

東北大学東北アジア研究センター叢書 第73号

江戸時代の漂流記と漂流民

漂流年表と漂流記目録

平川 新・竹原万雄 共編



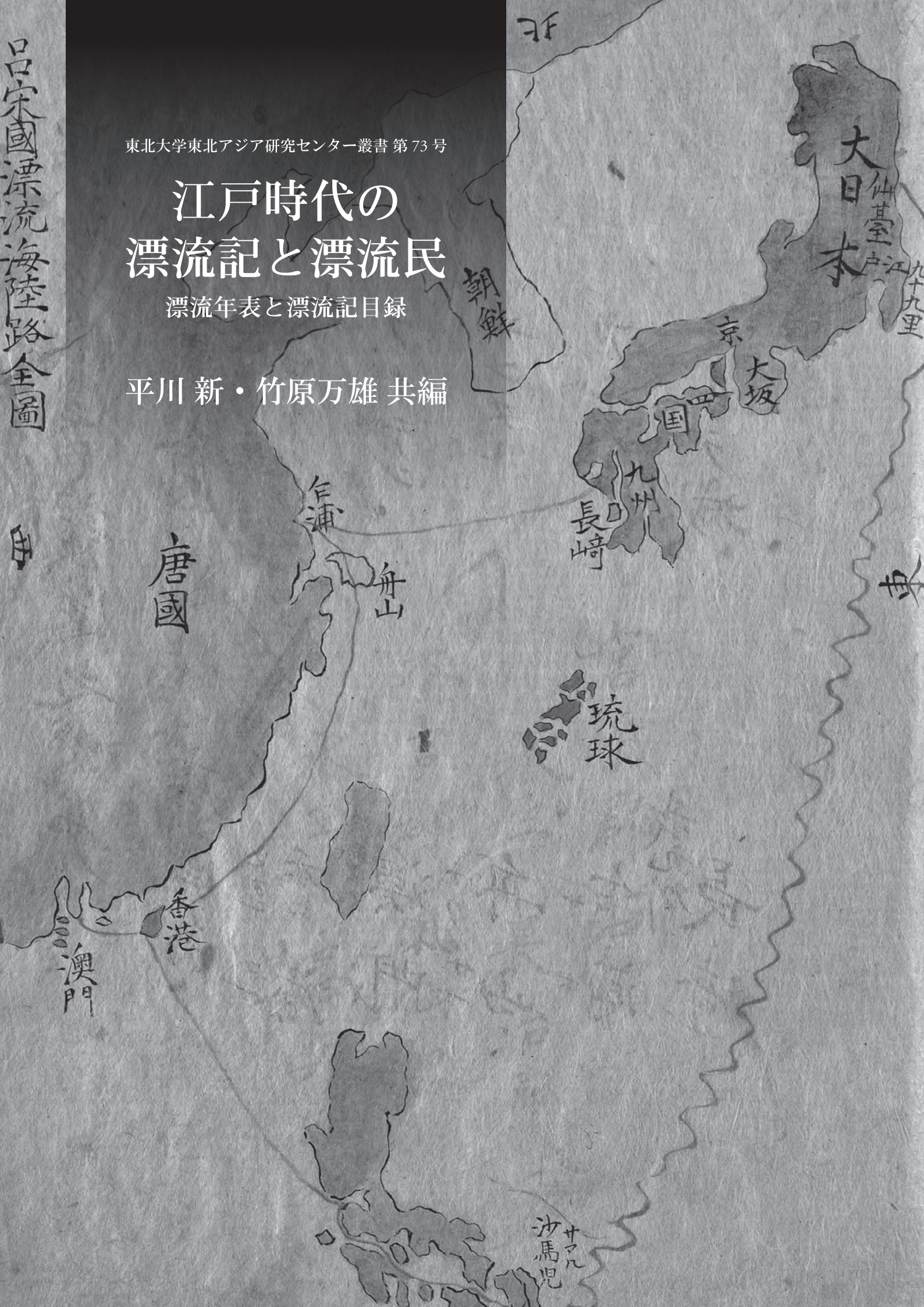
呂宋國漂流海陸路全圖

東北大学東北アジア研究センター叢書 第73号

江戸時代の 漂流記と漂流民

漂流年表と漂流記目録

平川新・竹原万雄 共編



表紙図版

「環海異聞」：同志社大学図書館蔵

「東航紀聞」：国立国会図書館蔵

「時規物語」：前田育徳会蔵（大黒屋光太夫記念館第6回特別展図録より）

大扉図版

「呂宋国漂流記」：国立国会図書館蔵

江戸時代の漂流記と漂流民 — 漂流年表と漂流記目録 —

目次

はじめに 平川 新

- 一 漂流記への関心 1
- 二 ロシア史料の調査 1
- 三 漂流記データベースの作成 2
- 四 刊行にいたるまで 3
- 五 論説編について 3

概論 漂流の諸相 平川 新

- *海難と漂流 5 / *漂流船の漂着地 5 / *時期別漂流件数 6 / *漂流民の運命 7
- *帰国の仕方それぞれ 7 / *漂着時に殺害された漂流民 8 / *奴隷になった漂流民 8
- *残留した漂流民 8 / *入国できなかった漂流民（モリソン号打払い事件） 8
- *外国の君主や大統領に拝謁した漂流民 9 / *将軍・藩主が引見した漂流民 10
- *仙台藩関係の漂流民 10 / *石巻若宮丸のロシア漂流 12 / *名取関上浜大乘丸の安南漂流 12

第1編 論説編 平川 新

- 一 開国以前の漂流民と日露関係 17
- 二 遣日ロシア使節レザーノフ来航と日本の政情 26
- 三 若宮丸漂流民善六とゴロヴニン事件 52
- 四 ロシア漂流船若宮丸と船主米沢屋 62
- 五 清国広東船の仙台領漂着と送還 72

第2編 漂流年表 竹原万雄

- 凡例 77
- 漂流年表 78

第3編 漂流記目録 竹原万雄

- 凡例 94
- 第1部 漂流記目録 96
- 第2部 未分類漂流記 165
- 第3部 漂流記集 196

はじめに

平川 新

一 漂流記への関心

漂流記への私の関心は、1996年に東北大学が新設した東北アジア研究センターという組織に所属したことが大きなきっかけだった。同センターは東北アジア（日本、朝鮮半島、モンゴル、ロシア、中国）の地域研究を任務としており、江戸時代史が専門分野だった私は日本地域の担当ということになった。数年たったころに、せつかく学際的なセンターに所属したのだから、これを機に対外関係史を研究してみようと考えはじめるようになった。

そこで思い浮かんだのが若宮丸漂流民のことだった。1988年から始まった石巻市史の編纂に参加したが、そのときに若宮丸漂流民も執筆対象になった。石巻の若宮丸が江戸に向かって出帆したあと、磐城沖で遭難し、アリューシャン列島まで流され、乗組員はロシアに保護されていた。1804年に遣日ロシア使節のレザーノフが若宮丸漂流民を長崎に送還し、幕府に貿易を求めたということはよく知られた史実だが、若宮丸の地元だけにその漂流史は市史にとっても大事なテーマだった。担当は私ではなかったが、編纂委員会でもしばしば若宮丸のことが話題になっていた。

そうか、若宮丸のことを追いかけていけばロシアとの関係がもっと具体的にわかるようになるかもしれない、と思いついたのである。江戸時代の日露関係史は、ロシア史研究者の木崎良平氏による、いくつものお仕事があった。1992年刊行の『光太夫とラクスマン』（刀水書房）、1993年の『日露交渉史』（明玄書房）に続いて、1997年に『仙台漂流民とレザーノフ』（刀水書房）を刊行しておられた。木崎氏にはこのほか、ロシア漂流日本人に関する網羅的な

論文もあったので、幕末以前の日露関係はおおむね漂流民を軸に展開していたのだということが理解できた。

大島幹雄氏も1996年に『魯西亜から来た日本人：漂流民善六物語』（廣濟堂出版）を出帆しておられた。若宮丸漂流民の一人でロシアに帰化した善六が主人公で、ドキュメンタリータッチの歴史叙述は魅力的だった。しかも大島氏が2000年に翻訳刊行されたレザーノフ『日本滞在日記』（岩波文庫）は、日本側の史料だけで研究されてきたレザーノフ来航について新たな材料と視点を提供するものだった。これを読んで、自分のやるべきことが見えてきた。もっとロシア側の史料を集めようと。

二 ロシア史料の調査

幸いなことに東北アジア研究センターにはロシア・ソ連史を専門とする寺山恭輔氏がおられたので、寺山氏の全面的なご協力をいただいて、2000年に共同研究「前近代における日露交流史料の研究」を立ち上げた。寺山氏のご尽力により、数人のロシア人研究者にもプロジェクトに参加していただくことができた。彼らには、ロシアの史料所蔵機関で日本関係史料の調査・収集をお願いした。おかげで、それまで知られていなかった多くの日本関係史料を確保することができた。入手したロシア語史料は、ロシア学を専攻する若手の日本人研究者を全国から募集して翻訳を進めた。

その成果として2004年から2010年にかけて、『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係』第1集～第5集（東北大学東北アジア研究センター叢書）を刊行することができた。ここには、ロシア帝国がシベリアやカムチャッカ半島、アリューシャン列島

に版図を拡大していく過程や、ロシア政府が日本に大きな関心を示し、日本人漂流民を積極的に保護するようになっていく経緯など、ロシアが日本にアクセスする過程の基本史料 285 点が収録されている。インターネットで東北大学図書館にアクセスし、「機関リポジトリ」で書名検索すれば全 5 冊の閲覧やダウンロードができる。18～19 世紀は日本では江戸時代の中後期にあたるが、この時期の日露関係に関心のある方はぜひ活用していただきたい。

三 漂流記データベースの作成

こうしたロシア側史料の調査を進めていくなかで、日本人漂流民の全体調査が必要だということも痛感した。これまでの漂流民・漂流記の研究で、かなりたくさん漂流事件が確認され、漂流記なども紹介されてきた。たとえば川合彦充氏の『日本人漂流記』の附録「近世日本漂流編年略史」(社会思想社、1967 年、以下「川合本」)には、1611 年(慶長 16)から 1868 年(明治元)までの漂流事件 266 件が収録されている。よくぞこれだけ調べたものだと感心したが、残念ながら事件ごとの出典が示されていないため、各漂流の具体相を追跡調査することはむずかしい。

その後、加藤貴氏が『漂流奇談集成』(国書刊行会、1990 年、以下「加藤本」)を編纂し、いくつかの漂流記を翻刻された。同書の附録「日本近世漂流記年表」には、205 件の漂流事件が収録され、典拠となる史料や漂流記も併記されていた。これであれば漂流記の追跡調査もできるので、ありがたいデータベースだった。

とはいえ、さらに多くの漂流記情報の収集が必要だと考え、2003 年から 2 年計画で、東北アジア研究センターの研究プロジェクトとして「日本近世漂流記の基礎的研究」を開始した。研究協力員として、当時東北大学の大学院生だった竹原万雄氏に漂流記に関する情報収集を依頼した。

竹原氏には、川合本と加藤本のほかに、同志社大学図書館刊行の『日本人漂流記文献目録』(服部純一編、1984 年)、岩波書店の『補訂版国書総目録』(第

八巻)の「補遺」や、国文学研究資料館編『古典籍総合目録』をはじめ、インターネットで漂流記の検索をかけてもらった。とくに北海道大学附属図書館北方史料データベース、東京海洋大学附属図書館デジタル資料、⑧早稲田大学図書館 WEB 展示会等は、漂流記関係の情報がまとめて掲載されており、これらも漂流史料を確認するのにかなり役にたった。

調査は目録やデータベースからの検索が中心であったが、かなりたくさん漂流記・漂流記事を収集することができた。それらから、「漂流年」「船名」「船籍地」「帰国年」「乗組員名」「乗組員数」「帰国ルート」などの情報を確認し、漂流事件として把握可能になったのが 341 件であった。これらについては、本書の第 2 編に「漂流年表」として整理した。また今後の研究の便に供するために、これら年表の根拠となった出典等までまとめた情報を「漂流記目録」として掲示した。出典情報には精粗があるが、目当てをつけた漂流事件を研究するさいには、史料調査等にかなり役に立つことになるだろう。

しかし、漂流年が確定できなかつたり漂着地が不明であるために、「漂流年表」や「漂流記目録」に分類することができなかった漂流記や漂流記事も少なくない。それらを「未分類漂流記」としてまとめ、405 件を収録した。この「未分類漂流記」のデータについては、今後、各漂流記の内容を個別に点検して、漂流年代や漂着地、漂流船名などが確認されれば、新たな漂流事件として「漂流年表」と「漂流記目録」への移動が可能になる。それが実現できれば、記録で確認できる漂流総数は優に 500 件を越えるのではないだろうか。しかも沈没や行方不明のために記録にも残されなかつた遭難・漂流事件は、これ以外にも無数にあつたに違いない。

また第 3 編第 3 部には「漂流記集」として、複数の漂流記や漂流記事を編集した記録も収めた。ここに収録した漂流記集は、江戸時代に編纂されたものから近年に刊行されたものまで、102 件にのぼっている。複数漂流記の編集本であることが明らかなもののほか、表題や書誌情報から複数の漂流記が含まれていると判断したものも収録した。江戸時代後

期から漂流記集の編纂が増えてくるが、それは漂流民たちの特異な体験への好奇心と、彼らが伝えた海外情報や異国への関心が高まってきたからだろう。

四 刊行にいたるまで

以上が漂流記情報収集の経緯だが、2004年度末にはこのデータベースはできあがっていた。にもかかわらずその公開が遅れたのは、ひとえに本プロジェクトの代表である平川の事情によっている。

この調査遂行中の2003年7月に宮城県北部連続地震が発生したことから、被災地の歴史資料（史料）保全活動を開始することになった。被災地活動が一段落したら漂流記調査を再開するつもりだったが、災害が来る前の古文書等のデータベース化を新たな課題としたために、史料保全活動を継続していくことになった。しかも2008年6月の岩手宮城内陸地震、2011年の東日本大震災と、連続してこの地は大きな災害にみまわれたことから、史料レスキューや保全活動に多くの時間と労力を費やすことになった。

さらに2007年の東北大学防災科学研究拠点の設置、2012年の災害科学国際研究所の開設など、大学の防災・災害研究組織の運営も担ったために、その後の漂流記調査に手をつけることができない状況になってしまった。

こうしたことから、このデータベースは長い間、眠り続けてきた。だが石巻若宮丸漂流民の会の事務局長である大島幹雄氏から昨年、あの漂流記のデータベースはどうなっていますかという問い合わせがあった。そうだ、あのデータを眠らせておくわけにはいかないという思いがわきあがり、本書刊行の大きなきっかけになったのである。目覚めさせてくれた大島氏には大いに感謝したい。

なお、この漂流年表と漂流記目録は、当時大学院生だった竹原万雄氏の協力なくしてはできあがらなかった。情報収集と煩雑なデータの整理に精魂をこめてあたっていたことに改めて感謝したい。本書の共編者である竹原氏からは、刊行にあたって次のメッセージをいただいた。紹介しておきたい。

「本書は、2004年に作成した『日本近世漂流記の基礎的研究－漂流年表・漂流記目録』の報告書を底本としています。漂流年表・漂流記目録に関しては、当時、できる限り疎漏のないように努めました。しかし、記述の誤謬があるかもしれません。しかも報告書作成から20年が経過しており、写本の所蔵機関の名称をはじめ、さまざまな変更が生じていることも予想されます。しかし、近世漂流記研究に取り組まれる方々には、漂流事件の把握や資料検索において多少なりとも貢献できれば幸いです。」

五 論説編について

本書には、第1編として論説編を置いた。漂流民を題材としてこれまで書いてきた平川の論考のなかから5本を収録している。

論考1「開国以前の漂流民と日露関係」は、東北アジア研究センターが1997年にロシア科学アカデミー・シベリア支部（ノボシビルスク市）にシベリア連絡事務所を開設したさいの合同シンポジウム「歴史にみるロシアと日本」でおこなった報告である。日本人漂流民に対するロシア政府の対応が時期によって大きく異なっていることから、その特徴を段階的にまとめたものである。

論考2「遣日ロシア使節レザーノフ来航史料にみる日本の政情」は、若宮丸漂流民を長崎に送還して通商を求めたレザーノフの『日本滞在日記』やロシア史料をもとに、そこから読み取ることができる日本の政情について論じたものである。とくに日本側史料では未確認であった対外政策をめぐる幕府と朝廷の関係を、ロシア史料をもとに明らかにできたことの意義は大きい。

論考3「若宮丸漂流民善六とゴロヴニン事件」は、1813年、日本がクナシリ島で捕虜にしたロシア海軍士官ゴロヴニンと、その報復としてロシア側がクナシリ島沖合で拿捕した高田屋嘉兵衛の捕虜交換交渉に際し、ロシアに帰化していた若宮丸漂流民善六がロシア側通訳として箱館に現れたことを検討した論考である。とくに箱館奉行所役人松田伝十郎の「北夷談」附図には、上陸したロシア士官のほか小柄

な人物が描かれており、これがロシア名キセリョフこと日本名善六であることを論証している。

論考4「ロシア漂流若宮丸と船主米沢屋」は、これまで不明だった若宮丸船主である米沢屋の素姓を新出史料によって明らかにしたものである。米沢屋は数隻の千石船を所有した石巻の有力商人であり、材木商のほか、藩の国産方役所のもとで「御国産方差配人」として、米粕や魚油などの海産物を集荷する特権を与えられた商人であった。

論考5「明国広東船の仙台領漂着と送還」は、1796年（寛政8）、本吉郡大室浜（石巻市北上町十三浜大室）の沖合に漂着した中国広東省の漂流船

の保護と送還を扱ったものである。日本と清国の間には漂流民の相互相関の関係があったが、仙台藩の儒者や僧侶たちと広東漂流民とが筆談した記録をもとに、その接遇や長崎へ送り届ける様子などを明らかにしている。

なおこのほか、拙著『開国への道』（全集日本の歴史十二、小学館、2008年）の第二章「漂流民たちの見た世界」では、大黒屋光太夫と若宮丸のロシア漂流と帰国の全過程、および彼らがもたらした海外情報と日本認識のあり方などについて論じている。ご参照いただければ幸いである。

概論

漂流の諸相

平川 新

*海難と漂流

四方を海に囲まれた日本の有力な交通手段は海運である。古代以来、国内輸送にしても海外交流にしても、船は重要な移動手段だった。だが、海運が盛んになるにつれて海難事故も多くなった。海岸沿いに進む沿岸走法であれば天候の急転を避けて近くの湊や入り江に避けることもできるが、遠距離航行に適した沖合走行が開発されると海難事故も多くなった。突風や大波にあおられて沈没してしまえば海の藻屑となった。

漂流というと漁船を思い浮かべやすいが、じつは商船や幕府・藩の領主米や荷物を運ぶ御用船のほうが圧倒的に多かった。漁船は小型で沈没しやすいために、漂流にいたらないからである。商船や御用船は千石船などのように大型船が多く、沈没さえ免れれば漂流していくことになる。仙台藩の遭難記録によれば漁船の遭難も3分の1ほどあるが(『石巻の歴史』第4巻)、漁船が漂流して救われた事例は、全国的にみてもそう多くはない。土佐のジョン万次郎が乗ったカツオの一本釣り船など、わずかである。

強い波に打たれて舵が壊れたり、強風でバランスを崩したりしないように帆柱を切り倒すこともあった。そうなると思えば操船ができないために、あとは風まかせ波まかせの漂流になった。全国各地の漁村や港町には、土地の村役人が難破船を救助したことや船の難破を証明した裏手形が多数残されている。幸いにして国内の沿岸に漂着したことから命が助かったのである。

だが、沖合に流されると消息はたどれない。漂流中に沈没した船も多かった。だが数ヶ月の漂流の末、どこかの島や陸地に漂着し、かろうじて助かった人

たちも少なからずいた。そうした漂流民がなんとか帰国することができると、漂流に関する記事が書かれたり、漂流記が残されたりしたのである。

*漂流船の漂着地

確認できた341件を漂流地ごとに分類したのが表1である。漂流地は北太平洋全域に広がっている。日本各地の港を行き来する航海の途中で嵐に遭遇し、漂流した。漂流の期間は、1か月程度から半年を超えるものまでである。それでも生きながらえるのは、廻船の場合、売買用の米や海産物などを積み荷としていたからだ。これらを食料とすることができたために、沈没さえしなければ長期の漂流にも耐えられた。同じような場所で嵐にあっても、南海に流されるか、北方に吹き飛ばされるかは、海流と季節風次第だった。飲料水は雨水をため、魚を釣っておかずにしたらしい。

漂着地としてもっとも多いのは、日本近海の島々の99件である。次が隣国の97件。内訳は中国47件、朝鮮42件、琉球8件である。南方海域は35件で、台湾以南の東南アジア沿岸に広く漂着している。ルソン島の14件が一番多い。北方海域も千島列島からカムチャツカ半島、アリューシャン列島、樺太など広域に及んでいる。沿海州が多いのは、日本海を航行中の船が対岸に漂着したものだ。さらに、太平洋の向こうの北米やハワイ諸島に漂着した船も13件あった。

表1で注意しておきたいのは、「外国船による救助」の45件である。これは漂流中の日本船を外国船が洋上で救助した事例である。その内訳を表2にあげた。興味深いのは1700年代までは4件(「漂流年表」「漂流記目録」のNo. 22、96、135、147。

以下 No. のみ記す) にすぎなかったが、1806 年に大坂船がハワイ近海でアメリカ船に救助されたのを皮切りに、外国船による救助が 1868 年までに 41 件もあったことだ。

表1 漂流地別内訳

漂着地	件数	
八丈島	29	
青ヶ島	12	
鳥島	14	
日 御蔵島	1	
本 小笠原諸島	2	99
近 種子島	14	
海 屋久島	1	
対馬	1	
蝦夷地 (北海道)	21	
エトロフ島	4	
中国	47	
隣 朝鮮	42	97
国 琉球	8	
台湾	8	
マカオ	2	
バタン諸島	3	
南 ルソン島	14	
方 ミンダナオ島	1	35
海 パラオ諸島	1	
域 マリアナ諸島	1	
オーシャン島	1	
安南 (ベトナム)	3	
ジャワ島 (インドネシア)	1	
千島列島	3	
北 カムチャツカ半島	4	
方 アリューシャン列島	5	23
海 樺太	1	
域 沿海州	10	
アラスカ	1	
北 カナダ	1	13
米 アメリカ	7	
ハワイ諸島	4	
外国船による救助	45	
無人島	2	
不明	27	
合計	341	

内訳をみると、アメリカ船の 25 を筆頭に、イギリス船 4、スペイン船 3、オランダ船 2、フランス船、ドイツ船、ロシア船の各 1 となっており、太平洋海域における欧米の活動ぶりがこの数字に反映されている。アメリカ船が 25 件と突出しているのは、19 世紀初頭から鯨を追って太平洋に本格的に進出しはじめたからである。

これをみると、漂流事件は、単に日本における海運事情の変化を反映しているだけではなく、漂着・救助・送還を巡って、世界状況を敏感に反映する歴史現象だといってよい。

*時期別漂流件数

表 3 は、341 件の漂流を世紀ごとにまとめたものである。1600 年代と 1700 年代は 100 年間の集計だが、1800 年代は明治 1 年までの 68 年間の件数である。それでも前世紀よりも件数が多い。それは 1 年当たりの漂流件数を見るとよくわかる。17 世紀は 0.73 件だが、19 世紀は 1.06 件、19 世紀は 2.50 件である。17 世紀に比べて 3.4 倍まで増えて

表2 外国船による救助 (1666~1868 年)

国名	1700 年代まで	1800 年代
オランダ船	1	2
清国船	2	1
アメリカ船		25
イギリス船		4
スペイン船		3
フランス船		1
ドイツ船		1
ロシア船		1
不明外国船	1	3
合計	4	41

表3 時期別漂流件数

時期	件数	1 年当たり
1611 ~ 1700 (慶長 16 ~ 元禄 13)	65	0.73
1701 ~ 1800 (元禄 14 ~ 寛政 12)	106	1.06
1801 ~ 1868 (享保元 ~ 明治元)	170	2.50

いる。

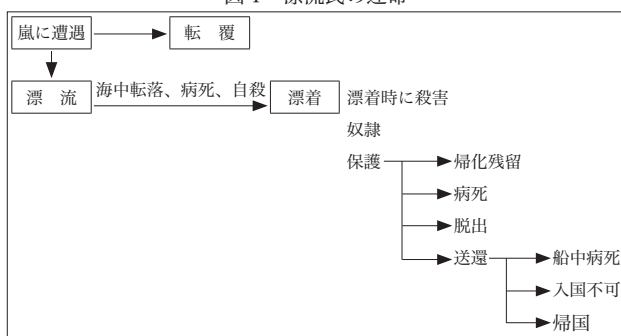
18世紀半ばまでは、陸地が見える程度の海上を湊々に停泊しながら航行する「地乗り」が主流だった。山や地形を目当てに進むため昼間の航海だった。だが18世紀以降、「沖乗り」航法が開発されると、磁石と海路図を頼りに目的地に向かって直航するようになった。湊への停泊も少なくなり、夜間も航行している。所要日数は大幅に短縮したが、嵐に遭遇したときに湊への避難が遅れて遭難の危険度が高まったのである。しかも漂流が増大するのは、列島全域での廻船の活動が年々盛んになっていったことにも比例している。

とはいえ、19世紀でも漂流は年間平均2.5件だから少ないように見える。だがこれは、あくまで漂流年や漂流地が判明している事例からの数値であり、記録に残らない実際の漂流件数は数十倍あったとみたほうがよいだろう。廻船による物流の活性化は、漂流を日常的な社会現象にしたのであった。江戸時代は、まさに「漂流の時代」だったといつてよい。

*漂流民の運命

嵐で遭難した船の乗組員の運命をわかりやすく示したのが、図1である。図に即して説明していこう。

図1 漂流民の運命



漂流のほとんどは嵐に遭遇したところから始まる。激しい風波に耐えられずに転覆してしまえば、それでおしまいだ。この段階でどれほどの人が犠牲になったか。だが、帆柱を切り倒して船のバランスをとったり、積み荷を海中に捨てて船を軽量化し、なんとか沈没を免れれば、そこからが漂流の始まりとなる。

どこに流されていくのか。それは風と波次第だった。流されている間に、また嵐にあつて転覆した船も少なくない。漂流中に海中に転落したり、病死することもあった。長い漂流生活に悲観して自殺した乗組員もいた。積み荷の食料が無くなれば船上での餓死が待っていた。

こうした困苦の末にどこかの陸地や島に漂着でもすれば、まれにみる幸運だといってよい。だが、それで命が助かるわけではない。上陸しても現地人からすれば不審者になるので殺害されたり、船の積み荷を狙われて襲撃されることもあった。あるいは現地人に捕縛されて奴隷となった例もある。

一方で、現地民に保護されて地元の女性と結婚して子供をつくり、日本に帰るきっかけを失った漂流民もいる。病気で亡くなった者もいれば、望郷の念やみがたく、いろいろな手づるを必死にたどって帰国の道を切り開いた漂流民もいた。

*帰国の仕方それぞれ

表1の「漂流地別内訳」をみると、中国は47件、朝鮮は42件と圧倒的に多い。ところが、朝鮮半島や中国沿岸、琉球に漂着した場合、他の国よりも比較的帰国しやすかった。朝鮮、中国、琉球と日本との間には、幸いにして漂流民の相互送還の関係ができていたからである。

朝鮮と日本は対馬藩を介した外交関係(通信の国)が成立しており、朝鮮人が日本沿岸に漂着した場合には対馬藩を通して釜山の倭館に送還され帰国できた。逆に朝鮮半島に漂着した日本船の乗組員は、釜山の倭館に駐在している対馬藩の役人に引き渡され、日本に帰国することができた。

中国に漂着すると中国商人の長崎貿易の基地である作浦(浙江省嘉興市)に送られ、そこから中国商船に乗って長崎に送還された。中国との間に正式の国交はなく、交易関係のみ(通商の国)だったが、日本人漂流民を長崎に乗せてきた中国商船には幕府が謝礼を出している。そのことも中国商人が日本人漂流民を積極的に送り返す動機付けになっていたようだ。

逆に日本沿岸に漂着した中国人は、漂着地の村役人や領主の世話によって長崎まで送られ、そこから中国船に乗って帰国できた（本書第1編「5. 清国広東船の仙台領漂着と送還」参照）。

琉球漂着の場合は、薩摩藩の琉球在番奉行に引き渡し、薩摩を経由して郷里の役所へ送り返されている。琉球人の日本漂着の場合は、この逆のルートが機能した。

これら三国以外、幕府は外交・貿易関係を結んでいなかったから、相互送還の関係はなかった。南方の台湾やフィリピン、ベトナムから帰国するには、長崎に向かうオランダ船を探るか、中国に渡って長崎行き中国船を探すしかなかった。しかし、それを実現できたのは、ほんのわずかな人たちだった。

異国に漂着した漂流民たちがたどった運命を、いくつかの事例で確認しておこう。

***漂着時に殺害された漂流民**

1644年、越前国三国新保村の3隻の船が松前交易のために佐渡を出帆するも佐渡沖で嵐にあつて漂流。「韃靼国」（清国）に漂着した。住民の計略で陸におびき出されて弓を射かけられ、乗組員58人のうち43名が殺害されてしまった。生き残った15名は瀋陽に送致され、清皇帝の後見人である睿親王に引見された。のち朝鮮に送還され対馬を経て帰国している（本書第2編「漂流年表」No. 12。以下Noのみ）。

1695年、大坂の淡路屋又兵衛の船（15人乗り）が嵐に遭って7ヶ月漂流の末、カムチャッカ半島南部に漂着した。漂流中に2名が海中に転落して死亡したが、漂着時に現地民に襲撃されて2名が殺害された。10人はどこかに連行されて行方知れずとなったが、伝兵衛は現地民のもとに残されて生活していた。のちカムチャッカを支配したコサック隊長に保護された伝兵衛はモスクワに送致された。1701年にロシア皇帝ピョートル1世に引見され、ペテルブルグに初めて開設された日本語学校の教師となった（No. 63）。

***奴隷になった漂流民**

1668年、尾張国知多郡大野村の商船が三河国大山沖で遭難し、バタン島（フィリピン）に漂着。現地民に船を壊され、15人の乗組員が奴隷的に使役されたが、年配の乗組員2人が働きが悪いとして殺された。漂流民たちは日本から金銀銅鉄を持ち帰って交易するためには船が必要だと現地民を説いて造船し、その船で11人が脱出した。現地女性と結婚した1人は残留した。脱出者は清国宝登山に到達し、九州五島に帰着した（No. 24）。

1764年（明和元）、函館を出帆した筑前国志摩郡唐泊浦の伊勢丸（20人乗り）が鹿島灘で遭難し、ミンダナオ島（フィリピン）に漂着。現地民に捕縛されて使役される。9人が死亡し、4人が転売されて行方不明となる。残る7人もボルネオに転売された。うち1人が華僑に買われ、さらにオランダ人に売られる。帰国を懇願し、1771年にオランダ船で長崎に帰着した（No. 143）。

***残留した漂流民**

1841年（天保12）、摂津国兵庫西宮の永住丸（13人乗り）が西宮から奥州に向けて出帆。下総国犬吠埼沖で北西風にあおられて遭難した。7ヶ月漂流してスペイン船に救助されスペイン領メキシコに着。6人がスペインの居留地マカオに送還され、6人がメキシコに残留する。1人は消息不明。1844年、作浦から5人が中国船で長崎に帰着するも、1人はマカオに残留した（No. 247）。

***入国できなかった漂流民（モリソン号打払い事件）**

天保3年（1832）10月、尾張国知多郡小野浦の宝順丸（14人乗）が遠州灘で遭難し、翌年末、北アメリカ・フラタリ岬に漂着。このとき生存者は3人だった。インディアンに助けられ、村で使役される。やがてイギリスのハドソン会社に保護されてロンドンに渡った。その後、マカオに送致されるも、イギリスと清国のアヘン戦争により、マカオにとどまる（No. 230）。

天保6年(1835)、肥後国飽託郡川尻の船(4人乗)が天草沖で流され、ルソン島に漂着した。マカオに送致されて、尾張国宝順丸の3人と出会う。マカオ在住のアメリカ人商人が漂流民を日本に送還し日本政府との通商交渉の機会にしたいと考え、尾張国の音吉、久吉、岩吉、および肥後国の庄蔵、寿三郎、力松、熊太郎をモリソン号に乗せて日本に向かった。江戸湾入口の浦賀沖に停泊したところ、幕府の異国船打払令のために砲撃を受け退去せざるをえなかった。鹿児島で薩摩藩と交渉するが、漂流民は交易のあるオランダ人から日本へ送還するべきだと引き取りを拒否され、漂流民は上陸することができなかった。上海に住んだ音吉はその後、安政元年(1854年)、イギリスの通訳として長崎に来航し、日英和親条約の締結交渉に力を尽くした(No.237)。

*外国の君主や大統領に拝謁した漂流民

漂流先で保護されるだけでも幸運だが、漂流国のトップに引見された漂流民もいた。日本への強い関心を抱いていたからである。

<ロシア皇帝>

もっとも多いのはロシア皇帝に拝謁を許された漂流民たちである。一番古く確認できるのは、前掲「漂着時に殺害された漂流民」の項目でも紹介した大坂の淡路屋又兵衛船に乗っていた伝兵衛である(No.63)。15人乗り組みだったが、1615年にカムチャッカに漂着したあとは伝兵衛だけの消息しかわからない。その伝兵衛は1701年にロシア皇帝ピョートル1世に引見されている。

その次は1728年にカムチャッカ半島に漂着した薩摩の若潮丸(17人乗)の宗蔵と権蔵である(No.98)。ロシアの記録には「ソーザ」と「ゴンザ」と記されている。ペテルブルグでアンナ女帝に引見された。2人ともロシア正教の洗礼を受け、のちに日本語学校の教師となった。

ロシア皇帝に拝謁した3番目は、1782年にアリューシャン列島に漂着して保護された伊勢国白子村の神昌丸(17人乗)の大黒屋光太夫である(No.159)。イルクーツクで生活していた光太夫は

イルクーツクの商人ラクスマンに連れられてペテルブルグに入り、1791年に皇帝エカチェリーナ2世に引見され、帰国を許された。

4番目は、1793年にアリューシャン列島に漂着した石巻の若宮丸漂流民である。彼らはイルクーツクで生活していたが、日本送還を機に貿易交渉をするというイルクーツク商人らの献策が採用され、ロシア政府としての遣日使節派遣が具体化した。1803年に漂流民10人がペテルブルグで皇帝アレクサンドル1世に引見され、津太夫ら4人が帰国の意思を示し、日本に送還されることになった。

<清国の皇帝後見人>

前述の「漂着時に殺害された漂流民」の項目でも紹介したが、1644年に韃靼国に漂着した越前国三国の漂流民は、漂着時に43人が殺害されたが、生き残った15名は瀋陽に連行された。1644年はちょうど中国で明朝が滅び、清朝(満州人)が建国された年であった。順治帝は8歳の幼君であり、叔父の睿親王が後見人として実権を掌握していた。漂流民たちは睿親王に引見されたあと、朝鮮経由で帰国できた。中国はちょうど明清の王朝交代期であり、この時期の瀋陽や北京の様子を記した「韃靼漂流記」は貴重な記録となっている(No.12)。

<安南国王>

奥州名取郡^{ゆりあげ}閑上村(宮城県名取市)の大乗丸(16人乗)が、1794年、新穀を積んで江戸に向けて石巻を出帆し、房総沖の荒天で吹き流され、約2ヶ月漂流して安南(ベトナム)に漂着。嘉定(ホーチミン市)の「王城」で国王の阮福暎(グエン・フック・アイン)に引見された。塩釜桂島出身の沖船頭清蔵が持っていた「和漢無隻之袋」(国語辞書)は安南国王に求められたため献上したという話もある。清蔵は病死したが、残った漂流民は国王が手配をしてポルトガル船に乗船してマカオに送られ、清国役人の斡旋により広東を経て作浦から長崎に送還された(No.167)。

<アメリカ大統領>

摂津国菟原郡大石村の栄力丸(17人乗)が上方から江戸に向かう途中、紀伊半島の大王崎沖で嵐に

遭遇。2ヶ月の漂流後、南鳥島付近でアメリカ船に発見され救助されて、サンフランシスコに上陸する。日本送還のために香港に渡るが、他の漂流民からモリソン号事件で日本に入国を拒まれたことを聞いて、再びアメリカに戻り、ニューヨークで生活する。のち1853年に日本人として初めてアメリカ大統領フランクリン・ピアースと会見した。また上院議員の秘書となったあと、ジェームズ・ブキャナン大統領とも会見した。1859年、駐日公使ハリスの通訳として帰国している。1862年には、ブキャナンの次の大統領エイブラハム・リンカーンとも会見している。1863年、再び日本に帰国した (No. 287)。

*将軍・藩主が引見した漂流民

幸いにして日本に帰国できた漂流民は故郷に戻ることができたが、その漂流体験や異国体験に関心をもった為政者もいた。百姓身分の者が将軍や藩主に引見されるのは破格の待遇である。いくつかの事例を紹介しておきたい。

<将軍家斉>

先にロシア皇帝エカチェリーナ2世に引見された伊勢国の大黒屋光太夫は、1793年に遣日使節ラクスマンによって根室に送還されるが、帰国後、11代将軍徳川家斉に引見され、ロシア事情の聞き取りを受けた。記録は桂川甫周らが『漂民御覧之記』『北槎聞略』としてまとめ、蘭学の発展や日本の国防政策に大きな影響を与えた (No. 159)。

<仙台藩主伊達周宗>

先に安南国王に謁見を許された奥州名取郡閑上浜大乗丸漂流民を紹介したが、帰国した1797年、江戸藩邸で仙台藩主伊達周宗に引見されている (No. 167)。

藩主周宗は、もう1組の漂流民も引見していた。ロシア皇帝のアレクサンドル1世に引見された石巻の若宮丸漂流民は、1804年に遣日使節レザーノフによって4人が長崎に送還された。レザーノフが求めた通商は幕府によって拒否されたが、仙台藩江戸藩邸で藩主の伊達周宗に引見されている。その後、仙台藩の蘭学者大槻玄沢らの聞き取り調査で編

纂されたのが、『環海異聞』である。漂流民の証言と蘭学者たちが収集していた外国書籍をつきあわせて描かれた絵図が多数収録されている。以後、仙台藩はロシア学を急速に充実させていくことになった (No. 166)。

<徳島藩主蜂須賀斉昌>

天保12(1841)年11月、奥州に向けて出帆した摂津国の栄寿丸(12人乗)は犬吠岬沖で漂流した。翌年2月、スペイン船に洋上で救助され、7人がスペイン領カリフォルニア半島に送られた。その後スペイン船で広東に送られ、1843年に2人が清国商船で長崎に帰着し、1845年には3人も同様に帰国した。漂流民の初太郎は徳島藩出身だったことから藩主蜂須賀斉裕が初太郎を庭前に召し、家臣に漂流記の編纂を命じた。これが「亜墨新話」である (No. 247)。

*仙台藩関係の漂流民

表4は、仙台藩関係の漂流事件一覧である。仙台領民の船が漂流した事例は20件確認できる。仙台城米 (No. 1) や仙台米 (No. 2) を積んだ船、あるいは穀船 (No. 6, 8, 119) などとあるのは、仙台藩の御用船である。御用船とはいっても、藩所有の手船もあればチャーターした民間船もあった。これに対するのが商船で、商人たちの持ち船である。商人たちは自分の才覚で商品を手入れし、江戸や各地に輸送して販売利益を得ていた。それぞれ地域の有力な資産家であり、千石船を所有して回船業に従事していた。

仙台領の港を出航した他領の船が遭難した事例も4件確認できる。①は遠州新居の船が竹浦(女川)を出たあと、九十九里沖で遭難し鳥島に漂着している。他所から竹浦に寄港しただけなのか、竹浦で商荷の積み込みをしたのかはわからないが、②のミンダナオ島に漂着した筑前国の伊勢丸は、箱館から江戸に向かう途中、牡鹿半島の小湊浜に立ち寄っていた。③の肥前船は仙台荒浜を出港して九十九里沖で漂流を始め鳥島に漂着した。④越中富山の長者丸は仙台領の唐丹を出港したあと漂流し、洋上で

表4 仙台藩関係漂流年表（番号分は仙台領民。丸数字は仙台領の港を出帆した他領の船）

目録No.	年代	事項
1	36 1682 (天和2)	仙台藩城米を積んだ船が蝦夷地に漂着
2	37 1684 (貞享1) 3月	仙台米を積んだ船が蝦夷地に漂着
3	52 1690 (元禄3)	仙台領の船が蝦夷地に漂着
4	60 1693 (元禄6) 12月	仙台領石巻船が房総沖で漂流。蝦夷地シコタンに漂着
5	82 1712 (正徳2) 11月	相馬領の船(仙台領荒浜住民乗組み)が銚子沖で漂流。翌年1月に清国広東省に漂着。同年7月長崎に帰着
6	94 1723 (享保8)	仙台藩穀船が琉球に漂着
7	104 1739 (元文4)	石巻の船頭惣兵衛船が種子島に漂着
8	109 1743 (寛保3)	石巻の穀船が種子島に漂着)
9	124 1752 (宝暦2) 12月	本吉郡気仙沼村の春日丸が銚子へ航行中に仙台沖で漂流。翌年3月清国浙江省に漂着
10	126 1752 (宝暦2) 12月	亶理郡荒浜の船が相馬沖で漂流。翌年1月に琉球に漂着
11	131 1757 (宝暦7)	仙台藩穀船がシコタン島に漂着
12	135 1761 (宝暦11) 12月	亶理郡荒浜の福吉丸が江戸へ航行中に銚子沖で漂流。翌年4月に清国南通州沖で清国船が救助。同年11月江戸帰着
13	140 1763 (宝暦13) 5月	石巻船が浦戸を出航後漂流。蝦夷地シヤマニに漂着
14	150 1774 (安永3) 11月	仙台領折浜の最吉丸が常陸沖で漂流。翌年4月に清国広東省に漂着
15	153 1774 (安永3) 12月	仙台領小竹浜の永福丸が塩屋崎沖で漂流。翌年3月に清国福建省に漂着。同年12月長崎帰着
16	166 1793 (寛政5) 12月	石巻若宮丸が江戸へ航行中に塩屋崎沖で漂流。翌年5月アリューシャン列島に漂着、1804年9月長崎帰着
17	167 1794 (寛政6) 9月	名取郡閑上浜の大乗丸が江戸へ航行中に安房国沖で漂流。閏11月に安南に漂着、翌年11月長崎帰着
18	205 1822 (文政5)	石巻湊の円蔵船が種子島に漂着
19	243 1839 (天保10) 11月	気仙郡小友浦の中吉丸が常州那珂湊へ航行中、鹿島灘で漂流。翌年1月小笠原島に漂着
20	248 1841 (天保12) 10月	観吉丸(観音丸)(船主伊達郡北半田重吉、船頭石巻甚助)荒浜出帆。九十九里沖で漂流。翌年7月フィリピン群島サマル島付近に漂着。1843中国を経て長崎帰着
①	91 1719 (享保4) 11月	遠州新居船、仙台竹浦を出帆。九十九里沖で漂流。翌年1月鳥島へ漂着。1739年八丈島に帰着
②	142 1764 (明和1) 10月	筑前国伊勢丸、箱館から小淵浜(牡鹿町)を経て江戸へ航行中。塩屋崎沖で漂流。ミンダナオ島に漂着。1771年に長崎に帰着
③	161 1787 (天明7) 12月	仙台荒浜を出帆した肥前船(荒浜生れの水先案内人忠八乗組み)が九十九里沖で漂流。翌年2月鳥島に漂着
④	241 1838 (天保9) 11月	越中富山長者丸が仙台領唐丹港を江戸へ出帆。同港沖で漂流。翌年4月アメリカ捕鯨船が救助。1843年3月エトロフ島に帰着

アメリカの捕鯨船に救助されている。

こうした事例から、全国の船が東北や蝦夷地(北海道)を行き来して活発な経済活動をしていたことがわかる。表2で、列島全域での廻船活動の活発化が漂流の増加を生んだと指摘したが、それはこのような活動を反映したものであった。

表4の漂着地をみると、アリューシャン列島1、シコタン島1、蝦夷地5、小笠原島1、鳥島1、八丈島1、種子島3、琉球2、清国5、フィリピン1、ミンダナオ島1、安南1、洋上でアメリカ捕鯨船に

よる救助1、となっている。北から南まで広範囲に及んでおり、全国的傾向と同様であった。漂流期間も2か月から6か月と長い。船荷に米などの食料が積み込まれていたため命をつないでいるが、食料が絶えて餓死したり、途中で沈没した船も数多くあったに違いない。確認できるのは、生きながらえて記録を残すことができた事例だけなのである。

清国や琉球に漂着して保護された漂流民は、いずれも清国商人の船で長崎に送還されている。相互送還制度のおかげである。その制度がない安南やフィ

リピンに漂着した漂流民も清国経由で帰国できているが、幸運な例といってよい。

*石巻若宮丸のロシア漂流

仙台領民の漂流でもっとも知られているのは、1793年（寛政5）の石巻若宮丸のロシア漂流である（表4 No. 16）。石巻商人米沢屋の持ち船である若宮丸（16人乗）は、米や海産物、材木などを積んで江戸に向かった。塩屋崎沖で嵐に遭遇し、荒波で舵をへし折られて漂流し始めた（米沢屋については本書第1編論説編「ロシア漂流若宮丸と船主米沢屋」参照）。転覆を防ぐために帆柱を切り、積荷の米も半分捨てたという。乗組員は髪を切って神仏に祈った。半年漂流の末、アリューシャン列島の島を発見し上陸。島民に救助されたが、その後ロシア人狩猟者に保護されて、ロシア生活をするようになる。

10年後、帰国を希望した4人が遣日使節レザーノフに伴われて日本に送還され、ようやく祖国の地を踏むことができた。ロシアの首都ペテルブルグの外港クロンシュタットを出航して大西洋を南下し、アメリカ大陸の南端を回ってハワイからカムチャッカに到達。そこから南下して長崎に入港するルートだった。漂流民を駆け引きの材料とした長崎でのレザーノフと幕府との交渉は、江戸時代の国際関係史としても特筆すべき事件であった。

このロシア漂流事件に対する国内の関心はきわめて高く、蘭学者大槻玄沢編の『環海異聞』を始め、多くの漂流記が出回った（No. 166）。帰還民太十郎（東松島市室浜）がロシア皇帝から拝領した羅紗の洋服が現存し、奥松島縄文村歴史資料館に展示されている。

これより11年前の1782年、伊勢国白子の船頭大黒屋光太夫（幸太夫とも表記）の船も同様にアリューシャン列島に漂着し、ロシアのイルクーツクで10年生活したのち、遣日使節ラクスマンによって根室に送還されている。こちらは蘭学者桂川甫周編纂の『北槎聞略』によって漂流の全過程を知ることができる（No. 159）。

大黒屋光太夫と若宮丸のロシア漂流は、いずれも日本との通商を望むロシア政府により、交渉の手段として送還されたのであった。それらの漂流譚と歴史的意義については、平川新『開国への道』（小学館、2008年）を参照していただきたい。

*名取^{ゆりあげ}閑上浜大乘丸の安南漂流

仙台領民の漂流で知られるもう一つの漂流が、安南国王に謁見した漂流民である名取郡閑上浜の大乘丸の安南漂流である（No. 167）。この漂流譚は『南瓢記』として出まわり、世上の関心をひいた。『南瓢記』から、その概要を紹介しておく。

1794年（寛政6）8月23日、大乘丸（16人乗）は南部米2600俵余を積んで石巻を出帆した。盛岡藩は内陸の米を北上川を利用して石巻に下していたから、石巻には盛岡藩の米蔵があった。南部米というのは、その盛岡藩米のことで、江戸に出荷された。寒風沢港で風待ちをして27日に出航したが、29日房州沖で強風により舵を折られる。あおられて転覆しないように帆柱を切り、米700俵を捨てた。

漂流してから80日ほどで水が切れたため、髪を切り神仏に祈願すると降雨があった。その水をためて飲料水としたが、1人につき水は1日に1杯だった。米はたくさん積んでいたから、米の飯は1人で1日2杯食べることができた。

閏11月20日に安南国の小島に漂着。地元の漁船に救助された。12月3日、安南の城下に連行され王様に引見されて、通辞と医者をつけられた。『南瓢記』には、「ことの外、深節に取扱ひ申す事〜国政のよろしき所と見へ」とある。親切で丁寧なもてなしは、この国の政治が安定しているからだという感想である。

ただし、食文化の違いには驚いている。

「三度の朝夕、ただ飯ばらばらとして味なく、〜男のめしたきをみるに、米を洗ひ瀬戸物の釜へ水を入れ、ほどなく吹上り候せつ、残らずめしのねばりしゆばを取りすて炊き候、〜国風なることを感じけり」

食事は米飯だったが、パサパサとしていた。米炊

きの様子を見ると、沸騰して蒸気が吹き上がると、釜の上部にたまった米つゆのねばり（ゆば）をすくいって捨てていた。飯がパサパサだったのはそのためだったが、わざわざうまみ成分を捨てる炊き方に、「国風」の違いを感じたという。

日本の米は粒が短く丸みを帯びており、炊くとねばりが強いジャポニカ米だが、安南の米はインディカ米で、ジャポニカ米よりも細長く、ねばりも少ないという。もともとパサパサしやすい米の品種だったということもあるようだ。

「醤油一切なき国にて、何にても残らず塩煮になし、その中へ牛の脂、ぶたの脂を入れたき候ゆえ、はじめのほどは皆々くひかね、月日おしうつるに従い、次第に美味となり、このことになれる」

日本の料理は醤油での味付けが一般的だが、ベトナムでの味付けは塩だった。しかも牛や豚の脂を入れて煮込んでいた。「はじめのほどは皆々くひかね」とあるから、あまりの脂っこさに閉口したようだ。しかし、それも慣れてくると「次第に美味」になったという。異国での食事に味覚も順応してきたのだった。

ベトナムでは米がたくさんとれて安価だったことから、豚の餌は米だったという。家畜に米を食べさせるとは、日本では考えられないことだった。

「猫、さしてかわることなし。鼠、おなじくかわりなし。蚊・蠅、至って大きし、何れも年中たくさんなり」。

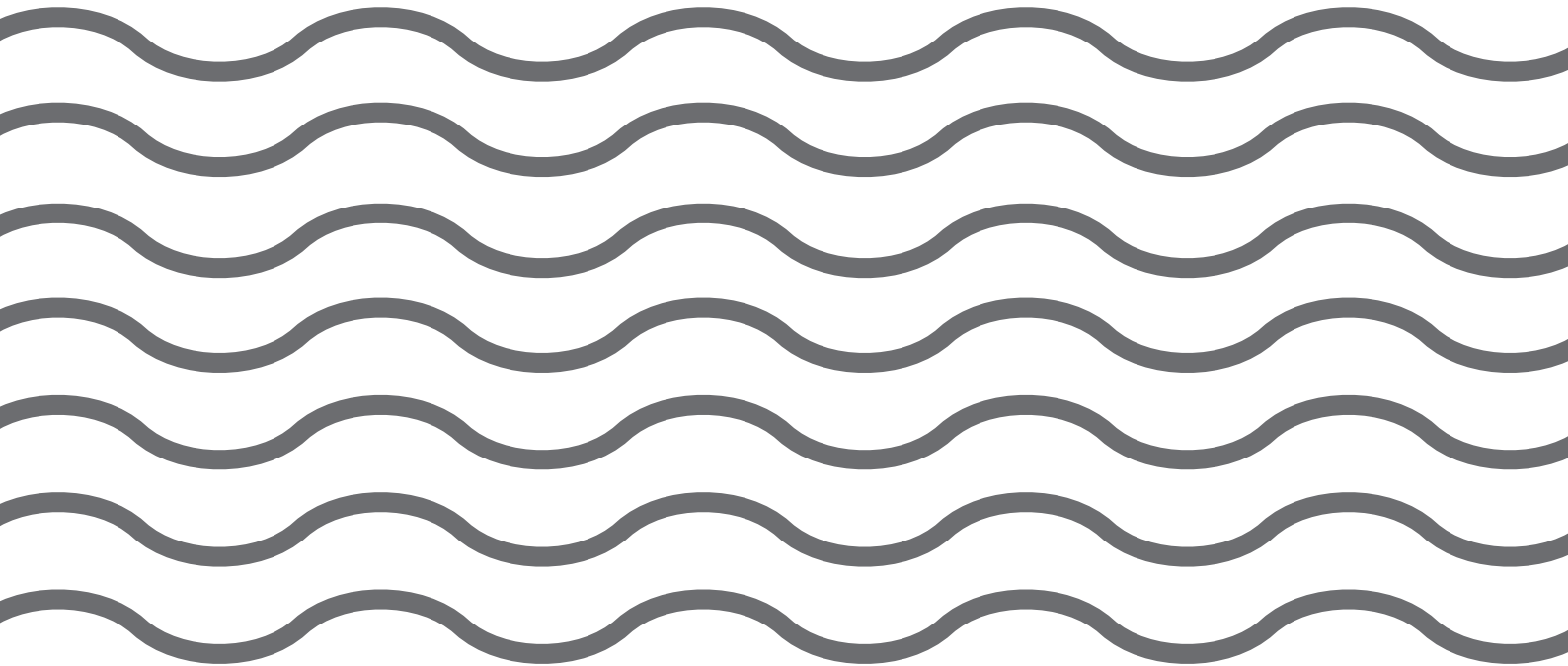
猫や鼠は日本と変わりはないが、蚊と蠅はかなり大きいと驚いている、日本では蚊や蠅は暖かい季節だけ飛び回っているが、ベトナムは年中温暖だったので、蚊や蠅も年中たくさんいたという。

安南国政府に保護された漂流民は生活・風習の違いに驚きながらも、帰国後それをしっかりと伝えてくれた。ベトナム滞在中に4人が病死したが、翌年4月、安南国王はオランダ船への乗船を手配してくれた。5月5日にマカオに到着し、清国役人の斡旋により同21日、広東に移動。8月13日広東を出帆して10月6日乍浦に着いた。11月7日に乍浦を出帆し、23日に長崎に着いて、ついに帰国できたのである。漂流自体は過酷な体験だが、保護されて帰国するまでは、かなり幸運に恵まれたといえるだろう。

第1編

論説編

平川 新



一 開国以前の漂流民と日露関係

はじめに

ロシアは日本という国の存在をいつ知ったのだろうか。

ヨーロッパ人が初めて日本にやってきたのは1543年のことで、それはポルトガル人であった。東南アジア海域で貿易活動を展開していたポルトガル人が、嵐のために日本に漂着した。種子島に初めて鉄砲が伝えられた話として知られている。これを契機にポルトガル商人やキリスト教宣教師たちが次々に来日し、やがて1570年代に植民地マニラを拠点にしたスペイン人たちも日本にやってきた。やや遅れて1600年代初めには、オランダ人やイギリス人も来航してきた。かくして、ヨーロッパ諸国と日本の交流の活発化により、日本に関する情報がヨーロッパに伝えられるようになった。

1606年に刊行されたオランダの地理学者ヘルハルト・メルカトールの『アトラス』(地図帳)には日本に関する記述があり、武士・百姓・商人などの生活ぶりや国の政治などに関する記事があった。同書は1637年にロシア語にも翻訳されたというから、ロシアは日本と通商関係をもったヨーロッパ諸国からの情報などをつうじて、極東アジアに日本という国があるということを知ることになったのだろう。

その後1678年、モスクワから北京にスパファリーが派遣され、中国・アムール・タタール・サハリン・日本・朝鮮に関する報告書を作成している。スパファリーの北京派遣の目的は、アムール河上流における国境問題を解決し、中国と通商関係を結ぶことであったが、日本にも強い関心をもっていた。

彼は北京で日本に関するさまざまな情報を収集し、モスクワに報告したという。

ヨーロッパや中国を介した日本情報の獲得とは別に、ロシアは探検をつうじて日本に接近しつつあった。ロシア人のシベリア征服は1581年のエルマークの遠征を大きな画期とするが、陸路でオホーツク海に到達したのは1640年前後のことであった。

ロシア帝国はクロテンを追ってシベリアへ進出し、ラッコを追って太平洋を目指したといわれる。シベリアもカムチャツカも無人の荒野ではなかったから、ロシア帝国の東征に対して現地住民の抵抗や反乱も少なくなかった。各地に派遣されたコサック隊は未知のシベリア大地の探検とともに、現地住民を制圧する役割を負っていた。シベリアの要所に役所や砦がおかれて現地住民から毛皮税などを徴収し、さらなる東進と南下の拠点とした。こうしてロシア帝国の最前線は、徐々に日本に近づいてきた。

コサック隊長のウラジーミル・アトラソフがカムチャツカ半島を探検し、半島の最南端にまで到達したのは1697年のことである。この探検でアトラソフは、カムチャツカ半島西岸のカムチャツカ河口でカムチャダールに囚われていた日本人の漂流民と出会った。アトラソフに保護された日本人漂流民の名前は「デンベイ」(伝兵衛)といい、大坂商船の乗組員であった。1695年ころに大坂を出帆して江戸に向かったが、嵐にあつて7か月ものあいだ漂流し、カムチャツカ半島に漂着したという。この大坂商船には15人が乗り組んでいたが、漂流中に2人が海中に転落して行方不明となり、漂着のさいには2人が原住民に殺害され、さらに10人がいずこかへ連れ去られて、わずかに伝兵衛一人が残されたという。伝兵衛はカムチャツカ川支流のナネ湖畔にある

カムチャダール人の部落で過ごしていたが、翌年、カムチャッカ遠征中のコサック隊長ウラジミル・アトラソフに出会ったのだった。1701年にはヤクーツクを経てモスクワに送致され、1702年にピョートル1世に謁見している。

これまでの研究によると、この大坂商船を含め、ロシア領域への漂着は、1696年から1850年までの約150年間に9件の事例が確認できる(表1の①～⑦、⑩⑫)。漂流船はすべて商船である。これら商船は、日本の太平洋沿岸を航行中に嵐に遭遇し、北上する海流に押し流されてカムチャッカ半島や千島列島、アリューシャン列島などに流れついた。各船には十数人ずつが乗船していたので漂流民総数は174人になるが、これ以前にも漂流はあっただろうし、右の期間中においても、おそらくもっとたくさんの人びとが漂流・漂着したと思われる。

この大坂商船漂流一件(表1-①)は、伝兵衛がモスクワで語り残した「伝兵衛物語」によって知られるが、日本側に記録はない。日本側に当事者の記録があるのは、漂流民がロシアから送還され、彼らが漂流記録を残したケースに限られる。したがって漂流事件9件は、日本側のみならずロシア側の記録を探索した先学の努力によって明らかにされたものである。

ロシアへの漂流は、序章で紹介したように、無数にあった漂流事件のほんの一部にすぎない。しかし江戸時代の国際関係に与えたインパクトという点では、ロシアへの漂流事件ほど影響が大きかったものはない。漂流民の扱いをめぐる日露の関係が大きく転換するからである。

そこで本稿では、漂流事件をとおして、17世紀から19世紀にかけての日本とロシアの関係を四段階に区分し、各段階の特徴を検討すると共に、それぞれの不可分な関係をみていくことにしたい。

1. 第一段階

— ロシアの日本に対する関心 —

表1に掲げた漂流事例をみると、ケース①～④

(1696～1744年)からは、漂流民に対するロシア側の対応に大きな特徴をみてとることができる。その特徴とは、この時期の漂流民は日本に帰還できた者が皆無だったという点である。

ケース①の事件で最後まで生き残った伝兵衛は、前述のようにピョートル1世に謁見するが、じつはこのとき彼は皇帝に帰国の嘆願をしている。だが皇帝は、帰国を許可しなかった。皇帝は勅令によってペテルブルグに日本語学校を作り、伝兵衛をこの学校の日本語教師に任命したのがある。それとともに皇帝はヤクーツク庁に勅令を発して、コサック隊にカムチャッカへの探検を命じた。その勅令のなかには、日本の情報を集め交易に努力せよという訓令も含まれていた。

次のケース②は1710年にカムチャッカに漂着している。乗組員のうち消息のわかる三右衛門(Sanemon、ロシアではサニマと呼ばれた)は、しばらくヴェルフネ・カムチャッカ砦に幽閉されていたが、1713年に出発したコズイレフスキーの北千島探検に従ったあと、1714年にペテルブルグに送られている。三右衛門は、すでにペテルブルグの日本語学校の教師になっていた伝兵衛の助手になったという(秋月俊幸「コズイレフスキーの探検と千島地図」『北方文化研究』3、1968年)。なおコズイレフスキーの調査のあと1714年にもピョートル大帝は、日本探索のための遠征隊の派遣を命じたが、サハリン北部を探検したにすぎなかったようだ(A. スギブニェフ「18世紀、19世紀初期におけるロシア人による日本との通商関係樹立の試み」)。

1729年にカムチャッカに漂着したケース③では、漂流民17人のうち15人が漂着時にコサック隊に殺されるという悲惨を味わっている。生き残った宗蔵(Souzo)と権蔵(Gonzo)は1731年にペテルブルグに送致され、34年にアンナ女帝に謁見したあと、ロシア科学アカデミー附属日本語学校の教師となった。1745年に千島列島オンネコタン島に漂着したケース④では、生存者10人のうち9人がペテルブルグ、イルクーツク、イリムスクなどで日本語教師になったことが確認されている。

表1 ロシア関係の日本人年表

● 1542年、ポルトガル人、初めて日本に到達
● 1667年、ロシア語版のメルカトル『世界図』に日本あり
● 1678年、スバファリー、中国に派遣され日本の情報を収集
① 1696年、カムチャツカに15人が漂着（カムチャツカ→ヤクーツク→モスクワ） ・1702年、伝兵衛、ピョートル1世に拝謁、帰国を嘆願するが許されず ・1705年、伝兵衛、ペテルブルグ日本語学校の教師になる
● 1696年、コサック隊長アトラソフがカムチャツカを探検
② 1710年、カムチャツカに10人が漂着（カムチャツカ→ヤクーツク→ペテルブルグ） ・1713年、三右衛門、コズイレフスキーの北千島探検に従う ・1714年、三右衛門、ペテルブルグ日本語学校で伝兵衛の助手になる
● 1711年、コズイレフスキーがクリル列島の北部を探検
● 1721年、エヴィレーイノフが再びクリル列島を探検
③ 1729年、カムチャツカに17人が漂着（カムチャツカ→ヤクーツク→ペテルブルグ） ・1734年、権蔵と宗蔵、女帝アンナに拝謁 ・1736年、権蔵と宗蔵、ロシア科学アカデミー附属日本語学校の教師になる
● 1739年、スパンベルグ、日本に到達
④ 1745年、クリル・オンネコタン島に17人が漂着（オンネコタン島→ボリシェレック→オホーツク→ヤクーツク→ペテルブルグ）
● 1778年、ロシア船、根室に來航して松前藩に通商を求め
⑤ 1783年、アリューシャン列島アムチトカ島に16人が漂着（アリューシャン→カムチャツカ→オホーツク→ヤクーツク→イルクーツク→ペテルブルグ） ・アリューシャン滞在中モスクワ商人の保護を受ける ・1788年、庄蔵と新蔵、イルクーツクの日本語学校の教師になる ・1791年、大黒屋光太夫ら3人、エカテリーナ2世に拝謁し帰国の許可を得る ・遣日使節ラクスマンに同行して帰国（イルクーツク→オホーツク→根室）
● 1792年、遣日使節ラクスマンを日本に派遣（交渉失敗）
⑥ 1794年、アリューシャンに16人が漂着（アリューシャン→オホーツク→イルクーツク→ペテルブルグ） ・1803年、アレクサンドル1世に拝謁 ・1804年、津田夫ら4人、遣日使節レザーノフに同行して帰国（クロンシュタット→南米ホーン岬→ハワイ→カムチャツカ→長崎）
⑦ 1804年、クリル・ポロムシリ島に14人が漂着（ポロムシリ島→ペテロパヴロフスク） ・レザーノフの通商交渉不調により送還なし。ゆえに脱走してクリル諸島を南下しエトロフ島に帰着
● 1804年、遣日使節レザーノフを派遣（交渉失敗）
⑧ 1806年、ロシア人、サハリン南部に上陸し日本人4人を捕虜にする。米・木綿等を略奪 ・北海道リシリー島で釈放
⑨ 1807年、ロシア人、エトロフ島に上陸して日本人を捕虜にする。米・木綿等を略奪。次いで利尻島付近で日本商船を襲う ・オホーツク→ヤクーツク→イルクーツク→オホーツク→クナシリ島で釈放
● 1811年、日本、ロシア艦長ゴロヴニンをクナシリ島で捕虜にする。
⑩ 1811年、カムチャツカに16人が漂着（カムチャツカ→オホーツク→クナシリ島） ・ロシア艦長ゴロヴニンを奪還するためクナシリ島で漂流民を使者に立てるが失敗
⑪ 1812年、ロシア人、報復のためクナシリ島で日本商船を襲撃し37人を捕虜にする ・のち31人を釈放し6人を抑留。1813年、箱館に入港し捕虜の高田屋嘉兵衛をゴロヴニン奪還の交渉役とす
⑫ 1813年、千島列島ハラマコタン島に12人が漂着（ハラマコタン島→ペテロパヴロフスク→オホーツク→ペテロパヴロフスク→エトロフ島へ送還（1816年））
⑬ 1813年、太平洋を1年5か月漂流しメキシコ沖で英国船が14人を救助（メキシコ沖→アラスカ→ペテロパヴロフスク→エトロフ島へ送還（1816年））
⑭ 1832年、太平洋を10か月漂流し7人がハワイ・オアフ島に漂着（ハワイ→オホーツク→アラスカ→エトロフ島に送還） ・アメリカ海運業者の世話によりオホーツクに移送
⑮ 1838年、太平洋を5か月漂流しアメリカ船が10人を救助（ハワイ→ペテロパヴロフスク→オホーツク→アラスカ→エトロフへ送還） ・イギリス船がペテロパヴロフスクまで送還
⑯ 1850年、クリル諸島海域でアメリカ船が13人を救助（ペテロパヴロフスク→アヤン→アラスカ→下田へ送還） ・アメリカ船がペテロパヴロフスクまで送還
● 1853年、遣日使節ブチャーチンを派遣（交渉成功、日本とロシアの通商関係成立）

以上のように、ケース①～④の事例をみると、いずれにおいても、生き残った漂流民はロシアにおいて日本語教師としての職を与えられている。ロシアは漂流民を日本に返すよりも、ロシアにおける日本語教育に従事させる方針をとったのであった。

ロシアが日本に大きな関心を抱いていたことは、ケース①から④までの漂流民が、いずれもペテルブルグに送致されたことから知られる。このうちケース①と③の漂流民は、ロシア皇帝に拝謁したことが確認されている。皇帝みずから、日本に対する関心を強く示したのであった。残念ながら、ケース②と④の漂流民は、皇帝に拝謁した記録を確認できないが、彼らもペテルブルグまで連れていかれているので、皇帝に拝謁した可能性があるだろう。

日本からの漂流民は、日本の情報を伝える重要な存在であったために帰国を許されず、来たるべき日本との交渉に備えて、ロシア人に日本語と日本の事情を教える教師に任命されたのであった。この4件の漂流民のうち、日本語教師になったことを確認できるのは、なんと13人にのぼる。彼らから教えた学生の中には、その後のロシアによる日本接触の動きのなかに姿をあらわす者もいた。

たとえば、ロシア海軍シュパンベルグ大尉は、ロシア政府から日本航路の開発と通商の可能性を調査するように指示されて、1738年から42年にかけて3度の日本遠征を試みているが、3回目の遠征には、ケース③の日本語教師である権蔵と宗蔵の教え子2人が参加したことが確認されている。遠征の基地はカムチャツカのポリシェレックだが、1738年の1回目の遠征では千島列島のウルップ島まで到達して引き返していた。

翌39年、再びポリシェレックを発したシュパンベルグ隊は、ついに日本に到達した。日本側の記録によって、仙台湾と房総半島南端の海域に停泊したことが判明している。日本ではのちにこの事件を「元文の黒船」(1739年は日本暦で元文4年だったため)と呼ぶようになったが、いずれの地でも地元民との間で金品の交換があり、ロシア側は毛皮や貨幣を贈り、日本人は水や食料を与えたようである。安房国

では6人が上陸している。

異国船の突然の来訪に驚いた仙台藩では、武器・弾薬を石巻に急送し、仙台北下も警備を強めるなど、さながら非常事態が宣言されたような状態になったという。トラブルを避けるためにシュパンベルグ隊は短時間で日本を離れたが、日本の地理的な位置も十分に把握できなかったために、ロシアは3度目の調査をシュパンベルグに命じたのであった。このときロシア元老院はペテルブルグから日本語学生2人を通訳として乗船させることを命じている。言語不通が調査失敗の一因とみたためであろう。その通訳が権蔵と宗蔵の教え子だったのである。

一説によると、この遠征隊には、1718年にカムチャツカで難破した日本人漂流民(ロシア名はヤコフ・マクシモフ)も乗船したという。ただし、3度目の遠征では日本に到達できなかった。

また1771年に、カムチャツカに流刑となっていたハンガリー人ベニョフスキーたちが脱走してロシア船を奪い、海路ヨーロッパに逃走する事件が発生しているが、そのロシア船の航海士補ポチャロフは、ケース④の日本人が教鞭をとるイルクーツクの日本語学校で学んだ人物であった。ベニョーフスキー一行はカムチャツカを南下して土佐や阿波、奄美大島などに寄港しており、日本側の記録では「はんべんごろう事件」として知られている。彼らが南下してヨーロッパを目指したのは、あるいはポチャロフが日本語教師から日本と東南アジアをつなぐ航路があることを聞いていたからかもしれない。

さらに1778年と79年に、イルクーツクの商人シャバリンが根室と松前に来航して日本に通商を求めているが、78年の通訳オチェレジンと79年の通訳アンチピンは、いずれもイルクーツクの日本語学校の卒業生であった。それだけではない。オチェレジンは、ケース④の漂流民の一人である利八郎の義兄であった。利八郎はイルクーツクでオチェレジンの妹と結婚していたのである。もう一人の通訳アンチピンもまた、イルクーツクの貴族だとされている。極東ロシアでは、版図の拡大をはかる役人や軍人だけではなく、商人や貴族たちまでもが日本との

交易によって一旗あげようとの野望を抱いていたのである。日本からの漂流民、その日本人による日本語教育は、彼らにその夢が現実のものであるとの希望を与えたのであろう。

2. 第二段階 — 漂流民の送還と遣日使節 —

迷いこんだ漂流民を保護して日本情報の蓄積につとめ、彼らを日本語教師に任命してコミュニケーションの手段を獲得するというロシアの姿勢は、東アジア海域への進出を効果的にするものであった。日本遠征に出向いた日本語学校の生徒を記録で確認できるのは、いまのところ、1742年のシュパンベルグ隊がもっとも古い。ロシアが最初の日本語教師伝兵衛を得たのは1705年のことであるから、あるいはシュパンベルグ隊よりもはやい時期に、日本探検に参画した生徒がいたかもしれない。我々が知りえるのは、あくまで記録に残されたものに限られるからである。

さて話を次の段階に進めよう。表1のケース⑤にあらわれる大黒屋光太夫とケース⑥の津太夫は、現在の日本でもっとも有名な漂流民である。それは彼らが、ロシアの遣日使節と一緒に日本に帰国したからであった。大黒屋光太夫は1792年に派遣されたラクスマンとともに、津太夫は1804年の使節レザーノフに連れられて、なつかしき母国日本に向かった。ロシアは漂流民送還を理由に使節を派遣し、それをきっかけにして日本と通商交渉をおこなう計画だった。日本政府はロシア使節の通商要求を拒否したが、交渉が終わるとロシア使節は日本人を日本政府に引き渡して帰国した。

このケース⑤と⑥の事実からわかるように、漂流民に対するロシアの姿勢は、それ以前に比べて大きく変化している。漂流民をロシアにとどめおくのではなく、送還することによって日本との通商交渉の契機に利用する方針に転換したのであった。それはシュパンベルグの日本遠征をふくめて、18世紀の前半にカムチャツカから千島列島やサハリンにいたる航路が開拓され、日本を射程距離にとらえたから

であった。そこで以下に、ロシアの東方進出と南下の経過を日本人漂流民と関連づけて概括しておく。

ロシア人がウラル山脈をこえてシベリアに進出したのは16世紀末のことだが、1642年にはヤクーツクに政庁を開設し、そこから東進して1648年にはベーリング海峡とカムチャツカの間にあたるアナドイリに砦を築いた。ヤクーツクから南進してオホーツクの町を開いたのも、ほぼ同時期の1649年で、イルクーツクに砦を設置したのは1661年のことであった。アナドイリはカムチャツカ半島や千島列島方面の基地となり、オホーツクはオホーツク海や北太平洋進出の拠点、イルクーツクはアムールランド方面への進出基地となった。

コサック隊長のアトラソフが、アナドイリ砦から南下してカムチャツカ探検に出発し、前述のようにケース①の漂流民伝兵衛と出会ったのは1697年のことである。伝兵衛から日本のことを知ったピョートル1世は日本情報の収集をシベリア庁に命じ、それをうけたコサック隊はカムチャツカ半島の探検を続け、ついに1711年、アンツィフェーロフとコズイレフスキーたちが、半島にもっとも近い北千島のシュムシュ島に上陸、1713年にはケース②の漂流民三右衛門が同行して第2島のプルムシル島に到達した。コズイレフスキーはプルムシル島でエトロフ島から来ていたアイヌ人を捕らえ、南千島列島や松前島（北海道）のを知ることになる。松前島の日本人はクナシリ島やエトロフ島のアイヌと交易をおこない、これら南千島のアイヌが北千島のアイヌたちと交易をおこなっていることを知ったのである。

コズイレフスキーの調査報告をうけたピョートル1世は、1719年、測量師であり航海士であるエヴィレーイノフとルージンに、さらに詳細な探検調査を命じた。両人は1721年にカムチャツカのポリシェレックを出発し、千島列島を測量しながら南下した。途中、嵐にあつて遭難しそうになるが、彼らが作成した地図には14の島々が記入されているという。その後1734年には、ロシア人が中部千島列島で毛

皮税を徴収したとの指摘もあるので、北海道に到達するのは時間の問題であった。

世界史に有名なベーリングの北太平洋探検は1724年、ピョートル1世によって発せられた。この探検は1741年まで実施され、ユーラシア大陸とアメリカ大陸が海峡（ベーリング海峡）によって切断されていることを発見した。だがこの探検隊には、その目的に日本航路の開拓もふくまれていた。日本探検隊の隊長としてオホーツクを出発したのが、前述のシュパンベルグである。彼は千島列島沿いに南下し、1739年の2回目の遠征でついに仙台湾や房総半島に到達したのであった。1778年にはイルクーツクの商人シャバリンが根室に來航して、はじめて日本に通商を求めたのである。

以上のように、17世紀末から18世紀前半にかけて、ロシアはカムチャツカを征服し、ついでクリル（千島）列島北部へと進出、さらに日本にいたる航路も発見した。その間に、ケース①～④の日本人漂流民によって日本についての具体的な情報も入手することができた。ケース⑤と⑥で漂流民を日本に送還したのは、ロシア政府に日本との通商交渉を開始する条件がほぼ整ったからであった。

3. 第三段階 — 通商交渉の失敗と紛争 —

1783年にアリューシャン列島のアムテトカ島に漂着した日本人が、ロシアの遣日使節ラクスマンに伴われてオホーツクから根室に到達したのは1792年9月3日のことである。アムテトカ島へ漂着したのは17人だったが、9年ぶりの母国帰還をはたしたのは、わずかに大黒屋光太夫ら3人にすぎなかった。現地での対応には松前藩士があたり、幕府の応接使が松前に到着したのは翌年3月であった。対応策の検討に時間を要したのだろう。ラクスマン一行が根室から函館に回航し、陸路松前に入ったのは6月である。幕府の使者は、通商についての申し入れは長崎でおこなうよう通知して長崎入港の許可証を与え、帰還民3人だけを受け取った。だがラクスマンは、長崎に回航することなくオホーツク

に帰港している。なお、ラクスマンには、ケース④の日本語教師の教え子が通訳として従い、事務長には漂流民久助の子供が任命されたという。ロシアに残った漂流民たちの労苦が、大黒屋光太夫たちの日本帰還を支えたということになる。ロシアの対日政策の変更は、このようなかたちで漂流民の運命に違いをもたらしたのであった。

次いでケース⑥の漂流民が、1804年9月、2回目の遣日使節レザーノフによって日本に送還された。アリューシャン列島に漂着したのは1794年であったから、10年ぶりの帰国ということになる。この間、16人の漂流民のうち3人が死亡し、6人が帰化、3人は病気のために残留を余儀なくされた。帰国できたのは、わずか4人であった。ここには、歳月と運命に翻弄された漂流民16人の、それぞれの姿がある。レザーノフの一行はラクスマンのときとは異なって、バルト海のクロンシュタット港を出発し、大西洋を縦断して南アメリカ大陸の南端を迂回、ハワイを経由してカムチャツカに向かう航路をとった。そこからさらに太平洋を南下し、九州を回って長崎に到着した。およそ1年2か月の航海であった。

ロシアはすでにラクスマン派遣のときに長崎入港の許可を得ていたので、通商が開けるとの期待をもっていた。だが通商を拒絶する幕府の姿勢は固く、レザーノフは帰還民4人を引き渡して長崎を退去した。6か月の日本滞在であった。日本はオランダ・中国・朝鮮と貿易をしており、新たな貿易国を求めないという対外政策の結果だが、この時期に長崎のオランダ商館長が幕府に通商特権の継続を請願したという指摘もある。日本貿易の利権をめぐるヨーロッパ諸国の、みえざる確執も背景にあったといえる。なお幕府は、今後、漂流民の送還はオランダを通じておこなうことを求めている。漂流民送還を理由にした来日に歯止めをかけようとしたのだろう。だが幕府のこうした姿勢は、ロシアに強硬策をとらせることになった。

レザーノフはいったんオホーツクに帰着したが、1806年、レザーノフの部下のフヴォストフは、樺

太南部にいた日本人を襲撃し、4人を捕虜にした。これがケース⑧の事件である。翌年、今度はエトロフ島の日本人施設を襲撃して6人を捕虜にし、さらにレブン島沖やリシリ島で日本商船を襲って船を焼き捨てた。これがケース⑨である。ロシア側は、こうした強硬手段によって幕府に圧力をかけ、ロシアとの交易に応じさせようとしたのである。フヴォストフは襲撃直後に釈放した日本人に松前奉行宛の手紙をもたせているが、もし交易に応じなければ、またこうした行為をおこなうと告げている。もちろん、幕府は通商拒否の姿勢を変えていない。これより先の1805年、ケース⑦にあげたように、陸奥国の漁民14人が北千島のポロムシリ島に漂着したが、レザーノフの通商交渉の失敗により、日本への送還が見送られている。そこで彼らはカムチャツカから脱走して、アイヌの助けをかりながら千島列島を南下し、エトロフ島まで帰還したのであった。

その後1811年、ロシアはゴロヴニンを南千島列島の沿岸測量に派遣したが、クナシリ島で日本側に捕縛される事件が発生した。フヴォストフの日本人襲撃事件を契機に、日本側は北海道や、すでに日本人が進出していたクナシリ島・エトロフ島の防衛体制を強化していた。そうしたなかでのゴロヴニンの来航であったために、一挙に緊張が高まり、捕縛という事態になったのである。

ロシア側はゴロヴニンを救出するために、フヴォストフが捕虜にした日本人と、1811年にカムチャツカに漂着した日本人（ケース⑩）を送還し、ゴロヴニンと交換する計画をたてた。ここでもまた、漂流民は交渉の道具とされたのであった。ゴロヴニンの部下のリコルドは、クナシリ島でこれらの日本人を次々と使者に立てたが全員戻ってこなかった。これに怒ったリコルドは、クナシリ島沖を航行していた高田屋嘉兵衛の船を襲撃し、6人を捕虜にしている。ケース⑪がそれである。これらの捕虜とゴロヴニンを交換しようとしたのであった。クナシリ島でおこなわれた交換交渉では、高田屋嘉兵衛が調停役にあたった。嘉兵衛は、ゴロヴニンを釈放させるためにはロシアが日本にフヴォストフ事件を謝罪する

必要があるとリコルドを説得している。高田屋嘉兵衛は聡明な商人であった。そこでリコルドは、オホーツクに戻ってイルクーツク知事の謝罪文を用意し、箱館に持参した。これによってゴロヴニンが釈放されたのである。

以上のように、ロシアによる通商要求と日本による拒否は、両国の関係を緊張させることになった。それがロシアによる日本人襲撃と、日本によるその報復という事態を招いたのであった。ケース⑧・⑨・⑪は、そのことを象徴的に示している。

4. 第四段階 — 日本との通商へ —

こうした不幸な事件のあとも、日本からの漂流民は絶えることがなかった。ケース⑫～⑯は、それを示している。しかし、この時期の漂流民の救助と送還には、これまでとは異なった特徴がある。ケース⑬～⑮はいずれも、太平洋を漂流してメキシコ沖またはハワイまで到達している。彼らを救助し、カムチャツカまたはアラスカまで送還したのはイギリス船とアメリカ船だった。イギリス船やアメリカ船がカムチャツカやアラスカまで来ているのである。これ以前にもアメリカ沿岸まで漂流した日本人がいただろうが、アメリカが彼らをカムチャツカまで送還することはなかった。航路が開かれていなかったからである。

しかし19世紀になると、アメリカは捕鯨活動や貿易を求めてカムチャツカ沖やオホーツク海、さらに日本近海に進出し、イギリスも東アジアでの活動を活発化させるようになった。そのためにアメリカやイギリスの船が太平洋を往来するようになって、漂流した日本人がアラスカやカムチャツカを経由して日本に送還されるようになったのである。アメリカ船が直接、日本に漂流民を送還することもあった。表1には載せてないが、アメリカ船に救助された漂流民としてもっとも有名な人物は、土佐国の万次郎である。彼は1841年、出漁中に鳥島に漂流し、半年後にアメリカの捕鯨船に救助されてハワイに至り、1850年に琉球から鹿児島に帰還している。幕末・

維新期の外交にも大きな役割をはたした。

漂流民をめぐるこうした状況変化のなかで、1840年には、イギリスがアヘン戦争を契機に武力で中国を屈服させ、香港を奪った。1844年にはオランダが日本に各国との通商条約を結ぶように勧告し、1853年にはアメリカが武力を背景に通商条約の締結を強く要求した。同年、ロシアもプチャーチンを日本に派遣し、通商を求めた。日本はヨーロッパ諸国やアメリカによる武力外交に危機感を抱いていたので、1854年、ついにアメリカ・イギリス・ロシア・オランダと和親条約を結び、貿易制限を撤廃することになったのである。

5. 漂流民による文化交流

日本人漂流民は、ロシアと日本の仲介者として位置づけられ、かなり重要な政治的役割をはたした。ロシアの日本戦略のなかに組み込まれたとってよいだろう。しかし彼らは、ロシアと日本の文化的交流にも大きな役割を果たしている。表2をもとにそれを確認しておこう。

第一は、ペテルブルグ⁶およびイルクーツクの日本語学校の教師としての役割である。漂流民のうち15人が日本語教師となったことを確認できる。彼らはロシアの青年に日本語を教育しただけではな

表2 日本人漂流民の文化交流

〈辞典・著書〉

ケース①：伝兵衛→1702年『伝兵衛物語』を口述

ケース③：権蔵→1738年『新スラヴ・日本語辞典』を編纂

ケース④：伊兵衛、久太郎、長松、利八、長助→1773年『日本語単語集』と『日本語会話集』を編纂

ケース④：佐之助の息子のタタリノフ→1782年露日辞典『レクシコン』を編纂

ケース⑤：大黒屋光太夫→1791年『Lingurum tius Orbis Vocabularia Comparativa Augustissimae Cura Collecta』（欽定全世界言語比較辞典）の編纂に参加

ケース⑤：新蔵→1817年『日本及び日本の商業について』（ロシア語版）を著述

ケース⑯：7人→1851年『露日辞典』を編纂

〈日本語教師〉

ケース①：伝兵衛→1705年ペテルブルグ日本語学校

ケース②：三右衛門→1714年ペテルブルグ日本語学校

ケース③：権蔵、宗蔵→1736年科学アカデミー附属日本語学校

ケース④：勝右衛門、伊兵衛、磯治、八兵衛、久太郎→1747年ペテルブルグ・アカデミー附属日本語学校→イルクーツク航海学校附属日本語学校

ケース④：長松、利八、長助、佐之助→イリムスク日本語学校→イルクーツク航海学校附属日本語学校

ケース⑤：庄蔵、新蔵→1791年イルクーツク日本語学校

ケース⑥：善六→1796年イルクーツク日本語学校

〈通訳〉

ケース②：三右衛門→1713年コズイレフスキーの千島探検の通訳

ケース⑤：大黒屋光太夫→1792年遣日使節ラクスマンの通訳

ケース⑥：善六→1813年ゴロヴニン交換交渉の通訳

ケース⑪：高田屋嘉兵衛→1813年ゴロヴニン交換交渉の通訳

〈日本におけるロシア語教育〉

ケース⑤：大黒屋光太夫→1808年、日本人オランダ語通訳にロシア語を教育

〈帰国語のロシア語辞典の編纂〉

ケース⑤：大黒屋光太夫

ケース⑬：重吉

〈種痘技術の修得〉

ケース⑨：五郎治

ケース⑩：久蔵

〈西洋式造船技術の修得〉

ケース⑫：喜三左衛門

（注） ケース番号は表1に該当

く、日本の風俗などについても教えた。ロシア人生徒が、その後、日本との通商交渉に通訳として参加したことは前述の通りである。

第二は、漂流民が日本語辞典を編纂したり、日本に関する著書を書いたことである。少なくとも5冊の辞典が編纂されているが、すべてが残存しているわけではない。ケース①の伝兵衛(Denbei)は『伝兵衛物語』を口述し、日本の制度や風俗などについて詳しく証言した。また、ケース⑤の新蔵(Sinzou)も、『日本及び日本の商業について』という著書を出し、日本の商業や地理・歴史をロシアに紹介している。

第三は、漂流民が通訳や交渉役として活躍したことである。確認できるのは、ケース②の三右衛門、ケース⑤の大黒屋光太夫、ケース⑥の善六、ケース⑪の高田屋嘉兵衛などである。

以上は日本人がロシア国内や日本との外交交渉などで活躍した事例だが、帰国した漂流民のなかには、

日本でロシア語の辞典を編纂したり、ロシア語教育にあたった者もいる。ケース⑨でロシアの捕虜となった五郎治とケース⑩の久蔵は、種痘法を日本に伝え、日本の医学の歴史に名前を残している。また、ケース⑫の喜三左衛門は造船技術を修得して帰国し、日本で西洋式の帆船を建造している。このほか、帰国した漂流民たちの多くは漂流記録を書き、ロシアの風俗・歴史・言語などを日本に伝えた。

以上のように、漂流民たちはロシアと日本の文化的交流に大きな役割をはたした。漂流という不幸な体験は、歴史のなかで、日本とロシアを結ぶ太い糸となり、やがて19世紀半ばの日本とロシアの国交樹立をもたらすことになったのである。

(初出:「開国以前の日露関係について」平川新、A.A. キリチェンコ共編『日本とロシアーその歴史をふりかえる』東北アジアアラカルト8、東北アジア研究センター、2003年)

二 遣日ロシア使節レザーノフ来航と日本の政情

1. レザーノフ来航をめぐる幕府と天皇

ロシア使節レザーノフが石巻の若宮丸漂流民4人をナジェジダ号に乗せて長崎に来航したのは、文化元年(1804)9月のことである。寛政4年(1792)、ロシア使節ラクスマンが根室に来航して通商を求めたことに続く、ロシアから2回目の使節であった。ラクスマンは、天明3年(1783)にアリューシャン列島のアムチトカ島に漂着した伊勢の神昌丸乗組員大黒屋光太夫ら3人を同伴していた。ロシア領に漂着した日本人送還を対日交渉の手がかりとするのが、この時期のロシアの方針であった。

しかし、長崎に入港したレザーノフは厳重な監視下におかれて、与えられた宿舎の屋敷地から街中へは一步も出ることができなかつた。半年間待たされたあげくに幕府から通告されたのは、通商の拒否と長崎からの退去であった。幕府の回答は、通信と通商の関係を朝鮮・琉球・中国・オランダに限定し、それ以外の国とは新たな関係をもたないというもので、研究史では鎖国を祖法とする認識がこのときに明確に成立したと位置付けられている(藤田覚「鎖国祖法観の成立過程」『近世後期政治史と対外関係』吉川弘文館、2005年)。

ところが、レザーノフの『日本滞在日記』(大島幹雄訳、岩波文庫、2000年)やその他のロシア史料をみると、幕府の拒否回答の裏側にあるとされる事情が赤裸々に記されている。しかもその内容は、これまで日本の史料ではまったく確認されていないものであった。本章ではそれを紹介し、それがもつ意味について検討しておきたい。

(1) レザーノフ日記から

初めにレザーノフの『日本滞在日記』から、長崎通詞とレザーノフの会話を引用しておこう。幕府目付で長崎特使の遠山景晋^{かげみち}がレザーノフに幕府の決定を伝えたのが日本暦文化2年3月6日のことで、次に引用する3月15日はレザーノフ一行が長崎を出航するための準備をしているときのことである。

◇レザーノフ『日本滞在日記』ロシア暦1805年4月1日(文化2年3月15日)

この日も朝から荷積みが行なわれた。通訳の為八郎が友人たちと一緒に来訪。

「ラクスマンが受け取ったものが許可書であったことを知る必要があります。その時委任状を出した重臣は出羽^{デワサマ}さまといいます。出羽さまは將軍の側近でしたので、將軍にロシアと通商関係を結ぶことがどれだけおおくの利益をもたらすかと説得しました。將軍も熱心にこのことに取り組みました。出羽さまは勝利を取めたのです。もうひとりの重臣で出羽さまの友人でもある蝦夷^{エゾサマ}さまも彼を支持し、三人目の飛驒肥後^{ヒダヒ}さまも支持したのです。

いまからこのあと何が起きたかを簡単に説明いたします。私たちは五年間首を長くしてロシア人を待っていました。六年目に不幸にも出羽さまが亡くなります。ここで反対勢力が力を持ちはじめます。蝦夷さまには、この勢力に立ち向かうだけの力がありませんでした。彼は、二年後に引退に追いつめられました。飛驒肥後さま一人だけになり、ますます立場が弱くなったのです。民衆はロシアとの通商を待ち望んでいましたが、あなた方は来ることなく、騒ぎは静まりました。

あなたが日本に到着してすぐに、将軍は通商に同意することを明らかにしました。しかし一人の狡い重臣、出羽さまの敵、つまりはロシアの敵が、将軍を思いとどませ、根幹に関する法令に関しては、まず天皇の同意をもらわなくてはならないと言い出したのです。今回は特に新しくキリスト教の強国を受け入れるかどうかに関わる大事な問題だと言うのです。さらに彼は天皇に対して、彼を精神的な皇帝といてもいいと思いますが、将軍が天皇の最後の権力を奪おうとしており、ラクスマンに許可書を渡したときも、天皇には何も知らせなかったと、働きかけたのです。実際に何も知らせなかったのはほんとうのことであり、決断力をお持ちだった出羽さまは、その時天皇に知らせる必要がないと見なしていました。ついに天皇はこの唆しにのり、重要な案件を決定するには、幕府閣僚の同意が必要になったのです。集められた幕府閣僚たちは、この狡い重臣の策略に丸め込まれてしまったのです。彼の名前を私たちに聞かないでください。私たちは彼から厭われています。ただひとつだけ言えることは、将軍はあなた方の味方だということです。しかしいまは内乱が起こらないように、譲歩しているのです。しかし飛騨肥後さまが犠牲になりました。何故ならば天皇に報告しなくてもいいと主張した一人だったからです。あなたもご承知のように、私たちの国では約束はそんなに厳格に守られていません。日本の法律は、外国でも同じでしょうが、狡猾な解釈によっていかようにも変えられるのです。(下線は筆者。以下同)

上に引用した長崎通詞見習の馬場為八郎とレザーノフとの会話の内容は、大きく二つに分けられる。一つはラクスマン来航時の問題であり、二つめはこのたびのレザーノフ来航時の問題である。

まず寛政4年(1792)のラクスマン来航時について、馬場為三郎が語ったという内容を整理しておこう。

・幕府がラクスマンへ与えた文書は貿易許可書

だった。

- ・許可派の中心人物は将軍側近のデワサマだった。
- ・デワサマは日ロ貿易の利益を将軍に説いた。
- ・デワサマの友人であるエゾサマもデワサマを支持した。
- ・ヒダヒゴサマもデワサマを支持した。
- ・デワサマはラクスマンへの許可書について天皇に知らせる必要はないとみなしていた。
- ・だが6年後にデワサマが死亡し、反対勢力が力を持ち始めた。
- ・エゾサマはその2年後に引退に追いつめられた。
- ・ヒダヒゴサマ一人になった。

次に、レザーノフ来航時については次のように整理できる。

- ・将軍はロシアとの通商に同意した。
- ・だが「デワサマの敵」が将軍を思いとどませ、キリスト教大国を受け入れるためには、まず天皇の同意が必要と言い出した。
- ・彼(「デワサマの敵」)は、ラクスマンへの許可書も天皇に知らせていないと朝廷に働きかけた。
- ・将軍はあなた方の味方だが、内乱がおこらないように譲歩した(将軍はロシアとの通商に同意していたが、天皇と対立しないように譲歩して通商を認めなかった)。
- ・天皇に知らせなくてもよいと主張したヒダヒゴサマが失脚した

おおむね以上が紹介した部分の大要だが、このレザーノフ日記には、「デワサマ」、「エゾサマ」、「ヒダヒゴサマ」という3人の人物名が出てくる。日本人の通詞から聞いた名前を記録したものであるから、発音を正確に聞き取ったかどうかの問題がある。「デワサマ」が「出羽様」である可能性は高いとしても、「エゾサマ」が「蝦夷様」であり、「ヒダヒゴサマ」が「飛騨肥後様」という表記でよいかどうかについては確証はない。

この時期に出羽守を名乗っていた老中は水野忠友

だが、1788年（天明8）に松平定信に老中を解任されており、ラクスマン来航時は老中ではない。その後1796年（寛政8）に西丸付き老中となるが、在任中の1802年（享和2）に没している。ここにいる「デワサマ」（出羽様）がこの水野忠友であるかどうかは定かではないが、その可能性は低いように思われる。

「デワサマ」を支持したという「エゾサマ」を「蝦夷様」とすることにも不安がないわけではない。「蝦夷様」とした場合には、この特有の表現は蝦夷地を支配していた松前氏のことをさす可能性をもつが、松前氏は志摩守を官途名としており、松前氏をさして「蝦夷様」とする用法はみられないという（菊地勇夫氏のご教示による）。ましてや幕閣あるいはその周辺で「蝦夷様」と呼ばれる存在は見出しがたい。ただし幕府は、ラクスマン来航を始めとするロシア問題を理由に、寛政11年（1799）に松前藩から東蝦夷地を上知している。レザーノフ日記には「エゾサマ」が8年後に引退に追いつめられたとあり、時期的には符節が合わないわけではない。長崎通詞が比喩的に松前氏を「エゾサマ」といった可能性もあるが、松前氏が日口通商派であったことを示す根拠は、いまのところ見出していない。

一方、「エゾサマ」の発音は「イズサマ」に近い。もしこれを「イズサマ」とした場合には、この時期の有力な老中として松平伊豆守信明が視野にはいることになる。松平伊豆守信明は、天明8年（1788）4月から享和3年（1803）12月まで老中に在任していたが、信明解任の理由として将軍家齊が信明の蝦夷地対策に不満を抱いていたからだとする高澤憲治氏の見解は興味深い（『老中松平信明の辞職と復職』『南紀徳川史研究』5号、1994年）。時期が一致するわけではないが、信明の解任時期と、「エゾサマ」がおおよそ8年後に引退を余儀なくされたという記事にも親近性がある。とはいえ、「エゾサマ」を「イズサマ」とし、それを松平信明だとする決め手はない。

次の「ヒダヒゴサマ」は、発音に従えば「飛驒肥後」に近いが、「肥田」だとすれば長崎奉行の肥田豊後守頼常の可能性もある。後掲する史料の翻訳者

は「フィダフィガサマ」と訳しているため、少しは肥田豊後の発音に近くなるが、フィット感は低い。しかも彼は、レザーノフが来たときに失脚したわけではない。

このようにみえてくると、長崎通詞の馬場為三郎がレザーノフに教えた名前から幕府関係者を特定することは困難だといわざるをえない。そのことがこのレザーノフ日記を使いにくくしている大きな要因なのだが、翌日の日記にも幕閣の名前が登場している。

◇同上、ロシア暦1805年4月2日（文化2年3月16日）

両国の利益に反することをしている狡い重臣の名前を教えて欲しいと尋ねた。ながい間、彼（通詞の本木庄左衛門）は答えをためらっていたが、ついに白状した。

「彼の名前を口にすることも汚らわしい。彼の名前はウネメ（采女）といいます。彼は江戸の近くの田舎にある武蔵の領主です。この人でなしは60歳ぐらいです。

「ウネメ」といえば、レザーノフの通商要求を拒否せよと主張した老中戸田采女正氏教うじのりがおり、長崎通詞が彼を通商拒否派の中心人物だとみなしても不思議ではない。他の官途名は該当者を探すことが困難であるため、長崎通詞が出まかせをいった可能性もあるが、「ウネメ」に関しては、通商を拒否したことに対する通詞としての怒りから、ついつい本名をいったのではないだろうか。

なお、「ウネメ」は60歳ぐらいとされているが、戸田采女正氏教は宝暦4年（1754）の生まれであるから、当時は数えて52歳程度になる。また戸田の領地は美濃国大垣であって、日記にあるような武蔵の領主ではない。ただし江戸の近郊ということであれば、レザーノフへの強硬な回答を主張したという土井大炊頭利厚（藤田覚前掲「鎖国祖法観の成立」）が下総国古河を領地としている。戸田にしろ土井にしろ、いずれもレザーノフの通商要求を拒否した老中であつたから、情報が混乱したのかもしれない。

ところで以上の記事は、長崎通詞たちがレザーノフに語った情報をもとに書かれたものである。大筋

の流れとしては、ラクスマン来航時に幕府はロシアとの貿易を容認する許可証を渡したが、その後、貿易反対派が幕閣の主導権を握り、レザーノフ来航時に將軍は通商を容認したものの、幕閣の反対派が朝廷の許可があると主張して対立し、ついには將軍も通商拒否に転じなければならなくなった、ということである。藤田覚氏は、ラクスマンへ信牌（長崎入港許可証）を渡した当時の幕府には日口通商を許可する可能性があったと指摘しているが、馬場為三郎の証言は、外交の最前線に立つ通詞たちもロシアへの信牌授与が日口通商を開くサインだと受けとめていたことを示すことになる。

なお、先の記事での大きな問題は、通商を容認しようとする將軍に対して、通商拒否派は天皇を持ち出してこれに対抗した、とする点であろう。横山伊徳氏はレザーノフの『日本滞在日記』をもとに、対口通商をめぐる幕府内部に対立があり、通商反対派が天皇を利用した可能性について言及している（『18-19世紀転換期の日本と世界』『日本史講座』7、2005年）。もしこれらの記事が事実であるとすれば、対外関係史だけではなく朝幕関係史にも大きな影響を与えることになるだろう。それだけに、この記事のもつ意味が問われることになる。

(2) 露米会社記録から

そこでもうひとつ、これに類する別な史料を紹介しておこう。これは通商を拒否されてレザーノフが日本を去ったあと、ロシア暦1808年7月2日付けで、露米会社本部からロシア皇帝アレクサンドル1世に提出された報告書の一節である

◇ロシア暦1808年7月2日「露米会社本部からアレクサンドル1世への報告。日本との通商関係を発展させ、またサハリンを開発する必要性について」（『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係』第1集所収、2004年、東北アジア研究センター。以下、『日口史料集』1と略称）。

（ラクスマンが入港許可証を得てから）～その後9年が経過し、いまや日本自身が望んでいる関係を日本と構築するという企ては、残念

ながら、完全に忘れ去られたままであり、もし皇帝陛下がアメリカ会社の二つの船を世界一周に派遣する際の1803年にこの出来事を思い出されることがなければ、この忘却はさらに長期にわたっていたことでしょう。陛下はこの問題を好ましくも侍従の故レザーノフに委任されたのでありますが、彼は日本民族と、自分の以前の意向にしたがってロシアの使節を受け入れることを確定していた^{クボ}公方自身の非常に断固たる傾向のため、結局逆の回答を得るという不幸に見舞われることになったのであります。

この原因となったのは我々に好意をもっていた大臣出羽^{デフサマ}様がラクスマン来航後7年目に死去したことであり、現在の強力な第一大臣^{ウネメサマ}采女^{ウネメサマ}様〔老中戸田采女正氏教〕は立派とはいえないエゴイストで、自国の君主の目的を理解せず、ヨーロッパ人との交渉を許すことで自分の権力が弱体化することを恐れ、本心の狡猾さから、新しいキリスト教民族に対する彼の関知しない入国許可により好ましくない結果を引き起こされないので、あらかじめ内裏と連絡をとることを忠告したのですが、別の首都であるメアコ（都）に住み、聖職者トップであるこの^{ダクリ}内裏は采女様の秘密エージェントによって偏向し、教唆され、彼の知らない間にラクスマンに対して証書が渡されたことを知ると、自分は^{クボ}公方の側から侮辱を受けたとみなし、我々の使節団が送られた際に会議に集合した200人の地主、貴族に対し満足のいく回答を求めたのであります。これらの国家の役人たちは公方に対し^{ダクリ}内裏の侮辱感がどれほど大きいものであるのか伝えたところ、彼は自分の意思に反することに同意し、巨大な流血の惨事を食い止めるべく我々との交易を拒否し、^{ダクリ}内裏の憤怒に対する生贄として、大臣であり故出羽^{デフサマ}様の同志であったフィダフィガサマを、常に我々との交易に関心をもち、公方と人民の希望を支持したという理由で差し出したのであります。彼は位を取り上げられ、流刑に処されてしまいました。

いま、このアレクサンドル1世への上奏文の全体を紹介しておく、ラクスマンが幕府から入港許可証を得るにいたった経緯を最初に述べたあとに、上に引用したようなレザーノフ使節団が得た幕府内部の情報を記し、そのあとには、レザーノフと長崎通詞とのやりとり、レザーノフが長崎を出航したあとに調査したサハリンの様子、通商を拒否した日本への報復をレザーノフがフヴォストフに命じたことなどを述べ、日本との通商関係を開くためにもサハリンを占領して定住政策をとるのが得策だと皇帝に提言する内容からなっている（注：本稿でサハリンと表記するのはロシア史料にもとづくか、あるいはロシアの立場からみた場合であり、日本側から見た場合にはカラフトと表記している）。

このように、ロシアの対日交渉の一連の経緯を記した記事のなかに上記引用部分があるのだが、ここに記されていることを箇条書きにしてみよう。

- ・我々（ロシア）に好意をもっていた出羽様は、ラクスマン来航後7年目に死去した。
- ・現在は采女様（老中戸田采女正氏教）が実権を握っている。
- ・采女様が入国許可を好ましく思わず、将軍に内裏（天皇）へ連絡をとるよう忠告した。
- ・内裏（天皇）は采女様の使者から、天皇の許可なくラクスマンに許可証が交付されたことを知ると、将軍から侮辱を受けたとして、大名らに回答を求めた。
- ・そのため将軍は自分の意思（対口通商許可）に反して、ロシアとの交易を拒否した。
- ・天皇の憤怒に対する生け贄としてフィダフィガサマが失脚した（注：レザーノフ日記では「ヒダヒゴサマ」と訳しているが、本翻訳では「フィダフィガサマ」と表記している。それぞれの訳者による表記を尊重してそのままとした）。

ロシアとの通商に前向きなデワサマ、天皇を持ち出して通商を妨害するウネメサマ、通商派であるフィダフィガ様の失脚といった点は先に紹介したレザーノフ日記と重なる内容である。ただし同日記になかったのは、ラクスマンへの信牌を自分の許可も

得ずに与えたと知った天皇が、「200人の地主、貴族」に対して回答を求めたという点である。大名のことをさしているのであろう。

以上みたように、レザーノフ日記の記事と露米会社によるロシア皇帝への報告書は内容的な重なりが多い。レザーノフは露米会社の重役であったが、ペテルブルグに向かう途中、クラスノヤルスクで1807年に病没している。したがってこの報告書は、レザーノフ以外の露米会社関係者によって書かれたことになるが、レザーノフの使節団には露米会社社員も随行しており、彼らからの情報とレザーノフの報告書などをもとに作成されたものと思われる。

ロシア史料には、デワサマやヒダヒゴサマ（フィダフィガサマ）あるいはエゾサマなど、幕府の重要人物であろうと思われる人名が出てくるが、いまのところ確定できるのはウネメサマくらいのものである。これだけでも記事の信憑性は大きく揺らぐであろう。ましてやレザーノフが来航したときに、ウネメサマ（老中戸田采女正）が天皇に使者を送って將軍家斉の通商容認を潰したという記事や、ラクスマンへの信牌授与について天皇が「200人の地主、貴族」、すなわち大名たちに回答を求めたといった記事は、これまで日本側の記録では確認されていない事柄であることから、ますます怪しげな史料だということになりかねない。レザーノフ日記の翻訳本が刊行されたにもかかわらず、これまであまり積極的に活用されてこなかったのは、こうした記事のおかげで、その信憑性に疑いがもたれていたからなのかもしれない。

(3) クルーゼンシュテルンの記録から

しかし、ここでもうひとつ、レザーノフが乗ってきたナジェジダ号の艦長クルーゼンシュテルンの『奉使日本紀行』（1840年刊の『世界周航記』のオランダ語版を幕府通詞青地盈が翻訳）からも、これらに関連する記事を紹介しておこう。

◇ロシア暦1804年11月24日（文化元年10月23日）

又予察するに日本にて国政を主る君をクボウサ

マと称せり。尚事の重きはダイリの命を得て決定する事と思はる。今度使節を受るには彼内裡は国政にかかはらざれども、此をダイリに告てその命を受る事と思はる。此に由て長崎奉行は江戸より指揮を受るのみならず、又都よりダイリの命をも受る事とみゆ。

レザーノフ日記や露米会社報告書とは違って、クルーゼンシュテルンのこの記事は、彼が得た情報を的確に整理して天皇と将軍との関係を簡潔に書きとめている。すなわち、日本で国政を司るのはクボウサマ=将軍であり、天皇は本来、国政にはかかわらない。しかし重要事項に関しては天皇の命をもって決定するようで、今回のロシア使節への対応も天皇に報告し、その命を受けることになっているようだ、と。内容的には、レザーノフ日記や露米会社報告書と共通した「天皇-将軍」認識であるといつてよいだろう。

(4) オランダ商館長の記録から

じつは驚くべきことに、こうしたロシア史料以外にも、レザーノフ一件について幕府が朝廷に報告したとする外国の記録がある。それはオランダ商館長ドゥーフが残した『日本回想録』（原著は1833年出版、永積洋子訳、新異国叢書、雄松堂出版）である。ドゥーフは1799年から1817年までの間、日本に滞在しており、レザーノフ来航時には出島からその成り行きを見守っていた。彼が将軍と天皇の関係を論じた箇所に、次のような記事があった。

このとき（2代将軍秀忠）以後、日本には国内の争乱も外国との戦争もない。しかし権現（家康）により内裏の権力は大きく制限され、かつて内裏は日本全土の唯一の統治者だったが、今やすべては将軍あるいは江戸の皇帝の保護の下におかれている。将軍は天皇と朝廷に毎年一定の年金を与えている。（中略）

しかし私は、幕府が朝廷の意向を配慮した方がよいと判断した二つの事例に出会った。一つはロシアの使節レザーノフが1804年、1805年に到着したとき、私が知り得た限りでは、京都

の宮廷、内裏の意見が求められた。私の日本滞在中のもう一つの事例は、天文学者が江戸の幕府に、これまでの慣習の太陰暦ではなく太陽暦を用い、この年から暦をそのように変えたいと提案したときである。これは内裏の宮廷に差し止められた。

ドゥーフは、以前とは異なって、いまや幕府が全国の支配権を有しているが、知っている限りでは2度、幕府が朝廷に意見を求めたことがある、と記している。1回目はレザーノフが来航したとき、2回目は太陰暦から太陽暦への変更を提案したときだという。レザーノフ来航時に幕府が朝廷の意見を求めたというのは、ロシア史料と完全に一致する内容である。

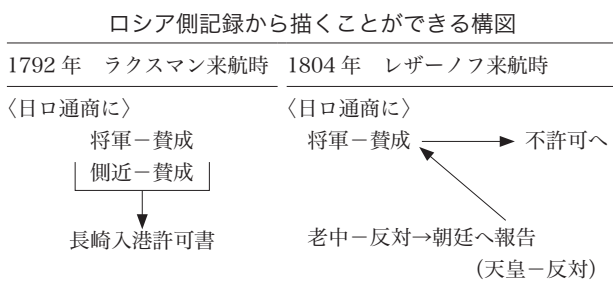
だが訳者の永積洋子氏は、ドゥーフのあげる二つの事例はまだ日本側史料では確認されていない、と注釈している。のちに改めて言及することになるが、たしかにレザーノフ来航一件が朝廷に奏上されたという日本側史料は、まだ発見されていない。

しかし天文学者が幕府に太陽暦の採用を提案したという動きは、これまでの研究でも確認されている。暦の研究者である岡田芳郎氏によると（『明治改暦』大修館書店、1994年）、経世家本多利明は寛政10年（1798）刊行の『西域物語』のなかで、太陰太陽暦である官暦を批判して西欧諸国と同じ太陽暦（グレゴリオ暦）の採用を唱えたという。また中井竹山が老中松平定信の諮問に答えて、政治・経済・社会上の諸問題を論じた『草茅危言』は寛政元年（1789）に奉呈されているが、そのなかでは迷信的暦註を排除した暦の作成を提言しており、これをうけて竹山の弟の中井履軒は、太陽の運行を主とした享和元年（1801）の暦を作成した。また山片蟠桃が履軒に倣って作成した「享和二年天暦」は、著名な『夢之代』（文政3年、1820年刊）に収録されているが、同書の初稿本は享和2年（1803）に執筆した『宰我の償』であった。岡田氏によると、中井履軒作の享和元年暦も山片蟠桃の「享和二年天暦」も厳密には太陽暦ではないということだが、太陽暦的要素を抽出した暦であるという。

ドゥーフの回想録には「この年から暦をそのように変えたいと提案した」とあるから、あるいは享和元年と二年に作成されたこれらの暦を指しているのかもしれない。ただし、この暦の採用を幕府が朝廷に働きかけたかどうかは不明であり、仮に幕府の働きかけがあったとしても、暦法の宗家とされているおんみょうのかみ つちみかど陰陽頭の土御門家がこれに同意したとは思われない。そのあたりの関係を反映して、幕府による働きかけの有無とは別に、「内裏の宮廷に差し止められた」という浮説が流れることはありえたであろう。ドゥーフは、そのような情報をどこからか耳にして書き留めた可能性が高い。だとすればレザーノフに関するドゥーフの記事にも、その正否は別にして、情報としての何らかの根拠があったとみなすべきであろう。要は、このような情報がどこから伝えられたのかということである。

(5) 幕府は朝廷に報告したのか

さて、これらの外国記録に出てくる情報をもとに、ラクスマン来航時とレザーノフ来航時における幕府の対応の違いを整理すれば、次表のようになる。



すなわち、1792年のラクスマン来航時においては、将軍家斉および老中と目される将軍側近はいずれも通商に前向きで、長崎入港許可証（信牌）を授与した。しかるに1804年のレザーノフ来航時には、将軍家斉は許可する意向であったものの、反対する老中戸田采女正が通商許可には天皇の許可があるとの理由で朝廷に報告した結果、天皇が強硬に反対したため、将軍も不許可にせざるをえなかった、というものである。

もしこれが事実であったとすれば、日ロ通商をめぐって将軍と老中が対立しただけではなく、反対派

の老中が天皇に内通し、天皇は幕府政治に介入して外交政策に重大な影響を与えた、ということになる。場合によっては、近世後期の政治史や朝幕関係史をひっくり返すほどの重大な事件ということになるだろう。ましてや、藤田覚氏が『近世政治史と天皇』（吉川弘文館、1999年）の「あとがき」に記した次の一文を読むと、あるいは、という思いを抱いてしまうのである。

歴史学研究会編の『日本史年表』を全面的に作り替え、『新版日本史年表』を作成する作業を手伝ったさいに、旧版の文化元年（1804）11月に、「林述斎ら、外国に対する処置につき朝廷に報告する」という記事があり、根拠となる史料を幕府や朝廷関係からあれこれ探してみたが見つからなかったため、史料の根拠なしとして削除した。しかし、幕府による朝廷への対外情勢報告という、朝幕関係史、近世政治史からすると重要な史実なので、本当は事実なのに探し方が悪くて見つからなかったのではないかと、刊行されてからもヒヤヒヤしていた。

ここにいう歴史学研究会編の『日本史年表』というのは1966年に初版が出版され、広く利用されたものである。その年表の文化元年11月に「林述斎ら、外国に対する処置につき朝廷に報告する」という記事があったが、史料の根拠を確認できなかったことから、藤田氏はこの事項を年表から削ったというのである。文化元年11月というのは、レザーノフが長崎で幕府の回答を首を長くして待っていた時期である。

レザーノフへの対応について幕府から意見を求められた林述斎と柴野栗山が、鎖国＝祖法観により通商を拒否すべしとする回答をしたことは、すでに藤田氏によって明らかにされている。旧版『日本史年表』では、その林述斎らの回答が朝廷に報告されたとしているのであった。外国史料では、レザーノフ使節への対応について幕府サイドから朝廷へ報告されたとされており、符節が合うことになる。これが旧版年表の根拠だったのではないかとも思いたくなるのだが、外国史料では林述斎の名前があらわれな

いので、年表記事とはズレがある。これを根拠とするには無理があるようだ。

ところで、これらの外国史料には、はたして信憑性があるのだろうか。ロシア史料にあるとはいっても、記事中の人物の特定も困難な史料であるから、証明力が保証されているわけではない。オランダ商館長ドゥーフの記事にしても、その記事の根拠が示されていないので、十分な証明力を有しているとはいえないだろう。したがってこれらの記録をもって、幕府が朝廷に報告した、ということの根拠とするのは、残念ながらむずかしい。

とはいえ日本側史料は、関係史料に通じた藤田氏でも探し出せなかったという。念のために、レザーノフ来航時に武家伝奏を勤めていた2人の公家の日記（正親町公明「公明卿記」、広橋伊光「伊光記」。いずれも東京大学史料編纂所蔵）で、レザーノフが長崎に滞在した文化元年9月から翌年4月までを確認したが、幕府から朝廷へ報告があったと思わせる記事を見出すことはできなかった。外国史料に見える事柄を歴史的事実とみなすためには、いまのところ旧版『日本史年表』が根拠とした史料が再発見されることを期待する以外にないだろう。

(6) 長崎通詞や警固兵たちからの情報

そこで、ひとまず問題の立て方を変えて、これら外国史料がもつ情報の性格について考えてみることにしたい。

まずロシア史料についてだが、幕府が天皇に意見を聞いているとか、天皇が通商に反対したといった情報をロシア側関係者（レザーノフ、露米会社社員、クルーゼンシュテルンなど）が、みずからでっち上げなければならない必要性はないので、こうした情報はレザーノフ日記が示すように長崎通詞からもたらされたものとみなしてよい。クルーゼンシュテルンも、しばしば長崎通詞と会話したと書いている。もちろんそれはオランダ語を介してだが、露米会社社員も同様であろう。一方、オランダ商館長ドゥーフは、日本語も堪能で出島貿易をつうじて町人たちとの交流もあるから、情報源は必ずしも長崎通詞に

限られるわけではない。だがレザーノフの長崎滞在中、通詞たちはドゥーフのもとにも出入りしており、同様の情報が流れた可能性は十分に想定できるだろう。いずれも長崎通詞を主な情報源とみなして問題はないと思われる。

しかし、こうした外国史料の記事とは異なって、もし幕府から朝廷への報告がなかったのだとしたら、なぜ長崎通詞はこうした情報をレザーノフに話したのだろうか。幕府からなかなか回答が来ないことに苛立っていたレザーノフをなだめるために、通詞たちが勝手に作り話をしたということなのだろうか。そうだとした場合、ではなぜそれが天皇を引き合いに出した話になるのだろうか。疑問の種は尽きない。

ところで、朝廷や天皇のことが通詞とレザーノフの間で話題になるのは、いつのことだろうか。それをレザーノフ日記で確認してみよう。

文化元年10月4日の日記では、江戸からの返事が遅いと問い質すレザーノフに対して、大通詞の石橋助左衛門が「江戸は、おそらくまだ決定できずにいるのだろう」と答えている。長崎から江戸に急使が派遣されて日が浅いので、通詞の返答にもまだ余裕がある。だが12月22日に通詞の馬場為八郎は、「あなたが急いでいるので、新たに江戸から京^{ミヤコ}に天皇に相談するため使者が送られています。そこから返事が来れば、ただちに間違いなく急使がくるはずですよ」と答えている。ここで、「京^{ミヤコ}」と「天皇」が初めて出てくる。

さらに年の瀬も押し迫った12月29日、同じく馬場為八郎は、次のように伝えた。「今回の遅れは二百人近くの名門の重臣たちが、日本人にとって根幹に関わる問題である通商条約について決議するために、江戸に集まっていることから生じたことである。こうした大事な問題は、じっくりと話し合い、決定されなくてはならない。しかし奉行はもう一度特使を派遣するので、どうかご安心ください」と語ったという。江戸に大名たちが集まって相談しているので遅くなっている、ということらしい。翌12月30日に馬場は、「返事の遅れに関しては、ロシア人

と交渉するのがいままでにないことであり、将軍は自分の叔父、兄、そして彼が大変尊敬している親戚に使者を送っているからだと言った。これだけ遅れているのは、望ましい兆候だ」と伝えてきたという。将軍は御三家などと相談している、という意味だろう。

こうした経緯をみると、天皇のことに言及したのは、もっぱら通詞の馬場為八郎であったようだ。幕府からの返事の遅れに苛立つレザーノフに対し、遅れの理由として、① 天皇へ使者を出していること、② 江戸で大名会議がおこなわれていること、③ 御三家へ相談していること、をあげてなだめたのであった。日本史研究の現状からみると、異常な発言というしかない。では馬場為八郎は、その場凌ぎのために天皇のことを引き合いに出したのだろうか。必ずしもそうではない。たとえば御三家については、松平定信の『宇下人言』(岩波文庫、166頁)に、ラクスマン来航時のこととして、「御三家のうち尾水両侯へも御談申候」とあることから、ありえないことではなかった。

しかもこうした認識は、馬場為八郎だけではなく、少なくとも通詞のなかでは共有されたものであった。その点を確かめておこう。

先に紹介したレザーノフ日記文化2年3月15日条には、馬場為八郎が、ラクスマンが受け取った文書は通商許可証だったこと、今回も将軍は通商に同意したが、幕府のなかの「デワサマの敵」が天皇に働きかけて将軍の決断をくつがえしたと語ったということが記されていた。じつは幕府がレザーノフに通商拒否を通告したあと、幾人もの通詞たちが口々に馬場為八郎と似通った発言を始めるようになったのである。たとえば本木庄左衛門は3月10日に、レザーノフに対して次のように語っている。

◇レザーノフ『日本滞在日記』ロシア暦1805年3月27日(文化2年3月10日)

昨日、庄左衛門がこんな決定になるとは思ってもいなかったのだと、フリードリッヒにその悲しみをぶちまけた。そしてある秘密を明かした。

ラクスマンが来訪時に受け取ったものは、まぎれもなく貿易許可書だった、という。しかしその許可はどっちにでもとれるような内容になっていた。その時幕府のなかでは、多くの意見があった。しかし当時幕府の中で権力を持っていた二人の幕僚が、ロシアとの通商が日本にとって有益であると強く主張した。そして多くの人がその意見を支持するようになった。あれから六年、すくなくとも八年後に私たちが日本に来ていれば、間違いなく歓迎されていただろう。しかし六年後にロシアとの通商を主張していた一人が亡くなり、八年後にはもうひとりの支持者が死んでしまった。いまはそれに反対していた者たちが権力を握っている。私たちが日本に来たとき、彼らにとっても以前に決められた意見を覆すのは大変困難なことであった。何故なら将軍自身、ロシアに対して好意を抱いていたからだ。彼らは国の役人たちを集め、その意見をまとめ、彼らの意見に従うよう奔走した。しかしそれから六ヶ月経ってその力も弱くなっている。時が経てば、以前の意見が勝つに違いない。

本木庄左衛門は、ラクスマンが受け取ったのは貿易許可書であったこと、将軍はロシアに好意を抱いていたが、通商に反対する者たちが権力を握っていることなど、馬場為八郎に共通した発言をしている。この本木は3月12日に、オランダ船を利用して長崎に来航することや、避難を装って日本の海岸に着船することを求めるなど、幕府の拒否通告以後も、相当に日口通商にこだわっている。しかもそのこだわりという点では、大通詞の石橋助左衛門も同様で、3月19日にレザーノフに対して、「ずるがしこい大名(戸田采女正のことかー筆者注)が死んだとき、またはなにか変化があったときは、すぐに公式に手紙を書きますので、その時はロシア人を2人、バタヴィアを經由して派遣して下さい」と求めている。通詞目付の名村多吉郎もまた、通商反対派が亡くなったあとに、「ご自身で松前に来て、交渉をはじめめるのです。～(中略) 全員あなたのために働く準

備ができています」と、レザーノフに、時節をまっ
て動くよう助言している。

以上から見てとれるように、通詞見習の馬場為八
郎だけではなく、小通詞本木庄左衛門、大通詞石橋
助左衛門や通詞目付名村多吉郎（レザーノフ日記 89
頁には多吉郎は大通詞とある）も、幕閣のなかに反対派
がおり、そのために通商が拒否されたと認識してい
る。おそらく長崎通詞たちに共通した理解だったので
あろう。しかし、より重要なことは、こうした認識
が通詞たちだけのものではなかったということであ
る。

長崎警備には筑前黒田藩や肥前佐賀藩が隔年交替
で勤めていたが、同地の梅が崎に幽閉されていたレ
ザーノフ一行には肥前大村藩の藩士たちが警固にあ
たっていた（レザーノフ日記文化 2 年 2 月 7 日。なお大
島幹雄氏は、同日記文化 2 年 2 月 28 日に宿舍の点検に来た
松田東三郎は佐賀藩の「物頭」だとしている）。レザー
ノフは顔馴染みになった警固兵たちから日本語を教わる
など、打ち解けていたようだ。2 月 26 日のレザー
ノフ日記によると、その警固兵たちとの会話として
次のような記事がある。

そこで話題を^{クボウ}將軍のことに転じてみた。「あ
なた方の国では、^{インペラートル}皇帝がふたりいますね。ふ
たりともそれぞれ自分の能力や弱点をもってい
ることでしょう、ふたりのうちどちらが慈悲深
いのですか」と聞いてみた。

これに対して彼らは、「私たちの国に皇帝は
ひとりしかいません」と答えた。私は「それは
誰ですか？ ダイリですか、テンシサマです
か？」と訊ねた。

かれらは、「クボウはテンシではありません、
天下さまです。天下さまは、この国で一番偉い
大名です。私たちの国で皇帝は、テンシのこと
です。クボウはテンシの許可がなければなにも
できません。それで彼のもとに許可を求めに使
者を出しているのです」と答えた。

警固兵も、將軍が使者を出して天子の許可を求め
ている、と語っていたのである。通詞の馬場為八郎
と同様の認識であった。役割も所属も異なる警固兵

と通詞が密接な関係をもっていたわけではない。し
かし、両者は共通の認識を有していたのである。と
いうことは、こうした外国の記録にあらわれた「天
皇＝將軍」関係は、まぎれもなく彼らに情報を伝え
た日本人の認識でもあったということになる。

いま改めてそれを整理すると、將軍（幕府）は天
皇の許可がないと外交政策を決定できない、あるい
は最終的政治権限は天皇にあり、という関係として
認識していたということである。警固兵が語ったと
いう「私たちの国で皇帝は天子のことです。公方は
天子の許可がなければなにもできません」という関
係が、その典型であった。

しかし一方で、レザーノフ日記や露米会社記録に
あったように、天皇への報告をめぐって幕府内部は
必ずしも統一されていないという認識も存在してい
た。たとえば、「デワサマ」や「ヒダヒゴサマ」は「天
皇に報告しなくてもよい」とする立場であるのに対
して、「デワサマの敵」は「根幹に関する法令に関
しては、まず天皇の同意をもらう必要あり」とする
考え方であった。前者を大政委任論であるとする
と、後者は天皇大政論といってもよいだろう。しか
も、ラクスマンに対応した「デワサマ」の時には天
皇に報告せずが幕府の姿勢であったのに対し、レ
ザーノフの時は報告必要派の「ウネメサマ」が実
権を握っていたとしている。わずかに 10 年の間に
幕府の対ロシア政策は大きく変わった、という認
識であった。

將軍よりも天皇が身分的にも権威的にも上位だ
という認識は当時の人々にもあったし、国制的にも
そうであった。研究史的にそれは、「金冠」と呼ば
れたり「象徴」と呼ばれたりしてきたものだが、そ
の形容詞からもわかるように、天皇に国政・外交に
関する実権はなく、それは將軍＝幕府が掌握して
いたとみなされてきている。そのことは研究史のな
かでも再三にわたって確認されてきたことであり、
藤田覚氏の「大政委任論」においても強調されて
きたことである（藤田『近世政治史と天皇』84 頁）。

文化 3（1806）年から 4 年にかけて、ロシア海
軍士官フヴォストフとダヴィドフらの艦船がカラ
フト、エトロフ島、リシリー島を襲撃した事件につ

て、同4年、幕府が朝廷に報告した。当時の朝廷はそれを聞き置いただけであったが、「弘化3年(1846)に朝廷はそれを活用して幕府に対し海防強化の勅書を出し、幕府もそれを受け入れたことにより、朝廷は幕府の対外政策に介入できる道を切り開いたのである」と、藤田氏は指摘している(『幕末の天皇』講談社、1994年、149頁)。これをもってしても、やはり朝廷が外交に介入するのは、弘化3年をもって嚆矢とするのである。

しかるに長崎通詞や警固兵たちは、研究者や幕府の思惑をはるかに超えて、レザーノフが来航した文化元年(1804)段階で、天皇が外交権の最終的権限をもつと認識していた。しかもレザーノフが求めた通商要求については、実際に幕府から朝廷へ報告がなされ、天皇の強い反対によって拒否されたと認識していたのであった。

なお補足しておくとして、ラクスマンに与えた信牌が通商許可証だったという認識は、長崎通詞だけではなく、当時の世評としても存在した可能性がある。数年後のことだが、文化3~4年(1806~7)に発生したロシア海軍士官フヴォストフらによるカラフト・エトロフ襲撃事件の原因について、日本国内には、ラクスマンに通商を許可する回答(信牌授与)をしておきながら、レザーノフが来ると幕府は約束を翻して拒否したからだとみなす「俗間」の説が存在したという(藤田覚「対外関係の伝統化と鎖国祖法観の確立」、前掲『近世後期政治史と対外関係』所収)。幕府が日口通商に前向きだという認識は、フヴォストフ事件を待つまでもなく、ラクスマンに信牌を授与した段階で存在したであろう。レザーノフが来航したことを知ると、都から多くの商人が長崎に来たというのもその期待のあらわれであろうし、長崎通詞たちが通商拒否に落胆し幕府を批判したのも、通商が開かれるという期待が裏切られたからであった。

(7) 「天皇-将軍」関係をめぐる日本社会の認識

レザーノフ日記や露米会社記録に出てくる幕閣と思しき人物名については、その比定がなかなかむずかしい。だが、たとえばロシア史料に描かれた「デ

ワサマ」の役回りからすると、老中の松平定信がもっともイメージに近い。レザーノフは「通訳たちは、あまりに軽率に自分たちの政府について話しすぎます」(前掲『日本滞在日記』文化2年2月26日条)と書いているが、むしろ人物については特定しにくいように、わざと異なった官途名を話していたとみたほうがよいだろう。そのように考えると、ロシア史料に登場する人物の比定に悩むよりも、そこで語られている天皇と将軍の大枠としての関係に注目したほうがロシア史料を有効に活用することにつながってくるだろう。

前述のようにロシア史料では、天皇と将軍の関係がきわめて緊張感を伴ったものとして描かれていた。天皇による外交への強い介入、将軍と幕閣との対立、日口通商を認めない幕府に対する長崎通詞や警固兵、商人たちの不満などが記されていた。もちろんここに記された情報と認識には錯誤や誇張もみられるが、ロシア使節団が得た日本情報は長崎通詞や警固兵らを通じたものである以上、それらを単なる錯誤や誇張として退けるわけにはいかないだろう。すなわちこれらの事実は、ロシア史料に記されたような認識が日本社会のなかに確実に存在した、ということの意味するからである。

とくに留意しておきたいのは、通詞や警固兵たちが、外交に関する最高決定権は天皇にあると認識していた点である。これは従来の研究史による理解では十分に補足されていなかった認識状況であろう。天明期以降、朝廷側の能動的な動きによって天皇権威が徐々に浮上し始め、それへの巻き返しとして松平定信によって大政委任論が提示されるというのが従来の理解であった。幕府側はこれによって政務を掌握する論理的正統性を得たことになるが、一般社会では必ずしもそうではなく、天皇が外交権をもつ、あるいは天皇が最終的政務権をもつという認識が相当に広がっていたことを示している。後述するように、ロシア海軍士官フヴォストフがエトロフ島やリシリー島で捕らえた日本人商人ですら、天皇と将軍との間で不和が増大し、日本には内訌があると語ったというのだから、こうした認識の普及度は無視で

きないはずである。松平定信があえて大政委任論を主張したのは、諸朝儀の再興にける朝廷を牽制するためだけではなく、社会に広がるこうした「天皇—将軍」認識に対する対抗という要素があったのかもしれない。

しかし実際の政治史としては、ロシア史料が語るような、天皇が外交に容喙し幕府の通商方針を覆したという事実は確認できていない。にもかかわらず、ではなぜ通詞たちは、天皇の介入によって将軍が通商方針を転換させたという情報をロシア使節団に流したのだろうか。これを通詞や警固兵たちによる、まったくのでっち上げだとするにはできない。彼らがそのように認識してしまう社会的必然性があった、ということだろう。ではそれはなにか。当時は儒学や国学からの尊王論が隆盛化しつつあった時期だが、こうした抽象的尊王論から「幕府による朝廷への報告」といった情報が出てくるとは思われない。具体的な政治的事件とからませた情報は、世俗的な情報である可能性が高いのではないだろうか。

そこで注目しておきたいのが、当時の日本社会に流れていた朝廷と幕府の対立に関する風評である。その最大のものが尊号一件に関する実録物であった。

1789年（寛政1）、光格天皇が生父の閑院宮典仁親王に太上天皇の尊号を贈りたいという希望を幕府に伝えたが、老中松平定信は、皇位にも就かず皇統を継がなかったものが太上天皇になった前例がないという理由でこれに反対した。しかし天皇は1792年（寛政4）公卿の大多数が賛成しているとして尊号宣下を強行しようとしたため、定信は武家伝奏おおぎまちきんあき正親町公明と議奏なるちか中山愛親らの職務上の責任を問うため江戸に召還して厳しく吟味した。幕府のこの強い姿勢に押された光格天皇は、ついに尊号宣下を断念せざるをえなかった。これが世に言う尊号事件である。

本橋ヒロ子氏（「実録・講談『中山大納言』、『歴史公論』11-4、1985年）や田中暁龍氏によると（「尊号一件風説書の成立事情」、東京学芸大学『近世史研究』4、1990年）、尊号事件のあと、この事件を題材にした『中山夢物

語』『中山瑞夢伝』『寛政秘録』『中山亜相東下記』などの実録物が多数出版され、貸本屋等を通して全国的に流布したという。しかしその筋立ては史実と異なって、中山愛親が松平定信を論破し意気揚々と京都へ帰るというものであった。史実は幕府が天皇と朝廷を押さえ込んだのだが、実録物では朝廷側が幕府側を圧倒する筋書きに逆転されていたのである。これを読んだ人びとは、朝廷と幕府のこうした関係を現実のものとして認識しただろう。操作された情報が造り出す仮想世界であった。幕府は流布していた『中山物語』を享和年間に禁書とし、文化13年にはこれを演じた講談師を逮捕したという。しかしその後も類書が出ているので、倒錯した尊号一件物語は、事件後まもなくから世間に流れ続けたといえるだろう。しかも本橋氏によれば、実録物化しつつある内容のものが、かなり早い段階から、幕府内部の人間とその周囲で密かに転写されていた形跡があるという。

尊号事件でもう一つ重要だと思われるのは、幕閣内部での対立である。藤田覚氏によると、公家の処分をめぐる老中首座の松平定信は、朝廷に事前通告することなく幕府が公家に刑罰と役職罷免を申し渡すべきだと主張したのに対し、老中の松平信明らは、朝廷との関係すなわち「公武融和」に配慮して事前に通告すべきだと主張し、対立したという（前掲『幕末の天皇』）。

してみると、尊号事件をめぐるのは、実録物とおして、朝廷・天皇の意思の貫徹、すなわち朝廷は幕府に優越しているという情報が流れ、事実関係では天皇への事前報告をめぐる幕閣内部に対立があったということになる。注目しておきたいのは、この関係が、レザーノフ来航をめぐる対応としてロシア史料が描く構図と類似している点である。ロシア史料によれば、ラクスマン来航時に将軍の側近であるデワサマ（出羽様）は、ラクスマンに発給する長崎入港許可証について、天皇に知らせる必要はないとしたのに対して、レザーノフ来航時には、主要幕閣である「デワサマの敵」が天皇の同意が必要だと主張して朝廷に連絡したことになっている。連絡

をうけた天皇は激怒してロシアとの通商に反対し、将軍は通商方針の撤回を余儀なくされたということであった。かくしてロシア史料のポイントは、第1に天皇への事前報告の可否をめぐる幕府内部に対立があったこと、第2に天皇の意思が将軍の意思に優越したという点にある。

このようにみえてくると、尊号事件とレザーノフ来航をめぐるのは、天皇と将軍の関係について類似した構図の情報が社会に流れていたことになる。したがってここでは、尊号事件をめぐる流言飛語とレザーノフへの対応情報が混同されて流布していた可能性を考えておきたい。

それを証するかのように、江戸の情報屋こと藤岡屋由蔵が書き残した『藤岡屋日記』（三一書房、近世庶民生活史料、1987年）の文化2年（1805）3月の条に、次のような記事がある。

一、此日昼頃より参り候、行列如前日号令、今日東都之御教諭、奉行読聞申候、天意も同敷敷。

江戸から下った特使遠山景晋が、レザーノフに幕府決定を通告した状況を記した記事のなかの一項目である。奉行が「東都の御教諭」すなわち幕府の教諭書を読み聞かせたという記事のあとに、「天意も同敷敷」とある。天皇も同じ考えか、といった趣旨である。通商拒否という幕府の方針に何らかの形で天皇がかかわっている、という認識が巷間に流布していたことをうかがわせるものだろう。レザーノフに対応した長崎の通詞や警固兵たち、さらに北方でフヴォストフに捕らえられた日本人商人たちが類似の「天皇—将軍」関係を語ったのは、当時の列島上をこうした虚実ないまぜにした情報が駆けめぐり、それが社会認識として一定の定着をみせていたからではないだろうか。

藤田氏によれば、天皇権威浮上のきっかけは文化露寇事件を幕府が朝廷に報告したことにあるが、朝廷が実際に外交問題に容喙し始めるのは、弘化3年（1846）に朝廷が幕府に対して海防強化の勅書を出したことだからだという。

しかし社会的には、すでに文化元年のレザーノフ

来航時から天皇による外交への具体的介入が存在したとみなされており、朝幕も緊張した関係にあると認識されていたことになる。こうした事例をみると、政治史上の問題とは別に、社会的な「天皇—将軍」認識のあり方についても再検討が求められるように思われる。

2. フヴォストフのカラフト襲撃事件と長崎通詞

(1) レザーノフによる襲撃命令

レザーノフは、日本との通商交渉に失敗して長崎を発ったあと、サハリンを視察してカムチャツカに帰港した。その後ロシア暦1806年8月、レザーノフはフヴォストフ中尉に、サハリン島（以下、ロシア史料およびロシア側の立場からはサハリン、日本史料および日本側の立場からはカラフトと表記する）とクリル列島（以下、ロシア史料ロシア側の立場からはクリル列島、日本史料および日本側の立場からは千島列島と表記する）へ遠征し、そこで日本船を襲撃して乗組員を捕虜にし、船は焼き払うことを指示した。これを受けて同年10月、フヴォストフのユノナ号はサハリンのアニワ湾に面した日本人居留地を襲撃して4人を捕虜にし、物資を略奪して家屋に放火したあと、カムチャツカのペテロパヴロフスクに帰港した。

翌年5月、フヴォストフは部下のダヴィドフと共にユノナ号とアヴォシ号で遠征し、クナシリ島とリシリー島で日本人居留地を襲撃して略奪と放火を繰り返し、日本人を捕縛した。彼らは捕らえた10人のうち8人を釈放して、ロシアが日本との通商を要求していることを伝えさせようとした（A.A. キリチェンコ「海賊船ユノナ号とアヴォシ号—ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件」『東北アジア研究』6、2002年、および『日口史料集』1、152頁以下所収）。

以上は、日本では「文化露寇事件」あるいは「フヴォストフの乱暴事件」として知られた事件のことである（藤田覚「近世後期の情報と政治—文化年間日露紛争を素材として—」、前掲『近世後期政治史と対外関係』所収）。襲撃のねらいについてレザーノフは、「我々

にとって利益の多い日本帝国との通商を実現する目的」（『日口史料集』1、139頁）のためだと述べている。ロシア帝国の力を見せつけられれば、恐れをなして日本は通商関係を開くだろうという読みであった。

フヴォストフに対するレザーノフの主な指示を要約すると、次のようである（1806年8月8日「N.P.レザーノフから秘密遠征隊長N.Aフヴォストフへの支持」『日口史料集』1、138頁以下より）。

1. サハリン島のアニワ湾に入航し、日本船を見つけたら焼き討ちすること。
2. 健康で労働に適した日本人は連行すること。特に職人や手工業者を捕虜にすること。そうでない者はロシア領であるサハリンに二度と来ないよう言い含めて松前島に帰すこと。
3. 捕虜や僧侶をノヴォアルハンゲリスク（ロシア領アラスカ。現在のアメリカ領シトカ）に連れていくこと。
4. 日本人の倉庫からあらゆる物資を持ち帰ること。

レザーノフが発したこのような命令をフヴォストフは忠実に実行したのだが、レザーノフは襲撃によって日本へ圧力をかけるだけではなく、どうやら日本人をアラスカ開拓の労働力としても確保する目論見があったようだ。長崎からカムチャツカに帰港したさい、レザーノフは陸奥国牛滝村慶祥丸漂流民らをアラスカ湾のコディアック島に入植させる案もっていた（1805年6月8日「N.P.レザーノフによる露米会社本部宛の報告書」ロシア国立歴史史料館蔵）。サハリンで日本人を捕縛するのは、その構想のなかから生み出されたものだったとあってよい。慶祥丸漂流民らが小舟でカムチャツカを脱出し、千島アイヌに助けられて命からがらエトロフ島まで帰りついたのは、レザーノフのこうした動きを察知したからであろう。

とはいえレザーノフは、次のような指示も出している。

サハリン人および日本人に関しては、どこで彼らに会おうとも、前者については優しさで惹きつけ、後者に対してはその船を焼いて損害

を与えること。しかしどこでも可能な限り人間性は保つこと。というのは、無慈悲さを向ける対象は個人ではなく、政府であるべきだからだ。政府は個人から交易を奪い、残酷な不自由さと貧困のなかに押し込めている。したがって我々が日本人に行うあらゆる寛大さによって、日本人はロシア人の度量の大きさをより深く理解するようになり、恐怖心だけでなく感謝の念からも、通商を求めることを余儀なくされるであろう。

サハリン人は優しく手なづけなければならないが、日本人には厳しくあたれということである。しかし一方で、「人間性」は保てともいう。あまり手荒で無慈悲なことをするなということのようだが、襲撃して焼き討ちしたり、捕縛して連行することは、それだけでも十分に無慈悲で非人間的な行為だろう。だがレザーノフにとって、悪いのはあくまで日本政府であった。日本政府はロシアとの交易を望む日本人の声を圧殺しており、だからこそロシアの力を見せつけて日本政府に恐怖を抱かせ、通商を実現させるのだという論理である。長崎で半年間も待たされていたとき、レザーノフは隠忍自重に徹していたが、通商要求を幕府に拒否されると、一気に強硬的姿勢に転じたのであった。

(2) 長崎通詞の「助言」

ところで、レザーノフがサハリンに目をつけたことについて、それは長崎通詞たちのアドバイスによるものだと述べたロシア史料がある。長文だが重要な史料なので、できるだけ引用しておく。

◇ロシア暦1808年7月2日「露米会社本部からアレクサンドル一世への報告。日本との通商関係を発展させ、またサハリンを開発する必要性について」（『日口史料集』1、174頁以下所収）

（前略）この首都江戸で起きたことについて、そして我々に対する拒否について長崎で知られるようになったとき、我々との通商を疑いなく信じていた民衆ばかりでなく、ちょうどそのときそこにいた役人、とくに通詞たちは、彼ら皆

が望んだロシアとの通商、ロシアとの将来の彼らの交流が彼の陰謀のせいで実現しなかったとして政府の厳格さ、その専制性にも関わらず、采女様を主犯者として罵倒し、自分たちの極端な憤激と不満を表明し、それゆえに故出羽様の有益な助言は遅かれ早かれ大きな力となって受け入れられることになるだろうし、采女様はすでに60歳であってそう長くはなく、彼の死後のロシアとの関係を再び彼らは望んでおり、その際には我々にとってもっと有利なことになっている可能性があると、寡黙というみずからのしきたりを超えてレザーノフにはっきりと吹き込み、我々がラクスマン後の12年間ぐずぐず手間取ったと**いって非難したのであります。**

役人の中には、特に通詞ですが、レザーノフに対してオランダ人を通じて手紙を書くこと、自分たちのところで起きていることを合図によって通知することを約束する者までいましたが、その際に、彼らが通知するときには采女様はすでにいないだろうから、ロシアの船は風を逃れての避難者のふりをして長崎に入港できるし、我々を成功裡に受け入れることが可能であるとの条件さえ出した者もありました。その際我々には長崎へオランダの雇員の一人として自国の役人を派遣するよう助言してきましたが、彼は長崎に1年住めば彼を通じてあらゆる詳細を知ることができるようになり、そうすればレザーノフ自ら松前に交渉のために来ることになるというものでした。彼らは翌年(1806年)彼らのうち誰が江戸に行くことになる**とも、ロシアのためになるようなより賢い人を準備するだろうと断言**しました。その際彼らは、大名と皇帝の2人の現地知事は、ほとんど彼らの我々への好意を疑うだろう**ということ**を請け合ったのです。

その上不可解な用語と合図で彼らはレザーノフに対し、彼らの希望がいち早く、よりよく実現するべくロシア人がすぐに北方から、日本近くに横たわっている島、たとえばマトマイ松前、

サハリンを指しながら、またいくつかこの問題に関する根拠を紹介しつつ、サハリンの温和な住民が獲た海獣の毛皮や、日本の北部のすべての住民にとって唯一不可欠の食糧である魚を彼らから暴力的に奪っている日本人をすぐに追い払わねばならないということ**を、最終的に助言**しました。これらがすべて実行されると、この行いの結果は皆に対し目を開かせ、公方は、宗教上の権力が多数の自国人の扶養さえそれにかかっていると**ころのロシアとの通商を拒絶する際に示した抵抗の誤りをはっきりさせることに**取り掛かるでしょう。

これらの助言に突き動かされたレザーノフは、通商大臣から彼に与えられた訓令No. 19を記憶に留めつつ、北部の松前、ことに今日ヨーロッパ人の誰にも支配を受けておらず、一人の中国人もいないサハリんに注目しました。彼はナジェージダ号に長崎よりこれらを観察すべく出港するよう命じましたが、現地に行ったこの船は松前の南部には、ラクスマンが接近したときすでに長い間日本人が居住しており、北部にはあらゆる点で我々のクリル人に類似している現地住民アイヌ以外には誰もいないことに気づきました。アイヌは獣や魚をとっています**が、日本人は南部からやってきてそれらを暴力的にむしり**とっているのです。このような日本人を彼はそこで何人か捕らえましたが、彼らは毎年魚を求めて各地を回っており、アメリカ会社がロシア入植地を確立したアレクサンドル(ウルップ)島もそのうちのひとつであると彼に断言しました。

サハリンではアニヴァ湾で彼は同様に、おとなしく、温厚であらゆる点で我々のクリル人に似ているところの極めて多数のアイヌ、魚・獣の漁のために大阪の商人によってわずか8年前に設置された、日本の獲物取引所〔番屋か〕を発見しました。彼らは現地住民だけを暴力的に働かせ、その後、収穫物をむしり取って日本へと搬送している**のであります。**

(中略) こういった考えを抱き、上述の長崎における協議を受けて、彼はアメリカから2隻の船ユノナ号、アヴォシ号 に対し、フヴォストフ海軍中尉にはこの島とそれに付属しているその他の島々を観察するだけでなく、そこから日本人を追い出し、彼らの獲物取引所を破壊し、それによって、両民族にとって正しく、有益な問題について、強力かつ友好的な隣の大国を拒絶したことがどれほど無作法なことだったか日本人に感じさせるよう委ね、命令しました。

これは、露米会社本部からロシア皇帝に上奏した文書の一部である。レザーノフは1807年にクラスノヤルスクで病没しているから、この文書はレザーノフが作成したものではない。レザーノフの記録などを用いて、日本に同伴した露米会社のシェメリンか、あるいは別な社員が作成したものであろう。

これによると、幕府がロシアとの通商を拒否したことについて通詞たちが大いに落胆し、強く幕府を批判したらしい。それだけではなく、今後のことについて通詞たちはレザーノフに対して次のような提言をおこなったという。

- ①嵐からの避難船を装って長崎に入港せよ。
- ②オランダ人を通じて接触せよ。
- ③オランダ人の雇い人として長崎に入れ。
- ④サハリンから日本人を追い払え。

通詞による「これらの助言に突き動かされ」て、レザーノフはサハリンに注目し、「上述の長崎における協議を受けて」、彼はフヴォストフ中尉に、「そこから日本人を追い出し、彼らの獲物取引所を破壊」することを命じた、というのである。もしこれが真実であれば、日本中を震撼させたフヴォストフによる襲撃事件には、長崎通詞が関与していたということになる。相当に衝撃的な内容だというしかない。

(3) レザーノフ日記に見える「北のこと」

幕府がレザーノフに通商拒否を通告したあと、長崎通詞たちは確かに幕府のことを強く批判していた。そのことは、前掲したレザーノフ日記や露米会社本部の報告書からも見てとれる。しかし、サハリ

ンの日本人居留地を襲撃して日本人を追い出せ、といった「助言」が長崎通詞らによって本当になされていたのだろうか。通詞たちの名誉のためにも、この記事の信憑性について検証しておく必要があるだろう。

上の文書は、レザーノフや露米会社社員(シェメリン)らが長崎滞在中に通詞から聞いたことをもとに作成されたものであろうから、このような会話がなされていたとすれば、長崎滞在中の毎日のことを書き付けたレザーノフ日記に関連する記事があっても不思議はない。その点はどうなっているだろうか。

◇レザーノフ『日本滞在日記』ロシア暦1805年3月29日(文化2年3月12日)

庄左衛門が私ひとりの時を見計らって、次のような内容のことを話した。

「今回の拒絶はあなたにとっては偶然の出来事であり、決して諦めてはなりません。すべては変革をこうむるのです。民衆はあなたたちと通商したいと望んでいるのです。これはいつか実現しなければならないのです。私たちはオランダ人を通じて手紙を書くことになるだろう」

「それはできない」と答えた。

「ではこうしましょう。手紙を受け取ったら、オランダ船にしかるべき人物を乗せてください。オランダ人たちが秘密を守ることは、私たちが保証します。この人物に私たちが行なおうとしている計画をすべて話します。それから日本で状況が変化したとき、遭難から逃れるという名目で日本の海岸にたどり着いて下さい。あなた方を受け入れることが、通商の始まりになります。幕府は自分たちの犯した誤りを正すために、その機会をのがさないようにするはずで

す。しかしこの時、北方のことは忘れないで下さい。私はこの大事な話を記憶に留めておいてもらうために、あなたに何かを残しておきます」。

彼はこっそりと薄い紙を渡してよこした。その中には日本のお土産が入っていた。(中略)そして感謝の言葉を述べたあとに、また何か言

おうとしたのだが、他の通訳が入ってきたので、そのままになった。通りすがりにまた彼は「まあ見て下さい。ただ北方のことをお忘れなきように」と繰り返した。これが何を意味するのか理解できなかった。

この日記には、幕府が通商拒否の回答をしたあとに、通詞の本木庄左衛門から、④我々の手紙を受け取ったらオランダ船にしかるべき人物を乗船させよ、⑤避難船の名目で日本の海岸に着船せよ、⑥手紙のやりとりを続けよ、といった具体的な提案があったと記されている。これは上掲の露米会社文書に長崎通詞の提案としてあった4点のうち①～③に該当している。ただし、④のサハリンから日本人を追い払えという助言があったという記事を日記に見いだすことはできない。

しかし、これに関連する可能性をもつ発言があった。引用史料の末尾にあるように、本木庄左衛門が「ただ北方のことをお忘れなきように」と耳打ちしたというのである。だがレザーノフは、「これが何を意味するのか理解できなかった」という。この発言が気になったレザーノフは、改めてこのことを3月16日に庄左衛門に問い質している。

◇レザーノフ『日本滞在日記』ロシア暦1805年4月2日（文化2年3月16日）

庄左衛門が人がいないのを見計らって、彼らが全力をもって通商ができるように努力すると、繰り返し説明した。そして次のように語った。

「あなたは多吉郎と話すことができます。この人は知恵のある責任者で、そのうえ非常に慎重です。おそらく私たちのうちふたりが、来年江戸に行くことになり、そこで多くのことができますと思います。民衆はあなたたちを支持しています。私たちはそのことを南から北へと広めていきます」

ここで私は口を挟んで、北のことについてもっと明確に説明してほしいと頼んだ。本当のところ、どんなにいろいろ考えても、私には理解できなかったのだ。彼は大声で笑いだし、「こ

の問題については、決して答えを得ることができないでしょう」と言って、こう付け加えた。

「よろしいですか。私たちは手紙のやりとりを途絶えさせてはならないのです。いつかあなたが死んだり、不在だったりする時にあなたに代わって誰かが、私たちに手紙を書かなくてはならないのです」

これに対して「このためには私は決して死ぬことはできないし、決して不在にもしません」と言うと、彼はちょっと吹き出して、こう答えた。

「そういうことではないのです。あなたについて、誰か他の人がフリードリッヒの名前を使って私たちに報告することができるはずで

す」
両国の利益に反することをしている、狡い重臣の名前を教えて欲しいと尋ねた。ながい間、彼は答えをためらっていたが、ついに白状した。（以下、ウネメに関する通詞の発言あり）

「北のことについてもっと明確に説明してほしいと頼んだ」にもかかわらず、庄左衛門は、「この問題については、決して答えを得ることができないでしょう」と言って、手紙のやりとりを途絶えないようにしなければならないと答えたという。レザーノフ日記による限り、本木庄左衛門の言った「北のこと」というのが何をさすのか、判然としない。ただの暗喩で終わったのだろうか。

(4) 「圧力」発言と長崎通詞

ここにもうひとつ、興味深い記録がある。ロシア使節団の一員としてレザーノフに随従した露米会社の手代フォードル・シェメリンが長崎からカムチャツカに帰港したあと、露米会社本部に提出した報告書である。

◇ロシア暦1805年6月14日「露米会社手代フォードル・シェメリンによる露米会社本部宛の報告書」（ロシア国立歴史史料館蔵、『日ロ史料集』4、148頁）

通詞らは言いました。

「聞いてください。終始圧力をかけ続ければ、相手も知らず知らずのうちにその圧力に屈して、友好関係を結ぶことが出来るのではないでしょう。この地では上手く関係を結ぶことが出来ないのが普通なのですから」。

(訳：渡邊聞)

シメリンの報告書には、ナジェージダ号が長崎に到着してから以降の日本側の対応が詳細に記されているが、こうした発言があったのは、幕府特使遠山景晋らとの2回目の会談があった文化2年3月7日のことであった。長崎奉行から、献上品は受け取れない、中国とオランダ以外とは交易する必要がない、ロシア船に食料を提供して帰国を許す、といったことが通告されたあとに、別室で通詞から詳しい説明を受けたさいのことだという。「終始圧力をかけ続ければ」、いずれ国交も開かれるだろうと、通詞は慰めともアドバイスともとれる発言をしたという。

とはいえ、この「圧力」が前掲のサハリン襲撃のことであるといえるわけではない。落胆する使節一行に、「圧力をかけ続ければ、いずれ…」といった程度の発言はありえないわけではないが、幕府特使との会談の合間に、サハリンから日本人を追い払って「圧力」をかけろ、というような乱暴な発言が通詞からなされたとは、とても考えられない。

では露米会社文書に出てくる、通詞によるサハリン襲撃の「助言」問題は、どう理解すればよいのだろうか。結論からいえば、露米会社による作為の可能性が高いといわざるをえないのである。次のフヴォストフ襲撃事件の処理の経緯から、その点を検証しておきたい。

3. 日本政府を威嚇するレザーノフ文書

通商要求を幕府に拒否されたレザーノフは、ひどく自尊心を傷つけられたが、レザーノフ日記による限り、さほどの抵抗をみせず長崎を離れている。だが、ロシア史料のなかに、日本政府に宛てた次のような史料があった。

◇ロシア暦 1805 年 3 月 23 日以降、「N.P. レザーノフから日本政府への覚書。通商関係確立拒否に関して」（『日ロ史料集』1、105 頁）

下記に署名した私、威光あふれるアレクサンドル一世皇帝陛下の侍従長にして帯勲者、ニコライ・レザーノフは、日本政府へ告げる。

1. 私は長崎滞在中に、威光あふれる皇帝陛下の御名によって、通商を申し出ていた。日本政府は 1792 年に [ロシアから] 派遣されたラクスマンに通商に関する許可を与えていたが、のちに…大臣の陰謀によって自らの言葉を撤回し、これを拒絶した。
2. [日本政府の] このような行為によって、私は次のことを日本政府に示さざるを得なくなった。すなわち、わが威光あふれる全ロシア皇帝陛下ほどの高貴な人物が示した隣人への友好に対する敬意が要求する原則を、ロシア皇帝はこの帝国 [日本] に守らせる手段をいくつかとる必要がある。
3. 両帝国間の不愉快な出来事が、天神公方陛下の意思ではなく、ただ前述の大臣の悪知恵によって起こったことは承知しているが、不幸な結果を回避するために、私は、人々の安寧を乱した者として…が罷免され、見せしめに罰せられることを要求する。また日本の宮廷がオランダ商館を介して、サンクトペテルブルグの慈悲深き皇帝陛下に即刻謝罪文を届けることを要求する。同時にマトマイ (松前) に、通商のために両国民が自由に入出りできる港を 1 ヶ所、ロシア商館建設地を 2 ヶ所指定することを要求する。日本帝国に対しては次のように約束する。通商は両国民の満足のために確立されるものであり、キリスト教は決して日本人の目に触れる形で出さず、日本帝国の法律もすべて厳格に遵守する。これらのことは、私の 6 ヶ月の日本滞在によって証明されている。
4. 日本帝国が松前島北端を越えて領土を拡張しないことを要求する。北方の全ての陸地と

海域は、わが陛下の領有するところであるからだ。

5. 日本政府は私の慎み深さを、ただ私の天神公方陛下への敬意から出たものと考えべきである。
6. サンクトペテルブルグにいかなる返答も届かない場合、また恥知らずの…が処罰されない場合、私は日本政府の再度の無礼に対して、[日本] 国民が破滅して取り返しのつかない損害を被る方策を採らざるをえなくなるだろう。

一読して、日本に対する脅迫的言辞に満ちた通告文であることがわかる。通商を拒否されたレザーノフの怒りが込められた内容だといってよいが、この覚書の内容を整理すれば次の4点にまとめることができる。

- ①通商拒否に中心的役割を果たした老中を罷免し、幕府がロシア皇帝に謝罪すること。
- ②松前に日口通商のための港を1か所設け、ロシア商館建設地2か所を指定すること。
- ③北方の全陸地と海域はロシア皇帝の領有するところであり、日本は松前島（北海道）北端を越えて領土を拡張しないこと、
- ④もし老中が処罰されず、これらに対する回答もペテルブルグに届かない場合、私は日本政府の再度の無礼に対して、日本国民が破滅して取り返しのつかない損害を被る方策を採らざるをえなくなる。

もしこの覚書が実際に長崎で渡されたとすれば、幕府は大騒ぎになっていただろう。だがいまのところ、この覚書が長崎で幕府役人に伝えられた形跡は確認できない。レザーノフ日記にも、日口交渉に立ち会った長崎通詞の日記（中山作三郎「魯西亜滞船中日記」シーボルト記念館蔵、「文化元子年魯西亜入船ヨリ出帆迄記録」長崎県立図書館蔵）にも、こうした通告がなされた場面は全く出てこないのである。

現在、手元にあるのは、ロシアで刊行された史料集に収録された活字版と、『日口史料集』に収録された翻訳版だけであり、この覚書の原本は未見であ

る。従ってその書式等を原本に即して確認することはできないが、「…大臣の陰謀」「恥知らずの…が罷免され」といったような、単語が欠落した内容からみて、レザーノフが作成した未完成のメモである可能性が高い。おそらく、長崎を出航してからカムチャツカに至るまでの航海途上か、帰港直後あたりに書かれたものと思われる。

日本側に手交されなかったとはいえ、なぜレザーノフはこうした文書を作成したのだろうか。次節でみるフヴォストフのカラフト襲撃事件との関係でとらえると、興味深い論点が得られる。まず第1点として、日本は松前島北端を越えて領土を拡張するなという言辞は、カラフト・エトロフの日本人居留地襲撃を正当化する論理にもなるだろう。第2点として、もし日本政府が謝罪しない場合は「日本国民が破滅して取り返しのつかない損害を被る方策を採らざるをえなくなるだろう」と恫喝しているが、これは襲撃の責任は日本にあることを主張するものであると同時に、レザーノフによる日本人襲撃指示が確信的におこなわれたことを示していよう。

4. レザーノフは襲撃指示を撤回したのか？

ロシア暦1806年8月8日、レザーノフは前掲したようなサハリン襲撃の指示書をフヴォストフに出した。それから1ヶ月半を経た9月24日、レザーノフはフヴォストフに次のような2回目の指示書を出している。

◇ロシア暦1806年9月24日「N.P. レザーノフからユノナ号艦長・海軍中尉N.A. フヴォストフへの指令書」（『日口史料集』1、142頁以下）。

（前略）オホーツクに到着してみると、貴下に対して出した委任について再び触れることが必要に思われる。前檣が折れる事態に見舞われ、向かい風は我々の前進を阻み、晩秋の風はいまや貴下をアメリカへと急がせている。貴下の船と単檣帆船がアニヴァ [アニワ] 湾で落ち合うよう定められた時間も失われた。現地での漁が終わってしまったので期待されていたとこ

ろの成功 [このとき、日本人はいないとみなされてきたから] も今や失われ、おまけにあらゆる状況を考慮すると、以前命令したことはすべてそのままにしておき、貴下はノヴォアルハンゲリスク港へ人々を引き連れて増援部隊としてアメリカに向かうことが必要だと考える。単檣帆船アヴォシ号は指示に従い、また指示なしでも帰還すべきである。しかしもし風の影響で時間のロスなくアニヴァ湾に貴下らが寄航せざるを得ないのならば、贈り物やメダルでサハリン住民に優しく接し、日本人の移住がここできかなる状態にあるのか観察されたし。これを実行するだけで貴下の名声を高めるのに十分だろうが、大きな利益をもたらすであろう貴下のアメリカへの帰還こそが何よりも、貴下が示す忠誠心の主要で第一の課題であるべきである。したがってもし会うことになれば、単檣帆船にも同様の指示を伝えられたし。一方貴下の航海には予想のつかない事態が出来るかもしれないが、貴下は自ら会社の利益と折り合わせられたし。貴下の力量と経験は必ずやこの最後の指示を実行するのに最良のものをひきだすであろう。当方に関しては、この港は貴下のためにマストを交換できないということ、状況のめぐり合わせのため私はプランを変更せざるを得なくなったことを残念に思う。

この指示書をめぐっては、これまでもいくつかの評価が出されている。たとえばソ連時代の歴史家 E. ファインベルク (『ロシアと日本』、日本語訳は 1973 年刊、新時代社) は、次のように指摘していた。

(ロシア暦 1806 年) 8 月 8 日、フヴォストフはレザノフの指令によりダヴィドフに対して、アヴォシ号でシムシル、ウルップ島およびアニワ湾を調査し、(中略) レザノフの計画実現に着手することを指示した。

9 月 15 日、(中略) 彼 (レザノフ) は重病で、自分の企てた探検について疑念にとらわれていたが、すでにアヴォシ号を出発させ、フヴォストフにも指令を発してしまっていたこともあつ

て、探検中止の決心はつかなかった。

9 月 24 日、探検の結果に対する自分の責任を回避するためか、フヴォストフに自発的に探検を中止するように仕向けたかったためか、レザノフは先の指令にまったくあいまいな補足を追加して送った。(中略) フヴォストフは急遽レザノフに説明を求めたが、レザノフはすでにペテルブルグに出発したあとだった。

ファインベルグはレザノフの 2 回目の指示について、停止とも遂行とも判断できない「あいまい」なものであったとみなしている。いやむしろ、ファインベルグによる評価のポイントは、自分の責任を回避するためにレザノフはわざと「あいまい」な追加指示を出した、とみなしている点にあるだろう。

一方、フヴォストフとダヴィドフによるサハリンやエトロフ島での日本人居留地襲撃事件を余すところなく明らかにした A.A. キリチェンコ氏は、次のように指摘している (『海賊船ユノナ号とアヴォシ号—ロシア側当事者の行動からみる樺太・択捉島襲撃事件』『東北アジア研究』6、2001 年)

「1806 年 8 月 8 日、レザノフはオホーツクに行く途中で密命書を準備した。それはフヴォストフ中尉の総指揮下にユノナ号とアヴォシ号が行うはずのものであった。(中略) この指示書は 1806 年 9 月にフヴォストフ中尉に委ねられた。しかしユノナ号がオホーツクから出航する前日、彼のところに指示書の補足が送られてきた。そこには自分がフヴォストフとダヴィドフに実行を命じたことの正しさについて、レザノフが疑い悩んだことが反映されている。(中略) しかし、フヴォストフはこの内容の不明確な補足書を無視し、レザノフの最初の命令を熱心に行うと決心した。

キリチェンコ氏は、2 回目の指示書からレザノフが襲撃指示の「正しさ」に「思い悩んだ」ことを読みとっている。「内容が不明確」になったのは、襲撃をやめさせるか遂行させるかについて悩んだ結果であるということだろうか。結局、フヴォストフはその「内容の不明確な補足書」を「無視」して襲

撃を実行したという。

この両者の見解に代表されるように、レザーノフが発した2回目の指示書は、襲撃指示を取り消したのかどうか、誠に不鮮明な内容になっている。しかしそれは、キリチェンコ氏が言うように、レザーノフが襲撃指示の「正しさ」に悩んだ結果だったのだろうか。あるいはファインベルグが指摘するように、「探検の結果に対する自分の責任を回避するため」であったのだろうか。

もしレザーノフが襲撃指示の「正しさ」に悩んだり、「自分の責任を回避」したいと考えたのであったのなら、単純に中止を指示すればよいはずである。しかしそうではなく、中止とも遂行とも、両様に受け取れる内容の指示書を出している。ということは、この指示書のポイントはまさに、いずれとも受け取れる、という点にあったのだと思われる。すなわちレザーノフは、明確な中止の指示も出さなくはなかったのである。では、それはなぜか。

レザーノフは、日本人居留地襲撃がもつ両様の意義、すなわち犯罪性とそれがもたらす成果について、はっきりと認識していた。

たとえばレザーノフは、ロシア暦1805年7月18日付けでアレクサンドル1世に対して、「ロシアの領地にある日本の出張所を一扫し、日本人の奴隷となっている原住民を解放して、彼らにいくつかの特典と定住生活を送る可能性を与え、さらに彼に下されている命令を完遂して、それらの土地に工場や農業コロニーの基礎をおく」計画を上申した(E. ファインベルグ前掲『ロシアと日本』)。これによってロシアの領土が拡大するだけではなく、力の行使によってロシア帝国の偉大さを見せつけられれば、怯えた日本政府はロシアとの通商を承認する可能性があると考えていたのである。まさに襲撃は、ロシア国家に偉大な成果をもたらす可能性を秘めていた。

しかし一方、レザーノフは、この襲撃がもつ違法性についても認識していた。1805年7月のアレクサンドル1世への上申書には、「御詔勅を仰がずに本件に着手しますことにつきましては私を御処罰ください」と書いてある。長崎を出帆しサハリンの視

察を終えた段階でレザーノフはサハリン攻略を計画していたのであった。しかも当初から皇帝の許可を得ないままに実行する腹つもりであったことになる。これにもとづいて同年の8月29日、露米商会勤務のフヴォストフ中尉とダヴィドフ少尉をサハリン・クリル探検隊の指揮官に任命したが(有泉和子「海賊にされた海軍士官フヴォストフとダヴィドフ」東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室年報2003、197頁収録史料)、フヴォストフに具体的な襲撃指示を出したのは翌年の8月8日であった。その後9月、レザーノフはオホーツクから商務大臣ルミャンツェフに宛てた文書で、「おそらく私は私案に着手したかどで犯罪人とみなされるでありましょうが、罰はもとより覚悟の上です。しかしそれは常に一身をなげうってきた陛下の御威光と祖国愛に駆られたためであり、このことをここに申し述べたいと思います」と述べている(E. ファインベルグ前掲『ロシアと日本』125頁~127頁)。1年待っても皇帝からの許可は来なかったわけだが、許可を得ないまま襲撃をすることが犯罪行為にあたるとの認識をレザーノフは明確にもっていたのである。

にもかかわらずレザーノフはフヴォストフらへの指示を明確に取り消さず、フヴォストフの判断に委ねるかのごとき2回目に指示書を出した。それはなぜか。2回目の指示書にある次の文言をみると、レザーノフには諦めきれない期待があったとみなすしかない。

(前略) かしもし風の影響で時間のロスなくアニワ湾に貴殿らが寄航せざるを得ないのならば、贈り物やメダルでサハリン住民に優しく接し、日本人の移住がここでいかなる状態にあるのか観察されたい。これを実行するだけで貴殿の名声を高めるのは十分だろうが(後略)

すなわちそれは、襲撃がもたらす偉大な成果＝「名声」を得るチャンスだという点である。この文言はフヴォストフに投げかけられたものだが、もし襲撃事件が評価を受けることになれば、その指示を出したレザーノフも栄誉にあずかることになるだろう。その可能性も少しはあると判断したからこそレザー

ノフは、明確な中止の指示を出さなかったのだと思われる。しかし逆に無許可襲撃の犯罪性が問題にされた場合、レザーノフは「以前命令したことはすべてそのままにしておき」と指示の執行停止とみなしうる文言を挿入しているの、出撃の責任はフヴォストフにあることになる。要するにレザーノフは、犯罪の嫌疑をかけられたときには責任を回避できるように、賞賛されたときには自分の手柄にできるようにと目論んだのではないだろうか。だからこそ、どちらともとれる、あいまいな2回目の指示書を出したのだと考えておきたい。

5. フヴォストフ襲撃事件は、 ロシアでどう位置付けられてきたのか？

日本人居留地襲撃という犯罪的行為の指示者になるか、それともロシアの版図拡大の起案者たる榮譽に浴するか。レザーノフにとっては賭けにも似た思いであったに違いない。しかしその結果は、非常に早い段階であらわれた。1回目の襲撃事件のあと、カムチャツカ州長官陸軍少将 P.I. コシエレフから皇帝アレクサンドル1世への報告書には、次のようにある。

◇ロシア暦 1807 年 2 月 28 日「海軍中尉 N.A. フヴォストフ指揮下の極秘遠征隊のカムチャツカ到着についてのカムチャツカ州長官陸軍少将 P.I. コシエレフから皇帝アレクサンドル1世への報告」(ロシア国立歴史史料館蔵、『日ロ史料集』5、100 頁)

私は、フリゲート船ユノナ号乗船の海軍中尉フヴォストフ指揮下の極秘遠征隊入港につきまして、去る 1806 年 12 月 14 日付 3003 番の報告書により皇帝陛下にご報告申し上げる榮譽にあずかりました。しかしながらこの遠征がどのようなもので、誰の命を受け、どのような目的で行なわれたのか、フヴォストフから私への通牒からはわかりませんでした。しかし今では、私は書簡と知らせから信頼に足る情報を得、この遠征は現侍従であり勲章所持者であるレザー

ノフの命により発起され、皇帝陛下からの前の使節団を日本宮廷が拒絶したことに対する報復に、皇帝陛下の御意思であるかのように、彼等の居住地を荒らす目的で日本を目指していると知りました。

このことは実際に既にフヴォストフから述べられ、実際にも去る 1806 年ペトロパヴロフスク港に到着した時、日本人 4 人、多くの米、その他の物を運んで来まし、またカラフト島を彼等の武力によって占領し、日本に属している住居は焼き荒らしたようなことを言っております。この春、2 隻の船、フリゲート船ユノナ号と単檣帆船アボシ号からなるこの遠征隊は、御承知のことと思われませんが、自らの計画を意図して、マツマイに向おうとしております。このことを皇帝陛下にご報告申し上げます。

(訳：斎藤由佳)

フヴォストフの乗ったユノナ号がオホーツクを出発したのは、ロシア暦 1806 年 9 月 27 日で、10 月 6 日にサハリンのアニワ湾に到着した。日本人居留地の襲撃を終えてカムチャツカのペテロパヴロフスクに帰還したのは 11 月 10 日である。日本人 4 人を拉致し大量の略奪品をカムチャツカに持ち帰ったフヴォストフは、自分の行動がレザーノフの指示に従ったものであることを、カムチャツカ帰還後に皇帝へ報告した(キリチェンコ前掲「海賊船ユノナ号とアヴォシ号」)。だがカムチャツカ州長官コシエレフは詳しい事情を知るにつれ、レザーノフが皇帝の許可を得ないまま、あたかも皇帝の意思であるかのようにフヴォストフに襲撃指示を出しているのではないかと疑念を抱いたのであった。

たしかにフヴォストフがレザーノフの指示に忠実に従ったというのは否定できないが、2回目の襲撃は忠実さだけで説明できるのではなく、相当にフヴォストフの意思が込められているとみたほうがよいように思われる。彼は皇帝に対して次のように上申している(キリチェンコ前掲論文、88 頁)。

私は今春(1807 年)、アニワ湾に必ず行こうと決意した。我々はこの遠征で次の利益を得

るであろう。

1. アイヌを日本の暴虐から解放する。
2. 豊富な穀物を得ることができる。それはアメリカへの援助となるだろう。
3. 我々が毎年アニワ湾を訪れるつもりであることを日本人に示すことができる。
4. アメリカに送るための人員をたくさん捕らえることができる。

先のカムチャツカ長官の報告書を見ると、サハリンでの襲撃について長官は事前にその計画を知らされていなかったようだ。情報を集めるなかでレザーノフによる無許可襲撃指示が判明したということのようだが、上記のように長官が2月に無許可襲撃について皇帝に報告しているところを見ると、レザーノフの指示がもつ問題点（違法性等）については長官からフヴォストフやダヴィドフにも伝えられたとみるのが妥当であろう。そのことは、2回目の遠征に出発する前の4月29日にダヴィドフが海軍大臣チチャゴフに宛てた文書からもうかがえる。そこにはフヴォストフがレザーノフに命令された通り、日本の施設を破壊して日本人を拉致し穀物を略奪したことが、賞賛されるのではなく「私の直属する大臣および世間一般」から「非難」を受けた、とあることから知られよう（有泉和子前掲「海賊にされたフヴォストフとダヴィドフ」193頁所収史料）。

ダヴィドフのこの文書には、「今回の企ては、皇帝陛下の一定の御意思がなければあり得たかどうか極めて疑わしく、敢えてこの件を閣下の御判断にお任せし、閣下からの御擁護をお願いする次第です」ともある。レザーノフはダヴィドフに「この遠征が極秘である旨」を伝えていたから、レザーノフによる襲撃指示には皇帝の何らかの関与または暗黙の了解があるはずだという期待をダヴィドフが抱いていたことを示していよう。また、遠征の指揮者はフヴォストフであり、彼の指示を受けているダヴィドフからすれば、このように考えるしかなかったのかもしれない。「私は、この企てに加わることも、それを断って服従しない態度を示すことも、いずれも良いことではないと懸念し、最終的には偶然の意志に身を委

ねることに決心しました」（有泉前掲論文）という言葉も象徴的である。

しかし一方のフヴォストフは、拉致した日本人から聞いた情報をもとに、「私の手もとにいる日本人たちは、ニポンには内証があると言明しており、わたしは、いま彼らに圧力をかければ、増大している国内の不平は傲慢な政府を屈服させて好ましい貿易へと向けさせられるであろうし、それによってパンと商品が得られると思う」（ファインベルグ前掲著130頁）と考えていた。ここにいう「圧力」とは、前掲したフヴォストフの上申書にみられるように、さらにたくさんの日本人の拉致と穀物の略奪であった。1回目の襲撃事件が不評であるにもかかわらず、あえて2回目の襲撃を計画し実行したのはフヴォストフの意思であったといつてよい。その意味でフヴォストフは、もはやレザーノフの命令の忠実な実行者であるにとどまらず、日本への圧力こそが通商を開くという確信をもった独自の存在であったといえるだろう。

ペテロパヴロフスクを出航して5月20日にエトロフ島に到着したフヴォストフとダヴィドフは、ナイホの会所にいた日本人番人を捕らえ、穀物を略奪して放火した。さらに同島のシャナ会所も襲撃し、ウルップ島を経てカラフトの番屋に火をかけ、レブン・リシリー島付近では日本商船の積み荷を奪って船を焼き払い、リシリー島に上陸して番屋や倉庫を焼き討ちした（キリチェンコ前掲論文87頁以下、木崎良平『仙台漂民とレザーノフ』刀水書房、1997年、208頁～209頁）。

それにしてもなぜフヴォストフとダヴィドフは、かくも狼藉の限りをつくしたのか。ロシア暦6月28日（文化4年6月5日）、フヴォストフはカラフトとエトロフ島で捕らえた日本人10人のうち8人をリシリー島で釈放し、彼らに一通の文書を持たせた。それには次のようなことが書かれていた（木崎良平前掲著209頁所収史料）。意識してあげておこう。

近隣のことゆえ使者を遣わしてたびたび通商を求めたが返事もないので、このたびこちらの「手並」を見せた。それでも聞かないときには

北の地を取り上げ、カラフトやその他島々から日本人を追い散らす。通商の願いが叶えば末代まで心やすくしたいが、そうでなければ、またまたたくさんの船を遣わして同様のことをすることになる。

まさしく武力行使による通商要求であった。フヴォストフはこうした強圧的手段を行使することによって、日本が通商に応じると考えていたのである。もしこれが成功すれば、日口通商を開いた功績はフヴォストフのものとなっただろう。彼が2度も遠征して日本人居留地を襲撃したのは、そのためであった。

しかしフヴォストフの思惑は、すぐに挫かれた。ロシア暦1807年7月16日、略奪品を満載してオホーツクに帰還したフヴォストフとダヴィドフは、オホーツク長官（有泉和子氏の訳ではオホーツク港湾隊長）プハーリン中佐に逮捕された。8月8日、プハーリンがアレクサンドル1世、チチャゴフ海軍大臣、ペストリ東シベリア知事に送った報告書では、フヴォストフとダヴィドフの反日的な行動がロシアの利益を損ない、侮辱された日本は対口通商関係を拒否し、大艦隊を擁するオランダやフランスなどの大国に援助を求める可能性があること、そうなればアメリカでの領地、さらに防備の薄いカムチャツカやオホーツクなどでは深刻な危機が生じると述べている（ファインベルグ前掲著134頁）。フヴォストフは、リシリー島で釈放した日本人に通商要求書を持たせ、日本政府の反応を引き出そうとしたのであったが、その結果が出る前にプハーリンは彼らの行動をこのように評価したのであった。

8月27日、軍事法廷委員会は、フヴォストフについて、1806年8月8日付けのレザーノフの指令に従って行動したが、9月24日付けの補足指令は遂行しなかったという結論を出した。両人はオホーツクから逃亡し、翌年5月ペテルブルグに到着したが、スウェーデン戦争のさなかであったために2人はフィンランド戦線に派遣された。チチャゴ海軍大臣は、フヴォストフとダヴィドフが日本人を襲撃したことは罪であるとしたが、フィンランド戦線で

軍功をあげた2人に対してフィンランド方面軍事司令官は叙勲を申請した。しかしアレクサンドル1世は、表彰しないことが「日本人に勝手なふるまいをした」両人に対する懲罰になると判断したという（ファインベルグ前掲著135頁）。

こうした経緯をみると、日本人居留地襲撃は、その直後からロシアでも厳しい批判にさらされていたということになる。

6. カラフト襲撃の「助言」記事がもつ意義

レザーノフが力の外交によって日口通商を開こうと計画し、フヴォストフらもその指示に従いつつ、それがもたらす栄誉に大きな期待を込めていたことは前述の通りである。しかし一方でレザーノフは、皇帝の許可なく日本人居留地を襲撃するという行為が犯罪とみなされる可能性についても認識していた。だからこそ彼は、犯罪行為の指示責任を回避するために、読みようによっては中止指示とも受け取れるが、逆に風向き次第では出航とも延期とも解釈できる、あいまいな2回目の指示書を出して、遂行責任をフヴォストフに負わせるような画策をおこなったのであった。事件の責任追及が始まると、露米会社本部もまた、フヴォストフとダヴィドフの探検隊とは一切関係ないという声明を出したという（ファインベルグ前掲著135頁）。

フヴォストフ襲撃事件をめぐるロシア側のこうした動きをみると、長崎通詞がカラフト襲撃を「助言」したというロシア史料についても、その信憑性に大きな疑念を抱かざるを得なくなる。その点をここで整理しておきたい。

レザーノフ日記に長崎通詞からカラフト襲撃を「助言」されたという記事が存在しないことは先に述べたが、じつはレザーノフがロシア暦1805年6月8日付けでアレクサンドル1世に提出した長文の報告書にも、そのことは記されていない（「使節団に対する日本政府の対応に関する遣日ロシア使節N.P.レザーノフの皇帝アレクサンドル1世への報告」ロシア国立海軍資料館蔵、『日口史料集』4、123頁）。同報告書はレ

ザーノフが長崎を出航したあと、サハリン南部の視察を経てカムチャツカのペテロパヴロフスクに入港（1805年5月25日）した直後に提出されている。レザーノフ使節団が1804年8月26日、長崎に向けてペテロパヴロフスクを出港して以降のことや、使節団の総括あるいは今後の展望などを記したものであり、重要な事項は基本的に網羅された報告書だといってよい。もちろん、先に紹介した幕府内部の対立や天皇と将軍の関係、通詞たちからの「提案」にも言及している。

しかしその「提案」の内容は、「ウネメサマ（采女様）」が死んだらロシアとの貿易が望まれるようになるであろうこと、通詞たちはオランダ人をとおしてレザーノフに手紙を書くこと、避難船を装って日本の港に立ち寄り幕府の反応をうかがうこと、あるいはオランダの官吏の一員として出島に入って情報を収集し、時機をみてレザーノフ自身が松前に会談に来ること、そうすれば通詞の誰もがロシアに助力するであろう、といった事柄であった。レザーノフ日記に記された内容と大差はない。もしレザーノフが、カラフトから日本人を追放せよ、それが効果的な圧力になる、といった具体的な提案を長崎通詞から受けていたとしたら、「提案」のなかでも最高度にエキセントリックな内容であるから、ここに記されないはずはない。しかしそれが無いということは、そのような「助言」がなされなかったからだと考えるのが、もっとも自然なことではないだろうか。

だとすれば、長崎通詞らによるカラフトを襲撃せよという「助言」は、露米会社によって作られたものということになる。ではなぜ露米会社の報告書には、ありもしなかったこと、あるいは、あったとしてもせいぜい「何らかの圧力を」といった程度のことであった発言を、カラフトから日本人を追い払えという助言があったと書いているのだろうか。

いま考えられるのは、レザーノフが指示した襲撃事件に関係しているのではないかということである。この露米会社の報告書が書かれたのはロシア暦1808年7月2日である。オホーツク長官に拘束されたフヴォストフとダヴィドフが、逃亡してペテル

ブルグに着いたのは同年5月のことであった。露米会社はこのころに、この両人の探検隊とは一切関係ないと発表している。両人は軍人であると同時に露米会社の契約社員でもあったから、同社が襲撃事件の責任を問われることを回避したかったのであろう。

しかし、レザーノフもまた露米会社の役員であった。指示責任は明白なのだが、その指示はみずからの発意ではなく、日本人通詞からの「助言」に突き動かされたものであったとすることは、少しでもレザーノフの責任を回避させることになりはしないだろうか。この露米会社の報告書は、皇帝の許可のもとにサハリン占領をすみやかに実行しなければ、ヨーロッパの他の国が先んじる可能性があるという警告している。レザーノフによる襲撃責任の軽減をはかりつつ、サハリン占領を国家意思として再定置する意図であったように思われる。

おわりに

以上、レザーノフ来航およびその後のフヴォストフ襲撃事件について、主としてロシア史料にもとづきながら検討してきた。その結果、日ロ関係および日本の状況について、日本側記録だけでは見えていなかったいくつかの論点を把握することができた。

レザーノフに対し幕府が通商拒否の回答をしたことについて、長崎通詞や警固兵だけではなく、長崎商人を始め、都から馳せ参じていた多くの商人も大きく落胆し、幕府へ強い不満をもらしていたと、ロシア史料には出てくる。のちのゴロヴニン事件に際してロシア海軍士官リコルドに捕縛された高田屋嘉兵衛も、幕府の拒否回答には日本人商人の多くが落胆したと証言していた。

とくにこの時期は、ヨーロッパにおいてフランス、オランダ、イギリスが交戦状態にあり、アジアでもオランダの拠点であったバタヴィアがイギリス艦隊の攻撃を受けたこともあって、オランダ船の長崎入港が途絶えがちであった。したがって、レザーノフの来航によってロシアとの交易が開かれるかもしれ

ないと期待を抱いた日本人商人たちが存在したことは間違いなだらう。もちろんそれが日本人一般の世論だったわけではないにしても、ロシアを迎える日本人の思惑の多様さを確認する手がかりにはなる

だらう。

(初出:「レザーノフ来航史料にみる朝幕関係と長崎通詞」、寺山恭輔編『開国以前の日口関係』、東北アジア研究シリーズ7、2006年)

三 若宮丸漂流民善六とゴロヴニン事件

1. 『北夷談』附図に描かれたリコルド一行

市立函館図書館に、『北夷談』という記録がある(国立公文書館デジタルアーカイブでは『北夷談』全7冊が公開されている)。著者は松田伝十郎といい、箱館奉行支配調役下役を勤める幕府役人であった。この記録は、幕府が東蝦夷地の支配権を松前藩から取り上げて幕府の直轄地とした1799年(寛政11)に始まり、蝦夷地が再び松前藩に復領した1822年(文政5)で終わっている。松田伝十郎は幕府直轄化とともに蝦夷地にはいり、^{あつけし}厚岸会所や^{えとろふ}択捉会所などに勤めているが、間宮林蔵と共に樺太探検にも従事した人物である。『北夷談』には、こうした一連の動きが書き留められており、幕府による蝦夷地支配の実態を知ることができる貴重な記録である。だが本稿で注目したいのは、じつはこの『北夷談』とセットになっている附図のほうである。

『北夷談』附図には、1813年(文化10)9月、ロシアの海軍士官リコルドが、日本に囚われた上官のゴロヴニンを引き取りに来たときの様子が描かれ



図1 箱館に上陸したリコルドと儀仗兵

ている。箱館(函館)湾に現れたロシア軍艦ディアナ号の姿や、同湾を警固する弘前藩と盛岡藩の御^お備^{そな}場^ばの情景、ゴロヴニンのサーベルなどが彩色画として描かれている。この附図の作者が『北夷談』本文と同様に松田伝十郎であるのかどうかは定かではないが、この絵のなかで特に注目したいのは、箱館に上陸したリコルド一行の姿である(附図は『北夷談』第5巻にある)。

ここには18人のロシア人の姿が描かれており、日露交渉に臨む緊張した雰囲気や漂わせているが、不思議なことに、そのなかの1人だけが異様なほど小柄に描かれている。他の17人はいずれも腰にサーベルを下げているので軍人であることはすぐにわかるが、この1人だけがサーベルを下げていない。いったいこの小柄な人物は誰なのか。

2. ゴロヴニン幽囚と高田屋嘉兵衛の捕縛

絵の分析に入る前に、ゴロヴニンが日本側に捕縛され、リコルドがその釈放を求めて箱館に来航するまでの経緯を簡単に見ておこう(木崎良平『仙台漂流民

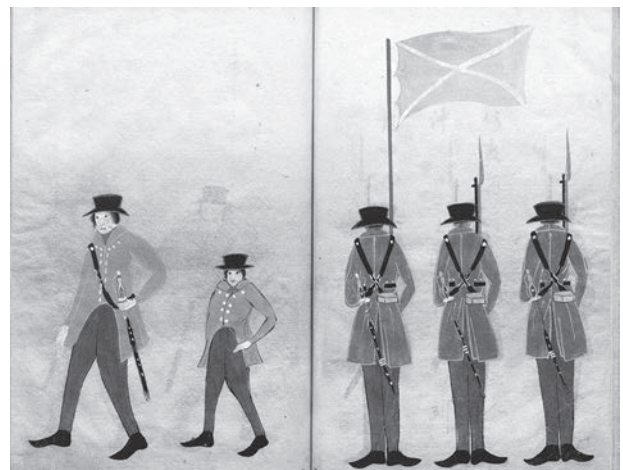


図2 箱館に上陸した善六

とレザノフ』刀水書房、1997年、ゴロヴニン著・徳力真太郎訳『日本俘虜実記』上下、講談社学術文庫、1987年など）。

第一回遣日使節ラクスマンが根室に来航したのに続いて、ロシアが通交を求めて第二回遣日使節レザノフを長崎に派遣したのは1804年（文化1）9月のことであった。だが幕府にあえなく拒否されたレザノフは、翌年3月、空しくカムチャツカに戻るようになった。もはや力づくで通交を求められないと考えたレザノフは、海軍将校フヴォストフ中尉とダヴィドフ少尉に、樺太で日本船を焼き討ちし、日本人を捕虜とすることを命じたのである。彼らは1806年と翌年に、樺太と択捉島の日本人居留地を襲撃して略奪したり、住宅や倉庫を焼き討ちし、日本人を捕虜にした。

こうした事態をうけて、ロシアに対する日本側の警戒心が極度に高まるのは当然のことだが、1811年、沿海調査のために千島列島を南下してきたディアナ号の艦長ゴロヴニンが国後島くなしりとうに上陸すると、同島の警固にあっていた幕府役人に捕縛されたのであった。ディアナ号に残っていたために難を免れた副官のリコルドは、オホーツクに戻ると、艦長を釈放させるために、先にフヴォストフらが捕虜にしていた日本人五郎治や、カムチャツカに漂着していた摂津国歎喜丸乗組員6人を乗せて国後島に再来した。彼らを上陸させて釈放交渉のきっかけを得ようとしたのだが、五郎治らが日本側に収容されただけで、ゴロヴニンの解放を得ることはできなかった。そのためリコルドは国後島の沖合を通りかかった日本船を襲撃し、高田屋嘉兵衛ら6人を拉致してカムチャツカに連行したのであった。

連行された高田屋嘉兵衛がまったく動じることなく、堂々とリコルドに対応し、ついにはゴロヴニンの釈放や日露関係の改善に貢献したことは、よく知られた史実である。嘉兵衛の助言を入れたリコルドは、フヴォストフらの襲撃事件がロシア政府の命令によるものではなく、彼らの個人的犯罪であることをイルクーツク民政長官が表明するよう、オホーツク長官に仲介を依頼した（フヴォストフの樺太襲撃事件については本書第二章参照）。その文書を持っ

て日本に向かい、ゴロヴニンを釈放するよう幕府と交渉することになったのである。

1813年5月、リコルドや高田屋嘉兵衛らの乗ったディアナ号は国後島に直航し、松前から出向いてきた幕府役人とゴロヴニンの解放について交渉を開始した。その席で幕府役人は、フヴォストフ事件にロシア政府が関与していないことを証明する公文書を求めた。嘉兵衛の予測通りの対応を幕府がみせたため、リコルドは嘉兵衛を国後に残してオホーツクに向かい、イルクーツク民政長官とオホーツク長官の公文書を入手して、再び日本に向けて出帆した。

リコルドの乗ったディアナ号が箱館港に姿を現したのは、1813年9月11日のことである。国後から箱館に移っていた高田屋嘉兵衛の出迎えをうけ、ゴロヴニン解放に向けた幕府役人との予備交渉は順調に進んだ。9月20日、松前奉行所高官との会見がセットされ、交渉は大詰めを迎えることになる。この日、リコルドは初めて箱館に上陸したのであった（平川新『開国への道』第三章、小学館、2008年）。

3. リコルドの上陸をめぐる日露の記録

『北夷談』附図に収められているリコルド一行上陸の図は、『北夷談』の本文ではどのような説明がなされているのであろうか。幸いなことに、昭和19年に「北門叢書」の一冊（大友喜作編『北夷談・北蝦夷図説・東蝦夷夜話』北光書房）として、大友喜作氏の解説付きで本文が翻刻されているので、そこから関連部分を紹介しておこう。

一、未の年クナヅリ島にて捕押へし魯西亜人、帰国に成る。迎ひ船箱館え渡来の筈に付、同所迄遣はさるに付、路中附添申渡され、下役村上貞助、在住勤方上原熊次郎、外に同心組頭壱人、同心六人召連れ、其外津軽家兵士壱人、足軽小頭一人、足軽五人途中警固し、八月十七日松前表出立の処、無別条同廿日箱館え著、同所詰調役坂本傳之助、三浦喜十郎え引渡し、吟味役柑本兵五郎へ届置て旅宿へ引とる。

露西亜人名前

役名 カヒタン
姓名 ワシレイ・メハロウイチ・ガハビン
役名 レイチャナント
姓名 ヒヤトロ・ヒヤトロイチ・モウル
役名 シトルマン
姓名 アンテレエ・イリイチ・レフニコウ
マドロス
シイモノフ
シカエフ
マカロフ
ワシンエフ

メ

ラソワ夷 ヲロキセ

以上 八人

箱館の方公用済て八月廿六日出立して松前へ帰村す。

一、異国船箱館持ウスシリえ見へしよし、注進有りて、鎮台備後守箱館へ出張に付き、手附を申渡され、九月十三日松前出立有り、当別村ヤケナイ、有川村、南郡、津軽両家御固め所台場巡見有り。同十六日亀田村陣屋にて小休之处、異国船箱館沖へ見へる段注進に付、直に出立、同日暮合に箱館に著有し処、異国船夜に入潤入札(ママ)して掛りし段見届の物注進有り、番舟等出し警固し、陸は所々に幕張、弓、鉄砲の御備厳重にして、南部、津軽両家御固め人数張番あり。

一、今度渡来の魯西亜船の大將名前左の通、へうと路いわの市イリコロト、在留の者迎えとして来たりしといふ。

一、在留の魯西亜人、役所へ呼出し、鎮台備後守左之通申渡す、去る卯年、蝦夷地え渡来して乱暴いたせし者ども、王命を請渡来するにあらず、海賊同様之者にて帰国之上仕置にも成りし由、去る未年クナジリ島におゐて召捕し者どもは全薪水に渴し、地方へ寄せしよし分かるに付、帰国申渡し、今度来りしイリコロトえ渡し遣す段申渡し有り。

一、当日には沖の口番所へ吟味役高橋三平、柑本

兵五郎、其外調役以下出席有り、外通海岸番所前は南部、津軽両家、嚴重に固め有り、今度来りしイリコロト初め、筆者、通詞役、其外マドロスまで上陸し、在留の者引渡しの申渡済、即刻元船へ連れ行き、直に船仕度して潤内出帆、その夜潤口に船繫して、翌朝西風にて□行き、見届之者帰て帆形見へず、□行し段届る。

附、箱館潤内へヲロシヤ舟繫場并滞船の図、沖の口御番所へ上陸の図、右に付御固めの場所并南部、津軽両家御固め人数張番の図等左のごとし。

一、鎮台備後守魯西亜一件事済て、手附一同、十月十日箱館発足、鷲ノ木村まで巡見有り、同十七日松前表へ帰館有り。

国後島で捕縛されたのは、ゴロヴニン(ガハビン)と彼の部下6人、それに案内役であったラショワ島のアイヌ(「ラソワ夷」)1人の、合計8人であった。彼らを迎えるにロシア船が箱館に来るので、『北夷談』の著者松田伝十郎らは、8月17日に、幽閉している松前から箱館まで8人を護送したという。この時期はまだリコルドの乗ったディアナ号は箱館に来ていないから、6月の国後島での予備交渉ですでに釈放に合意しており、箱館で引き渡す約束になっていたことがわかる。その後、松田らはいったん松前に戻っているが、9月16日にロシア船来航の報を受けて再び箱館に入り、引き渡しの場を目撃することになる。

ところで、右の『北夷談』本文五段落目に記された「当日」の様子を見ると、箱館奉行所吟味役高橋三平と柑元兵五郎ら幕府役人が待ち受けるなかを、「イリコロト(リコルドのこと一筆者注)始め、筆者、通詞役、其外マドロス」が上陸し、ゴロヴニンらの引き渡しをうけたあと、ただちに「元船」(ディアナ号)まで連れていき、すぐに出帆したとある。

この日本側の記録に対応するのが、リコルドの「日本沿岸航海および対日折衝記」(ゴロヴニン著・徳力真太郎訳『ロシア士官の見た徳川日本』講談社学術文庫、1985年、に所収。以下「対日折衝記」と称す)である。そこには引き渡し当日(日本暦で9月26日)のこ

とが、次のように記されていた。

十二時、私はサヴェリエフ君と通訳のキセリョーフを従え、護衛兵は一人も連れずに私は儀礼艇に乗り、交渉用の白旗を掲げて、これまで二度日本の両高官と会見した家へ向かった。日本側は我われを永くは待たせなかった。間もなく例の広間へ日本人の捕虜となっていたゴロヴニン艦長と両士官が連れて来られた。～そのあと高橋三平と柑本兵五郎の両吟味役から正式に私は同胞を受け取った。

(「対日折衝記」320頁)

上陸したのは部下のサヴェリエフと通訳のキセリョーフ、それに白い交渉旗をもった水兵となっている。日本側の引き渡し役として高橋三平と柑本兵五郎の名前をあげている点は、『北夷談』と同じである。念のためにゴロヴニンの手記の当該箇所をみると、「数分後にリコルド君がサヴェリエフ君と通訳キセリョーフのほか少数の水兵を連れて到着した」(『日本俘虜実記』下、238頁)とある。やはりそれほど人数ではなかったという書き方であり、松田伝十郎、リコルド、ゴロヴニンの日露三人の記事の一致度は高い。同じ現場に立ち会っていたのであるから関係者の証言が一致するのは当然かもしれないが、日本側の記録と外国の記録がここまで一致する例はそれほど多くはないだろう。

だが、文字記録のこうした一致度の高さに比べると、『北夷談』附図に描かれたリコルド一行上陸の情景は、これら三つの記事とは明らかに異なっているといわざるをえない。引き渡し日の上陸者は正確ではないが、右の三つの記事を見るかぎり、リコルドを入れても4人か、若干増える程度であろう。だが、『北夷談』附図には、18人も的人物が描かれている。特に捧銃をした儀仗兵10人の存在は大きい。もし引き渡し日に、これだけの儀仗兵が上陸していれば、リコルドの「対日折衝記」がまったく触れないということはあるまいだろう。つまり、引き渡し日に儀仗兵は上陸していないのではないかということである。だとすると、『北夷談』附図が描いた上陸の情景は、いったいいつのものなのかとい

うことになる。

「対日折衝記」によると、リコルドは箱館に3回上陸している。1回目は日本暦の9月20日におこなわれた松前奉行所高官との会見の日、2回目は9月24日にゴロヴニンとの面会を許された日、3回目がゴロヴニンらが釈放された9月26日である。3回目の上陸については先に見たので、1回目と2回目の様子について「対日折衝記」から紹介してみよう。まず1回目の9月20日の記事である。

翌日(日本暦九月二〇日)十二時ごろ、いろいろの旗を立てた奉行の儀礼艇に乗って、高田屋嘉兵衛はディアナ号にやって来た。すっかり盛装した嘉兵衛は船室に入ると私に向かって、海岸の会見に指定された家屋の上に旗が揚がってから出発すればよいのです、と言った。

ちょうど十二時、我われはその旗を認めた。しばらくして私は二名の士官と、通訳と、十名の武装した水兵を従えて奉行の儀礼艇に乗り込んだ。(中略)

会見の場所に指定された家屋は、海岸の傍の石の埠頭の横にあった。(中略)

私は白旗を持った下士官に上陸を命じ、次いで武装した護衛兵と、軍旗を持った下士官を上陸させ、それらの後から私自身が上陸し、後ろに士官たちが続いた。家の入口の前に二本の旗を掲げて一列横隊に並んだ儀仗兵は、私が前を通るとき捧げ銃の敬礼をした。

(「対日折衝記」304頁)

これによると箱館奉行所高官との交渉のために上陸したのは、白旗持ちの下士官1人、儀仗兵(武装した水兵)10人、軍旗持ちの下士官1人、士官2人、通訳1人、それにリコルドを入れて合計16人となる。この前日、高田屋嘉兵衛と上陸の打ち合わせをしたさい、リコルドは次のように答えていた。

これに対し私は、「自分が従えて行くのは小銃を持った兵十名、軍艦旗と交渉用の白旗を捧持した下士官二名、および二名を超えない士官と日本語の通訳で、これらの者は上陸する」と言明し、「私自身は、高官から申し出のあった

奉行所の儀礼艇に乗って所定の会見場所に赴くことに同意する。

(「対日折衝記」296頁)

「小銃を持った兵十名」というのは、儀仗兵10人のことである。それに海軍旗と交渉旗をもつ2人の下士官、および2人の士官と日本語通訳を伴って上陸すると告げている。やはり、全部で16人である。

では、ゴロヴニンとの面会が許された2回目の上陸時どうか。

その翌日(日本暦九月二三日)、この尊敬すべき日本人(高田屋嘉兵衛のこと一筆者注)はまたもや嬉しいニュースを持って来た。彼は二人の高官の名代として、明日、以前会見の行われた家で、私とゴロヴニン艦長および付き添いの水兵二人が、首席通訳村上貞助、学者たちおよび下級官吏の立会いのもとで会見することが決定していること、および嘉兵衛自身が奉行の儀礼艇で私を迎えに来ること、そして私が望むなら前回と同数の武装兵員を従えることが許されること等を申し伝えた。

私はこれに対し嘉兵衛に次のように返答をした。

「指定されている会見は私的なものであるから、私としては別の形式で上陸しなければならない。軍旗と交渉旗は儀礼艇の所定の場所に立てるが、私は艦長秘書の士官一人と水兵五人を連れて行く。これら水兵には小銃は持たせず、ただ捕虜となった二人の同僚との再会の喜びを味わわせてやるために連れて行くだけである」。

翌朝(日本暦九月二四日)十時ごろ、善良な高田屋嘉兵衛は例の奉行の儀礼艇でやって来た、私は前に決めた員数を従え、交渉旗と軍旗を立てて待ち望んだゴロヴニン艦長と会見しようとして、陸岸に向かった。

(「対日折衝記」310頁)

2回目の上陸でも1回目の時と同人数の上陸が許されると嘉兵衛は告げているが、リコルドは幕府役人との正式な会談ではなくゴロヴニンとの個人的な

面会にすぎないとして、儀仗兵や旗持ちを上陸させていない。リコルドと書記と5人の水夫だから、合計7人であった。念のためにゴロヴニンの『日本俘虜実記』でも確認すると、「私たちが着いて間もなく奉行用儀礼艇でリコルド君が到着した。士官はサヴェーリエフ君一人だけで、あとは通訳キセリョーフと少人数の水兵がついて来た」(下、228頁)とある。やはり、それほどの大人数ではない。

以上見たところによると、1回目の上陸は16人、2回目は7人、3回目は4人程度であった。だが、『北夷談』附図には18人が描かれている。もはやこの人数を一致させるすべはない。しかし、儀仗兵を連れて上陸したのは2回目の箱館奉行所高官との会見時だけであるから、附図の描くリコルド一行上陸の図はこのときのものだとみなすのが妥当であろう。上陸人数の違いについては、リコルドと附図のいずれの誤りであるのかを確定することはできないが、詳細な日記を付けていたリコルドの記録のほうが信憑性が高いとみなしておきたい。

4. 小柄な人物は善六か

リコルド一行上陸の図が、1813年9月20日の様子を描いたものであることは確定できた。ではここで最初の問題にかえて、同図に描かれた人物について検討することにした。

『北夷談』附図のリコルド一行の絵を初めて見たのは、兵庫県立博物館で開催された『豪商高田屋嘉兵衛』展の図録(兵庫県立博物館、2000年)であった。ロシア兵一行のなかの小柄な人物が気になって図録の解説に目を通すと、次のように書かれていた。

(前略)この北夷談附図にはゴローニンのサーベル、ディアナ号の絵などが描かれているが、特に注目されるのは、文化10年(1813)9月20日〔陰暦〕にゴローニン事件解決のために箱館奉行所へ会見に向かうリコルドら一行の姿である。旗を持ち捧銃する儀仗兵の中を烏帽子を被ったリコルドと随行員五名が進む。その最後尾の小柄な人物は、通訳のキセリョーフ(日

本人で本名は善六)と思われる。(後略)

この解説の執筆者である同博物館の神戸佳文氏は、小柄な人物を善六ではないかと推定していた。

善六というのは、1794年(寛政6)にロシアに漂着した石巻若宮丸の乗組員の1人である。江戸向けの米や材木を積んで石巻を出帆したものの、塩屋崎沖(いわき市)で嵐に遭って舵を折られ、風まかせ波まかせで太平洋をさまよひ、半年間の漂流のあと、アリューシャン列島に漂着したのであった。乗組員16人は全員が島民に救助されたのだが、3日後に船頭の平兵衛が病死した。その後、ロシアの役人に保護されてオホーツク港に渡り、さらにシベリアの中心都市であるイルクーツクに送られたが、1人が途中のヤクーツクで病死し、イルクーツクにたどりついたのは14人であった。1796年(寛政8)のことだが、彼らはそれから8年間、同地に滞在することになった。

若宮丸乗組員が遣日使節レザーノフに伴われて長崎に送還されたのは、1804年(文化元)のことである。だが帰国したのは4人だけであった。イルクーツクに滞在していた14人のうち1人は1799年(寛政11)に死亡しており、3人は病気で残留を余儀なくされた。残る10人がペテルブルグでアレクサンドル1世に引見されたのだが、皇帝に対して帰国の意思を表明したのは4人で、あとの6人は長い航海への不安を理由に、みずからロシアへの帰化を希望したのであった。長いロシア生活のなかでロシア正教の洗礼を受けていたり、ロシア女性と結婚したりするなど、残留を選択せざるを得ないそれぞれの理由があったのである。こうして若宮丸漂流民一行は帰国組とロシア残留組に分かれることになったのだが、残留組のなかに前述の善六がいたのであった。

若宮丸の善六が1813年にリコルドの通訳として箱館に上陸したことは、すでに知られた事実である(木崎良平前掲著、大島幹雄『露西亜から来た日本人』廣済堂出版、1996年)。だが『北夷談』附図に彼の姿を描いた絵があるというのは、ほとんど知られていなかった。それだけに兵庫県立博物館の図録をみて驚

かざるをえなかったし、この小柄な人物を善六ではないかと指摘した神戸氏の慧眼には敬意を表したい。

東北大学東北アジア研究センターでは「前近代における日露交流資料の研究」というプロジェクトを立ち上げ、開国以前の日露関係に関する資料を収集しており、また市民有志による「石巻若宮丸漂流民の会」が2001年に発足して、若宮丸漂流民への関心を盛り立てている。ロシア以外への漂着も含めて、漂流民一般に対する関心の高まりも顕著だが、そうしたなかで、ロシアに帰化した漂流民を描いた絵があったとなれば、きわめて大きな意義をもつ。漂流民問題を語るときに、ヴィジュアルな資料は大きな迫力をもってイメージを喚起するからである。しかしそのためには、この小柄な人物が間違いなく善六であるという証明が不可欠である。そこで以下に若干の考証を加えて、神戸氏の推測を確実なものとしておきたい。

5. 通訳としての善六

善六が歴史の表舞台に引き寄せられていくのは、ゴロヴニンと高田屋嘉兵衛の捕縛という日露間の紛争が契機であった。リコルドの「対日折衝記」のなかで善六は、イルクーツクにいる日本語通訳として現れてくる。

(高田屋嘉兵衛をカムチャツカに連行したあと一筆者注)私は傍そばに日本語の通訳がないことを悲しんだ。イルクーツクに日本語の通訳はいるが、遠距離のため来年の夏までカムチャツカに到着することはできないのであった。

(「対日折衝記」239頁)

リコルドは日本語を解せず、高田屋嘉兵衛はロシア語をしゃべれない。だからこそリコルドは、イルクーツクにいる日本語の通訳がここにいればと残念がったのである。おそらくリコルドは善六と面識があったはずである。1811年にゴロヴニンが日本側に捕縛されたあと、リコルドはオホーツクからイルクーツクに赴き、今後の対処についてイルクーツク

民政長官と相談している。そのとき、以前にフヴォストフに捕縛されてヤクーツクにいた五郎治を、日本に送還するからとイルクーツクに呼び寄せ、善六宅にしばらく寄留させたのであった。リコルドは翌1812年早々に五郎治を連れてオホーツクに向かったが、五郎治は善六宅にいたのだから、とうぜんリコルドも善六に会っていたに違いない。しかし同行したのが五郎治だけになったのは、善六には帰国の意思がなく、ゴロヴニンとの交換要員にすることができなかったからであろう。前述のように、その五郎治には国後島でまんまと逃げられてしまったのであった。

1813年、嘉兵衛らを伴って国後島に再来したりコルドに対して幕府役人は、フヴォストフらの襲撃事件はロシア政府の関与するものではないとする弁明書を持参するよう求めている。幕府は、一連の襲撃事件をフヴォストフらによる個人的犯罪とすることで日露間の紛争を終息させようとしていたのである。そこでリコルドは、嘉兵衛を残して国後を出発しオホーツクに向かった。

イルクーツク民政長官とオホーツク長官から松前奉行にあてた書簡を手に入れたりコルドは、オホーツクを発つにあたり一人の人物を乗せた。リコルドの「対日折衝記」には、

日本語を通訳するため、イルクーツクから派遣された日本人キセリョーフが本艦に乗り込んだ。
（「対日折衝記」278頁）

とある。イルクーツクにいる日本語の通訳キセリョーフが、リコルドの船をオホーツクで待っていたのである。「対日折衝記」によるとリコルドは、5月にカムチャツカを発って国後に向かう前に、オホーツク長官に対してイルクーツク民政長官の書簡を準備するよう要請していた。それも高田屋嘉兵衛の助言だったというから、嘉兵衛の見通しの確かさは驚嘆に値する。当初リコルドは嘉兵衛と共にオホーツクに立ち寄ってこの書簡を受け取り、そこから日本に向かうことになっていたが、予定を変更して直接、国後島に向かったのである。そのためにリコルドは、長官の書簡を受け取りに国後から戻って

きたのであった。このいきさつからみると、リコルドはイルクーツク長官の書簡を準備させただけではなく、イルクーツクにいる日本語通訳もオホーツクに呼び寄せるよう要請していたのだろう。

ところで、イルクーツクでキセリョーフと呼ばれた日本語通訳が若宮丸漂流民の善六であることは、これまでによく知られた事実である。1796年にイルクーツクでロシア正教の洗礼を受けた善六は、名付親の姓をもらって、ピョートル・ステファノヴィチ・キセリョーフと名乗った。その直後に善六は、同地の日本語学校の教師補になっている（前掲木崎良平著）。1803年、津太夫ら四人が南米のホーン岬経由で日本に送還されたとき、善六はカムチャツカまで同行したが、そこで下船した。他の漂流民とトラブルがあったからだともされているが、キリスト教の洗礼を受けた日本人が長崎港に入るのは大きな危険を覚悟しなければならなかっただろう。だが、それから10年後のいま、善六はリコルドの呼び出しを受け、通訳として日本に向かおうとしている。蝦夷地とはいえ、日本の地である。善六には期する思いがあったにちがいない。

船が箱館に近づくと、高田屋嘉兵衛が幕府役人と共に小船で出迎え、ディアナ号に乗船してきた。「今度は通訳キセリョーフの助けがあるので、以前よりはるかに都合よく、何事でも話し合えた」（「対日折衝記」289頁）とリコルドはいう。カムチャツカにいた半年の間に、リコルドと嘉兵衛は十分な会話ができるようになっていたというが、やはり通訳としてのキセリョーフの役割は大きかった。

松前奉行所は高田屋嘉兵衛に、幕府役人とリコルドの正式会談をどのような形で開催するかという予備交渉をするよう命じた。リコルド一行の上陸の仕方、儀仗兵の銃はどうするか、双方の挨拶の形式はどうするかなどの儀礼的な問題だけではなく、靴を脱ぐか履いたままかといった生活習慣の違いまで細かに調整されている。嘉兵衛とリコルドの間では、こうした交渉が通訳キセリョーフを通してなされたのである。

かくして9月20日、松前奉行所高官との会見が

セットされたが、その前日、リコルドと通訳キセリョーフの間では、次のようなドラマチックな会話が交わされている。

さてここで私としては、通訳キセリョーフの運命について懸念しなければならなくなった。キリスト教に改宗し、異国で官職に就いた日本国民に対する日本の法律の厳格なことを私は知らないわけではなかった。キセリョーフ君はロシアへの信奉から、彼が翻訳する書簡その他には、ロシアで生まれた日本人の児と署名はしているが、日本語をよく知っていることをみれば、狡猾な日本人にすぐに正体を見破られるであろうから、さすれば彼にとって最も恐ろしい結果を招くことになるだろう。

私はキセリョーフを自室に呼び寄せて言った。

「君は自分の国の法律のことは私よりよく知っているから、私といつしよに上陸しても危険がないかどうかよく考えて欲しい」

キセリョーフは答えた。

「私が何を恐れるというのですか。あなたを捕らえるなら、そのときは全員を捕虜にするのではないのでしょうか。私一人を捕らえることはあり得ないでしょう。私は日本人ではありません。通訳としての職務が果たせるように、どうか私を連れて上陸して下さい。陸上での両高官との交渉こそ、今度の事件で最も重要です。本艦上の高田屋嘉兵衛との話では私はあまり役に立たないのです。もし艦長が私を陸上に伴って行かれないなら、私は何のためにこの長い航海の苦勞に耐えてきたのか分からなくなります」。

キセリョーフがこの事件で役に立ちたいと望んでいるのをみて私は言った。

「君のような忠実な通訳が傍に居ることは大変に重要なことだ。ただ私としては、君に危険の恐れがある場合なので、君の希望に反した行動をしたくなかっただけなのだ」。

そのあと私は、2人の士官にも出発の準備を命じた。2人もまた私について上陸したいと希

望していたのである。

(『対日折衝記』278頁)

アリューションに漂着してから19年の歳月が過ぎていた。キセリョーフ=善六も42歳である。「私は日本人ではありません」。日本の地を眼前にして、日本人でありながら日本人ではないといわなければならない善六の苦衷。漂流という運命が1人の日本人をロシア人に作り替えてしまったのだ。日露の外交の舞台において、日本人善六はロシア人キセリョーフになりきらなければならなかったのである。

翌日、善六は、旗持ち2人の下士官、儀仗兵10人、士官2人とともに、リコルドに従って上陸した。『北夷談』附図のなかでサーベルを下げていないのは、ただ1人小柄な人物だけである。これだけわかりやすく書き分けているのは、絵図作者にとっても印象深かったからであろう。ゴロヴニンの手記にも、リコルド一行が上陸したときのことが次のように記録されている。

会見は九月三十日(ロシア暦)に行われた。

まだ会見の最中に数名の日本人が我われの所へ来て、ロシア軍艦の士官や水兵の肖像画(日本人はそのように考えていた)を見せて、会見の場で描いてきたものだと言った。絵は誰にも少しも似ていないものであった。しかし日本語の通訳については、ロシアの服を着ているが日本人のような顔つきだから恐らく日本人であろうと言った。我われはキセリョーフとは何者か全く知らなかった。絵鞆でリコルド君から受け取ったキセリョーフの日本語の手紙を我われに説明してくれた通訳は、「これはどんな人物か」と訊ねたので、「多分、自ら志願してイルクーツクに残留した漂流日本人に就いて日本語を習ったその土地の者であると思う」と返事しておいた。

(『日本俘虜実記』下、217頁)

リコルドと箱館奉行所の交渉の様子はゴロヴニン付きの役人たちから逐一伝えられていたが、上陸したリコルド一行を実際に見た役人の一人が、通訳は

日本人の顔つきをしている、と伝えたのであった。ここまでの証言がそろえば、ただ1人サーベルをもたない、あの小柄な人物こそが善六＝キセリョーフであることは、もはや間違いないだろう。

『北夷談』附図は、リコルド一行が日露交渉のために箱館に上陸した歴史的光景を書き残したというだけでなく、ロシアに漂着しロシア人となって、その日露交渉の表舞台に立ち現れた日本人善六の姿をも、我々に伝えてくれたのである。

ところでその附図の作者について、右のゴロヴニンの記事には気になる証言がある。日本の役人が、上陸したロシア人たちの肖像を描き、それをゴロヴニンに見せたという点である。絵心のある役人がいたということだが、『北夷談』の作者松田伝十郎は、松前幽囚のときからゴロヴニンの監視役であり、松前から箱館への護送役でもあった。ゴロヴニンの身近にいた役人の一人であったが、この絵心のある役人が松田伝十郎であるとするならば、『北夷談』附図に収められた上陸の図も彼の筆になる可能性はあるだろう。

6. ロシアに帰った善六

リコルドと共に上陸し箱館奉行所に向かうキセリョーフこと善六の心中には、日露外交の表舞台で重役を担う使命感が満ちていたことだろう。「通訳としての職務が果たせるように、どうか私を連れて上陸して下さい」とリコルドに語った善六の言葉に、その意気込みを感じることができる。上陸した一行は、沖の口と呼ばれる場所に設営された会見場に案内された。リコルドも緊張していたに違いない。

私は二人の士官を伴って会見の広間に入った。広間にはいろいろの身分の官吏が軍装に二本の刀を帯していっぱいになっていたが、その静粛なことに私は驚いた。私は膝を折って並んで座っている二人の高官を見分け、三歩ばかりの所に近づき敬礼した。彼らも頭を下げて返礼した。左右に居並んでいる官吏に敬礼すると、私は指定された席まで後退したら、そこにはも

う私の肘掛椅子が置いてあった。

深い沈黙はなおしばらく続いた。それで私は沈黙を破って、通訳のキセリョーフを通して、会見場が非常に友好的な雰囲気であるという私の意見を述べた。

(「対日折衝記」305頁)

リコルドの挨拶を善六＝キセリョーフが通訳するところから会見は始まった。晴れ舞台であった。だがその直後、彼にとって予想もしない衝撃的な光景が眼前に展開し始めたのである。

二人の高官は返事の代わりに微笑を浮かべ、二人のうち上席の国後島へ出張したのが、左手からにじり寄った官吏に話しを始めた。しかし低い声でキセリョーフにも一言も聞き取れないほどであった。そのあと役人は自分の席に戻り、驚いたことには私に向かって深々と御辞儀をしてから、かなり明瞭なロシア語で話し始めた。松前奉行所高官のかたわらに控えていた役人が、高官の挨拶を流暢なロシア語で通訳したのであった。村上貞助である。彼は幽閉されていたゴロヴニンからロシア語を学んだ幕府の役人であった。

この挨拶に対し私は、こんどはもう日本側の通訳村上貞助を通して次のように答えた。

(同前)

このあとは、リコルドの発言もすべて、村上貞助が通訳している。もはやこの会見で、善六＝キセリョーフの出番はなくなってしまったのである。その失意たるや、いかばかりであっただろうか。

善六はこのあと、9月26日のゴロヴニン引き取りの際にもリコルドに従って上陸した。解放されたゴロヴニンらを乗せたディアナ号は、一路、カムチャツカのペトロパヴロフスクに向けて進んでいった。善六＝キセリョーフは、その後どうなったのか。1815年(文化12)、御前崎沖で遭難して1年4ヶ月も太平洋を漂流し、イギリス船に救助された尾張の督乗丸乗組員が、日本へ送還される途中、ペトロパヴロフスクで次のような噂を聞いたという。

仙台の善六といふ者、今はこのユクーツカに

て、カピタンの娘を妻にして日本通詞になりて
居りたるとぞ、今の名はイハン・オロキセイ・
キセロクとぞいふなる。

(『船長日記』江戸漂流記総集第三巻、日本評論
社、1992年)

善六は、ロシア人カピタン（船長）の娘を妻にし
て、イルクーツクに暮らしているということであつ
た。

(初出：『東北文化研究室紀要』第46集、2005年、
東北大学文学部)

四 ロシア漂流船若宮丸と船主米沢屋

はじめに

石巻商人米沢屋平之丞の持船である若宮丸が石巻港を出たのは、寛政5年（1793）11月27日のことであった。仙台湾の東名浦で風待ちをしたあと、登り風になった同29日、江戸に向かって出帆した。だが3日後の12月2日、磐城沖にさしかかったころ、強い風波に遭遇して舵をへし折られた。翌日も、風にあおられて船が大きく揺らぎ続けたため、転覆しないように帆柱を切り倒さざるをえなかった。舵も帆も失った若宮丸は、以後、風まかせ波まかせで漂うことになったのである。

若宮丸はそれから半年間、太平洋を漂流したあげく、アリューシャン列島の小島に流れ着いた。現地民の導きで、同島に狩猟に来ていたロシア人に保護され、1年後に船でオホーツクに伴われたあと、イルクーツクに送致された。これより前の寛政4年（1792）、伊勢国の大黒屋光太夫らがラクスマンによって根室に送還されてきたように、ロシア政府は日本人漂流民を保護し送還することによって日本との通商交渉の手がかりにしようとしていた。若宮丸漂流民もすぐにでも日本へ送還されるかと期待したが、ロシア皇帝の交替やイルクーツク商人らの主導権争いで遅延した。

露米会社の創設者の一人でもあるレザーノフがこの争いに決着をつけ、漂流民送還と日本との通商交渉のために、皇帝の特使として日本に派遣されることになった。若宮丸一行が皇帝アレクサンドル1世に引見され、4人がロシアを出帆して帰国の途についたのは、1803年7月（ロシア暦）のことだった。アリューシャン列島の小島に漂着してから、9年が

経っていた。大西洋を南下して南アメリカ大陸の南端ホーン岬を迂回して太平洋を北上し、ハワイを経てカムチャツカに入港したのは、一年後だった。一ヶ月後に日本に向かって出帆し、長崎に入港したのは文化元年（1804）9月のことである。

こうした若宮丸漂流民の事績については、帰国後にロシア事情や海外事情を聞き取りしてまとめた大槻玄沢の『環海異聞』やロシア史料を中心に研究が進められており、漂流生活や彼らがもたらした海外情報の意義なども明らかにされつつある⁽¹⁾。ところが、若宮丸の船主である米沢屋平之丞については史料がほとんどないこともあって、どのような存在であったのか、未知のままになっていた。そこで本稿では、新たに確認された史料の紹介をしながら、若宮丸船主米沢屋の姿を少しでも明らかにしておきたい。

1. 米沢屋平之丞について

米沢屋平之丞について、これまでわかっていたのは、次のような事項だけであった。

一つは、『石巻市史』2（1956年刊）が紹介しているものだが、大阪の住吉大社にある石造りの大燈籠（基座2間四方、高さ2丈5尺）に、献納者の一人として名前があるということである。

住吉大社の歴史は古く、「日本書紀」にも「住吉大神」や「住吉社」という記事があり、奈良時代に遣唐使が派遣されたさいには、同社で海上の無事を祈ったとも伝えられている。江戸時代になると住吉大社は海上の守護神として全国の商人から篤い信仰をうけるようになった。廻船を利用した商業活動が活発になったため、航海の安全を商人たちが祈願し

たからである。その信仰ぶりは、同社の境内に足を
 一歩踏み入ると、すぐに分かる。参道のいたるところに所狭しと大小の石燈籠が据えられているからだ。なんと260基もあるという。そのなかに仙台ゆかりの石燈籠が7基もあることは、あまり知られていないようだ。

仙台関係の燈籠でもっとも古いのは宝暦5年(1755)の銘がある2基一対で、高さはいずれも8尺程度(2m 50cm)である。表面には「常夜燈」「陸奥」と刻まれ、側面には「仙台買積中」とある。2基あわせて16人の商人名を刻んでいるが、肉眼で判読できるのは、「仙台屋三郎兵衛」だけである。「仙台買積中」とは、江戸から商品を仕入れる商人集団のことであろうが、仙台城下商人だけなのかどうかは分からない。

次に古いのは、文化7年(1810)年に寄進された灯籠で、高さは2丈5尺(8m 30cm)もある大きなものである。燈籠の表面には「永代常夜燈」「仙台」、側面には「文化七年庚午八月、船持中」の文字が刻まれ、基座の前面には21人の献納者の名前が彫り込まれており、そのなかに米沢屋平之丞の名前もあった。

21人のうち素性が判明するのは、石巻の伏見屋吉蔵、勝又屋伝十郎、光井(三井)屋惣之丞と、石巻近在の桃生郡高須賀の高須賀屋次左衛門といった程度である。多くは石巻およびその近在の船持衆とみられる。とすると、燈籠に刻まれた「仙台」というのは、仙台城下ではなく仙台領という意味である



住吉大社拝殿

うか。それにしても屈指の大きさと威容を誇る石燈籠は、仙台領商人の隆盛と心意気を示している。

米沢屋平之丞に関する既知の情報の二つめは、石巻千石船の会が明らかにしたもので、米沢屋は石巻の裏町に店をもっていたこと、および遭難した若宮丸のほかに大日丸と大元丸という2隻の千石船を所有していたということである⁽²⁾。

三つめは、禅昌寺(石巻市山下町)の境内にある若宮丸供養碑(高さ3m 23cm、横幅40cm、厚さ12.5cm)である。そこには次のような碑文が刻まれていた⁽³⁾。

(碑文／表) (若宮) 代禱
 南無観世音菩薩 為□□丸水主□
 上菩提

(碑文／裏)

寛政五癸丑天十一月廿七日、若宮丸船頭平兵衛水主都十六□

□出帆河口七秋、漂流而猶未知生死、依是米沢氏□□□□

□耳露法門修諸般白業伸供養者也

寛政5年(1793)11月27日、水主たち16人が乗った若宮丸が石巻を出帆してから「七秋」(7年)たったが、漂流して未だ生死を知らず、よって米沢氏がこれを供養す、とある。磐城沖で消息を絶ったときを命日とし、若宮丸船主の米沢屋が七回忌の法要を営んで、この供養碑を建立したのであろう。こ



文化7年仙台商人寄進灯籠
 (住吉大社)

の供養碑を建てたとき、若宮丸はとうぜん沈没した
ものと思われていた。

四つめは、同じ禅昌寺の過去帳の記事である。漂
流記研究者の山下恒夫氏は、米沢屋の菩提寺であっ
た石巻の禅昌寺の過去帳に、次の記事があったこと
を紹介している⁽⁴⁾。

寛政二年八月十八日 戒名 仙巖宗寿居士
米沢屋平之丞 七十一歳

この米沢屋平之丞は寛政2年8月に亡くなっ
ているが、寛政5年11月に出帆した若宮丸の船主も
米沢屋平之丞であるから、この過去帳の平之丞は先
代だということになる。ところでその後、米沢屋は
菩提寺を禅昌寺から広濟寺（石巻市住吉町）に変え
ている。禅昌寺には幕末までの米沢屋の過去帳があ
るので、菩提寺を変えたのは明治期のことだろう。
理由は不明だが、家業の盛衰と関係があるのかもし
れない⁽⁵⁾。

若宮丸の船主米沢屋について知り得る情報は、以
上のようにきわめて少なかった。だが近年、2種類
の史料が発見されたことにより、米沢屋の素性の一
端が明らかになった。このところロシア漂流船若宮
丸への市民的な関心も高まっていることから、本稿
では史料紹介が中心になるが、米沢屋に関する情報
を整理しておきたい。



禅昌寺にある若宮丸供養費

2. 近江商人中井家文書にみる米沢屋

滋賀大学所蔵の近江商人中井家文書のなかに、米
沢屋平之丞に関する数点の史料があった⁽⁶⁾。その一
つは、寛政12年（1800）閏4月の次の史料である。

申合一札之事

一、石巻村小野寺六郎太夫様御抱地之内、本町半
軒屋敷、表間口四間、裏行御町並之所、家作・
蔵庫共ニ一字書立之通に而、壹ヶ年家賃金四拾
五切に而、貴殿添人日野屋源左衛門殿名前ニ而
質店被相出候ニ貸渡申候、右質店御相続中、何
拾ヶ年為共貸渡置、為立去申間舗候、末々無抛
筋有之候ハ、其時ニ応シ可及御相談候
一、家賃之儀は七月金拾五切、十二月金三拾切、
両度ニ都合四拾五切請取可申候、屋敷並町諸入
料并家作、外廻修復之儀は私方ニ而引請可申候
右之通御申合、末々共ニ相違為無御座候、小野寺
六郎太夫様御奥書□□始末如件

寛政拾貳年閏四月 牡鹿郡石巻村本町
小野寺六郎太夫様御抱地
高差引人 永吉

中井新三郎殿

日野屋源左衛門殿

石巻裏町立合人

米沢屋平之丞殿

右之通承届ニ相違無御座候、我等抱屋敷ニ付、如
此御座候、以上

同年八月

小野寺六郎太夫

この史料は、石巻村本町の小野寺六郎太夫の「抱
地」の「高差引人」である永吉が、中井家仙台店
の中井新三郎と日野屋源三郎に土地と屋敷を貸与す
ることを約した証文である。「抱地」とは土分の者が
百姓地を所有したときの言い方であるから、小野寺
六郎太夫はおそらく土分の者であろう。「高差引人」
とは「抱地」の土地管理者にあたる役割だとされて
いるので⁽⁷⁾、永吉は小野寺六郎左衛門がもつ本町の
土地と屋敷の管理人だったのであろう。

貸地は本町にあり、表間口4間の「半軒屋敷」であった。町場の屋敷地は一定規模に区画割りされているが、「半軒屋敷」で表間口が四間ということは、「一軒屋敷」であれば表間口は8間ということになる。この土地に家と蔵がセットで、年間の家賃は金45切（金11両1分）になっている。

これまでの研究によると、中井家（屋号は日野屋）は寛政12年8月に石巻店を開業したとされている⁽⁸⁾。この証文によれば、それより4ヶ月前に店舗を確保したということになる。

この貸地証文のなかで、石巻裏町の米沢屋平之丞は、中井新三郎と日野屋源左衛門の「立合人」として登場している。要するに保証人のことである。米沢屋は石巻で、仙台北屈指の大商人中井家の保証人になることができるほどの商人だったということになるだろう。もちろん中井家と米沢屋の関係はこれ以前から培われていた。いくつかの史料を中井家文書から紹介しておこう。

その一つは寛政9年（1797）6月の「大日丸銚子勘定帳」で、米沢屋平之丞が北四町検断の安倍屋與左衛門と日野屋（中井）新三郎に宛てた書式になっている。内容は、銚子の船宿と思われる信太清八からの大日丸諸入料の仕切のほか、大日丸の碇の取り上げ料金、銚子滞留中の船頭小遣い、塩釜より積んだ薬草の川芎運賃や水主の酒代などを書き上げ、金47両3分2朱の預り金から差し引いた残金が約1両3分となっている。

これだけでは何のことか不明だが、年号不記の米沢屋平之丞による日野屋林兵衛に宛てた手紙をみてみよう。これには、「先達而も申上候通、秋中、銚子表ニ而大日丸碇壱頭、海中より取揚申候而、大元丸積下ケ申」とある。要するに大日丸の碇を海中から引き揚げ、その費用を差引勘定したということである。どうやら大日丸が碇を海中に落とす事故をおこしたようである。なお、日野屋林兵衛は享和4年（1804）前後から仙台北屈下の南材木町に枝店を開いているが⁽⁹⁾、この書状では米沢屋が「旦那様へ右之段、宜敷被仰上度奉願上候」と中井新三郎への挨拶を頼んでいるので、おそらく枝店開店前で仙台

本店に勤務中のことであろう。

右の書状に関連して、寛政10年（1798）10月の「一札之事」という史料がある。これは米沢屋平之丞が日野屋（中井）新三郎と北四町検断の阿部屋與左衛門に宛てた借用証文である。金48両1分余を「大日丸道具代金」として借りている。この証文の別冊として「道具値付帳」があり、縄や碇などの代金48両1分余が計上されている。どうやら銚子での大日丸の修理等にかかった経費のようだ。

米沢屋と中井家（日野屋）の取引関係の詳細は不明だが、こうした史料をみると中井家は廻船による江戸交易を展開する米沢屋との間に金融関係をもっていたことがわかる。寛政9年6月の「大日丸銚子勘定帳」に出てくる薬草の川芎も中井家関係の商品だとすれば、商取引関係もあったということになる。

なお石巻千石船の会は、米沢屋の持ち船として文化年間に大日丸と大元丸があることを指摘していたが、右に紹介した中井家史料によれば、それより早く寛政9年段階には両船が同時に石巻・江戸間を行き来していたことがわかる。

この手紙で留意しておきたいことの第二は、「先達而も申上候通、涌谷殿様、彼是行違申儀計有之、延引仕、何共可申上様無之、無抛仕合ニ奉存候」とあるように、米沢屋は「涌谷殿様」、すなわち涌谷伊達家と取引関係があったことである。この文面では同家とトラブルがあつて入金がなされず、それがために中井家への返済が滞る旨が述べられている。

留意すべき第三点は、「新艘造立に取立、乍勝手、金繰至而迷惑仕候間、御利足御勘定申上、御元金は来四月迄恩借申上度奉存候」とあることである。この時期に米沢屋は新たな持船の建造に取りかかっていたらしい。ただしこれまでのところ、米沢屋の持ち船として大日丸と大元丸以外の船は確認されていない。

3. 名振浜永沼家文書にみる米沢屋

名振浜の永沼家文書のなかにも、米沢屋平之丞の

名前が記された史料があった⁽¹⁰⁾。このなかから、いくつかを紹介しておきたい。

*文化2年2月 桃生郡名振浜御国産方へ売上
候 𠄎 粕魚油焼失仕候分大図調書上

太兵衛

一 𠄎 粕貳拾五石二斗

内 一 貳石 焼失残り

残而 貳拾三石貳斗 焼失仕候分

一 魚油四斗入 三樽

内 一 貳樽 焼失残り

右引残 壹樽焼失仕候

𠄎 右分

一金三拾五切 手金受取申候

(以下六人分中略)

惣 𠄎 粕百六拾七石四斗

魚油拾六樽半

内 一 粕貳拾一石 焼失残り

一 魚油四斗入四樽 焼失残り

右 𠄎 貳百拾九切半 受取申候

残 𠄎 粕百四拾六石四斗

魚油拾貳樽半

此金百九拾一切四分 焼失仕候

右之通過ル十九日夜九つ頃ニも可有御座候哉、
七五郎方より自火相出焼失仕候ニ付、改之上、
調書上仕候、以上

文化貳年二月廿五日

右ノ 太兵衛

同 善三郎

同 七五郎

同 作四郎

同 左四郎

同 長右衛門

同 与兵衛

右之通焼失仕候儀相違無御座候、以上

同年同月 名振浜国産方買人宿善 内

同 浜肝入 甚 蔵

御国産御買人

米沢屋平之丞殿

この史料は名振浜の「国産方買人宿」の善内と同
浜肝入の甚蔵が、「御国産御買人」の米沢屋平之丞

に宛てた、火事による海産物焼失の書き上げである。
太兵衛以下7人は名振浜の漁民であり、𠄎 粕と魚
油の製造を生業としていた。その産物を名振浜の国
産方に納入していたが、文化2年(1805)2月19
日に発生した火事により、その大半を焼失したとい
う。

名振浜には「国産方買人宿」の善六がおり、彼と
同浜肝入甚蔵の奥書を付けて、「御国産御買人」で
ある米沢屋平之丞に報告されているので、善内が名
乗る「国産方買人宿」というのは浜ごとに設けられ
た買継商人であったのかもしれない。とすれば「御
国産御買人」の米沢屋平之丞は、これら買人宿を統
括する立場にあったとみなしてよいだろう。

「御国産御買人」や「国産方買人宿」といった用
語は、仙台藩の国産仕法に関係した職名である。そ
れについては後述するとして、二つめの史料を紹介
しておく。

*文化2年11月 国産方拝借金返納に関する達
書

左之通申来候間、両通共ニ相渡候条、其心得、
尚又於其元も何分折入首尾可有之候、縦ひ相分
候ても夫々取都り不申候へは不相成儀、殊ニ近
年入金之分如此躰ニ相成候而ハ不申濟事ニ候
条、何分出情相納候様吟味首尾可被申候

十一月十八日

飯 弥六郎

御国産方差配人

米沢屋平之丞殿

桃生郡名振之者共、御国産方拝借金年符等之義
ニ付別紙両通申出候、年符ニ難成候、御利息之
義、元金之内三か壺半口候ハ、御返納申様、与
五郎以申様被仰渡仕度御達品々相認候、御尤ニ
候間、早々相達被相渡可被下候、以上

十一月十八日

齋藤甚左衛門

飯田弥六郎殿

これは前掲史料に関連するもので、国産方に納入
すべき海産物が焼失したため、名振浜の生産者たち
が未納分にあたる拝借金を年賦で返済したいと国産
方役所に申し入れをしたが、役所は年賦を認めず、
元金の三分の一と利息の納入をはかるべき旨を国産

方役人である飯田弥六郎が米沢屋平之丞に通知したものである。ただし、この史料での米沢屋平之丞の肩書きは前掲史料の「御国産御買人」ではなく、「御国産方差配人」になっている。これより前の9月14日付けで、国産方役人の飯田弥六郎が名振浜肝入の甚蔵に宛てた貸し金返納通知書には、米沢屋のことを「石巻差配人」と書いている。

次は、米沢屋平之丞が登場する三つめの史料である。

*文化2年5月 石巻津方御備木差配人米沢屋平之丞へ居久根杉売り渡し願ひ

桃生郡名振浜御百姓誰居久根杉被下木類申上候事

一、杉 式拾本

但四尺三寸廻より四尺九寸廻迄

右之通拙者儀、先祖代居久根え植立置候木品ニ御座候間、御丁畳之御吟味を以此度被下木ニ被成下度奉願上候、如願之被下置候義ニ御座候ハ、津方御備木右差配人石巻米沢屋平之丞方へ売渡申答、内々申合わ仕置候、御憐愍之上如願被成下度、乍憚如此奉願上候、以上

文化二年五月

桃生郡名振浜

右願申上人 たれ

肝入甚蔵殿

これは名振浜の住人が居久根に植えた杉を伐採し、「津方御備木右差配人」である石巻米沢屋平之丞へ売り渡すことの許可を村の肝入に求めた文書である。居久根とは、屋敷地の外郭部に風除けとして植えた屋敷林をさすことが多いが、このほかに百姓が所持する里山をさすこともある。

藩が所有する御林山は藩の山林管理のもとにおかれたが、百姓所有地である居久根の材木も伐採には藩の許可が必要であった。伐採後には杉の苗木を植えなければならず、藩は杉の苗木を下付していた⁽¹¹⁾。それだけ仙台藩の山林政策は徹底されていたのである。この文書の宛先は名振浜の肝入甚蔵だが、申請人の部分に「百姓誰」とか「右願申上人たれ」と表記されているので、その居久根に植えた杉を伐採するさいの雛形文書のようなものである。

興味深いのは、雛形文書であるにもかかわらず、文中に「津方御備木右差配人石巻米沢屋平之丞方へ売渡申答」と米沢屋平之丞の名前が組み込まれていることである。ということは名振浜で伐採された材木類は、石巻の米沢屋が全面的に買い付ける体制になっていたと理解することも可能であろう。

次は米沢屋平之丞に関する四点目の史料である。

*文化2年5月 石巻津方御備木差配人米沢屋平之丞に川海上通判願状

覚

一 杉板 式拾枚

但厚サ三寸長三丈より四丈迄

幅不同

一 同平物 四丁

但厚五寸長五丈

幅不同

一 同丸太 壹本

但廻り四尺九寸

長三丈二尺

(中略)

右之通桃生郡名振浜より追波川通石巻へ川海上御通判被置度奉願上候、以上

文化二年五月

石巻右津方御備木

差配人 米沢屋平之丞

右之通願申出候間、早速御通判被相渡候様被成下度奉存候以上

同月同日大肝入 信夫十郎左衛門殿

この史料は、名振浜から石巻に船で杉板などの木材を運ぶために、石巻の「津方御備木差配人」である米沢屋平之丞が大肝入に「御通判」(通行証)の発行を申請した文書である。名振浜は追波川の河口の追波湾に近い場所にあり、石巻へは太平洋側の金華山経由と、追波川を遡及して小船越から、石巻に流れる北上川に入るルートがあった。前出史料でみたように名振浜で用材を仕入れた米沢屋は、追波川経由の川舟で石巻に輸送していたのである。

4. 仙台藩の国産仕法と米沢屋

米沢屋平之丞の肩書きにみえる「御国産御買人」や「御国産方差配人」といった名称は、仙台藩の国産仕法に関係する職名であろう。領内産物の他領出しを管掌するのが国産方であり、そのスキームを国産仕法と称した。これまでの研究によれば⁽¹²⁾(難波、仙台市史)、国産仕法に関する史料は天明元年(1781)以降にあらわれるとされているが、その仕組みが十分に解明されていないのが現状である。

米沢屋平之丞が登場する文化年間の国産方については、気仙郡綾里村の千田家文書に関連史料がある⁽¹³⁾。そこでは、千田家の仁兵衛が藩の国産方から、文化元年に6両余と7両余、同2年に金14切(3両2分)余の「御国産方本金」を拝借したとある。その返納は、「諸魚物」や「諸魚粕」あるいは「赤魚粕」「鯉頭粕」などを国産方に売り上げて返済するという。要するに、漁期前に藩から前借りし、収穫したあとに拝借額に相応した産物を納入して返済するという関係である。

先に紹介した名振浜の史料にも「御国産方拝借金」が出ていた。「御国産方御本金」とも出てくるので、気仙郡綾里村と同様の資金融通のシステムがあったとあってよい。その史料によれば、名振浜の7人が金219切半(56両1分)を国産方より前借りしたが、製造した粕と魚油の9割弱が焼失したため、産物での返納ができなくなった。そこで借金を年賦で返納したいと申し入れていたのである。前借金は運転資金として重要だが、事故があるとその返済の循環が破綻するため、借金としてのしかかってくることになる。ところが前掲史料では藩の国産方役人は年賦申請を認めず、貸し金をしっかりと回収するよう米沢屋に命じていたのであった。

その後の動きを『北上町史』(資料篇Ⅱ)所収史料から紹介しておく、11月20日付けで名振浜肝入の甚蔵に出した書状で米沢屋は、役所の返金指示が厳しく困ったとある。ただその後12月1日付けの甚蔵宛て書状では、とりあえず家屋焼失の者は

利息だけ、その他の者は元金の三分の一と利息を支払っておけば、来春にも皆々立ち続くように再び吟味があるとの話が内々にあったと伝えている。

国産方役所としては理由はどうあれ、当該年度に貸し金が全く回収できないのは困ったことである。それが元金三分の一の返済という役所側の指示になったのであろう。だが、罹災者の側は少しでも返済額を小さくしたいと考える。おそらく米沢屋が間に入って、家屋焼失者だけは元金三分の一の返済を免除し、利息だけの支払いになったのではないだろうか。だが、なおも減額猶予を求める罹災者側に対して、米沢屋は当面はこの条件で応じておけば、来春なんらかの措置がとられるだろうという役所の意向を伝えたのであった。

火災にあつて産物の9割を焼失した生産者に対し、三分の一とはいえ前貸金を回収しようとする国産方役所の姿勢は、見方によっては生産者の窮状を考慮しない厳しいものにみえるかもしれない。そこからは呵責で容赦のない権力というイメージが浮き立つが、事態の展開を冷静にみると、借り手である生産者が減額の要望を繰り返すことによって役所の側も徐々に譲歩している。最初から全免の姿勢を出さないから呵責なのではなく、どこまで返済が可能なかの着点を探る駆け引きだといってもよいだろう。その間に立って調整したのが、米沢屋平之丞であった。

ところで、火災による産物焼失の報告が「御国産御買人」である米沢屋になされているのに対して、貸し金返済のやりとりを米沢屋は「御国産方差配人」の肩書きでしている。これはいずれかが書き間違いということではなく、役割の相違が反映している可能性がある。

前掲史料で確認できるように、「御国産御買人」は名振浜の「国産方買人宿」と対になっている。前述のように、浜ごとの「国産方買人宿」と、これら「買人宿」を総括する「御国産御買人」としての米沢屋という関係だろう。名振浜の「国産方買人宿」である善内は同浜の七人の生産者と米沢屋をつなぐ仲買(買継)商人であったのではないだろうか。こ

れに対して米沢屋は、名振浜を含めた広域的な地域から米や魚油などの海産物を買付けする権利をもつ仕入商人であった可能性が高い。

これに対して「御国産方差配人」という名称は、産物の「御買人」という意味ではないように思われる。先の国産本金の返済をめぐる国産方役所とのやりとりをみると、国産方役所から生産者への資金融通や回収を媒介する役割を担っていたのではないだろうか。もちろんそれは、「御買人」がもつ買付権と表裏一体であることによって運用がしやすかったであろう。

では米沢屋はどの範囲の買付権、すなわち商圏をもっていたのだろうか。それを確定することは困難だが、「石巻差配人」といった表記があり、なおかつ牡鹿半島の北側に位置する名振浜を商圏としていたのであるから、場合によっては、牡鹿半島一帯がテリトリーであった可能性はあるだろう。

なお、米沢屋がたんに海産物を買付けたり、金融を斡旋するだけではなく、生産者の事情にも配慮しながら国産方役所と交渉していたことを示す史料も紹介しておきたい。

*文化2年6月12日国産方拝借金返済について

一筆啓上仕候、暑甚敷罷成候処、御家内様御揃益御機嫌能遊御座奉賀候、然ハ拙子は同儀罷在申候、乍憚御安心被成下候、然ハ御支配拝借人衆御勘定御元利返納相成候様別紙弥六郎様より被仰遣候処、引揃申事は勿論、御利息計も此年柄六ヶ敷事ニ奉存候、仍内々申上候、当月廿八日迄ハ一字に無之候共両人も石巻へ罷越不申候而は相成間敷候間、当金何程差上、無利息ニ而何ヶ年符ニ被成下度段願出候、御内々御添心被成置候て拝借人之助ニも相成候様奉存候、焼失之衆ニは痛候上之儀、殊ニ不漁引続迷惑ニ可有之候得共、御上之義ニ而申訳計ニ而ハ相済申間敷奉存候間、御内々如此申上候、右之訳御尤ニ被思召候ハ、文面御指図貴家様御来書計ニ而私方へ両人被相出候様可被成置候、其望向義、重々も取計可申候、右之段私より申上候義は御印符ニ被成下、貴家様より仰渡可被申候、早々

以上

六月十二日

米沢屋平之丞

甚蔵様

人々御中

名振浜の火災のあと、同浜肝入、米沢屋、国産方役人の間で事後処理がおこなわれている最中に、米沢屋が名振浜肝入の甚蔵に出した手紙である。意味をとりにくい箇所もあるが、意識をしておこう。

拝借人衆に対して国産方の（飯田）弥六郎様より元利とも返済するよう指示されたが、元利はもちろん、利息の支払いだけでもこの年柄ではむずかしいと内々に申し上げた。今月28日までに、拝借人全員ではなくとも両人でも石巻に出向いてきたほうがよい。そこで当面少しでも返済し、無利息で数ヶ年の年賦返済をお願いするとよい。内々に添心しておけば（国産方役人に口添えの意か）、拝借人の助けにもなるだろう。罹災者は大変だろうし、ことに不漁も続いているので困っているだろうが、「御上」に対しては申し訳をするだけではすまないだろうから、内々にこのことを知らせておく。以上のことを尤もだと思われるなら、私方へ両人を使わずようにしてほしい。望み向きの儀については、よくよく取りはからうつもりである。

被災した拝借人の窮状を察しつつ、返済条件を緩和してもらおうよう、国産方に働きかけている。前に紹介したように、結果的には全額返済猶予にはならなかったが、罹災者への配慮をにじませた米沢屋の姿を知らせるものとして貴重であろう。

5. 石巻津方御備木差配人と米沢屋

前掲史料で米沢屋がもっていたもう一つの肩書きは、「石巻津方御備木差配人」という名称である。「津方」は港湾をさすが、「御備木」とは何だろうか。「御備米」といえば凶作や災害に備えた備蓄米のことだが、材木を備えるという意味はわかりにくい。ただ、考える素材はある。

米沢屋平之丞の居所は石巻の浦町だが、この浦町

には「安永風土記書上」によると、「御守殿御材木御蔵」二棟、「御材木御蔵」二棟があった⁽¹⁴⁾。いずれも仙台藩関係の材木蔵ということになるが、「御守殿御材木御蔵」の「御守殿」とは、大名に嫁いだ徳川将軍家の娘の敬称であり、居住する奥御殿のことをさすという。

仙台藩主に徳川将軍家から輿入れした女性は二人いる。一人は、2代藩主忠宗の正室となった振姫である。岡山藩主池田輝政の娘だが、二代将軍徳川秀忠の養女となって伊達家に輿入れした。もう一人は6代藩主宗村の正室利根姫（^{はるこ}温子）である。本来は紀伊徳川藩主宗直の娘だが、8代将軍吉宗の養女となって宗村に嫁いだ。

振姫の輿入れと関係あるかどうかは不明だが、仙台城の本丸と二の丸の建物を描いた「肯山公造制城郭木写之略図」には、「守殿」が書き込まれている⁽¹⁵⁾。同図は延宝末年から天和初年（1680年前後）に作成されたとされており、時期的には振姫の輿入れに伴って建築された可能性はある。ただし、振姫の生活は主に江戸藩邸であり、この本丸「守殿」を振姫が恒常的に使ったわけではない。

ただし「御守殿」は仙台城だけではなく、江戸藩邸にもあった。享保20年（1735）、伊達家は利根姫を宗村の正室として迎え入れるにあたり、最初は愛宕下の中屋敷の一面に「御守殿」を造営した。5代藩主吉村が隠居して宗村が家督を継いだ寛保3年（1748）、芝口の上屋敷に「御守殿」を作り、そこに移っている⁽¹⁶⁾。これと同様、振姫を迎えたときにも江戸藩邸に「御守殿」が作られたはずである。

この「御守殿」という呼称は、その屋敷が解体または焼失しない限り、徳川将軍家から嫁いだ正室が没したあとも残った可能性はある。振姫が没したのは万治2年（1659）だが、その後作成された「肯山公造制城郭木写之略図」には「守殿」が書き込まれていた。利根姫が亡くなったのは延享2年（1745）だが、それよりあとにつくられた「安永風土記書出」の石巻の項目にも、前に紹介したように「御守殿御材木御蔵」という言葉があった。とはいえ、米沢屋平之丞が登場する文化年間に、仙台城あるいは江戸

藩邸に「御守殿」と称する屋敷があったかどうかはわからない。

だが以上の検討で留意しておきたいのは、「御守殿御材木御蔵」なる藩の材木蔵が石巻浦町にあり、それは「御守殿」用の材木を備蓄していたと推定されることである。同じ浦町にある「御材木御蔵」二棟も、「御蔵」と尊称されているように、藩の材木蔵である。いずれも、藩の屋敷のための用材を保管する御蔵であろう。とすると、そこに保管された藩用の材木のことを「御備木」と称したとしても不自然ではない。

ややまわりくどい説明になったが、米沢屋が名乗った「石巻津方御備木差配人」というのは、藩の材木蔵に関係する御用商人である可能性が高いということである。これに関連して注目しておきたいのは、文化元年（1804）6月に仙台城の二の丸が火災のために焼失したという事実である。翌2年3月には再建のための地鎮祭が執行された。これが落成するのは同6年4月のことであるから⁽¹⁷⁾、4年を要する大工事であった。当然のことだが、大量の材木を必要としただろう。その建築用材（「御備木」）を調達する「差配人」として米沢屋平之丞が任命された可能性は高いと思われる。本稿ではこの肩書きを、そのように理解しておきたい。

おわりに

『環海異聞』によれば、遭難した若宮丸の積荷は、米2,332俵と、御用木、雑小間木400本だったという。江戸に移入される米のなかで仙台米が占める比重はきわめて大きく、若宮丸も大量の米を積み込んでいた。また、御用木とは藩用の材木あるいは藩所有の御林山から伐採した材木のこと、雑小間木とは薪のことである。「火事と喧嘩は江戸の華」といわれたほど火事の多い江戸では材木需要が大きく、燃料の薪も江戸近郊からだけでなく、遠く仙台からも海上輸送されていたことがわかる。

山林は御林山として山守に管理させただけではなく、百姓所有の居久根の植林・伐採まで管理したほ

ど、仙台藩の山林政策は徹底していた。それは米と同じく材木が、江戸の大量需要に対応した、商品価値の高い産物だったからである。若宮丸は、その二大商品を積み込んでいたのであった。

ただし、若宮丸の積荷に材木や小間木が積み込まれていたのは、単にそうした江戸との関係だけではなく、前節までの検討によれば、船主である米沢屋が材木商人であったからだともいうことができる。その商売の実績が、のちに米沢屋をして「石巻津方御備木差配人」という、藩の材木御用を請け負うポストを得さしめたのだろう。

しかし米沢屋は、材木だけを専業とする商人ではなかった。「御国産御買人」や「御国産方差配人」という肩書きをもっていたように、藩の国産方役所のもとで、鮪粕や魚油などの海産物を集荷する特権を与えられた商人でもあった。

若宮丸が出帆した当時のことは不明だが、十数年ののち、米沢屋は藩の国産方および材木方の御用商人として活躍する存在になっていた。若宮丸を遭難で失った損失は大きかったと思われるが、大日丸と大元丸の2隻の千石船を活用してその痛手を克服し、石巻地方きっての有力商人になっていたのである。仙台北城下の有力商人であった中井家（日野屋）の石巻進出にあたり、店舗開設の保証人になっていることは、それを示すものとなる。

注

- (1) 『環海異聞』は山下恒夫編『江戸漂流記総集』第六巻(日本評論社、1993年)に収録されている。若宮丸漂流

民に関する主な研究としては、木崎良平『仙台漂流民とレザノフ』(刀水書房、1997年)、大島幹雄『魯西亜から来た日本人』廣済堂出版、1996年、平川新『開国への道』(小学館、2008年)など。

- (2) 「石巻千石船の会」ホームページ掲載の「石巻千石船末裔資料」。同資料は『石巻の歴史』第二巻「港町石巻の発展」にも収録されている。
- (3) 碑文は前掲の山下恒夫編『江戸漂流記総集第六巻』説に掲載されている。
- (4) 同前、解説。
- (5) 今村亨嗣「米沢屋平之丞子孫米沢屋幸子さんとともに『石巻若宮丸漂流民を偲ぶ会 in 禅昌寺』を振り返る」『石巻若宮丸漂流民の会会報 ナジェージダ』7-18、2008年1月号。
- (6) 中井家文書の米沢屋関係史料については、佐藤大介氏に写真版を提供していただいた。感謝したい。
- (7) 前掲『石巻の歴史』第二巻217頁。
- (8) 同前、219頁。
- (9) 科研費報告書『近世・近代商家文書に関する総合的研究』(研究代表者/佐佐美英機、2003年)。
- (10) 永沼家文書の米沢屋関係史料は『北上町史』資料編II、第11章第5節「ロシア漂流船石巻若宮丸の船主米沢屋」に8点が収録されている。
- (11) 『北上町史』通史編412頁。
- (12) 難波信雄「仙台藩国産統制機構の成立と機能」『宮城の研究』第四巻、清文堂出版、1983年。『仙台市史』第三巻第一章第二節「藩財政の窮乏と経済政策」。
- (13) 細井計『近世の漁村と海産物流通』(河出書房新社、1994年)372頁。
- (14) 「安永風土記書上」、前掲『石巻の歴史』第二巻94頁。
- (15) 「特論仙台城の建築」『仙台市史』近世一、2001年。
- (16) 『仙台市史』近世三(2004年)、70頁。
- (17) 「年表」『仙台市史』第十巻、1951年版。

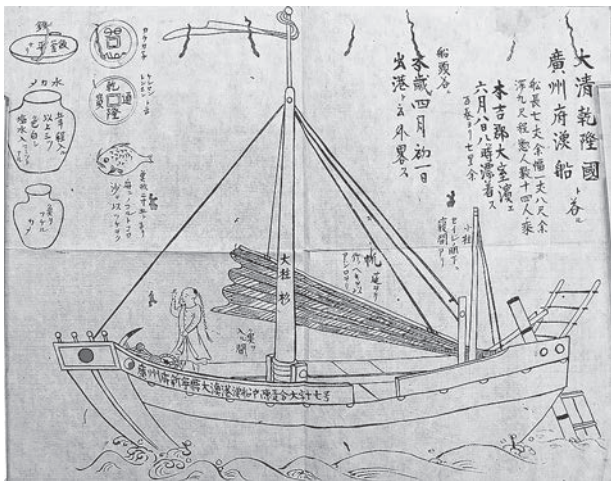
(初出：論文名同、斎藤善之編『近世南三陸の海村社会と海商』清文堂、2010年)

五 清国広東船の仙台領漂着と送還

1. 広東船漂着の記録

寛政8年(1796)6月、中国広東省の船が大室浜の沖合に漂流してきた。乗組員は仙台藩に保護されて、4ヶ月後に長崎に送還され、全員が無事、広東へ帰国することになった。

この一連の顛末を記した史料が「^{かんとうしやう}広東漂船雑記」(以下、「漂船雑記」と略称)と「^{かんとうしやうせんぎつ}広東漂着船問答日記」(以下、「問答日記」と略称)である。前書は、大槻玄沢(磐水、蘭学者、仙台藩江戸定詰医師)が「郷土の旧友」から送られてきた情報をまとめたものであり、後書は著者が不明ながら仙台藩の儒者や僧侶たちと広東漂流民とが筆談した詳細な記録である。日本側で対応したのは、仙台藩養賢堂学頭の田^{ときもり}辺匡敕、同教授の志村時恭(東蔵)と新井義路、さらに仙台大年寺の僧である密山・秀山・慈聞の三人であった。「問答日記」の一説には、「志村東蔵より芝郎(仙台藩江戸藩邸)知音之方へ贈候書状写」とあるので、大槻文彦に広東船の情報を寄せた「郷土



大室浜に漂着した広東船
(滋賀大学中井家文書)

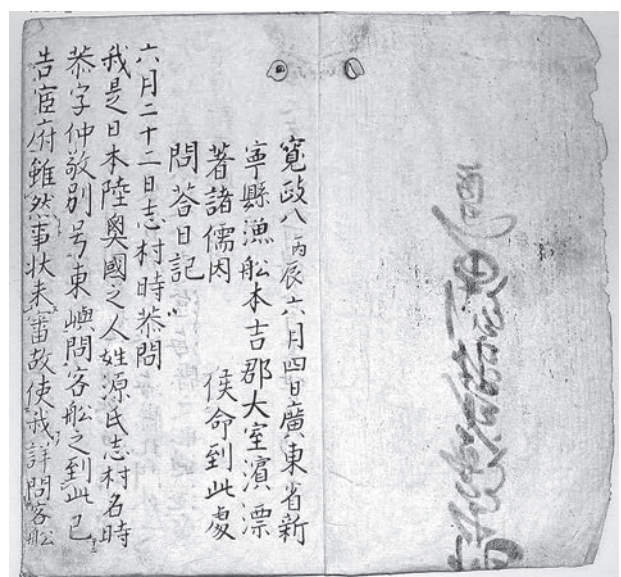
の旧友」というのは志村時恭のことであろう。

漂流民との問答の中心になっているのは志村時恭だが、彼は仙台藩の俊秀志村三兄弟(長男/^{きぬより}実因、次男/^{ときもり}時恭、三男/^{ひろゆき}弘強)の一人で、江戸の昌平黌に学び、帰郷して養賢堂の教授となっていた。三男の志村弘強はのちに大槻玄沢と共に、ロシアに漂着した石巻若宮丸漂流民の記録『環海異聞』を編纂することになるから、兄弟そろって漂流民に関係したということになる。

2. 広東船発見から上陸まで

広東船が大室浜の沖合に漂流してきたのは寛政8年(1796)6月のことだが、日付けについては「漂船雑記」が7日とするのに対し、「広東漂着船問答日記」は4日としている。ただし、大室浜の山神社に残された船材の銘文には6月7日とあって「漂船雑記」の日付けと一致する。

最初にこの船を発見したのは出漁していた大室浜



「広東漂着船問答日記」

の六之助であった。見知らぬ船を怪しんで近づいてみると、甲板の上から船員たちが手を振って助けを求めていたため、急いで浜に戻って村役人に知らせ、村役人は穀船抜荷取締番所の役人に届け出て、大室浜に引き寄せたのであった。

その翌日、十三浜に住む医師が漂流船に乗り込んで船員と筆談し、清国広東省新寧県の漁船であることがわかった。4月1日に出港して7日目に強風に遭ったという。船中を調べたところ、「兵具等」は見あたらず、「漁猟の道具」ばかりだったという。密輸船であることを疑ったようだが、漁船が漂流したものとみなしている。

こうした第一報が仙台に伝えられ、仙台からさらに江戸藩邸の家老と藩主にも報告された。おそらく幕府にも上申されたであろう。知らせを受けた仙台藩では藩の儒者志村時恭らを大室浜に派遣して、6月22日から本格的な取り調べを始めた。志村は最初の筆談で、貴船が漂流してきた事情を調べて幕府に報告し、その後、長崎に送って清国の商人に引き渡すので心配するなと伝え、事情聴取に応じるよう求めている。清国と日本との間には正式の外交関係はなかったが、長崎を窓口とした通商関係があり、多くの清国商人が長崎に来航していた。もし日本に中国人が漂着した場合には、現地の村役人や領主が保護し、長崎に送り届けることになっていた。志村が説明したのはそのことであつた。広東船乗組員は大いに安心したことだろう。

広東船の乗組員は表1にあげた14人であつた。全員の名前を書き上げ、その後の筆談の主役ともなつたのは陳世徳（27歳）である。若いながらも

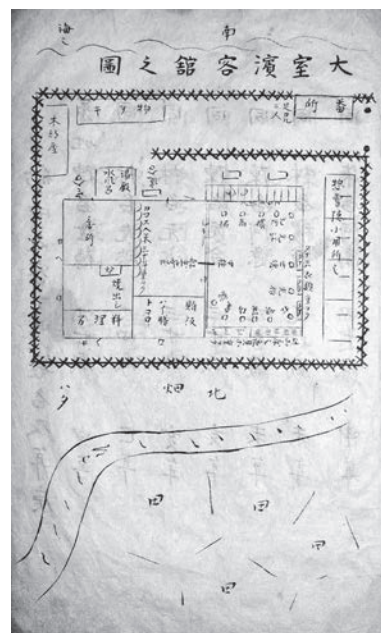
表1 広東船乗組員一覧

名前	年齢	名前	年齢
陳世徳	27	陳阿娘	42
林光裕	24	林阿松	16
林元江	30	朱阿高	40
陳讓光	38	林儂輝	36
林松声	41	陳阿夏	34
陳元江	30	陳阿意	22
陳阿楮	42	陳賢生	25

船頭だったのだろうか。志村は、船中は窮屈なので字を書ける人物を選んで岸に上がり、くつろいで話をしたいと求めたが、すぐには応じていない。翌23日に仙台大年寺から密山・秀山・慈聞の3人の僧が到着したさいも、重ねて上陸を求め、衣食も提供すると申し出ているが、実現しなかった。陸にあがることに不安を覚えたのであろう。だが3人の僧侶がかつて長崎に遊学して清国の商人とも交わつたことがあると伝えると、安心したのか、25日に全員が上陸することになったのである。

「問答日記」によると、「岸上の民舎を以て客館と為さしむ」とあるだけだが、漂流民を収容した宿舎は「大室浜客館之図」（登米市登米町公民館所蔵）という史料に示されている。聞き取りを重ね合わせると、図で示した場所にあつたようだ。風呂・台所付きなので食料の提供を受けて自炊生活をしたのだろう。宿舎の周りは竹矢来で囲まれ、出入口には監視人が詰めた番所も置かれている。

上陸にあたっては、仙台藩主の名をもって衣服や寝具14人分を与えた。また8月15日(旧曆)になって秋冷の季節になると、仕立師を遣わして衣類をこしらえ、9月10日には「寒冷甚だし」として綿入れを与えている。至れり尽くせりの待遇であつた。



「大室浜客館之図」

3. 筆談の様子

筆談の中心は陳世徳であったが、ほかに林光裕(24歳)と陳元合(30歳)も若干は応じている。漢字による筆談であるため、おおむね文意は通じたようだが、中国人側の回答には時として「字意を曉しらず」とあるので、日本語風漢文を判読できないこともあったらしい。

漂流しはじめたのは4月上旬のことだが、志村時恭が富士山を画いて、いつこの高山をみたかと問うと、陳世徳は山上に山雲のかかった高山を5月下旬に見たと答えた。志村は「此れ必ずや富士山なり」と合点している。漂流がはじまってひとつきはん一月半ほどで富士山が見えるところまでたどりついていたのだが、そこから一週間ほどで大室浜の沖合まで流されたことになる。

漂流の事情や身元の取り調べが一段落すると、日本側の応接者が儒学者であるだけに中国の文化や生活習慣に対する関心が強く、質問も多方面に及んでいる。項目だけをあげてみると、度量衡(計量の単位)、税金、孔子廟、関帝廟、仏寺、節句、役所、役人、稲作、産物、葬儀、気候、女性風俗、夫婦、家畜、酒価、皇帝などについて尋ねている。そのなかから興味深い問答をいくつかあげてみよう。

まず、「日本の美女、中国と同じや否や」という問いに対しては、「人は同じ貌なれども頭上は同じからず」と答えている。顔つきは同じだが髪型が違うということである。女性習俗の違いは髪型だけではなく、化粧法にもあった。「日本婦人は婚姻すれば必ず齒を染む。兄等(貴兄たち)、大室浜にて見る所の婦人の如し。広東婦人の夫有る者に此の事有りや」。つまり、日本の既婚女性は齒を黒く染めるが、広東ではどうかと問うている。貴兄たちが大室浜で見たようにと述べているから、大室浜の既婚女性がお齒黒をしていたことは間違いない。これに対して陳世徳は、「曰く、有ることなし。男子と色を同じうす」と答えている。広東には齒を染める習俗はないということである。ただし、「広州の婦人の夫

在る者は両耳連環して夫在るの義を示す。是を以て五六歳にして耳に銀環を穿つ」と述べ、既婚女性は耳輪をし、そのために幼少のころから耳に穴を開けていると語っている。

また、日本では官吏(武士)の夫婦は床を別にして眠るが庶民は一緒に寝る、貴国では如何、という問いに対して、広東では役人も庶民も寝るときは夫婦一緒だと答えている。異国人との会話をとおして、武士身分の夫婦は寝室を異にしていたことを知ることができる。

4. ことばの習得と交流

筆談が主であるとはいえ、何度も会っていればおのずと会話もするようになった。あるとき、同席した代官の前田河文治が持っていた扇子の絵をみて、陳世徳が「これはナダナダナダ」と言ったという。「これはなに？」という単語を最初に覚えることが異国語習得の効果的な方法なのだが、中国人たちも「これはなんだ？」という日本語を使って質問を繰り返していたことが知られる。「只今にては日本言葉少々相覚へ、罷り下り候諸役人も少々漢語相覚へ、たがひに使ひ候よし」というから、日本側の役人たちも中国語を少しずつ覚えて、簡単な会話程度はできるようになっていたようである。「漂船雑記」には、一から十までの数字と56単語について広東語の発音が記載されている。目・口・鼻といった身体や、飯・酒・烟草・硯・釜・障子などのような衣食住に関する単語が多いのは、手近なところから発音を確認していったからだろう。「無筆はこれ無く、カタカナは相分り申し候」とあるので、中国人たちも全員がカタカナ程度は書けるようになっていったようだ。

筆談ができるということは同じ漢字文化圏だからだが、漢字を知っているかどうかは教養の問題である。筆談に応じていた陳世徳と林光裕と陳元合の三人がかなりの教養をもっていたであろうことは、彼らがいくつも漢詩や墨跡を残していることから知られる。まただからこそ、取り調べにあたった日本側の儒学者たちも好意的に接したのであろう。とく

に陳世徳は、「日本の阿倍仲麻麿、唐朝に在りて日本王の使を奉じて唐に入り、李太白と遊ぶと云々。今、幾年を経るか」と質問して驚かせている。阿部仲麻呂は奈良時代の遣唐留学生で、李白や王維などの唐の文人と交流したことで有名だが、帰国の途中に難破して唐にもどり、ついに故国の地を踏むことがなかった。「是れ千有余年なり」と養賢堂学頭の田辺匡敕は答えているが、この問答は陳世徳の教養ぶりだけではなく、阿部仲麻呂が中国ではよく知られた存在であったことも教えている。

5. 長崎へ

「漂船雜記」によると、中国人漂流民たちが長崎に送られたのは、その年の10月中旬のことであった。十三浜からはしげ舟で石巻に向かったが、「川まで小舟乗出し、見物夥しく群集す」とあるから、見送りをかねた見物人が多く集まったようだ。同日の七つ時（午後4時ころ）に石巻に着き、1週間ほど滞在したあと、日の丸の幟をはためかせ、弓・鉄砲も揃えた船に乗せられて長崎に向けて出航した。石巻を出るときもまた、「前代未聞の見物」であったという。石巻を去るにあたり、乗組員一同を代表して陳世徳は次のような謝辞を残した。

貴国君（仙台藩主）～（中略）衆弟（私たち）、大深恩の天の如く大なるを受く。貴国の君、前に日常宴席を賜い衣食甚だ多し。～（中略）衆弟、国に還るの時、本国の人も亦、大深恩の天の如

く大なるを知らん。（後略）

仙台藩主や関係者の慈愛に満ちた接待に感謝し、無事祖国に戻れることの喜びが語られている。

6. 広東漂流船が残したもの

大室浜で漂流民たちを收容した客館のすぐそばの民家には、漂流船ゆかりの品と伝えられる大きな壺と絵皿二枚が残されていた。陸上で生活するにあたり、広東船に積んであったものを降ろし、旅立つにあたって置いていったものと思われる。その民家には以前はもっと多くの絵皿が残されており、冠婚葬祭のときに使ったと伝えられている。

また大室浜の山神社には、広東船の廃材の一部が奉納され、次のような銘文が刻まれていた。

寛政八丙辰六月七日、唐国広東之漁船一艘、唐人拾四人乗漂着之時、此丸印右船之納 於塵木者也

同年十月廿日出立 願主 大室浜
小肝入 太治平
吉沢氏刻之

大室浜の小肝入太治平が記念のために船材の一部を切り取って奉納したようだ。この奉納木の上部に刻まれた㊦の印は、「漂船雜記」に収載された広東船の絵に同様の記号が描かれているので、その部分を切り取ったものであろう。一部とはいえ船材が残されているということは、この地で広東船が解体されたことを示している。じっさい漂流民たちは仙台



大室浜の民家に残されていた壺と絵皿（この民家は2011年3月11日の大津波により流出した）

藩が用意した御用船に乗って長崎に向かったのであるから、広東船は地元で与えられて解体され、さまざまな用途に再利用されたのであろう。

その船材の一部は机となって迫町佐沼の大念寺に残されている。その机には、「田文卿」なる人物が密かに仙台藩の役人に頼んで船材の一部を手に入れて机を作ったと書かれている。「田文卿」の本名は不明だが、相当の資産家で文人墨客や俳諧のパトロンとして名をなしていたようである（『仙台人名大辞書』）。船材で机を作ったのも粋狂の一つだったのであろう。

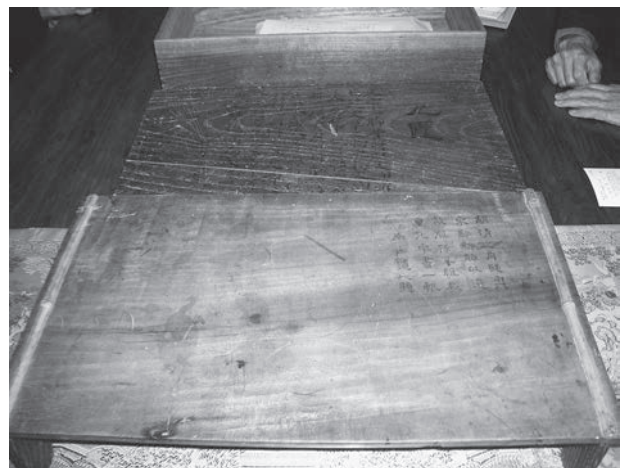
この机には、栗原郡築館町の俳人である畠白圭（本名は白鳥屋加蔵）の名前や、仙台城下の瑞鳳寺第十四世住職であり、詩書にすぐれた文人でもあった南山古梁の漢詩も記されている。また江刺郡岩谷堂

の俳人である休々庵文草と、寛政・文化年間（1790年代～1810年代）に仙台に来遊したとされる画人根本常南の記名もあることから、「田文卿」の手を離れたあと、この机は俳諧を中心とした文化サークルのなかで珍品としてやりとりをされていたのかもしれない。その机が佐沼の大念寺に所蔵されたいきさつは不詳だが、佐沼は俳句が盛んな地方であり、大念寺がその活動拠点の一つだったことから、俳諧関係者から同寺に寄贈されたのではないかと推測されている。広東船の船材から作られた机は、仙台領における文人たちの交流を探る手がかりにもなっているのである。

（初出：「広東船の漂着」『北上町史通史編』第2章第4節、2005年）



広東船の船材を利用した木碑
（大室浜の山神社）



漂流船の船板で作られた机と木箱
漢詩が書かれている。
（登米市迫町佐沼：大念寺蔵）

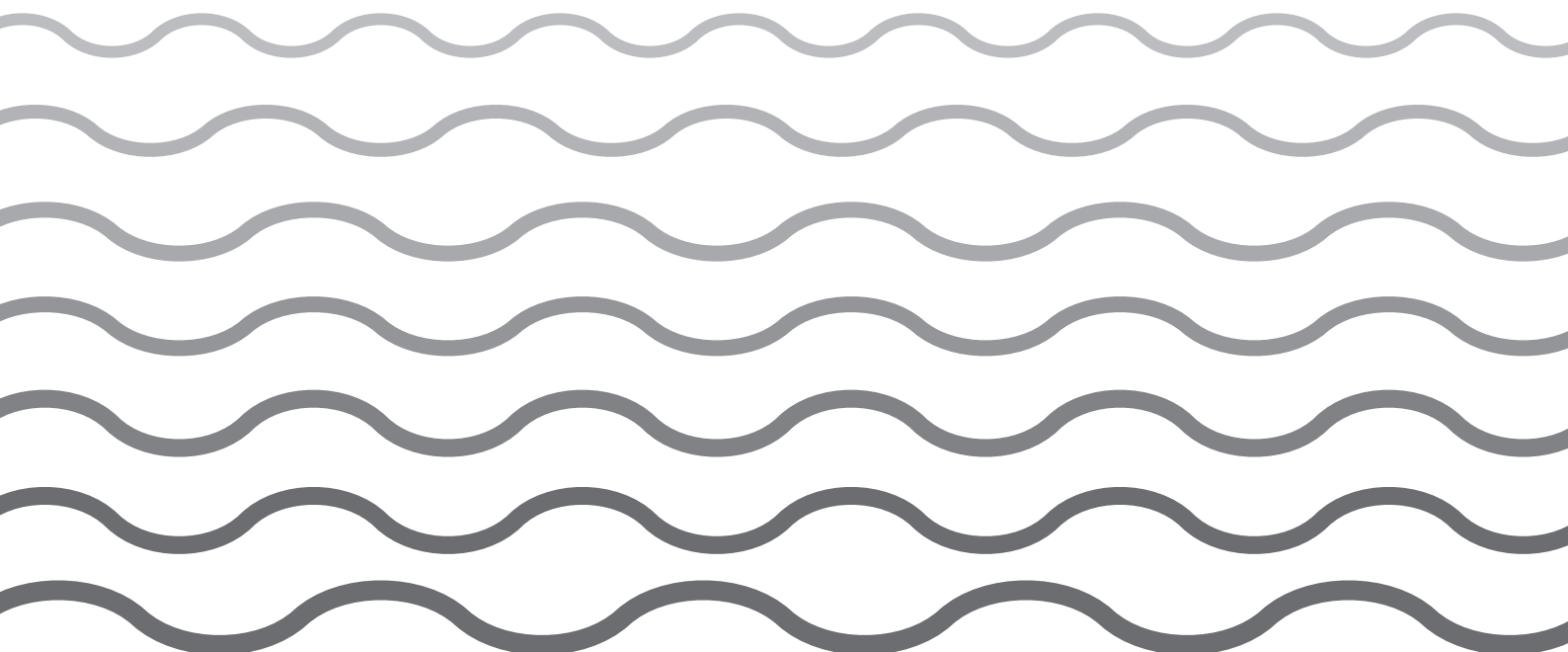
第2編

漂流年表

竹原万雄

凡例

「第3編 漂流記目録」の「第1部 漂流記目録」から漂流事件341件の基本データを抽出して年代順に並べた。詳しくは「第3編 漂流記目録」の凡例を参照。



No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
1	慶長 16 (1611)	慶長 17 (1612)	薩摩		マカオ			マカオー肥前国五島
2	慶長 17 (1612)		日本		清国台州			
3		慶長 18 (1613)	日本		ジャワのバンタムカ			ジャワのバンタムー平戸
4	元和 2 (1616)		讃岐国高松浦	喜兵衛船	青ヶ島	喜兵衛	3	青ヶ島ー八丈島ー伊豆国下田ー故郷
5		元和 4 (1618)	出雲国三尾関カ		朝鮮カ		7カ	
6	元和 4 (1618)		隠岐国竹島カ		朝鮮		7カ	朝鮮ー対馬藩
7	寛永 2 (1625)	寛永 3 (1626)	讃岐国高松		南方の小島	吉右衛門・松兵衛・六平	3	南方の小島ー青ヶ島ー八丈島ー伊豆国下田ー江戸ー故郷
8	寛永 14 (1637)		伯耆国会見郡米子村	村川市兵衛の漁船	朝鮮国蔚山鮎魚津	弥三右衛門・与七		朝鮮国蔚山鮎魚津ー対馬藩
9	寛永 17 (1640)		日本		清国台州		13	
10	寛永 17 (1640)		琉球		土佐国佐賀浦			
11	寛永 20 (1643)		越前国		見知らぬ島 [無人島]			見知らぬ島 [無人島]ー帰還
12	寛永 21 (1644)	正保 3 (1646)	越前国三国浦新保村	竹内藤右衛門船 [藤左衛門持船]・同子藤蔵船 [藤太持船]・国田兵右衛門船	日本海北岸の無人の地	竹内藤右衛門 [藤左衛門]・竹内藤蔵・国田兵右衛門 [岡田兵右衛門]	58カ	日本海北岸の無人の地ーボンエット湾ー奉天ー北京ー京城ー東萊府ー対馬ー厳原ー大坂ー越前
13	承応 2 (1653)		対馬カ		朝鮮		6カ	
14	明暦 3 (1657)		日本		アメリカ大陸			
15	万治 3 (1660)		日本		ルソン			ルソンーマニラ城域外の日本町サン・アントン
16	寛文元 (1661) [万治 3] (1660)		伊勢国松坂		エトロフ島付近の小島	七兵衛 [七郎兵衛]	15カ	
17・18	寛文初年		長崎稲佐村カ・薩摩		台湾・広東雷州			
19	寛文 3 (1663)	寛文 3 (1663)	肥前国五島		朝鮮国江原道蔚珍		3カ	朝鮮国江原道蔚珍ー対馬藩
20	寛文 6 (1666)		伯耆国会見郡米子村	大谷九右衛門の漁船	朝鮮国慶尚道長鬐		22カ	朝鮮国慶尚道長鬐ー対馬藩
21	寛文 6 (1666)		隠岐国カ		朝鮮		1カ	朝鮮ー対馬藩
22	寛文 6 (1666)	寛文 6 (1666)				ミゲル益田 (天草生れ)・ベドロ葛西 (豊後伊美生れ)	2カ	オランダ船が救助ー長崎
23	寛文 7、(1667)、8年頃 (1668)		摂津国大坂		南海			
24	寛文 8 (1668)	寛文 10 (1670)	尾張国知多郡大野村	権田孫左衛門船	バタン島	次郎兵衛・孫左衛門	15	バタン島ー清国ー長崎ー生国
25	寛文 9 (1669)	寛文 10 (1670)	阿波国海部郡浅川浦	勘右衛門船	小笠原諸島の母島	勘右衛門・長左衛門	7	小笠原諸島の母島ー八丈島ー伊豆国洲崎ー故郷
26	寛文 11 (1671)		琉球カ		尾州知多郡西ノ口		27カ	
27	寛文 11 (1671)		播磨国飾磨津カ		朝鮮国巨濟島		3カ	朝鮮国巨濟島ー対馬藩

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
28	寛文12 (1672)		讃岐国塩飽カ		朝鮮		14カ	朝鮮-対馬藩
29	寛文12 (1672)	延宝元 (1673)	伊勢国松坂	七郎兵衛船	エトロフ島	七郎兵衛	15	エトロフ島-クナシリ島-十勝-松前-江戸
30	延宝元 (1673)		陸奥国相馬カ		台湾			台湾-長崎
31	延宝4 (1676)		豊前国小倉カ		朝鮮		2カ	朝鮮-対馬藩-生国
32	延宝4 (1676)		越前		朝鮮			
33	延宝8 (1680)		土佐国室津浦		鳥島			
34	延宝8 (1680)		土佐国上加江浦		鳥島			
35	天和元 (1681)		紀伊領		蝦夷地			
36	天和2 (1682)		仙台カ		蝦夷地			
37	貞享元 (1684)		仙台カ		蝦夷地			
38	貞享元 (1684)		土佐国田野浦		鳥島			
39	貞享元 (1684)		土佐藩		八丈島			
40	貞享元 (1684)	貞享2 (1685)	伊勢国度会郡神社村	太兵衛船	マカオ近くの 小島	太兵衛	12	マカオ近くの小島-マカオ-長崎
41	貞享2 (1685)		秋田藩		松前			
42	貞享2 (1685)		津軽藩		蝦夷地福島村			
43	貞享3 (1686)		南部八戸					
44	貞享4 (1687)		相馬		蝦夷地イフツ			
45	貞享4 (1687)		仙台藩					
46	貞享4 (1687)			本庄市兵衛船				
47	貞享4 (1687)		津軽					
48	貞享4 (1687)		越後					
49	元禄元 (1688)	元禄元 (1688)	薩摩カ		広東省		10カ	広東省-長崎
50	元禄元 (1688)		越前国坂井郡神保浦カ		朝鮮国巨済島 知世浦		28カ	朝鮮国巨済島知世浦-日本
51	元禄3 (1690)	元禄5 (1692)	薩摩国山川カ		清国広東省高州 [雷州]	庄兵衛・惣右衛門・吉右衛門・五郎右衛門・庄三郎・市右衛門・慶兵衛・長兵衛・十三郎・仁左衛門・万右衛門	12	清国広東省高州[雷州]-福州-普陀山-長崎
52	元禄3 (1690)		仙台領		蝦夷地			
53	元禄4 (1691)		土佐国種崎浦		津呂浦			
54	元禄4 (1691)	元禄5 (1692)	種子島竹崎浦カ		琉球の久高島			琉球の久高島-那覇-鹿児島
55	元禄5 (1692)		土佐国安芸郡奈半利浦	次兵衛船	八丈島		3	八丈島-豆州下田
56	元禄5 (1692)		伊勢国若松		蝦夷地白老の内シマタへ			
57	元禄5 (1692)		備前国岡山		朝鮮国多太浦		16	朝鮮国多太浦-対馬藩
58	元禄5 (1692)	元禄6 (1693)	讃岐国塩飽牛島	市左衛門船 [源左衛門船]	清国補陀山の近く	谷本源左衛門・徳左衛門	14	清国補陀山の近く-長崎
59	元禄5 (1692)	元禄7 (1694)	長門カ		清国広東省陽江県		12カ	清国広東省陽江県-寧波-補陀山-長崎

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
60	元禄6 (1693)		仙台領石巻		蝦夷地シイコタン			
61	元禄6 (1693)		日本		ルソン			ルソン-マニラ城域外にある日本町ディアオ
62	元禄6 (1693)		摂津国		蝦夷地			
63	元禄8 (1695)		大坂	淡路屋又兵衛船	カムチャッカ半島南部	伝兵衛	15	カムチャッカ半島南部-オパラ川河口-ロシア人が救助-ヤクーツク-モスクワ
64	元禄9 (1696)	元禄10 (1697)	日向国志布浦	弥三右衛門船 [弥左衛門持船]	鳥島	少左衛門	5	鳥島-遠州川尻-志布浦
65	元禄10カ (1697)				蝦夷地アツケシ			
66	元禄15 (1702)	元禄15 (1702)	種子島	榎本重八船	青ヶ島	榎本重八	8	青ヶ島-八丈島-豆州下田-江戸-鹿児島藩邸-種子島
67	元禄15 (1702)		大坂		蝦夷地			
68	宝永元 (1704)	宝永2 (1705)	泉州湊浦	喜左衛門船	青ヶ島	源次郎	11	青ヶ島-八丈島郷浦-小島-豆州下田
69	宝永2 (1705)		酒田漁師町		蝦夷地ヲコシリ島			
70	宝永2 (1705)		琉球		土佐国幡多郡清水浦		82	
71	宝永2 (1705)	宝永4 (1707)	陸奥国柵倉太田熊次郎領	三之丞船	清国瓊州府	三之丞・権七	6	清国瓊州府-長崎
72	宝永3 (1706)		日本		ルソン		14カ	ルソン-マニラ城域外にある日本町ディアオ
73	宝永4 (1707)		土州安芸郡田野浦	六平船	八丈島		8	
74	宝永4 (1707)		筑前国博多西町浜カ		朝鮮	善四郎		朝鮮-長崎
75	宝永5 (1708)	宝永7 (1710)	陸奥国荒浜カ		ルソン			ルソン-清国乍浦-長崎
76	宝永7 (1710)		日本		東部カムチャッカのカリギル湾	三右衛門	8カ	東部カムチャッカのカリギル湾-ヤクーツク-ペテルブルグ
77	正徳元 (1711)	正徳3 (1713)	筑後国久留米藩	筑後国久留米藩主有馬玄蕃頭則維の船	ルソン	岡野三左衛門・長助・長太夫・源之丞	6	ルソン-マニラ城域外の日本町ディアオ-広東省電白県-長崎
78	正徳元 (1711)	正徳2 (1712)	薩摩カ		朝鮮			朝鮮-対馬藩-長崎
79	正徳2 (1712)	正徳2 (1712)	肥前国唐津カ		朝鮮		11カ	朝鮮-対馬藩-長崎
80	正徳2 (1712)		豆州カ	豆州代官小林又左衛門の米を積んだ官船	種子島増田村小塩屋	七左衛門	7	種子島増田村小塩屋-日州志布志
81	正徳2 (1712)		薩摩国浜之市村		東蝦夷地エトロフ島			
82	正徳2 (1712)	正徳3 (1713)	陸奥国相馬領棚塩	吉十郎船	清国広東省	吉十郎・覚兵衛・三八・次郎助・助七	8	清国広東省-長崎

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
83	正徳3 (1713)	正徳4 (1714)	越前国三国カ		朝鮮			朝鮮-対馬藩-大坂-江戸-帰郷
84	正徳3 (1713)		大坂	日野屋権右衛門船	八丈島		15	
85	正徳3 (1713)	正徳4 (1714)	尾州名古屋長者町	紙屋理兵衛船	琉球	政之助	9	琉球-大坂-尾張
86	正徳3 (1713)		薩摩カ		清国			
87	正徳3 (1713)				蝦夷地昆布の浜			
88	享保元 (1716)	享保2 (1717)	尾州名古屋船入町	柏屋市兵衛船	奥エゾ地トカチ	吉十郎	9	奥エゾ地トカチ-絵鞆-有珠-虻田-長万部-亀田-松前-江戸
89	享保3 (1718)		南部および江戸霊巖島		蝦夷地クスリ			
90	享保3 (1718)	享保4 (1719)	筑後カ		清国広東省			清国広東省-帰還
91	享保4 (1719)	元文4 (1739)	遠江国新居	筒山五兵衛船	鳥島	左太夫 [佐太夫]・甚八・仁三郎・平三郎	12	鳥島-八丈島-相州浦賀-江戸
92	享保5 (1720)		大坂	大津屋利三郎船	八丈島		14	
93	享保8 (1723)		土佐藩	万歳丸他一艘	御蔵島			
94	享保8 (1723)	享保8 (1723)	仙台カ		琉球			琉球-江戸深川
95	享保10 (1725)				対馬国内院浦	石橋七郎右衛門		
96	享保11 (1726)	享保11 (1726)	鹿児島藩カ			源右衛門	20	清国船が救助-長崎
97	享保12 (1727)		大坂					
98	享保13 (1728)		薩摩	若潮丸	カムチャッカ半島のロパトカ岬	宗蔵・権蔵	17	カムチャッカ半島のロパトカ岬-ヤクーツク-ベテルブルグ
99	享保16 (1731)		摂津国大坂		シコツ			
100	享保17 (1732)		琉球		種子島中之村前浜	金城親方・米須親雲上	27カ	
101	享保17 (1732)		伊豆国新島			定八郎	5	種子島西之村前ノ浜-鹿児島藩
102	元文元 (1736)	元文元 (1736)	能登国鳳至郡輪島	兵右衛門船	朝鮮国慶尚道長鬚	伝九郎	14	朝鮮国慶尚道長鬚-ウワンカイ-対馬藩-大坂
103	元文3 (1738)	元文4 (1739)	江戸堀江町	宮本善八船	無人島	富蔵・武兵衛・六助	17	無人島-鳥島-八丈島-江戸
104	元文4 (1739)		奥州石巻村		種子島増田村後浜	惣兵衛		
105	元文4 (1739)	元文5 (1740)	陸奥		エゾ地登加知	長三郎・清之丞・久助・奥卯松	16	エゾ地登加知-仙台藩
106	寛保元 (1741)	寛保2 (1742)	薩摩国		清国の舟山列島 [清国漁山]	伝兵衛	21	清国の舟山列島 [清国漁山] - 乍浦 - 長崎
107	寛保2 (1742)		蝦夷地キイタツフ		南部			
108	寛保2 (1742)		薩摩国児ヶ水	紋右衛門の商船				
109	寛保3 (1743)		奥州仙台領石巻村		種子島増田村	孫右衛門	15	種子島増田村-薩摩国山川
110	寛保3 (1743)	延享元 (1744)	尾張国知多郡多屋村	永通丸 (与十郎船)	青ヶ島	与十郎	5	青ヶ島-八丈島-江戸

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
111	延享元 (1744)	延享元 (1744)	松平遠江守領内摂州神戸浦			九郎兵衛	17	種子島住吉村沖で漂流中に救助-赤尾木ノ浦
112	延享元 (1744)		陸奥国鹿角郡佐井村	多賀丸 (竹内徳兵衛船)	千島列島オンネコタン島	竹内徳兵衛	18	千島列島オンネコタン島-カムチャッカ半島のボルシェレック-ペテルブルグ
113	延享2 (1745)	延享2 (1745)	琉球		奥州仙台領	用物宰領役上運天親雲上・山城仁屋	17カ	奥州仙台領-江戸
114	延享2 (1745)		紀伊国海士郡柳浦		八丈島			
115	延享2 (1745)		筑後国三潞郡榎津			長六	6	種子島西之村で破船-薩州山川
116	延享2 (1745)	延享3 (1746)	泉州日根郡湊浦	吉兵衛船	八丈島三根浦	伝左衛門	13	八丈島三根浦-帰還
117	延享3 (1746)		種子島	種子島家の年頭船		七之丞・孫左衛門		
118	延享3 (1746)	延享3 (1746)	奥州仙台カ	松平陸奥守領分奥州仙台門脇の船	種子島野間村	平吉		種子島野間村-薩摩山川
119	延享3 (1746)		屋久島楠川	平左衛門船			4	
120	延享3 (1746)		讃岐国大内郡三本松	歌津屋儀兵衛船	八丈島中之郷小筒ヶ浦	平八・吉右衛門・嘉右衛門・伊八	9	
121	延享4 (1747)		種子島小根占	周八の商船	国上村浦田			国上村浦田-山川
122	寛延3 (1750)	宝暦元 (1751)	陸奥国盛岡郡尾崎白浜村	神力丸 (久保屋善之丞船)	清国福建省嶗嶼	又五郎・利兵衛・伝六	8	清国福建省嶗嶼-福州-廈門-寧波-長崎
123	宝暦2 (1752)	宝暦4 (1754)	陸奥国相馬	十三夜丸 [一三夜叉丸] (立谷平左衛門船)	台湾海峡の小島	嘉兵衛	13	台湾海峡の小島-清国広東省惠州府陸豊県-長崎
124	宝暦2 (1752)	宝暦4 (1754)	陸奥国本吉郡気仙沼村	春日村 (大島屋加兵衛船) [大島屋幸兵衛船・大嶋屋嘉兵衛船]	清国浙江省定海県舟山の内花山	伝兵衛・大島屋嘉兵衛	13	清国浙江省定海県舟山の内花山-寧波-長崎-仙台
125	宝暦2 (1752)	①宝暦 (1755) 5・②宝暦6 (1756)	江戸霊巖島	福聚丸 (橋本藤助船)	ルソン島	善右衛門・三之助・清次郎・久次郎・伝次郎・清次郎	15	ルソン島-マニラ域外の日本町ディアオにあるフランシスコ会に引取られ、扶助料を給与される…①三之助：マカオ-乍浦-長崎-江戸・②清次郎、久次郎、伝次郎、清次郎：マカオ-寧波-乍浦-長崎
126	宝暦2 (1752)	宝暦3 (1753)	陸奥国亙理郡荒浜	茂八船	琉球国久志間切	栄吉	14	琉球国久志間切-薩摩国山川-摂津国兵庫浦-江戸
127	宝暦5 (1755)	宝暦9 (1759)	和泉国箱作村	五郎兵衛船	鳥島	藤八・幸助	5	鳥島-伊豆国子浦
128	宝暦6 (1756)		紀伊国蘭村	堀川屋八右衛門船	エトロフ島モヨロ	友右衛門		
129	宝暦6 (1756)	宝暦6 (1756)	陸奥国津軽郡石崎村	治右衛門船	朝鮮国江原道江陵	治右衛門	4	朝鮮国江原道江陵-乍浦-対馬-大坂
130	宝暦6 (1756)	宝暦6 (1756)	琉球		肥前国五島		16	肥前国五島-長崎

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
131	宝暦6 (1756)	宝暦7 (1757)	陸奥国牡鹿郡石巻	和泉屋升右衛門船	北エゾ地シイコタン	徳兵衛・源四郎	13カ	北エゾ地シイコタン-厚岸-幌泉-松前-奥州三厩-帰郷
132	宝暦7 (1757)	宝暦9 (1759)	志摩国布施田浦	若市丸 (浅野小平次船) [小平治船]	台湾	浅野小平次 [小平治]・清助・市松・甚助	6	台湾-福州-南京-乍浦-長崎-志州鳥羽
133	宝暦9 (1759)	宝暦9 (1759)	和泉国波有手村	佐市郎船	鳥島	佐市郎		鳥島-伊豆国子浦
134	宝暦9 (1759)	宝暦9 (1759)	土佐藩	大宝丸	鳥島	伝七	18	鳥島-伊豆国子浦
135	宝暦11 (1761)	宝暦12 (1762)	陸奥国亙理郡荒浜	福吉丸 (木村屋茂右衛門船)		善十郎・五助	17	清国南通州沖で清国船が救助-南通州-上海-長崎-江戸
136	宝暦12 (1762)	宝暦13 (1763)	松平遠江守領内摂津国西ノ宮	長平衛船	カラフト島	上岡徳五郎・弥四郎・吉十郎・久七・万三郎・久太郎・三次郎・八兵衛・善四郎	9	カラフト島-シラヌシ-宗谷-故国
137	宝暦12 (1762)		琉球			高良・潮平親雲上	10カ	土佐国幡多郡柏島沖で救助-宿毛大島港
138	宝暦12 (1762)	明和4 (1767)	筑前国唐泊浦	本宮丸	ルソン	孫右衛門	18	ルソン-ビシャヤ-カバロウカシ-ハルハヤ-マハエ-ハイト-ソクボウ-清国漳浦県-漳州府-厦門-福州-乍浦-長崎
139	宝暦12 (1762)		日本		ルソン		14カ	ルソン-マニラ城域外の日本人町ディアオ
140	宝暦13 (1763)		奥州仙台領石巻		東蝦夷地シヤマニ			
141	宝暦13 (1763)		名古屋		蝦夷地トカチト			
142	明和元 (1764)	明和8 (1771)	筑前国志摩郡唐泊浦	伊勢丸 (重右衛門船)	ミンダナオ島	重右衛門・孫太郎	20	ミンダナオ島-バンジュールマシ-スラバヤ-長崎
143	明和元 (1764)	明和4 (1767)	筑前国残島	村丸	ルソン	文次郎・五郎左衛門	19	ルソン-カガヤン-ソクボウ-厦門-福州-乍浦-長崎
144		明和2 (1765)	薩摩カ		朝鮮		21カ	朝鮮-対馬-長崎
145	明和2 (1765)	明和4 (1767)	陸奥国磐城郡小名浜村	住吉丸	安南国	善四郎	6	安南国-会安-長崎
146	明和2 (1765)	明和4 (1767)	常陸国多賀郡磯原村	姫宮丸 (弥八郎船) [弥八持船]	安南国	佐平太 [佐源太]・弥八・友七	6	安南国-会安-長崎-小石川水戸藩邸
147	明和4 (1767)					佐藤玄明		南海で異国船が救助
148	明和7 (1770)		種子島		朝鮮	新右衛門		朝鮮-長崎-鹿児島藩
149	安永2 (1773)	安永3 (1774)	薩摩		清国浙江省寧波府定海県舟山	長兵衛・池山喜三右衛門・源次郎・中原伸右衛門・権左衛門	19	清国浙江省寧波府定海県舟山-乍浦-長崎
150	安永2 (1773)		尾張		琉球			

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
151	安永3 (1774)	安永3 (1774)	加賀国石川郡粟ヶ崎村	藤蔵船	朝鮮半島の東南部	伝次郎	9	朝鮮半島の東南部ー甘浦ー釜山ーウワンカイー対馬藩ー大坂ー故郷
152	安永3 (1774)	安永5 (1776)	陸奥国折ノ浜	最吉丸 (十兵衛船)	広東省潮州府潮陽県	幸助	14	広東省潮州府潮陽県ー乍浦ー長崎
153	安永3 (1774)	安永4 (1775)	陸奥国小竹浜	永福丸 (六兵衛船)	福建省泉州府惠安県の小島	佐五平・長右衛門	16	福建省泉州府惠安県の小島ー乍浦ー長崎
154	安永4 (1775)	安永4 (1775)	陸奥国檜葉郡山田浜村カ		清国	勝兵衛・作兵衛・次郎・金右衛門・六兵衛	5カ	清国ー福州ー乍浦ー長崎
155	安永4 (1775)		琉球カ		志摩国鳥羽浦			
156	安永5 (1776)		大隈国カ		朝鮮			
157	安永8 (1779)	安永9 (1780)	大坂安治川	住徳丸 (摂津屋半十郎船)	清国福建省	徳蔵・伝蔵こと半十郎	13	清国福建省ー乍浦ー長崎ー江戸
158	安永8 (1779)		紀伊国日高郡御坊村	一葉丸 (伝次郎船)	清国福建省			
159	天明2 (1782)	寛政4 (1792) [寛政5] (1793)	伊勢国白子村	神昌丸 (彦兵衛船) [幸太夫船]	アリュージェン列島のアムチトカ島	大黒屋光太夫 [幸太夫・幸大夫・光大夫・太黒屋幸太夫]・庄蔵・新蔵・小市・磯吉	17	アリュージェン列島のアムチトカ島ーニジニカムチャッカーーオホーツクーヤクーツクーイルクーツクーペテルブルグーイルクーツクーオホーツクー根室
160	天明5 (1785)	寛政9 (1797)	土佐国赤岡浦	松屋儀七船	鳥島	長平	4	鳥島ー青ヶ島ー八丈島ー江戸
161	天明7 (1787)	寛政9 (1797)	肥前国寺江村	金左衛門船 [金右衛門船]	鳥島	儀三郎・市之丞・長之丞・清蔵	11	鳥島ー青ヶ島ー八丈島ー江戸
162	天明8 (1788)	寛政2 (1790)	松前松ヶ崎	松栄丸 (彦六船) [長吉船]	広東省潮州府 [清国惠州付近]	善吉・伊兵衛・長吉	15	広東省潮州府 [清国惠州付近]ー乍浦ー長崎
163	寛政元 (1789)	寛政9 (1797)	日向国諸県郡志布志浦	住吉丸 (中山三右衛門船) [中山三左衛門持船]	鳥島	栄右衛門 [栄左衛門]	6	鳥島ー青ヶ島ー八丈島ー江戸
164	寛政2 (1790)		大坂折屋町		八丈島			
165	寛政3 (1791)		加賀国石川郡本吉	住吉丸 (明断屋徳兵衛船)	朝鮮慶尚北道慶州地内甘浦	平四郎	5	
166	寛政5 (1793)	文化元 (1804)	陸奥国牡鹿郡石巻	若宮丸 (米沢屋平之丞船)	アリュージェン列島	平兵衛・善六・津太夫・左平 [佐兵衛]・儀兵衛 [儀平]・太十郎・米沢平之丞	16	アリュージェン列島ーヤクーツクーイルクーツクーモスクワーペテルブルグー長崎
167	寛政6 (1794)	寛政7 (1795)	奥州名取郡閑上浜	大乘丸 (彦十郎船)	安南国	清蔵・清之丞・源三郎	16	安南国ーマカオーー広東ー乍浦ー長崎ー江戸
168	寛政7 (1795)		琉球		土佐国幡多郡下田浦	親垣親雲上・伊良皆親雲上・坐波・儀間筑登之・石川親雲上	31	土佐国幡多郡下田浦ー日向国細島
169	寛政7 (1795)	寛政9 (1797)	松前西在突符村	金右衛門船	満洲吉林地方の魚皮韃境	孫太郎・安次郎・重兵衛	3	満洲吉林地方の魚皮韃境ー北京ー蘇州ー乍浦ー長崎

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
170	寛政7 (1795)	寛政10 (1798)	陸奥国土佐郡青森大町 [松前箱館]	徳永丸 (久保屋儀兵衛船) [舩屋喜衛門手船]	バタン諸島の一小島	久保屋儀兵衛 [久保義兵衛]・巳之助・万次郎・吉太郎・円次郎	5	バタン諸島の一小島-バタン島-ルソン島のカガヤン-マニラ-カヴィテ-マカオ-広東-乍浦-長崎-江戸
171	寛政10 (1798)	寛政10 (1798)	石見国カ		朝鮮国慶尚道慶州の内甘浦		6カ	朝鮮国慶尚道慶州の内甘浦-対馬藩-長崎-生国
172	享和2 (1802)	文化5 (1808)	蝦夷箱館奥山	順吉丸 (角屋吉左衛門船)	台湾	文助	9	台湾-チョブラン島-安平-廈門-福州-乍浦-長崎
173	享和3 (1803)		陸奥国北郡牛滝村 [南部領牛滝村福浦村]	慶祥丸 (源右衛門船)	千島列島ホロモシリ島	継右衛門	14	千島列島のホロモシリ島-ペトロパウロフスク-エトロフ島
174	文化2 (1805)		日本		アラスカのシトカ付近			アラスカのシトカ付近-ロシア人が救助-ヤボンスキー島-蝦夷の沿岸
175	文化3 (1806)	文化4 (1807)	大坂安治川	稲若丸 (伝法屋吉右衛門船)		新名屋吟蔵・文右衛門・貞五郎・喜三郎・惣次郎・和左蔵・松次郎・平原善松	8	アメリカ船が救助-ハワイ-マカオ-広東-マカオ-バタビア-長崎-故郷
176		文化4 (1807)	遠江カ		清国カ			
177	文化4 (1807)	文化5 (1808)	鹿児島藩	永柳丸 (鹿児島藩主松平薩摩守の手船)	台湾	伊勢貞右衛門・源五郎	22	台湾-安平-廈門-福州-乍浦-長崎
178	文化6 (1809)	文化7 (1810)	大坂山本町	天徳丸 (油屋源蔵船) [富田屋三次郎船]	台湾	三次郎・新助・新蔵	14	台湾-清国-長崎
179	文化6 (1809)		薩摩カ		朝鮮			
180	文化7 (1810)	文化8 (1811)	薩摩国鹿児島下町	長久丸 (松村良右衛門船)	清国江南	貞次郎	26	清国江南-長崎
181	文化7 (1810)		琉球		五島奈良尾			
182	文化7 (1810)	文化10 (1813)	摂津国御影村	歓喜丸 [勸亀丸] (加納屋十兵衛船)	カムチャッカ半島	平助・与茂吉・久蔵・吉五郎	16	カムチャッカ半島-オホーツク…①与茂吉:クナシリ島・②久蔵:箱館
183		文化8 (1811)	薩摩カ		朝鮮		24カ	朝鮮-長崎
184	文化9 (1812)	文化10 (1813)	種子島カ		朝鮮	三右衛門・助右衛門		朝鮮-帰国
185	文化9 (1812)	文化13 (1816)	鹿児島藩	永寿丸 (鹿児島藩主松平豊後守斎興の手船) [喜三右衛門船・喜三左衛門船]	千島列島のハラマコタン島	喜三左衛門 [喜左衛門]・佐助・角治	25	千島列島のハラマコタン島-アイヌ人が保護-ペトロパウロフスク①-オホーツク-ペトロパウロフスク②-ウレッジ島-エトロフ島-江戸
186	文化10 (1813)		土佐国福島浦		八丈島			
187	文化10 (1813)		日本				35	イギリス船が救助-ノアホーク・サウンドのロシア植民地

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
188	文化10 (1813)	文化13 (1816)	尾張国名古屋納屋町 [紺屋町]	督乗丸 (小島屋庄右衛門船)[長右衛門船]		重吉こと長右衛門・要吉・半兵衛・音吉	14	イギリス船が救助 - サンタ・バーバラ - シトカーペトロバウロフスクールップ島 - エトロフ島 - 江戸
189	文化10 (1813) [文化9] (1812)	文化11 (1814)	安芸国豊田郡御手洗島之内大浜村	虎市丸 (栄助船)	清国広東省	栄助・次作・利吉		清国広東省 - 長崎
190	文化12 (1815)	文化13 (1816)	薩摩国阿久根	伊勢田丸 (政右衛門船)	清国広東省惠州府陸豊県碓石鎮	宅右衛門・古渡七郎右衛門・権左衛門・坊助・八兵衛	49 [46]	清国広東省惠州府陸豊県碓石鎮 - 玉山県 - 乍浦 - 長崎
191	文化12 (1815)		加賀国本吉村	三次郎船				
192	文化13 (1816)		薩摩国鹿兒島	相生丸	清国浙江省寧波府象山県の内石浦			
193	文化14 (1817)		琉球		五島玉ノ浦大宝沖			
194		文化14 (1817)	薩摩カ		清国浙江省		24カ	清国浙江省 - 長崎
195	文政2 (1819)		琉球国泉崎村	仲村渠筑登之の馬艦船	常州多賀郡川尻村	当銘	12	
196	文政2 (1819)		薩摩藩カ	亀寿丸 (薩摩藩手船)	朝鮮			
197	文政2 (1819)		琉球		肥前国五島福江島岐宿村西津		9	
198	文政2 (1819)		薩摩国川内白和町	若宮丸	清国浙江省温州府			
199		文政3 (1820)	薩摩カ		朝鮮		24カ	朝鮮 - 長崎
200	文政3 (1820)	文政9 (1826)	陸奥国閉伊郡船越浦田野村 [閉伊郡磯鶏村]	神社丸 (黒沢屋六之助船)	パラオ諸島	平之丞・亀蔵・久助・久兵衛・伊勢松・倉松・清助・米次・栄助・長吉・鶴松・喜太郎	12	パラオ諸島 - シヤム - マカオ - 乍浦... ①倉松、清助、米次、栄助：隅州屋久島 - 長崎・②長吉、鶴松、喜太郎：遠州下吉田村 - 清水港 - 肥前平戸田助浦元島 - 長崎
201	文政3 (1820)		日本		北アメリカのコロンビア川口の南側アダムス岬			
202	文政4 (1821)	文政4 (1821)	琉球国之内大島大和浜間切之内今里村カ			末喜久・作林・喜久恵	3	オランダ船が救助 - 長崎
203	文政4 (1821)		薩摩国高城郡	住徳丸	朝鮮国全羅道濟州牧旗義泉為美浦			
204		文政4 (1821)	薩摩カ		清国浙江省		15カ	清国浙江省 - 長崎
205	文政5 (1822)		奥州仙台牡鹿郡湊	円蔵船	種子島国上村湊	吉蔵		種子島国上村湊 - 鹿兒島
206		文政5 (1822)	薩摩カ		朝鮮		36カ	朝鮮 - 長崎
207	文政5カ (1822)		種子島カ		清国	仲之允・徳松		清国 - 帰国
208	文政5 (1822)	文政6 (1823)	薩摩国鹿兒島	天満丸	清国福建省漳州府漳浦県	幸次郎・仲右衛門	28	清国福建省漳州府漳浦県 - 長崎
209	文政6 (1823)	文政6 (1823)	鹿兒島藩	神通丸 (鹿兒島藩主松平豊後守手船)		橋口武兵衛門・上村藤次郎	24	オランダ船が救助 - 長崎

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
210	文政6 (1823)		薩摩藩	神明丸 (薩摩藩手船)	朝鮮国全羅道興陽県豊安浦			
211	文政6 (1823)		薩摩藩	天神丸 (薩摩藩手船)	朝鮮国興清道安興			
212	文政6 (1823)	文政7 (1824)	種子島	熊野丸	朝鮮	三浦藤兵衛		朝鮮-長崎
213	文政6 (1823)	文政7 (1824)	種子島カ		清国	喜蔵・次郎右衛門・源次郎・休次郎・善太郎		清国-長崎-鹿児島
214	文政7 (1824)		薩摩国鹿児島下町	金山丸	朝鮮国			
215		文政7 (1824)	薩摩カ		朝鮮		62カ	朝鮮-長崎
216	文政7 (1824)	文政8 (1825)	大坂本町	安穩丸 (柏屋勘兵衛船)		兵蔵・惣吉・松次郎	13	外国船が救助-小名浜沖で漁撈中の常陸国多賀郡河原子村の十吉の漁船に移す-平潟-江戸
217	文政8 (1825)		土佐国中ノ浜		青ヶ島			
218	文政9 (1826)	文政9 (1826)	薩摩国山川	財久丸	清国浙江省寧波府定海県	直右衛門	10カ	清国浙江省寧波府定海県-長崎
219	文政9 (1826)	文政10 (1827)	越前国丹生郡下海浦	宝力丸 (蓬萊屋庄右衛門船)	揚子江の河口あたりの松江府	善右衛門・吉左衛門	9	揚子江の河口あたりの松江府-乍浦-長崎
220	文政9 (1826)		陸奥国小南部領		相模国浦賀			
221	文政10 (1827)		陸奥八戸カ		清国			
222	文政10 (1827)		陸奥カ		清国			
223	文政10 (1827)	文政11 (1828)	陸奥国八戸	融勢丸 (石橋徳右衛門船)	バタン諸島の小島	徳次郎・勇吉・惣助	11	バタン諸島の小島-バタン島-マニラ-温州-長崎
224	文政11 (1828)	文政13 (1830)	伊豆国八丈島中野郷	仁寿丸 (沖山金右衛門船)	ルソン島カガヤン	儀兵衛・助四郎・栄助	13	ルソン島カガヤン-マニラ-マカオ-広東-乍浦-長崎-江戸
225	天保元 (1830)	天保2 (1831)	薩摩藩	大日丸 (薩摩藩手船)	清国浙江省寧波府定海県の内舟山		10カ	清国浙江省寧波府定海県の内舟山-長崎-生国
226	天保元 (1830) [天保3] (1832)	天保元 (1830)	備前国岡山広瀬町	神力丸 (多賀屋金十郎船)		五左衛門・甚介・清兵衛・勝之助・伊勢次郎	19 [14]	バタン諸島のイバホス島で船が大破-サブタン島-バタン島-マニラ-マカオ-広東-乍浦-長崎
227	天保元 (1830)		種子島カ		清国	三右衛門・庄蔵		
228	天保2 (1831)		日本					
229	天保2 (1831)	天保3 (1832)	大隅国		朝鮮国全羅道濟州旌義県為美浦 [濟州牧義県為美浦]		14カ	朝鮮国全羅道濟州旌義県為美浦 [濟州牧義県為美浦]-対馬藩-長崎-生国
230	天保3 (1832)		尾張国知多郡小野浦	宝順丸 (樋口源六船)	北アメリカのワシントン植民地フラッター岬付近	重右衛門・岩吉・久吉・音吉	14	北アメリカのワシントン植民地フラッター岬付近-ハワイ-ロンドン-マカオ
231	天保3 (1832)	天保7 (1836)	越後国早川村	角長の船 [龍宮丸 (長門屋持船)]	ハワイのオアフ島ワイアルア付近	次郎右衛門・伝助・長太・伝吉・戸三郎	9	ハワイのオアフ島ワイアルア付近-ホノルル-ベトロパウロフスケ-シトカー-エトロフ島

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
232	天保4 (1833)		泉州堺	明吉丸 (木屋平兵衛船)	種子島安城村	嘉兵衛	9	
233	天保4 (1833)		琉球		五島大和守領分			
234	天保5 (1834)	天保6 (1835)	尾張カ		ルソン	音吉		ルソンー帰還
235	天保5 (1834)		日本		マリアナ群島	与四郎 (または伊四郎)	21カ	マリアナ群島ーグアム島
236		天保6 (1835)	長門国豊浦郡肥中浦		朝鮮		3カ	朝鮮ー長崎
237	天保6 (1835)		肥後国飽託郡川尻	庄蔵船	ルソン島	庄蔵・寿三郎・熊太郎・力松	4	ルソン島ーマニラーマカオ
238	天保7 (1836)	天保8 (1837)	陸奥国閉伊郡山田村カ	開運丸[海運丸]	清国広東省	万吉	5カ	清国広東省ー長崎
239	天保9 (1838)	天保9 (1838)	薩摩藩	三益丸	清国蘇州府崇明県	吉次郎	23	清国蘇州府崇明県ー長崎
240	天保9 (1838)		常陸国那珂郡湊村	南部屋文右衛門船	青ヶ島			
241	天保9 (1838)	天保14 (1843)	越中国富山古寺町	長者丸 (能登屋兵右衛門船)		吉岡屋平四郎・五三郎・喜右衛門・金六・平四郎・片口屋七左衛門・八左衛門・六兵衛・平兵衛・次郎吉	10	アメリカ船が救助ーハワイーベトロパウロフスクーオホーツクーシートカーエトロフ島ー松前ー江戸ー帰郷
242	天保10 (1839)	天保13 (1842)	遠江国佐野郡高御所村	昌栄丸 (茂左衛門船)		千太郎 [仙太郎]・松之助・辰蔵	3	外国船が救助ーホノルルーマカオー福州ー乍浦ー長崎ー江戸ー故郷
243	天保10 (1839)	天保11 (1840)	陸奥国気仙郡小友浦	中吉丸 (及川庄兵衛船)	小笠原島	三之丞	6	小笠原島ー下総国飯岡沖ー銚子
244	天保10 (1839)		常陸国那珂郡湊村	宝来丸	琉球国勝連浜村			
245	天保12 (1841)	嘉永4 (1851)	土佐国高岡郡宇佐浦	筆之丞 (伝蔵の漁船)	鳥島	伝蔵・万次郎[中浜万次郎・ジョン万次郎・満次郎・萬次郎・万治郎]・五右衛門・寅右衛門・重助	5	鳥島ーアメリカ船が救助ーホノルルー琉球ー長崎
246	天保12 (1841) [天保11] (1840)	天保14 (1843)	加賀国石川郡大野村	松徳丸 (丸屋伝六船)		勝蔵・宗七・弥三兵衛	7	清国船が救助ーマカオー乍浦ー長崎
247	天保12 (1841)	①・② (1843) 天保14・③ (1845) 弘化2	摂津国兵庫西宮内町	永住丸[榮寿丸] (中村屋伊兵衛船)		善助・初太郎・儀三郎・亥之助・弥市・太吉	13	スペイン船が救助ーカリフォルニア…①初太郎:マカオ①ーホノルルーマカオ②ー乍浦ー長崎ー故郷・②善助:マカオ①ーホノルルーマカオ②ー上海ー乍浦ー長崎ー故郷・③亥之助・弥市・太吉:乍浦ー長崎
248	天保12 (1841)	天保14 (1843)	陸奥国伊達郡北半田	観吉丸[観音丸] (重吉船)	フィリピン群島中のサマル島付近の小島	甚助・次郎吉・長次郎・喜平・重吉・与三蔵	8	フィリピン群島中のサマル島付近の小島ーカヴィテーマニラー香港ーマカオー乍浦ー長崎ー江戸
249	天保12 (1841)		尾州内海	数右衛門船		数右衛門・源助・治助・長吉・十作・亀吉・伊助	7	外国船が救助ーペルーのキヤオ港

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
250	天保14 (1843)	天保14 (1843)	薩摩国河辺郡加世田郷泊村	栄助の漁船	朝鮮	与吉	21	朝鮮-萩三島-長門国萩宇津港-長崎
251	天保14 (1843)		江戸カ					北海でアメリカ船が救助
252		天保15 (1844)	天草カ		朝鮮		3カ	朝鮮-長崎
253	天保15 (1844)	弘化2 (1845)	阿波国中野郡撫養	幸宝丸 (天野屋兵吉船)	鳥島	徳之丞・由蔵・幸助	11	鳥島-アメリカ船が救助-(上総国夷隅郡守谷村・房州乙浜村)-浦賀
254	弘化2 (1845)	弘化2 (1845)	陸奥国閉伊郡釜石浦	千寿丸 (佐野屋与平治船)		勇助・太郎兵衛・富蔵	11	アメリカ船が救助-館山港-浦賀
255		弘化2 (1845)	尾張カ					
256	弘化2 (1845)	弘化3 (1846)			清国松江府華亭県の小島	喜兵衛・富三郎・小重太・幸吉	4	清国松江府華亭県の小島-乍浦-長崎
257	弘化2 (1845)		日本				3カ	
258		弘化2 (1845)	日本					
259	弘化3 (1846)	弘化4 (1847)	尾張				9カ	ドイツ船が救助-松前海峡で日本船に移す-南部領
260	弘化4 (1847)	嘉永元 (1848)	伊豆国三宅島	権現丸 (伝右衛門船)	薩州屋久島	伝右衛門	6	薩州屋久島-長崎
261	弘化4 (1847)		日本				4カ	
262	弘化4 (1847)		日本		スタブレトン島の一小湾		5カ	
263	嘉永元 (1848)		日本				20カ	アメリカ船が救助-ハワイ諸島のマウイ島ラハイナ
264	嘉永元 (1848)	嘉永2 (1849)	大阪今橋	大通丸 (紙屋新助船)		正十郎	12	
265	嘉永3 (1850)		播州赤穂郡坂越浦	明德丸 (矢子屋彦兵衛船)	八丈島属島小島宇津木村	彦四郎・長五郎・平七・清七	14	
266	嘉永3 (1850)		三州高浜	竹久丸 (栄三郎船)	青ヶ島	栄三郎・久吉	15	青ヶ島-八丈島大賀郷
267	嘉永3 (1850)	①嘉永 (1851) 4・②嘉永 (1852) 5	紀伊国日高郡菌浦	天寿丸 (和泉屋庄衛門船) [庄左衛門船・虎吉船]		九助 こと 虎吉 [寅吉]・長助・半六・佐蔵	13	アメリカ船が救助…①虎吉:ホノルル-ハワイ-香港-上海-乍浦-長崎-故郷・②長助、半六:ペトロパウロフスク-アヤン-ノウォアルハンゲリスク(シトカ)-豆州下田-豆州中木浦-下田-江戸-故郷
268	嘉永3 (1850)		大坂淡路町二丁目	寿通丸 (錫屋庄兵衛船)	八丈島三根村神湊	徳蔵・利右衛門・政蔵	16	
269	嘉永3 (1850)		尾州常滑浦	嘉永丸 (忠蔵船)	八丈島中之郷藍ヶ江	忠蔵	9	
270	嘉永3 (1850)		播州坂越浦	小竹丸 (義兵衛船)	八丈島末吉村神子崎	助市・与市・長右衛門	11	
271	嘉永3 (1850)		越後国頸城郡青海浦	観在丸 (内川屋、斎藤太次右衛門船)	八丈島大賀郷八重根	内河屋徳三郎・小野伴三郎・民治郎	11	
272	嘉永3 (1850)		淡州津名郡志筑浦	春吉丸 (九右衛門船)	青ヶ島	九右衛門・友八・芳太郎	10	青ヶ島-八丈島大賀郷

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
273	嘉永3 (1850)		播州坂越浦	住寿丸 (松次郎船)	青ヶ島	松次郎・源治郎・利八	11	青ヶ島ー八丈島大賀郷
274	嘉永3 (1850)		尾州常滑浦	幸栄丸 (富浦長次郎船)	八丈島属島小島宇津木村	万蔵	10	八丈島属島小島宇津木村ー末吉村洞輪沢
275	嘉永3 (1850)		淡州三原郡惣川村	福膳丸 (新蔵船)	青ヶ島	新蔵・茂助・春吉	5	
276	嘉永3 (1850)		阿州那賀郡答島村	喜栄丸 (善兵衛船)	八丈島末吉村洞輪沢	熊蔵・勇蔵・金蔵	10	
277	嘉永3 (1850)		紀州尾鷲浦	喜福丸 (浜中屋、土井八郎兵衛船)	八丈島末吉村	長吉・惣兵衛・長太郎	12	
278	嘉永3 (1850)		紀州鶴殿	観喜丸 (彦右衛門船)	八丈島末吉村	彦兵衛・勇治郎・彦左衛門	8	
279	嘉永3 (1850)		尾州野間一色村	春日丸 (野村藤次郎船)	八丈島末吉村	虎吉	12	
280	嘉永3 (1850)		大坂船坂町	長栄丸 (佐兵衛船)	青ヶ島	留五郎・梅吉	11	青ヶ島ー八丈島大賀郷
281	嘉永3 (1850)		加賀国向粟ヶ崎	宝永丸 (鳥屋徳兵衛船)	青ヶ島	長治郎・清五郎	12	青ヶ島ー八丈島大賀郷
282	嘉永3 (1850)		紀州和歌山湊上町	和合丸 (御影屋市兵衛船)	八丈島属島小島鳥打村	岩蔵・治助・源兵衛	7	
283	嘉永3 (1850)		大坂福島	住清丸 (木屋市十郎船)	八丈島末吉村巻繩浦	庄十郎・藤四郎・和吉	15	
284	嘉永3 (1850)		摂州御影	天徳丸 (西田屋弥平治船)	八丈島末吉村	庄治郎・福松・栄蔵	17	
285	嘉永3 (1850)		摂州今津	三社丸 (利作船)	八丈島三ツ根村神湊	権八・市兵衛・熊吉	16	
286	嘉永3 (1850)	嘉永5 (1852)	肥前国彼杵郡伊王島大明寺村カ [深堀大明寺カ]・五嶋カ		清国浙江省寧波府定海県	菊蔵・仁蔵・虎次郎・春蔵・忠五郎・八十松・和七・未蔵	14	清国浙江省寧波府定海県ー乍浦ー長崎
287	嘉永3 (1850)	①安政元 (1854)・②安政6 (1859)	摂津国菟原郡大石村	永力丸 [栄力丸] (松屋八三郎船)	江戸	万蔵・亀五郎・次作・彦蔵 [浜田彦蔵]・長助・仙八・岩吉・安太郎・利七	17	アメリカ船が救助ーサンフランシスコ①ーハワイー香港…①長助：上海①ー乍浦ー長崎・②彦蔵：サンフランシスコ②ーホノルルー上海②ー長崎ー神奈川ーサンフランシスコ③
288	嘉永3 (1850)		長門国藤曲村	浮木丸	清国乍浦近辺の小島			
289	嘉永3 (1850)		三州松江	栄蔵船	八丈島中之郷藍ヶ江		8	
290	嘉永3 (1850)		摂州菟原郡御影村	富貴丸 (沢田屋十兵衛船)	八丈島三根村神湊		16	
291	嘉永3 (1850)		相州西浦賀町	六兵衛船	八丈島末吉村洞輪沢		5	
292	嘉永4 (1851)		日本		アリュेशन列島アッカ島		3カ	

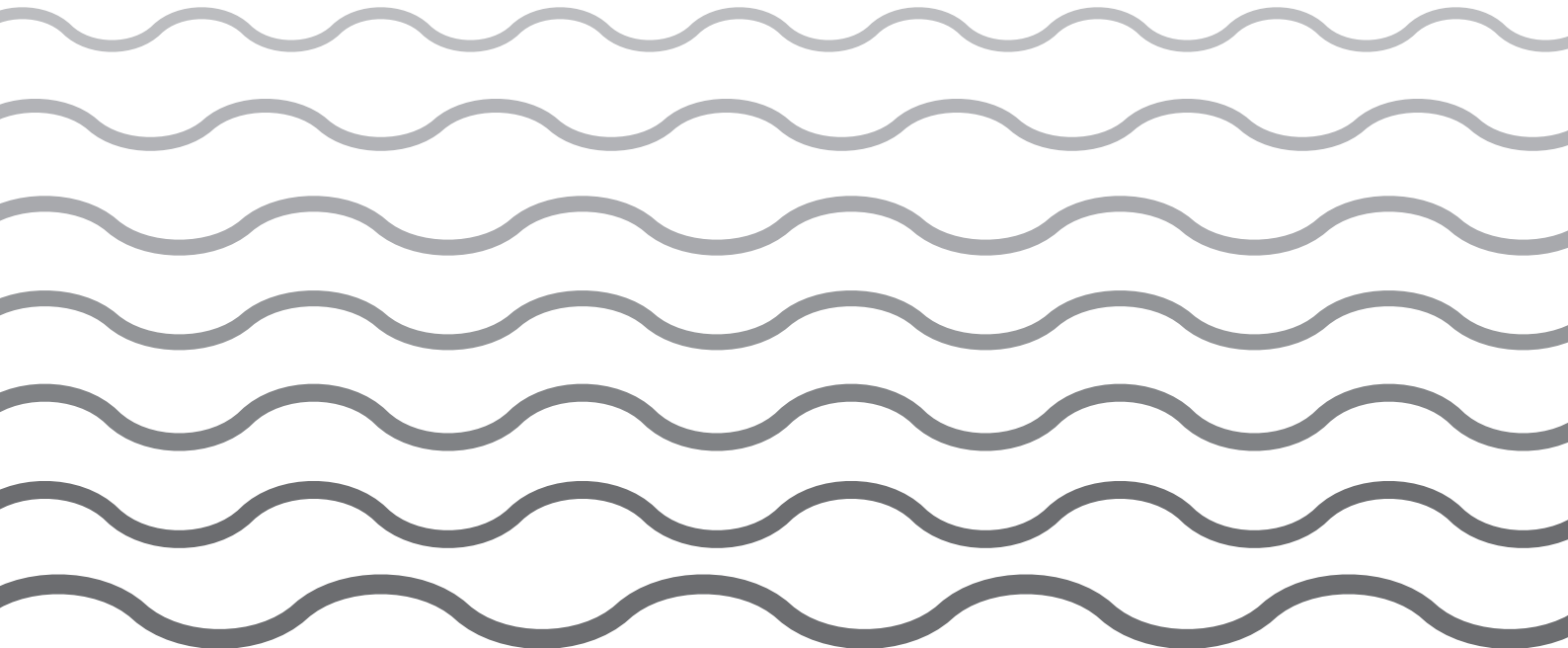
No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
293	嘉永4 (1851)	①嘉永5・②安政元 (1852・1854)	三河国渥美郡江比間村	永久丸(与一船)		岩吉・善吉・作蔵・勇次郎	4	アメリカ船が救助 -ホノルル…①岩吉・善吉:釜山-長崎・②作蔵、勇次郎:ホーン岬-ニューベットフォード-ニューヨーク-ボストン-ホーン岬-バルパライソー-ガラパゴス諸島-サンフランシスコ-香港-豆州下田沖
294		嘉永5 (1852)	長州カ				9カ	
295	嘉永6 (1853)		日本カ					
296	嘉永6 (1853)		日本					
297	嘉永6 (1853)	安政元 (1854)	薩州カ		清国ソウメン府	平左衛門	19カ	清国ソウメン府-スウチウ-乍浦-長崎
298	嘉永6 (1853)	嘉永7 (1854)	越後国岩船郡寝屋村	八幡丸[善助船]		勇之助	13	アメリカ船が救助 -カリフォルニア-下田
299	安政元 (1854)		琉球		土佐国津呂浦			
300	安政元 (1854)	安政2 (1855)	芸州倉橋	文蔵船	種子島浦田浦	文三郎		種子島浦田浦-山川
301	安政2 (1855)		日本					
302		安政3 (1856)	琉球カ			渡名喜親方		
303		安政3 (1856)	摂津国東明浦	平治船		新太郎	16カ	アメリカ船が救助 -安房国南朝夷村の甚左衛門の漁船に移乗
304	安政3 (1856)		琉球中山府		薩州山川港			
305	安政3 (1856)		日本					
306	安政3 (1856)		日本					
307	安政3 (1856)				清国			
308	安政4 (1857)		琉球		長崎代官管地野母村沖			
309	安政4 (1857)	安政5 (1858)	尾張国知多郡半田村	永栄丸(七三郎船)		七三郎	12	イギリス船が救助 -サンフランシスコ-香港-上海-長崎
310	安政4 (1857)	①安政5・②安政6 (1858・1859)	尾張国知多郡亀崎村	神力丸(次三郎船)		源弥・勘太郎・喜平	5	アメリカ船が救助 …①源弥:箱館・②勘太郎、喜平:ホノルル-長崎
311		安政5 (1858)	松前カ			伝九郎・甚吉・久米吉・由松	4カ	
312	安政5 (1858)	万延元 (1860)	播磨国赤穂郡坂越浦[赤穂郡刈屋村]	光塩丸	ルソン	庄三郎・浅吉・善四郎・権八・源蔵・乙松・市太郎・近之助・八三郎・嘉市・利助・民三郎・清五郎・金兵衛・弥四郎	15カ	ルソン-長崎
313	安政5 (1858)	万延元 (1860)	淡路カ			政吉	3カ	アメリカ船が救助 -ホノルル-横浜
314		安政6 (1859)	日本					

No.	漂流年 (西暦)	帰国年 (西暦)	船籍地	船名	漂着地	乗組員	乗組員数	帰国ルート・その他
315	安政6 (1859)	安政6 (1859)	北蝦夷地トンナイカ		ニコライエフスク	北蝦夷地トンナイ詰足軽倉内忠右衛門		ニコライエフスクー北蝦夷地クシュンナイ
316	安政6 (1859)		日本					
317	安政6 (1859)							
318	安政6 (1859)		奥州宮古	善宝丸	琉球			
319	安政7 (1860)		豊後国岡領三佐村	福吉丸	琉球国久志間切川田村車泊			
320	文久元 (1861)	文久3 (1863)	尾張国知多郡内海	伊勢丸 (前野長七船)	アリューション列島のアツツ島	代助・亀三郎・定吉	12	アリューション列島のアツツ島ーニコライエフスクー長崎
321	文久元 (1861)	文久2 (1862)	尾張国知多郡中洲	イオ丸		清五郎・権次郎・彦吉・栄吉・仙次郎	11	アメリカ船が救助ーサンフランシスコー神奈川
322	文久元 (1861)	文久2 (1862)	尾張国知多郡小野浦	忠五郎船	八丈島		13	八丈島ー江戸
323	文久元 (1861)		尾張国知多郡野間	鈴木平吉船	伊豆国小浦			
324	文久元 (1861)		豊後国岡領三佐村カ		久志間切川田村車泊			
325	文久2 (1862)		日本					
326	文久3 (1863)		越前国三国	順喜丸				イギリス船が救助
327		文久3 (1863)	日本		ロシアの属島			ロシアの属島ー長崎
328	文久3 (1863)					広島藩士・鹿児島浪士		アメリカ船が救助
329	文久3 (1863)		日本		ベーカス島		4カ	
330	文久3 (1863)							
331	元治元 (1864)		常州那珂湊	小池屋四郎八船	種子島能野浦	源七	7	
332	元治元 (1864)	慶応元 (1865)		幕府の第一長崎丸	八丈島	本木昌造		
333	慶応元 (1865)	慶応元 (1865)	越中国射水郡六渡寺	平寿丸 (平次郎船)	北洋の島	清八・与吉・次三郎・北次郎・与三三郎	5	北洋の島ーウラジオストークー長崎
334	慶応元 (1865)		宍岐国平戸	灘吉丸	朝鮮国全羅道濟州無注浦			
335	慶応2 (1866)	慶応3 (1867)	松前志摩守領分大松前カ [大松浦カ]		ロシア領沿海州	栄吉・竹松・竹蔵	4カ	ロシア領沿海州ーウラジオストークー長崎
336	慶応2 (1866)		八丈島		清国の東砂という無人島			清国の東砂という無人島ー清国船が救助ー香港
337	慶応2 (1866)		紀伊国牟婁郡有田村		鳥島			
338	慶応3 (1867)		八丈島カ		香港	八丈島用船預長戸路収蔵	34カ	
339	慶応3 (1867)		対馬藩					
340	慶応4 (1868)		日本					
341	明治元 (1868)		鍋島藩支藩の小城藩	大木丸	台湾			

第3編

漂流記目録

竹原万雄



凡 例

第 1 部 漂流記目録

川合彦充『日本人漂流記』(社会思想社、1967年、以下「川合本」)、加藤貴校訂『漂流奇談集成』(国書刊行会、1990年、以下「加藤本」)から把握された慶長16(1611)年から明治元(1868)年までの漂流事件341件を年代順に並べ、漂流事件ごとに事件の内容を示す項目及び出典を示した。

○漂流事件情報

*341件の漂流事件について、「川合本」、「加藤本」に加え、服部純一編『日本人漂流記文献目録』(同志社大学図書館、1984年、以下「同志社」)、『補訂版 国書総目録 第八巻』(岩波書店、1990年)中の「補遺」(以下「国書補遺」)、国文学研究資料館編『古典籍総合目録 一 国書総目録続編 第一・二巻』(岩波書店、1990年、以下「古典」)、「北海道大学北方資料データベース」(<https://www2.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/>、以下「北方」)、「東京海洋大学附属図書館 デジタル・アーカイブ」(https://lib.s.kaiyodai.ac.jp/digital_archive/、以下「海洋」)、「早稲田大学図書館 WEB 展覧会」(<https://www.wul.waseda.ac.jp/TENJI/virtual/index.html>、以下「早稲田」)等の情報をもとに、以下の項目を設定した。

【漂流年】(船が出港、漂流、破船、漂着等をした年代)、【帰国年】、【船籍地】(「カ」とあるのは主に乗組員の出身地)、【船名】、【漂流地点】(船が漂流、遭難等をした場所)、【漂着地】、【出港地】、【乗組員】、【乗組員数】、【帰国ルート】(漂流地や漂着地からの動向。帰国していない漂流船もわかる範囲で動向を示した)、【関係船】(漂流地から日本あるいは故郷につくまでに関係した漂流船や出会った場所)、【備考】(「川合本」「加藤本」をもとに、上記の項目以外で作成者(竹原)が必要と考えた情報)、【出典】(下記、「漂流事件の出典情報」参照)。

- *各項目の情報は各書のうち情報量が多いものを優先し、その他は「川合本」を主とした。
- *各書により情報が異なる場合は「[]」で異なる情報を示した。
- *各情報のうち、あいまいなものには「カ」を付した。
- *各漂流事件について各書に情報がない項目は削除した。

○漂流事件の出典情報

- *「川合本」「加藤本」のほか、「同志社」「国書補遺」「古典」「北方」「海洋」「早稲田」等に収載された漂流記等のうち、各漂流事件の情報があるものを「【出典】」として以下のように示した。但し、「同志社」「国書補遺」「古典」「北方」に関しては目録内容のみからの判断であるため、根拠に乏しいものは書名の後ろに「カ」を付した。
- *「川合本」を参照したものには「《川合》」と付した。
- *「加藤本」を参照したものには「《加藤》」と付し、さらに「加藤本」にある参考資料の情報を掲載した。
- *「同志社」を参照したものには「《同志社》」と付し、さらに「同志社」にある「書名」「冊数」「別称」「成立年代」「編著者」「写本」「版本」「活字翻刻」「謄写翻刻」「複製本」「備考」の情報を掲載した。「別称」は「別」、「成立年代」は「成」、「編著者」は「著」、「写本」は「【写本】」、「版本」は「【版本】」、「活字翻刻」は「【活字】」、「謄写翻刻」は「【謄写】」、「複製本」は「【複製】」、「備考」は「※」と略記したうえで掲載した。また、「写本」及び「版本」の所蔵機関を「所」を付した後に列記した。なお、備考には、一部作成者(竹原)のコメントも記した。
- *「国書補遺」を参照したものには「《国書補遺》」、「古典」は「《古典》」、「北方」は「《北方》」、「海洋」は「《海洋》」、「早稲田」は「《早稲田》」と付し、「同志社」と同様に情報を掲載した。なお、ホームページを参考にした「北方」「海洋」「早稲田」の記載情報はホームページ上の書誌情報を参照した。
- *上記以外の文献から発見した漂流記等については「《その他》」と付し、「同志社」と同様に情報を掲載した。
- *「加藤本」「同志社」「国書補遺」「古典」の情報は、基本的に各書に掲載されている書式のまま載せたため、

書式等の詳細に関しては各書の凡例等を参照していただきたい。

*「写本」や「版本」の所蔵機関については『国書総目録』及び「国書補遺」、「古典」にある「図書館・文庫一覧」を参考にして略称ではなく図書館・文庫名をそのまま記した。そのため、当時から図書館・文庫名が変更された場合は、現在の所蔵機関名とは異なるものもある。「同志社」と「国書補遺」に関しては図書館・文庫名が異なるものもあるが、「同志社」を基本として「国書補遺」を参考として用いた。検索の際は双方に注意されたい。略称とおもわれるが「図書館・文庫一覧」にはない所蔵機関については「{ }」を付した。なお、「彰考館」に関しては、略称は「彰考」「旧彰考」の二通りであるが、「図書館・文庫一覧」の図書館・文庫名ではどちらも「彰考館文庫」となっている。この二つを区別するために前者を「彰考館文庫」、後者を「{旧} 彰考館文庫」とした。

*情報の重複、追加について

情報（とくに書名）の重複はなるべく避け、「加藤本」「同志社」「国書補遺」「古典」「北方」「海洋」「早稲田」の順に情報を優先した。但し、一部に「国書補遺」・「古典」を優先した場合もある。情報を追加する場合（例えば、「同志社」に掲載されていない漂流記の所蔵機関の情報が「国書補遺」に掲載されている場合）、「追加《国書補遺》」等と付した上でその情報を「〔 〕」で囲んだ。なお、書名の頭に「○」を付したものは、「加藤本」にある同名書も参照されたい。

第2部 未分類漂流記

「同志社」「国書補遺」「古典」「北方」「海洋」のうち、「川合本」「加藤本」から把握された漂流事件341件の中に分類できなかった、あるいは情報が少ないため分類することが困難であった漂流記を収録した。分類できなかった漂流記のうち、同様の漂流事件だとおもわれるものをまとめたものもある。順番は「同志社」「国書補遺」「古典」「北方」「海洋」の順で、それぞれ書名の「あいうえお順」で並べた。記載方法は、「第1部 漂流記目録」と同様である。

第3部 漂流記集

「同志社」「国書補遺」「古典」「北方」「海洋」「早稲田」等のうち、ひとつの漂流記等に複数の漂流事件を含むものを103件にまとめた。同様の内容とおもわれるものをまとめたものもある。順番は「同志社」「国書補遺」「古典」「北方」「海洋」「早稲田」の順で、それぞれ書名の「あいうえお順」で並べた。記載方法は、基本的には「第1部 漂流記目録」と同様である。

*書名や備考の情報から第1部・第2部・第3部に検索をかけた。その結果、第1部・第2部・第3部のいずれかの漂流事件・漂流記の内容を含むとおもわれるものに「《 》」を付し、第1部のものは「《第1部○○》」、第2部は「《第2部○○》」、第3部は「《第3部○○》」、不明なものは「《?》」と付した。なお、根拠に乏しいものは○○の後ろに「カ」を付した。

*【関連事項】では、複数と判断した根拠等を説明した。

*複数となる根拠に乏しいものには書名の後ろに「カ」を付した。

第 1 部 漂流記目録

No. 1

【漂流年】慶長 16 (1611) 年 【帰国年】慶長 17 (1612) 年 【船籍地】薩摩 【漂着地】マカオ 【帰国ルート】マカオー肥前国五島

【出典】《川合》。

No. 2

【漂流年】慶長 17 (1612) 年 【船籍地】日本 【漂着地】清国台州

【出典】《加藤》「台州漂客記事」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)。

No. 3

【帰国年】慶長 18 (1613) 年 【船籍地】日本 【漂着地】ジャワのバンタムカ 【帰国ルート】ジャワのバンタムー平戸 【備考】慶長 18 年にイギリス商船クローヴ号が平戸に入港。この船がジャワのバンタムを出港するときに乗り組んでいた一人の日本人は、漂流者かもしれない

【出典】《川合》。

No. 4

【漂流年】元和 2 (1616) 年 【船籍地】讃岐国高松浦 【船名】喜兵衛船 【漂流地点】熊野灘 【漂着地】青ヶ島 【乗組員】喜兵衛 【乗組員数】3 【帰国ルート】青ヶ島ー八丈島ー伊豆国下田ー故郷 【関係船】青ヶ島にはすでに漂流者がいた。八丈島で関ヶ原の戦いで負けて流されていた宇喜田秀家に会う

【出典】《川合》。《加藤》「元和漂流記」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)。

No. 5

【帰国年】元和 4 (1618) 年 【船籍地】出雲国三尾関カ 【漂着地】朝鮮カ 【乗組員数】7カ 【備考】朝鮮から送還

【出典】《川合》。

No. 6

【漂流年】元和 4 (1618) 年 【船籍地】隠岐国竹島カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】7カ 【帰国ルート】朝鮮ー対馬藩

【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(一三五、韓録)。

No. 7

【漂流年】寛永 2 (1625) 年 【帰国年】寛永 3 (1626) 年 【船籍地】讃岐国高松 【漂流地点】紀伊沖 【漂着地】南方の小島 【出港地】讃州高松 【乗組員】吉右衛門・松兵衛・六平 【乗組員数】3 【帰国ルート】南方の小島ー青ヶ島ー八丈島ー伊豆国下田ー江戸ー故郷

【出典】《川合》。《加藤》「讃州船島国脱航談」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「蛮人島漂流記」(仲原善忠訳『日本漂流奇談』)。

《同志社》「讃岐高松の百姓吉右衛門等漂流記」(1巻、【写本】海外異聞の内)。

《北方》「無名国江漂流譚」(【写本】)。

No. 8

【漂流年】寛永14(1637)年 【船籍地】伯耆国会見郡米子村 【船名】村川市兵衛の漁船 【漂流地点】隠岐国竹島 【漂着地】朝鮮国蔚山魴魚津 【乗組員】弥三右衛門・与七 【帰国ルート】朝鮮国蔚山魴魚津—対馬藩

【出典】《川合》。《加藤》林煌「通航一覧」(一三五、韓録、近藤某所蔵留書)。

No. 9

【漂流年】寛永17(1640)年 【船籍地】日本 【漂着地】清国台州 【乗組員数】13 【備考】台州の参将方矩に救助された

【出典】《川合》。

No. 10

【漂流年】寛永17(1640)年 【船籍地】琉球 【漂着地】土佐国佐賀浦

【出典】《川合》。

No. 11

【漂流年】寛永20(1643)年 【船籍地】越前国 【漂着地】見知らぬ島[無人島] 【出港地】越前 【帰国ルート】見知らぬ島[無人島]—帰還

【出典】《川合》。《加藤》林煌「通航一覧」(三二二、猷廟日記)。

No. 12

【漂流年】寛永21(1644)年 【帰国年】正保3(1646)年 【船籍地】越前国三国浦新保村 【船名】竹内藤右衛門船[藤左衛門持船]・同子藤蔵船[藤太持船]・国田兵右衛門船 【漂流地点】佐渡沖 【漂着地】日本海北岸の無人の地 【乗組員】竹内藤右衛門[藤左衛門]・竹内藤蔵・国田兵右衛門[岡田兵右衛門] 【乗組員数】58カ 【帰国ルート】日本海北岸の無人の地—ポシエツ湾—奉天—北京—京城—東萊府—対馬—嚴原—大坂—越前

【出典】《川合》。《加藤》渥美正美編「となりのはなし」(異国物語)/天野信景「塩尻」(一六、我国商船韃靼へ漂着せし事)/木村理右衛門「朝鮮物語」(園田一亀『韃靼漂流記の研究』、京都大学文学部国語国文学研究室編『朝鮮物語』)/林煌「通航一覧」(一三五、朝鮮通交大紀、韓録)/林煌「通航一覧」(二二九、甲子夜話、市中雑談)/林煌「通航一覧」(二三五、寛永小説、韃靼物語、漂流雑記、続白石叢書)/「異国物語」(橋川時雄『異国物語 附異国物語校統記』、荒川秀俊編『異国漂流記集』)/「越前船漂流記」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五巻漂流)/「寛永漂流記」(山田清作編『寛永漂流記』)/「韃靼・大明・朝鮮順歴誌[三国順歴誌]」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)/「韃靼漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、園田一亀『韃靼漂流記研究』、園田一亀『韃靼漂流記の研究』、清水文雄校注『韃靼漂流記』)/「韃靼物語」(講史会編『講史資料 古老遺筆』)/「越前の人韃靼に漂流し明韓を経て故郷に帰る」(石井研堂訳『日本漂流譚』一)。

《同志社》「異国漂渡記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書4))/○「異国物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書5)、同志社大学(海表異聞30)、【活字】『異国物語』(三秀舎、昭和10年、(異国物語考訳、橋川時雄著を合刻))/「越前国三国浦新保村竹内藤右衛門同子藤蔵岡田兵右衛門韃靼大明朝鮮国へ渡し事」(【写本】所龍谷大学)/「越前国三国浦新保村竹内藤左衛門同子藤蔵等覚書」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書2))/「越前人漂流記」カ(1冊、成正保3年、【写本】所{旧}彰考館文庫(2部))/「越前漂流記」カ(1冊、成正保頃、【写本】所{旧}彰考館文庫)/「越前船漂流記」カ(1冊、【写本】所京都大学(武道撫萃録383)、名古屋市蓬左文庫)/「越前三国浦新保村之者流れ一件」カ(1冊、【写本】所礪川堂文庫)/「寛永韃靼漂流記」(1冊、【写本】所無窮会神習文庫)/「清朝沙汰 寛永二十年越前国新保村之者撻狙国江参帰朝仕言上書」(1冊、【写本】所尊経閣文庫)/「竹内藤右衛門異国物語」(1冊、【写本】

所龍谷大学)／○「韃靼漂流記」(1冊、別「韃靼物語」、著国田兵右衛門・宇野与三次郎等、成正保3年、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書2)、宮内庁書陵部(新井白石写)、「漂流記」(静幽堂叢書51)、京都大学(「越前国之者韃靼へ漂流ノ口上書」、享保2年写)、東京教育大学、早稲田大学、東北大学狩野文庫(「韃靼漂流譚」、宮城県図書館青柳文庫、刈谷市立図書館、東京都立日比谷図書館特別買上文庫諸家(2部)、〔追加《国書補遺》京都大学谷村文庫(「越前国漁夫筈狙へ漂流の口書」、定西法師琉球国物語と合)〕、〔追加《古典》茨城県立歴史館(「韃靼国漂流記」、文政6年写、1冊)、大洲市立図書館矢野玄道文庫(「韃靼漂泊記」、馬丹島漂流記と合〔「韃靼漂泊記馬丹流着記」1冊〕)〕)。

《古典》「越前船漂流記」カ(【写本】所茨城県立歴史館(1冊))／「韃靼大明物語」カ(【写本】所茨城県立歴史館(1冊))。

《その他》「異国物語」(1冊、著竹内藤右衛門、【複製】異国物語(昭和10年、異国物語校続記を付す)、※『補訂版 国書総目録』より)。

No. 13

【漂流年】承応2(1653)年 【船籍地】対馬カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】6カ 【備考】朝鮮から護送
【出典】《川合》。《加藤》林煌「通航一覽」(一三五、韓録)。

No. 14

【漂流年】明暦3(1657)年 【船籍地】日本 【漂着地】アメリカ大陸
【出典】《川合》。

No. 15

【漂流年】万治3(1660)年 【船籍地】日本 【漂着地】ルソン 【帰国ルート】ルソンーマニラ城域外の日本町サン・アントン 【備考】マニラ城域外の日本町サン・アントンに引き取られて、洗礼を受けてキリシタンになった
【出典】《川合》。

No. 16

【漂流年】寛文元(1661)[万治3(1660)]年 【船籍地】伊勢国松坂 【漂流地点】遠州灘 【漂着地】エトロフ島付近の小島 【乗組員】七兵衛[七郎兵衛] 【乗組員数】15カ
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)／宮崎成身「視聽草」(六集之五、玉滴隠見抄書(寛文元・十年漂流記))／「玉滴隠見」(卷第一五、紀州御領分勢州松坂ノ舟灘風放タル事 付名無島一覽次第事)／「勢州船北海漂着記」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)。

No. 17

【漂流年】寛文初年 【船籍地】長崎稻佐村カ 【漂着地】台湾
【出典】《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、日本人異国漂流雑記)／西川如見「長崎夜話草」(三、日本船異国漂流近代多事)。

No. 18

【漂流年】寛文初年 【船籍地】薩摩 【漂着地】広東雷州
【出典】《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、日本人異国漂流雑記)／西川如見「長崎夜話草」(三、日本船異国漂流近代多事)。

No. 19

【漂流年】寛文3(1663)年 【帰国年】寛文3(1663)年 【船籍地】肥前国五島 【漂着地】朝鮮国江原道蔚珍 【乗組員数】3カ 【帰国ルート】朝鮮国江原道蔚珍—対馬藩
【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽」(一三五、御日記、韓録)。

No. 20

【漂流年】寛文6(1666)年 【船籍地】伯耆国会見郡米子村 【船名】大谷九右衛門の漁船 【漂着地】朝鮮国慶尚道長鬢 【出港地】隠岐国竹島 【乗組員数】22カ 【帰国ルート】朝鮮国慶尚道長鬢—対馬藩
【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽」(一三五、韓録、異国出契)／「異国出契」(神宮司庁『古事類苑』外交部)。

No. 21

【漂流年】寛文6(1666)年 【船籍地】隠岐国カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】1カ 【帰国ルート】朝鮮—対馬藩
【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽」(一三五、韓録、異国出契)。

No. 22

【漂流年】寛文6(1666)年 【帰国年】寛文6(1666)年 【乗組員】ミゲル益田(天草生まれ)・ペドロ葛西(豊後伊美生まれ) 【乗組員数】2カ 【帰国ルート】オランダ船に救われる—長崎
【出典】《川合》。

No. 23

【漂流年】寛文7、8(1667、1668)年頃 【船籍地】摂津国大坂 【漂着地】南海 【出港地】伊豆国下田
【出典】《加藤》岡崎正友「土佐人漂流の古文献二、三」。

No. 24

【漂流年】寛文8(1668)年 【帰国年】寛文10(1670)年 【船籍地】尾張国知多郡大野村 【船名】権田孫左衛門船 【漂流地点】三河の大山沖 【漂着地】バタン島 【乗組員】次郎兵衛・孫左衛門 【乗組員数】15 【帰国ルート】バタン島—清国—長崎—生国
【出典】《川合》。《加藤》渥美正美「となりのはなし」(中天竺ハダン島エ難風に逢流され船の者口書)／熊野正紹「長崎港草」(七、日本人異国漂流雑記)／西川如見「長崎夜話草」(三、日本人異国漂流近代多事)／林燿「通航一覽」(二七一、巴旦漂流記、漂流雑記、柳營日次記、長崎覚書、長崎志、長崎事始細見録、長崎集)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、尾張国の者異国より帰朝の事)／「尾張国知多郡大野村孫左衛門船漂流帰国之事」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「中天竺之内馬丹嶋江漂流ノ舟水主共口書」(服部聖多朗『尾張漂流譚』)／「中天竺之内バタン国ニ被吹流人々三年目ニ致帰国口書写」(荒川秀俊編『日本漂流・漂着史料』)／「馬丹島漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、清水文雄校注『韃靼漂流記』)／「馬丹島漂流物語」(柴秀夫編『南海漂流譚』)／「尾州大野村船漂流一件」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』)／「尾張の人馬丹島に漂流し土人を欺きて故郷に帰る」(石井研堂訳『日本漂流譚』一)／「尾張船頭比津資漂流物語」(西村真次訳『史的素描』第三伝記篇)。

《同志社》「享保十三戌申年中天竺之内馬丹嶋江流れ候水主口書」カ(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書4))／「バタン国物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館、※ばたん物語・中天竺之内バタン国エ被吹流人々三年目ニ致帰国口書写 →馬丹島漂流記)／「馬丹国物語」カ(1冊、著六蔵・伝右衛門等、【写本】所宮内庁書陵部)／○「馬丹島漂流記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(「享保十三戌申年中天竺之内馬丹嶋江流れ候水主口書」、漂流叢書4)(「中天竺馬丹物語」、寛政11年写、漂流記叢書7)(「中天竺之内馬丹

嶋江漂流ノ舟水主共口書」、安政5年写、漂流記叢書6)、国会図書館支部内閣文庫(「中天竺馬丹島之記」、寛政2・3年写、漂流雜記1)、京都大学(「巴旦国物語」)(増訂海外異聞の内)、東北大学狩野文庫(「馬丹島漂流」、佐渡事略を付す)(「中天竺馬丹島漂流之記」、文政13年写)、日本大学(「中天竺馬丹島漂流記」、礪川堂文庫(「中天竺波丹物語」)、[旧]彰考館文庫(「中天竺馬丹島江漂流記」)、〔追加《古典》大洲市立図書館矢野玄道文庫(韃靼漂流記と合〔「韃靼漂泊記 馬丹流着記」1冊〕)、三康文化研究所附属三康図書館椎尾文庫(「中天竺波丹島物語」、天保3年竹素園写、1冊))、【活字】柴秀夫編『南海漂流譚』(双林社、昭和18年)／○「尾州大野村船漂流一件」(1冊、【写本】所池田皓)。
《古典》「中天竺馬丹島之記」カ(【写本】所玉川大学(乾坤、文化6年荒川一声写、1冊))／「尾州大野難船記」(別「天竺波丹物語」、【版本】所元治元版一市立弘前図書館(志州鳥羽難船記他と合〔「難船集記」1冊〕))。
《海洋》「尾張者異國漂流物語」(1冊、【写本】)。

No. 25

【漂流年】寛文9(1669)年 【帰国年】寛文10(1670)年 【船籍地】阿波国海部郡浅川浦 【船名】勘右衛門船 【漂流地点】志摩国安乗沖〔遠州灘〕 【漂着地】小笠原諸島の母島 【乗組員】勘右衛門・長左衛門 【乗組員数】7 【帰国ルート】小笠原諸島の母島一八丈島一伊豆国洲崎一故郷
【出典】《川合》。《加藤》宮崎成身「視聽草」(六集之五、玉滴隠見抄書(寛文元・十年漂流記))／「玉滴隠見」(巻第二一、紀州藤代之廻船難風逢人無嶋へ吹被着 附不思獵之事)／「阿州船無人島漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「阿紀の人無人島に漂着一板に縁りて故郷に帰る」(石井研堂訳『日本漂流譚』一)。
《同志社》「無人島漂流記」カ(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(未六月無人島ヨリ帰国之もの三人申口・辰巳無人島訴状並口上留書を付す))。

No. 26

【漂流年】寛文11(1671)年 【船籍地】琉球カ 【漂着地】尾州知多郡西ノ口 【乗組員数】27カ
【出典】《川合》。

No. 27

【漂流年】寛文11(1671)年 【船籍地】播磨国飾磨津カ 【漂着地】朝鮮国巨濟島 【乗組員数】3カ 【帰国ルート】朝鮮国巨濟島一対馬藩
【出典】《川合》。《加藤》林煌「通航一覽」(一三五、韓録)。

No. 28

【漂流年】寛文12(1672)年 【船籍地】讃岐国塩飽カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】14カ 【帰国ルート】朝鮮一対馬藩
【出典】《川合》。《加藤》林煌「通航一覽」(一三五、韓録)。

No. 29

【漂流年】寛文12(1672)年 【帰国年】延宝元(1673)年 【船籍地】伊勢国松坂 【船名】七郎兵衛船 【漂流地点】遠州灘 【漂着地】エトロフ島 【乗組員】七郎兵衛 【乗組員数】15 【帰国ルート】エトロフ島一クナシリ島一十勝一松前一江戸
【出典】《川合》。
《同志社》「伊勢松坂七郎兵衛等蝦夷漂流一件」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(漂流雜記3、正徳元年肥前国商船広東漂流一件と合))。

No. 30

【漂流年】延宝元（1673）年 【船籍地】陸奥国相馬カ 【漂着地】台湾 【帰国ルート】台湾－長崎
【出典】《川合》。《加藤》林煌「通航一覽」（二一五、華夷変態）。

No. 31

【漂流年】延宝4（1676）年 【船籍地】豊前国小倉カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】2カ 【帰国ルート】
朝鮮－対馬藩－生国
【出典】《川合》。《加藤》林煌「通航一覽」（一三五、韓録）。

No. 32

【漂流年】延宝4（1676）年 【船籍地】越前 【漂着地】朝鮮
【出典】《川合》。

No. 33

【漂流年】延宝8（1680）年 【船籍地】土佐国室津浦 【漂流地点】室戸崎沖 【漂着地】鳥島
【出典】《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 34

【漂流年】延宝8（1680）年 【船籍地】土佐国上加江浦 【漂流地点】宇佐の龍沖 【漂着地】鳥島
【出典】《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 35

【漂流年】天和元（1681）年 【船籍地】紀伊領 【漂着地】蝦夷地
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」（他国漂人部卷之三二）。

No. 36

【漂流年】天和2（1682）年 【船籍地】仙台カ 【漂着地】蝦夷地 【備考】仙台藩城米を積んだ船
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」（他国漂人部卷之三二）。

No. 37

【漂流年】貞享元（1684）年 【船籍地】仙台カ 【漂着地】蝦夷地 【備考】仙台米を積んだ船
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」（他国漂人部卷之三二）。

No. 38

【漂流年】貞享元（1684）年 【船籍地】土佐国田野浦 【漂流地点】安芸沖 【漂着地】鳥島
【出典】《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 39

【漂流年】貞享元（1684）年 【船籍地】土佐藩 【漂流地点】遠州灘 【漂着地】八丈島 【出港地】江戸
【出典】《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 40

【漂流年】貞享元（1684）年 【帰国年】貞享2（1685）年 【船籍地】伊勢国度会郡神社村 【船名】太兵衛船
【漂流地点】三州大山沖 【漂着地】マカオ近くの小島 【乗組員】太兵衛 【乗組員数】12 【帰国ルー

ト】マカオ近くの小島—マカオ—長崎

【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、黒船送伊勢国民)／近藤守重「亜媽紀略藁」上／西川如見「長崎夜話草」(二、亜媽港より日本人送来船之事)／林燿「通航一覽」(一八四、長崎虫眼鏡、法令雜録、憲教類典、長崎集)／堀内信編「南紀徳川史」七／松浦東溪「長崎古今集覽」(一〇、阿媽港より伊勢国之者送来事・亜媽港より日本人送来船之事)／宮崎成身「教令類纂」初集一〇一／「長崎実録」(四、阿媽港より伊勢之者送来事(大蔵省編『日本財政經濟史料』卷之七))。

No. 41

【漂流年】貞享2(1685)年 【船籍地】秋田藩 【漂着地】松前

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 42

【漂流年】貞享2(1685)年 【船籍地】津軽藩 【漂流地点】南部佐井 【漂着地】蝦夷地福島村

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 43

【漂流年】貞享3(1686)年 【船籍地】南部八戸 【備考】蝦夷地大森で破船

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 44

【漂流年】貞享4(1687)年 【船籍地】相馬 【漂着地】蝦夷地イツ

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 45

【漂流年】貞享4(1687)年 【船籍地】仙台藩 【備考】蝦夷地ヒウラにて難風に逢い乗り捨てられる

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 46

【漂流年】貞享4(1687)年 【船名】本庄市兵衛船 【備考】蝦夷地大島で破船

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 47

【漂流年】貞享4(1687)年 【船籍地】津軽 【備考】蝦夷地吉岡村で破船

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 48

【漂流年】貞享4(1687)年 【船籍地】越後 【備考】蝦夷地泊り川で破船

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 49

【漂流年】元禄元(1688)年 【帰国年】元禄元(1688)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】広東省 【乗組員数】10カ 【帰国ルート】広東省—長崎 【備考】八十八番広東船で帰還

【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、日本人異国漂流雜記)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、広東船ヨリ薩摩之者送来事)／林燿「通航一覽」(二一九、華夷変態、長崎覚書、長崎志)／松

浦東溪「長崎古今集覧」(一二、薩摩の者を広東船より送来事・広東船より薩人送来事)。

No. 50

【漂流年】元禄元(1688)年 【船籍地】越前国坂井郡神保浦カ 【漂着地】朝鮮国巨濟島知世浦 【乗組員数】28カ 【帰国ルート】朝鮮国巨濟島知世浦-日本
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(一三五、韓録)。

No. 51

【漂流年】元禄3(1690)年 【帰国年】元禄5(1692)年 【船籍地】薩摩国山川カ 【漂着地】清国広東省高州[雷州] 【出港地】江戸 【乗組員】庄兵衛・惣右衛門・吉右衛門・五郎右衛門・庄三郎・市右衛門・慶兵衛・長兵衛・十三郎・仁左衛門・万右衛門 【乗組員数】12 【帰国ルート】清国広東省高州[雷州]-福州-普陀山-長崎 【備考】拾番高州船として長崎に入港
【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、日本人異国漂流雜記)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、高州船ヨリ薩摩之者送来事)／林糧「通航一覽」(二二〇、華夷変態、長崎覚書、長崎志)／松浦東溪「長崎古今集覧」(一二、薩摩の者広東へ漂着送来事・高州船より薩人を送来事)。

No. 52

【漂流年】元禄3(1690)年 【船籍地】仙台領 【漂着地】蝦夷地 【出港地】水戸付近の平方
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 53

【漂流年】元禄4(1691)年 【船籍地】土佐国種崎浦 【漂着地】津呂浦 【備考】西窪津浦沖で破船
【出典】《加藤》岡崎正友「土佐人漂流の古文献二、三」。

No. 54

【漂流年】元禄4(1691)年 【帰国年】元禄5(1692)年 【船籍地】種子島竹崎浦カ 【漂着地】琉球の久高島 【帰国ルート】琉球の久高島-那覇-鹿児島
【出典】《川合》。

No. 55

【漂流年】元禄5(1692)年 【船籍地】土佐国安芸郡奈半利浦 【船名】次兵衛船 【漂流地点】紀州三木島前三里沖 【漂着地】八丈島 【乗組員数】3 【帰国ルート】八丈島-豆州下田 【関係船】八丈島には名古屋の吉左衛門船の漂流者がおり、飯米を分け与え、割道具で小船を造り、豆州下田に着き、帰還した
【出典】《川合》。《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 56

【漂流年】元禄5(1692)年 【船籍地】伊勢国若松 【漂着地】蝦夷地白老の内シマタへ 【出港地】深浦
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 57

【漂流年】元禄5(1692)年 【船籍地】備前国岡山 【漂着地】朝鮮国多太浦 【乗組員数】16 【帰国ルート】朝鮮国多太浦-対馬藩
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(一三五、韓録)。

No. 58

【漂流年】元禄5(1692)年 【帰国年】元禄6(1693)年 【船籍地】讃岐国塩飽牛島 【船名】市左衛門船 [源左衛門船] 【漂流地点】遠州灘 【漂着地】清国補陀山の近く 【出港地】江戸 【乗組員】谷本源左衛門・徳左衛門 【乗組員数】14 【帰国ルート】清国補陀山の近くー長崎 【備考】清国船、七十六番船・七十九番船で帰還

【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、日本人異国漂流雑記)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、普陀山船ヨリ讃岐ノ者送来事)／林燿「通航一覽」(二二五、華夷変態、源左衛門唐土漂流記、長崎覚書、長崎事始細見録、漂流紀聞)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、普陀山漂着の讃岐の者の事・普陀山より讃岐人送来事)／吳国漂着人之事(真木信夫「塩飽水主の漂流奇談」)。

《同志社》「支那漂流記」(2冊、【写本】所同志社大学(海表異聞39-40))／「源左衛門唐土漂流記」(1冊、別「異国江漂着仕候船頭水主口上・漂氓雑話」、成元禄5年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)。

No. 59

【漂流年】元禄5(1692)年 【帰国年】元禄7(1694)年 【船籍地】長門カ 【漂着地】清国広東省陽江県 【乗組員数】12カ 【帰国ルート】清国広東省陽江県ー寧波ー補陀山ー長崎

【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、日本人異国漂流雑記)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、宋居勝船ヨリ長門ノ者送来事)／林燿「通航一覽」(二二〇、華夷変態、長崎覚書、長崎志)／松浦東溪「長崎古今集覽」一二、宋居勝船より長州の者送来事・宋居勝船より長門の者送来事)。

No. 60

【漂流年】元禄6(1693)年 【船籍地】仙台領石巻 【漂流地点】房州九十九里沖 【漂着地】蝦夷地シイコタン

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 61

【漂流年】元禄6(1693)年 【船籍地】日本 【漂着地】ルソン 【帰国ルート】ルソンーマニラ城域外にある日本町ディラオ 【備考】マニラ城域外にある日本町ディラオのフランシスコ会に引き取られて、扶助料を給与され、洗礼を受けてキリシタンに

【出典】《川合》。

No. 62

【漂流年】元禄6(1693)年 【船籍地】撰津国 【漂着地】蝦夷地

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 63

【漂流年】元禄8(1695)年 【船籍地】大坂 【船名】淡路屋又兵衛船 【漂着地】カムチャッカ半島南部 【乗組員】伝兵衛 【乗組員数】15 【帰国ルート】カムチャッカ半島南部ーオパラ川河口ーロシア人が救助ーヤクーツクーモスクワ 【備考】モスクワへ送られ、ピョートル大帝に引見され、日本語研究学校の教師に任命され、帰化して洗礼を受けガブリエルと名乗った。三右衛門(No.76)が送られて来て日本語研究学校で伝兵衛の助手となった

【出典】《川合》。《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 64

【漂流年】元禄9(1696)年 【帰国年】元禄10(1697)年 【船籍地】日向国志布志浦 【船名】弥三右衛

門船[弥左衛門持船] 【漂流地点】薩摩国山川港沖 【漂着地】鳥島 【出港地】江戸 【乗組員】少左衛門 【乗組員数】5 【帰国ルート】鳥島-遠州川尻-志布志浦
【出典】《川合》。《加藤》曾槃「日州船漂落記事」（石井研堂編『校訂漂流奇談全集』）。

No. 65

【漂流年】元禄10（1697）年カ 【漂着地】蝦夷地アツケシ 【備考】元禄10年頃、蝦夷地アツケシに漂着船あり
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」（他国漂人部卷之三二）。

No. 66

【漂流年】元禄15（1702）年 【帰国年】元禄15（1702）年 【船籍地】種子島 【船名】榎本重八船 【漂流地点】日州内之浦沖 【漂着地】青ヶ島 【乗組員】榎本重八 【乗組員数】8 【帰国ルート】青ヶ島-八丈島-豆州下田-江戸-鹿児島藩邸-種子島
【出典】《川合》。

No. 67

【漂流年】元禄15（1702）年 【船籍地】大坂 【漂着地】蝦夷地 【出港地】能代
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」（他国漂人部卷之三二）。

No. 68

【漂流年】宝永元（1704）年 【帰国年】宝永2（1705）年 【船籍地】泉州湊浦 【船名】喜左衛門船 【漂流地点】熊野大島沖 【漂着地】青ヶ島 【出港地】江戸 【乗組員】源次郎 【乗組員数】11 【帰国ルート】青ヶ島-八丈島郷浦-小島-豆州下田
【出典】《川合》。

No. 69

【漂流年】宝永2（1705）年 【船籍地】酒田漁師町 【漂着地】蝦夷地ヲコシリ島 【出港地】南部川内
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」（他国漂人部卷之三二）。

No. 70

【漂流年】宝永2（1705）年 【船籍地】琉球 【漂着地】土佐国幡多郡清水浦 【出港地】清国福州 【乗組員数】82
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」（二四、大島筆記）／松野尾章行「皆山集」（一一五）／関田駒吉「土佐漂着船に関する文献」。

No. 71

【漂流年】宝永2（1705）年 【帰国年】宝永4（1707）年 【船籍地】陸奥国柵倉太田熊次郎領 【船名】三之丞船 【漂流地点】奥州相馬沖 【漂着地】清国瓊州府 【乗組員】三之丞・権七 【乗組員数】6 【帰国ルート】清国瓊州府-長崎
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」（二二一、華夷変態、中村氏筆記抄）。

No. 72

【漂流年】宝永3（1706）年 【船籍地】日本 【漂着地】ルソン 【乗組員数】14カ 【帰国ルート】ルソン-マニラ城域外にある日本町ディラオ 【備考】マニラ城域外にある日本町ディラオのフランシスコ会に

引取られて、扶助料を給与された。洗礼を受けてキリシタンになったと思われる

【出典】《川合》。

No. 73

【漂流年】宝永4(1707)年 【船籍地】土州安芸郡田野浦 【船名】六平船 【漂流地点】阿房国由岐沖 【漂着地】八丈島 【出港地】安田浦 【乗組員数】8 【備考】八丈島へ乗掛け元船を捨ててはしけで上陸した

【出典】《川合》。《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 74

【漂流年】宝永4(1707)年 【船籍地】筑前国博多西町浜カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員】善四郎 【帰国ルート】朝鮮-長崎

【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」(三一六四(森永種夫『犯科帳』一))。

No. 75

【漂流年】宝永5(1708)年 【帰国年】宝永7(1710)年 【船籍地】陸奥国荒浜カ 【漂着地】ルソン 【帰国ルート】ルソン-清国乍浦-長崎

【出典】《川合》。

No. 76

【漂流年】宝永7(1710)年 【船籍地】日本 【漂着地】東部カムチャッカのカリギル湾 【乗組員】三右衛門 【乗組員数】8カ 【帰国ルート】東部カムチャッカのカリギル湾-ヤクーツク-ペテルブルグ 【備考】ペテルブルグに送られて日本語研究学校で伝兵衛(No.63)の助手になった

【出典】《川合》。

No. 77

【漂流年】正徳元(1711)年 【帰国年】正徳3(1713)年 【船籍地】筑後国久留米藩 【船名】筑後国久留米藩主有馬玄蕃頭則維の船 【漂着地】ルソン 【乗組員】岡野三左衛門・長助・長太夫・源之丞 【乗組員数】6 【帰国ルート】ルソン-マニラ城域外の日本町ディラオー-広東省電白県-長崎 【備考】四番広東船として帰還

【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、日本人漂流雑記)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、広東船ヨリ筑後之者送来事)／西川如見「長崎夜話草」(三、日本船異国漂流近代多事)／林糧「通航一覽」(二二一、長崎志、広東漂流記)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、広東船ヨリ筑後之者送来事)／「広東へ漂流覚書」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)。

《同志社》「広東」カ(著岡部三左衛門、※日本漂流書目による)／「広東漂流記」カ(1冊、成正徳3年、著吉田左太夫、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫(大正15年写)、宮城県図書館)／○「広東へ漂流覚書」(1冊、【写本】所国立国会図書館(春雨楼叢書の内)、東北大学狩野文庫)。

《国書補遺》「広東漂流記」カ(【写本】所東京教育大学(「正徳元年広東漂流記」))。

No. 78

【漂流年】正徳元(1711)年 【帰国年】正徳2(1712)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】朝鮮 【帰国ルート】朝鮮-対馬藩-長崎

【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(一三五、長崎志)。

No. 79

【漂流年】正徳2(1712)年 【帰国年】正徳2(1712)年 【船籍地】肥前国唐津カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員】11カ 【帰国ルート】朝鮮-対馬藩-長崎
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(一三五、長崎志)。

No. 80

【漂流年】正徳2(1712)年 【船籍地】豆州カ 【船名】豆州代官小林又左衛門の米を積んだ官船 【漂着地】種子島増田村小塩屋 【乗組員】七左衛門 【乗組員数】7 【帰国ルート】種子島増田村小塩屋-日州志布志
【出典】《川合》。

No. 81

【漂流年】正徳2(1712)年 【船籍地】薩摩国浜之市村 【漂着地】東蝦夷地エトロフ島
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。
《同志社》「恵渡路部漂流記」カ(1冊、別「大隅国分之内浜之市船頭奥蝦夷るところふに漂着之記(原)・蝦夷藪話」、**成**正徳2年、【写本】所北海道大学、〔追加《北方》【写本】、【活字】『日本庶民生活史料集成4』(「エトロフ島漂流記」))。)
《北方》「蝦夷藪話 乾」(**成**正徳2年、**著**聊睡庵筆記、【写本】、※内題は「大隅国国分之内浜之市船奥蝦夷るところふ漂着之記」で、内容は「恵渡魯府漂流記」に同じ)。

No. 82

【漂流年】正徳2(1712)年 【帰国年】正徳3(1713)年 【船籍地】陸奥国相馬領柵塩 【船名】吉十郎船 【漂流地点】銚子沖 【漂着地】清国広東省 【乗組員】吉十郎・覚兵衛・三八・次郎助・助七 【乗組員数】8 【帰国ルート】清国広東省-長崎 【備考】十二番広東船で帰還
【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、日本人漂流雑記)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、広東船ヨリ奥州ノ者送来事)／林糧「通航一覽」(二一九、長崎志、月堂見聞集、蓋簪録、落穂雑談一言集)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、広東船より奥州之者送来)／本島知辰「月堂見聞集」七／「奥州亙理郡荒浜者広東漂流紀聞」(斎藤笹舟『遭難三隻』)／「番人打破船」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「漂人談話」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)。

No. 83

【漂流年】正徳3(1713)年 【帰国年】正徳4(1714)年 【船籍地】越前国三国カ 【漂着地】朝鮮 【出港地】三国 【帰国ルート】朝鮮-対馬藩-大坂-江戸-帰郷
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(一三五、格致累年録)。

No. 84

【漂流年】正徳3(1713)年 【船籍地】大坂 【船名】日野屋権右衛門船 【漂流地点】熊野灘 【漂着地】八丈島 【乗組員数】15
【出典】《川合》。

No. 85

【漂流年】正徳3(1713)年 【帰国年】正徳4(1714)年 【船籍地】尾州名古屋長者町 【船名】紙屋理兵衛船 【漂流地点】紀州里野浦沖 【漂着地】琉球 【乗組員】政之助 【乗組員数】9 【帰国ルート】琉球-大坂-尾張
【出典】《川合》。《加藤》天田信景「塩尻」(八四、琉球へ漂着せし人の事)。

No. 86

【漂流年】正徳3(1713)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】清国
【出典】《川合》。

No. 87

【漂流年】正徳3(1713)年 【漂着地】蝦夷地昆布の浜 【備考】蝦夷地昆布の浜へ漂着船あり
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 88

【漂流年】享保元(1716)年 【帰国年】享保2(1717)年 【船籍地】尾州名古屋船入町 【船名】柏屋市兵衛船 【漂流地点】豆州子浦沖 【漂着地】奥エゾ地トカチ 【出港地】江戸 【乗組員】吉十郎 【乗組員数】9 【帰国ルート】奥エゾ地トカチ-絵鞆-有珠-虻田-長万部-亀田-松前-江戸
【出典】《川合》。

No. 89

【漂流年】享保3(1718)年 【船籍地】南部および江戸霊巖島 【漂着地】蝦夷地クスリ
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 90

【漂流年】享保3(1718)年 【帰国年】享保4(1719)年 【船籍地】筑後カ 【漂着地】清国広東省 【帰国ルート】清国広東省-帰還
【出典】《川合》。

No. 91

【漂流年】享保4(1719)年 【帰国年】元文4(1739)年 【船籍地】遠江国新居 【船名】筒山五兵衛船 【漂流地点】九十九里浜沖 【漂着地】鳥島 【出港地】仙台 【乗組員】左太夫[佐太夫]・甚八・仁三郎・平三郎 【乗組員数】12 【帰国ルート】鳥島-八丈島-相州浦賀-江戸 【関係船】鳥島で江戸船(No.103)の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》岡村良通「寓意草」下/神沢杜口「翁草」(三七、無人島漂流船の事)/松浦静山「甲子夜話続篇」(九七、遠州新井村筒山某船無人嶋え漂着并大坂船同断之事)/「遠州船無人島漂流記」(柴秀夫編『南海漂流譚』)/「遠州船無人島物語」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、清水文雄校注『韃靼漂流記』、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流)/「元文世説雜録」(二二、未五月無人島え漂流之者一件之事)/「無人嶋漂流記」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)/「無人嶋ヨリ帰国之者御調書上留並八郎大明神由来書上共」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)/「遠州船南方無人島漂着物語」(吉岡永美訳『漂流船物語の研究』)/「遠人無人島に漂流し新漂船を得て帰国す」(石井研堂訳『日本漂流譚』二)/「無人島物語」(仲原善忠訳『日本漂流奇談』)。

《同志社》「遠州船漂落紀事」(【写本】所宮内庁書陵部(片玉集統集27、無人嶋談話の付))/「小笠原島記并漂流記」(1冊、【写本】所同志社大学(海表異聞48))/「元文四無人嶋ヨリ帰来セル遠州荒井之者尋問記」(1冊、【写本】所国会図書館(漂流叢書7))/「無人島帰国物語」(1冊、【写本】所北海道庁(天保14年写))/「無人島漂着記」(1冊、別「元文四年遠州荒井宿甚八等申上」、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)。

《古典》「遠州新居難船記」(別「無人島帰国物語」、【版本】所元治元版-市立弘前図書館(尾州大野難船記他と合[「難船集記」1冊])/「無人島漂流記」(別「無人島漂民記」、成享保4年、【写本】所鹿沼市立図書館大櫓文庫(弼憲写、藤原政行政文政9年写の転写、台湾漂流記と合[「たいあん國漂流記」]1冊))。

No. 92

【漂流年】享保 5 (1720) 年 【船籍地】大坂 【船名】大津屋利三郎船 【漂流地点】遠州灘 【漂着地】八丈島 【乗組員】14
【出典】《川合》。

No. 93

【漂流年】享保 8 (1723) 年 【船籍地】土佐藩 【船名】万歳丸他一艘 【漂流地点】伊豆沖 【漂着地】御蔵島 【出港地】江戸
【出典】《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 94

【漂流年】享保 8 (1723) 年 【帰国年】享保 8 (1723) 年 【船籍地】仙台カ 【漂着地】琉球 【出港地】奥州石巻 【帰国ルート】琉球-江戸深川 【備考】仙台藩の米を積んだ船
【出典】《川合》。

No. 95

【漂流年】享保 10 (1725) 年 【漂着地】対馬国内院浦 【乗組員】石橋七郎右衛門
【出典】《加藤》「犯科帳」(七-一〇 (森永種夫『犯科帳』一))。

No. 96

【漂流年】享保 11 (1726) 年 【帰国年】享保 11 (1726) 年 【船籍地】鹿児島藩カ 【漂流地点】甑島沖 【出港地】薩摩国坊津浦 【乗組員】源右衛門 【乗組員数】20 【帰国ルート】清国船が救助-長崎 【備考】鹿児島藩の大坂行き蔵米を積んだ船、丙午の拾四番船で長崎に送られる
【出典】《川合》。《加藤》松浦東溪「長崎古今集覧」(一二、薩摩之者送来)。

No. 97

【漂流年】享保 12 (1727) 年 【船籍地】大坂 【備考】シヤコタンの内レホトで破船
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 98

【漂流年】享保 13 (1728) 年 【船籍地】薩摩 【船名】若潮丸 【漂着地】カムチャッカ半島のロパトカ岬 【乗組員】宗蔵・権蔵 【乗組員数】17 【帰国ルート】カムチャッカ半島のロパトカ岬-ヤクーツク-ペテルブルグ 【備考】ペテルブルグでアンナ女帝に引見され、勅命により神父に預けられ、洗礼を受ける。権蔵は神学校に入学し、後に 2 人は日本語教授に当たった
【出典】《川合》。

No. 99

【漂流年】享保 16 (1731) 年 【船籍地】摂津国大坂 【漂着地】シコツ
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 100

【漂流年】享保 17 (1732) 年 【船籍地】琉球 【漂流地点】七島洋上 【漂着地】種子島中之村前浜 【乗組員】金城親方・米須親雲上 【乗組員数】27 カ
【出典】《川合》。

No. 101

【漂流年】享保 17 (1732) 年 【船籍地】伊豆国新島 【漂流地点】種子島西之村前ノ浜 【乗組員】定八郎
【乗組員数】5 【帰国ルート】種子島西之村前ノ浜-鹿児島藩
【出典】《川合》。

No. 102

【漂流年】元文元 (1736) 年 【帰国年】元文元 (1736) 年 【船籍地】能登国鳳至郡輪島 【船名】兵右衛
門船 【漂流地点】長門国津島沖 【漂着地】朝鮮国慶尚道長鬢 【乗組員】伝九郎 【乗組員数】14 【帰国ルー
ト】朝鮮国慶尚道長鬢-ウワンカイ-対馬藩-大坂
【出典】《川合》。

No. 103

【漂流年】元文 3 (1738) 年 【帰国年】元文 4 (1739) 年 【船籍地】江戸堀江町 【船名】宮本善八船 【漂
流地点】房州洲崎沖 【漂着地】無人島 【乗組員】富蔵・武兵衛・六助 【乗組員数】17 【帰国ルート】
無人島-鳥島-八丈島-江戸 【関係船】鳥島で遠州船 (No. 91) の漂流者と一緒になる
【出典】《川合》。《加藤》「遠州船無人島物語」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、池田皓編『日本庶民生活
史料集成』第五卷漂流) / 「無人島漂着物語」(南部叢書刊行会編『南部叢書』第一〇冊) / 「無人嶋漂流記」(荒
川秀俊編『異国漂流記集』) / 「無人嶋ヨリ帰国之者御調書上留並八郎大明神由来書上共」(荒川秀俊編『異国
漂流記集』) / 「無人島物語」(仲原善忠訳『日本漂流奇談』)。

No. 104

【漂流年】元文 4 (1739) 年 【船籍地】奥州石巻村 【漂着地】種子島増田村後浜 【乗組員】惣兵衛
【出典】《川合》。

No. 105

【漂流年】元文 4 (1739) 年 【帰国年】元文 5 (1740) 年 【船籍地】陸奥 【漂着地】エゾ地登加知 【出
港地】石巻 【乗組員】長三郎・清之丞・久助・奥卯松 【乗組員数】16 【帰国ルート】エゾ地登加知-仙
台藩 【備考】松前藩から仙台藩へ引渡された
【出典】《川合》。

No. 106

【漂流年】寛保元 (1741) 年 【帰国年】寛保 2 (1742) 年 【船籍地】薩摩国 【漂流地点】沖縄諸島の久
米島沖 【漂着地】清国の舟山列島 [清国漁山] 【出港地】八重山島 【乗組員】伝兵衛 【乗組員数】21 【帰
国ルート】清国の舟山列島 [清国漁山]-乍浦-長崎 【備考】四番船として長崎に入港
【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、漂流泊浜伝兵衛日録) / 田辺茂啓「長崎実録大成 (長崎
志)」(一二、乍浦船ヨリ薩摩ノ者送来事) / 林糧「通航一覽」(二二五、長崎志) / 松浦東溪「長崎古今集覽」
(一二、乍浦船ヨリ薩摩ノ者送来) / 「薩州船清国漂着談」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)。
《同志社》「漂流泊瀬伝兵衛日録」(【活字】西道仙・安中半三郎校『長崎叢書 第 5 編』(長崎古文書出版会、
明治 27 年))。

No. 107

【漂流年】寛保 2 (1742) 年 【船籍地】蝦夷地キイタツフ 【漂着地】南部
【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 108

【漂流年】寛保2(1742)年 【船籍地】薩摩国児ヶ水 【船名】紋右衛門の商船 【備考】種子島納官村長浜で破船
【出典】《川合》。

No. 109

【漂流年】寛保3(1743)年 【船籍地】奥州仙台領石巻村 【漂着地】種子島増田村 【乗組員】孫右衛門 【乗組員数】15 【帰国ルート】種子島増田村-薩摩国山川
【出典】《川合》。

No. 110

【漂流年】寛保3(1743)年 【帰国年】延享元(1744)年 【船籍地】尾張国知多郡多屋村 【船名】永通丸(与十郎船) 【漂流地点】紀州長島沖 【漂着地】青ヶ島 【出港地】紀州九鬼 【乗組員】与十郎 【乗組員数】5 【帰国ルート】青ヶ島-八丈島-江戸 【関係船】青ヶ島で豊後国三佐浦の漂流者と一緒になる
【出典】《川合》。

No. 111

【漂流年】延享元(1744)年 【帰国年】延享元(1744)年 【船籍地】松平遠江守領内摂州神戸浦 【漂流地点】種子島住吉村沖 【乗組員】九郎兵衛 【乗組員数】17 【帰国ルート】種子島住吉村沖で漂流中に救助-赤尾木ノ浦
【出典】《川合》。

No. 112

【漂流年】延享元(1744)年 【船籍地】陸奥国鹿角郡佐井村 【船名】多賀丸(竹内徳兵衛船) 【漂流地点】下北半島沖 【漂着地】千島列島オンネコタン島 【乗組員】竹内徳兵衛 【乗組員数】18 【帰国ルート】千島列島オンネコタン島-カムチャッカ半島のボルシェレック-ペテルブルグ 【備考】ペテルブルグでロシア語を学び、一部の者はイルクーツクに送られて日本語学校の教師になった
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(三一六、魯西亜紀聞、北海烏船記、蝦夷草紙、辺要分界図考、蝦夷の道知辺)／最上徳内「蝦夷草紙」(附録、勝右衛門漂流の事)／「蝦夷地一件」(松前并蝦夷地之儀に付及承候趣申上候書付写)／「竹内徳兵衛魯国漂流談」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)。
《同志社》「漂流之記」(1冊、【写本】所龍谷大学)。

No. 113

【漂流年】延享2(1745)年 【帰国年】延享2(1745)年 【船籍地】琉球 【漂着地】奥州仙台領 【乗組員】用物宰領役上運天親雲上・山城仁屋 【乗組員数】17カ 【帰国ルート】奥州仙台領-江戸 【備考】山城仁屋は17年後の宝暦12年も土州柏島に漂着
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(二四、続談海)。

No. 114

【漂流年】延享2(1745)年 【船籍地】紀伊国海士郡柳浦 【漂流地点】足摺岬沖 【漂着地】八丈島
【出典】《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。
《同志社》「八丈島記」カ (【写本】所高知県立図書館(延享3年谷写))。

No. 115

【漂流年】延享2(1745)年 【船籍地】筑後国三潞郡榎津 【漂流地点】種子島西之村 【乗組員】長六 【乗組員数】6 【帰国ルート】種子島西之村で破船―薩州山川
【出典】《川合》。

No. 116

【漂流年】延享2(1745)年 【帰国年】延享3(1746)年 【船籍地】泉州日根郡湊浦 【船名】吉兵衛船 【漂流地点】三州大山沖 【漂着地】八丈島三根浦 【乗組員】伝左衛門 【乗組員数】13 【帰国ルート】八丈島三根浦―帰還
【出典】《川合》。

No. 117

【漂流年】延享3(1746)年 【船籍地】種子島 【船名】種子島家の年頭船 【乗組員】七之丞・孫左衛門 【備考】佐多沖で楫を折り、大泊外之浦に泳ぎ着いて浦役人に告げ、小舟で大泊にひき入れた
【出典】《川合》。

No. 118

【漂流年】延享3(1746)年 【帰国年】延享3(1746)年 【船籍地】奥州仙台ヵ 【船名】松平陸奥守領分奥州仙台門脇の船 【漂着地】種子島野間村 【乗組員】平吉 【帰国ルート】種子島野間村―薩摩山川
【出典】《川合》。

No. 119

【漂流年】延享3(1746)年 【船籍地】屋久島楠川 【船名】平左衛門船 【乗組員数】4 【備考】種子島住吉浦で破船し、住吉浦に入港して碇泊中であつた
【出典】《川合》。

No. 120

【漂流年】延享3(1746)年 【船籍地】讃岐国大内郡三本松 【船名】歌津屋儀兵衛船 【漂流地点】三州伊良胡崎沖 【漂着地】八丈島中之郷小筒ヶ浦 【乗組員】平八・吉右衛門・嘉右衛門・伊八 【乗組員数】9 【備考】八丈島地役人らの世話を受け、延享4年に流人とともに八丈島を出帆
【出典】《川合》。

No. 121

【漂流年】延享4(1747)年 【船籍地】種子島小根占 【船名】周八の商船 【漂着地】国上村浦田 【出港地】那覇 【帰国ルート】国上村浦田―山川 【備考】羽州秋田能代の者が6人おり、速やかに帰国を望んだので、種子島家では6人を山川へ送った
【出典】《川合》。

No. 122

【漂流年】寛延3(1750)年 【帰国年】宝暦元(1751)年 【船籍地】陸奥国盛岡郡尾崎白浜村 【船名】神力丸(久保屋善之丞船) 【漂流地点】仙台[岩城]沖 【漂着地】清国福建省嶸嶼 【乗組員】又五郎・利兵衛・伝六 【乗組員数】8 【帰国ルート】清国福建省嶸嶼―福州―厦門―寧波―長崎
【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(七、奥州南部人漂流日録)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、寧波船ヨリ南部ノ者送來事)／林燿「通航一覽」(二一七・二一八、長崎志、外国通覽)／松浦

東溪「長崎古今集覽」(一二、寧波船より南部之者送来)／宮崎成身「視聽草」(六集之五、未十二番船より連參候日本人始末之一件(宝曆元年))／「神力丸漂流記」(南部叢書刊行會編『南部叢書』第一〇冊)／「南部人漂流記」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)／「福建廈門寧波難風渡唐歸朝記」(柴秀夫編『南海漂流譚』)。
《同志社》「廈門漂流記」カ(1冊、成寛延3年—宝曆元年、【写本】所東京大学史料編纂所)／「異国紀聞」(1冊、別「奥州盛岡領漂流人宝曆元年未十二月廿日長崎江戻着最初ニ差出候書付」、成宝曆2年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(1冊)(外国紀聞10)、早稲田大学(外国紀聞所収本写))／「奥州南部人漂流日録」カ(【活字】西道仙・安中半三郎校『長崎叢書 第5編』(長崎古文書出版會、明治27年))／○「神力丸漂流記」(1冊、成享和3年、【写本】所大橋図書館)／「唐国福建省江漂着仕候奥州南部之者六人口書」(1冊、別「漂着者口書」、成宝曆元年、【写本】所国立国会図書館(「唐国福建省へ致漂着候奥州南部之者六人口書」、漂流記叢書8)、国会図書館支部内閣文庫、{学書言志})／「南部人福建府漂流記」カ(1冊、【写本】所国立国会図書館、東京大学本居文庫)／「漂船秘録」(6巻、成宝曆元年、【写本】所桑名松平家)／「漂泊之者共相尋候口上覚」(1冊、【写本】所早稲田大学)／「漂流人請取始末」カ(1冊、成宝曆元年、【写本】所岩手県立図書館)／「漂流人請取人始末」(1冊、成宝曆2年、【写本】所岩手県立図書館)／「漂流人取調書」(1冊、【写本】所{京外大}(宝曆2年写))／「宝曆元辛未年福建漂流記」カ(1冊、【写本】所東京教育大学)。
《海洋》「漂海記」(1冊、【写本】)。

No. 123

【漂流年】宝曆2(1752)年 【帰国年】宝曆4(1754)年 【船籍地】陸奥国相馬 【船名】十三夜丸[一三夜叉丸](立谷平左衛門船) 【漂流地点】岩城[磐城]沖 【漂着地】台湾海峡の小島 【乗組員】嘉兵衛 【乗組員数】13 【帰国ルート】台湾海峡の小島—清国広東省惠州府陸豊県—長崎 【備考】十四番船・十八番船・二十番船に分乗して長崎に到着
【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(八、漂流雜記下)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、広東船ヨリ相馬ノ者送来事)／林糧「通航一覽」(二二二、長崎志)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、広東船より相馬之者送来)／「唐国広東省え漂流仕相馬者口書」(斎藤笹船『遭難三隻』)。
《同志社》「相馬十三夜丸広東漂流記」(1冊、成宝曆4年、【写本】所福島県立図書館(昭和写))。
《海洋》「十三夜丸臺灣漂流記：完」(1冊、【写本】)。

No. 124

【漂流年】宝曆2(1752)年 【帰国年】宝曆4(1754)年 【船籍地】陸奥国本吉郡気仙沼村 【船名】春日丸(大島屋加兵衛船)[大島屋幸兵衛船・大嶋屋嘉兵衛船] 【漂流地点】奥州仙台気仙沼 【漂着地】清国浙江省定海県舟山の内花山 【乗組員】伝兵衛・大島屋嘉兵衛 【乗組員数】13 【帰国ルート】清国浙江省定海県舟山の内花山—寧波—長崎—仙台 【備考】戌一番船として長崎に入港
【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(八、漂流雜記下)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、寧波船ヨリ仙台ノ者送来事)／林糧「通航一覽」(二二五、迷復記、長崎志)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、寧波船より仙台之者送来)／「奥州仙台本吉郡北方気仙沼本郷嘉兵衛船春日丸流着候次第船頭覚書」(千葉忠右衛門「気仙沼の春日丸漂流始末」)／「浙江漂流帰帆」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「宝曆漂流物語」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)。
《同志社》「奥州商船漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(佐野氏始末記と合)、京都府立図書館(同上))／「奥州人浙江漂着記」カ(1冊、【写本】所京都大学(海外異聞の内))／「支那漂流記」(4冊、同志社大学(海表異聞41-44))／「宝曆四年奥仙台之民唐土浙江省漂流之記」(別「宝曆四仙台領大島屋嘉兵衛等清浙江省寧波漂流記」、【写本】所東京教育大学(嶮谷叢説那珂本8)、市立函館図書館(同上))。

No. 125

【漂流年】宝曆2(1752)年 【帰国年】①宝曆5(1755)年・②宝曆6(1756)年 【船籍地】江戸靈巖

島【船名】福聚丸(橋本藤助船)【漂流地点】岩城〔磐城〕灘【漂着地】ルソン島【乗組員】善右衛門・三之助・清次郎・久次郎・伝次郎・清次郎【乗組員数】15【帰国ルート】ルソン島—マニラ域外の日本町ディラオにあるフランシスコ会に引取られ、扶助料を給与される…①三之助：マカオ—乍浦—長崎—江戸・②清次郎、久次郎、伝次郎、清次郎：マカオ—寧波—乍浦—長崎【備考】残留した10人は洗礼を受け結婚【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(八、漂流雑記下)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、乍浦船ヨリ豆州ノ者送来事・乍浦船ヨリ呂宋漂着ノ者送来事)／林麴「通航一覽」(一八一、長崎志、大成令続集、兼山堂叢書)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一〇、唐船より呂宋漂着人送来事)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、乍浦船ヨリ豆州ノ者送来・乍浦船ヨリ呂宋漂着ノ者送来)／「長崎実録」(四、唐船より呂宋漂着之日本人送来事(大蔵省編『日本財政經濟史料』卷之七))／高柳真三・石井良助編『御触書宝曆集成』(一三四三・一三四五号)。

《同志社》「漂流人之記」カ(1冊、【写本】所国立国会図書館(中古叢書第86冊))／「呂宋国之様子漂流人共江相尋候趣申上候書付」カ(2冊、別「呂宋国漂流人之記」、成宝曆3年、著菅沼定秀、【写本】所国立国会図書館(中古叢書85・86))／「呂宋国漂流人之記」カ(【写本】所国立国会図書館(中古叢書85・86))／「中古叢書」カ(【写本】所国立国会図書館(149冊、目録1冊))。

No. 126

【漂流年】宝曆2(1752)年【帰国年】宝曆3(1753)年【船籍地】陸奥国亶理郡荒浜【船名】茂八船【漂流地点】相馬領村上沖【漂着地】琉球国久志間切【乗組員】栄吉【乗組員数】14【帰国ルート】琉球国久志間切—薩摩国山川—摂津国兵庫浦—江戸【出典】《川合》。《加藤》林麴「通航一覽」(二四、大島筆記)。

No. 127

【漂流年】宝曆5(1755)年【帰国年】宝曆9(1759)年【船籍地】和泉国箱作村【船名】五郎兵衛船【漂流地点】伊勢沖【漂着地】鳥島【乗組員】藤八・幸助【乗組員数】5【帰国ルート】鳥島—伊豆国子浦【関係船】鳥島で泉州の佐市郎船(No. 133)に救われる。佐市郎船は土佐藩船(No. 134)の漂流者も救助し伊豆国子浦に入港【出典】《川合》。《加藤》「幸助無人島漂着」(真木信夫「塩飽水主の漂流奇談」)／「無人嶋漂流記」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)。

No. 128

【漂流年】宝曆6(1756)年【船籍地】紀伊国菌村【船名】堀川屋八右衛門船【漂着地】エトロフ島モヨロ【出港地】相模国浦賀【乗組員】友右衛門【出典】《川合》。《加藤》最上徳内「蝦夷草紙」(四附録、エトロフ島の事)。

No. 129

【漂流年】宝曆6(1756)年【帰国年】宝曆6(1756)年【船籍地】陸奥国津軽郡石崎村【船名】治右衛門船【漂流地点】松前沖【漂着地】朝鮮国江原道江陵【乗組員】治右衛門【乗組員数】4【帰国ルート】朝鮮国江原道江陵—乍岩浦—対馬—大坂【出典】《川合》。《加藤》「津軽船御馳走談」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)。

No. 130

【漂流年】宝曆6(1756)年【帰国年】宝曆6(1756)年【船籍地】琉球【漂着地】肥前国五島【乗組員数】16【帰国ルート】肥前国五島—長崎【出典】《川合》。《加藤》林麴「通航一覽」(二四、長崎志、長崎年表挙要)。

No. 131

【漂流年】宝暦6(1756)年 【帰国年】宝暦7(1757)年 【船籍地】陸奥国牡鹿郡石巻 【船名】和泉屋升右衛門船 【漂流地点】永江 【漂着地】北エゾ地シイコタン 【出港地】石巻 【乗組員】徳兵衛・源四郎 【乗組員数】13カ 【帰国ルート】北エゾ地シイコタンー厚岸ー幌泉ー松前ー奥州三厩ー帰郷 【出典】《川合》。

No. 132

【漂流年】宝暦7(1757)年 【帰国年】宝暦9(1759)年 【船籍地】志摩国布施田浦 【船名】若市丸(浅野小平次船) [小平治船] 【漂流地点】志摩国大王崎沖 【漂着地】台湾 【出港地】大坂 【乗組員】浅野小平次 [小平治]・清助・市松・甚助 【乗組員数】6 【帰国ルート】台湾ー福州ー南京ー乍浦ー長崎ー志州鳥羽

【出典】《川合》。《加藤》渥美正美「となりのはなし」(志州船頭物語記)／熊野正紹「長崎港草」(八、漂流雑記下)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、乍浦船ヨリ志摩ノ者送来事)／林燿「通航一覽」(二一五、台湾漂流記、長崎志、続談海)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、乍浦船ヨリ志摩ノ者送来)／「異国漂流談」(柴秀夫編『南海漂流譚』)／「志州船台湾漂着話」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「志州鳥羽浦船頭漂流一件」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「台湾漂流記」(神宮司庁『古事類苑』外交部)／「台湾漂流記」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流)／「志摩の人台湾島に漂流し清国船に因て故郷に帰る」(石井研堂訳『日本漂流譚』一)。

《同志社》「異国漂流記」(1冊、別「異国漂流実記・志摩小平治異国噺・志摩布施村船頭小平次等漂流記」、【写本】所京都府立図書館、東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「異国漂流船談」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書11))／○「異国漂流談」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書17・18))／「海難噺物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書24))／○「志州船台湾漂着話」(別「宝暦七丑九月吹流候船人小平治口上書、成宝暦9年、〔追加《国書補遺》【活字】荒川秀俊『異国漂流記集』(昭和37年)〕)／「志州船頭小平治漂流一件」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(「志州船頭小平次吹流一件」、諸家随筆10)、宮内庁書陵部(諸家随筆10)、名古屋市蓬左文庫(同上))／「志州船頭漂泊記」カ(1冊、【写本】所東京大学本居文庫)／「志州船頭漂流譚」カ(1冊、【写本】所香川大学神原文庫(江戸末期写))／「志州鳥羽小平治船漂流之聞書」(【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書13))／「志州鳥羽小平治漂流記」(【写本】所宮内庁書陵部(池底叢書94))／「志州鳥羽船外国江吹流候一件」カ(【写本】所国立国会図書館(弘化3年写、漂流記叢書12))／「志州鳥羽船頭外国へ吹流し候一件」カ(1冊、成宝暦7年、【写本】所九州大学)／「志州鳥羽船頭帰国」カ(【写本】所国立国会図書館(安政4年写、漂流記叢書23))／「志州鳥羽船頭小平治難舟書付之写」(【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書21))／「志州鳥羽船頭小平次難風吹流帰国之次第」(【写本】所国立国会図書館(天明3年写、漂流記叢書19))／「志州鳥羽船頭小平治漂流談」(1冊、【写本】所東北大学狩野文庫)／「志州鳥羽船頭小平次吹流サレ外国所々咄之写」(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「志州鳥羽船漂流顛末」カ(1冊、【写本】所東京大学)／「志州鳥羽の船漂流物語」カ(1冊、【写本】所神戸大学)／「志州鳥羽之者吹流レ帰帆口上書」カ(1冊、【写本】所大阪府立図書館(神息事劔之両刃ヲ片刃ニ制を付す))／「志州鳥羽漂流人聞書」カ(【写本】所宮内庁書陵部(椿亭叢書8))／「志州鳥羽布施田浦小平治船台湾国漂流記」(1冊、成明和8年、【写本】所神戸大学)／「志州鳥羽布施田浦船頭小平次外国物語」(1冊、別「漂流外国紀談」、【写本】所同志社大学)／「志州鳥羽布施田浦船頭小平治控」(1冊、成宝暦9年、【写本】所栗田文庫)／「志州鳥羽布施田浦農民記 附 野作騒動聞書」カ(1冊、成弘化3年、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「志州鳥羽布施村船頭吹流次第」カ(【写本】所国立国会図書館(寛政9年写、漂流記叢書16)(「志州鳥羽流船目録」、漂流記叢書15))／「志州鳥羽流船記」カ(1冊、成宝暦12年、【写本】所三重県立図書館)／「志州鳥羽流船留書」カ(1冊、成寛政8年、【写本】所九州大学)／「志州鳥羽領小平次外国咄し」(【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書20))／「志州吹流船」カ(1冊、【版本】所東京都立日比谷図書館東京誌料)／「志州布施田小平次流船物語」(1冊、成宝暦9年、【写本】所三重県立

図書館)／「志州布施村小平治婦国口上書」(【写本】所九州大学九州文化史研究所(常州多珂郡儀原村船頭左太夫安南漂流記等と合1冊))／「志州布施田村小平治舟唐へ流レ行ク次第」(【写本】所国立国会図書館(天明2年写、漂流記叢書22))／「志摩国難船にて唐より送り被返候口書」カ(1冊、成嘉永7年、【写本】所九州大学)／「志摩国吹流船聞書」カ(1冊、【写本】所金刀比羅宮図書館(宝暦7年写))／「台湾漂流」(1冊、【写本】所同志社大学(海表異聞47))／○「台湾漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、追加《古典》鹿沼市立図書館大櫓文庫(「[たいあん國漂流記]」、彌憲写、藤原政行政文9年写の転写、無人島漂流記と合「[たいあん國漂流記]」1冊)))／「漂落紀聞」(1冊、別「志州鳥羽小平次船漂舶物語」、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)／「漂流台湾国書付写」(1冊、【写本】所神戸大学)／「宝暦九己卯年壬七月志州鳥羽船頭船吹流之一件」カ(【写本】所学習院大学(筆叢の内))／「宝暦九年台湾漂民之記」カ(【写本】所東京教育大学(嶮谷叢説那珂本8)、市立函館図書館(同上))／「宝暦九年漂流記」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(外国通覧4))／「宝暦七年小平次台湾漂流記」(1冊、【写本】所無窮会神習文庫)／「宝暦七年志州船頭小平次漂流記」(1冊、【写本】所神戸大学)。

《古典》「志州鳥羽船頭吹流記」カ(【写本】所玉川大学(慶応3年写、1冊))／「志州鳥羽難船記」カ(【版本】所元治元年一市立弘前図書館(播州高砂通船記他と合「難船集記」1冊))／「志州布施田村小平次記」(【写本】所射和文庫(越前人長崎人漂流記と合「漂流記」合1冊))／「志州布施田村小平次船唐江流入事」(別「志州鳥羽稲垣様御領志州布施田村小平次船大冤江漂着始終写書」、【写本】所射和文庫(「志州鳥羽稲垣様御領志州布施田村小平次船大冤江漂着始終写書」1冊))／「台湾漂流之船頭小平治記」(【写本】所玉川大学(1冊))。

《北方》「志州船頭小平次口上覚」(成宝暦9年、【写本】)。

No. 133

【漂流年】宝暦9(1759)年 【帰国年】宝暦9(1759)年 【船籍地】和泉国波有手村 【船名】佐市郎船 【漂着地】鳥島 【乗組員】佐市郎 【帰国ルート】鳥島—伊豆国子浦 【関係船】鳥島で泉州の五郎兵衛船(No. 127)の漂流者を救助。土佐藩船(No. 134)の漂流者も救助し伊豆国子浦に入港
【出典】《川合》。《加藤》「無人嶋漂流記」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)。

No. 134

【漂流年】宝暦9(1759)年 【帰国年】宝暦9(1759)年 【船籍地】土佐藩 【船名】大宝丸 【漂流地点】遠州〔熊野〕灘 【漂着地】鳥島 【出港地】江戸 【乗組員】伝七 【乗組員数】18 【帰国ルート】鳥島—伊豆国子浦 【関係船】鳥島で泉州の佐市郎船(No. 133)に救助される。船に泉州の五郎兵衛船(No. 127)の漂流者がいた。伊豆国子浦に入港。
【出典】《川合》。《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 135

【漂流年】宝暦11(1761)年 【帰国年】宝暦12(1762)年 【船籍地】陸奥国亶理郡荒浜 【船名】福吉丸(木村屋茂右衛門船) 【漂流地点】銚子沖 【乗組員】善十郎・五助 【乗組員数】17 【帰国ルート】清国南通州沖で清国船が救助—南通州—上海—長崎—江戸
【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(八、漂流雑記下)／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、上海船ヨリ奥州并総州ノ者送来事)／林糧「通航一覽」(二二九、長崎志、奥民唐土漂流記)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、上海船ヨリ奥州并総州ノ者送来)／「荒浜船南通州漂着始末」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)。

《同志社》「奥民唐土漂流記」カ(1冊、成宝暦11・12年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)／「福吉丸漂流口上書」(1冊、【写本】所東北大学狩野文庫(天明6年写))／「宝暦十一年仙台領木村屋茂右衛門船清国漂流」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(漂流雑記6))／「宝暦十一年仙台領木村屋茂右衛門船

清国漂流始末」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(漂流雑記5))。

No. 136

【漂流年】宝暦12(1762)年 【帰国年】宝暦13(1763)年 【船籍地】松平遠江守領内摂津国西ノ宮 【船名】長平衛船 【漂流地点】三州大山沖 【漂着地】カラフト島 【乗組員】上岡徳五郎・弥四郎・吉十郎・久七・万三郎・久太郎・三次郎・八兵衛・善四郎 【乗組員数】9 【帰国ルート】カラフト島ーシラヌシー宗谷ー故国

【出典】《川合》。《加藤》最上徳内「蝦夷草紙」(附録、日本人カラフト島に漂着の事)／「享和辛酉西唐太事状」(神宮司庁『古事類苑』外交部)。

《北方》「唐太島漂流記」(成宝暦13年、【写本】)。

No. 137

【漂流年】宝暦12(1762)年 【船籍地】琉球 【乗組員】高良・潮平親雲上 【乗組員数】10カ 【帰国ルート】土佐国幡多郡柏島沖で救助ー宿毛大島港 【備考】土佐国幡多郡柏島沖で救助され宿毛大島港に曳航される

【出典】《川合》。《加藤》林樵「通航一覧」(二四、大島筆記)／戸部良熙「大島筆記」(吉田文治編『海表叢書』卷三、新村出編『南蛮紅毛史料』)／関田駒吉「土佐漂着船に関する文献」。

《同志社》「宝暦十二年琉球船漂着之事」カ(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(土佐国群書類従、拾遺、漂流))。

No. 138

【漂流年】宝暦12(1762)年 【帰国年】明和4(1767)年 【船籍地】筑前国唐泊浦 【船名】本宮丸 【漂着地】ルソン 【乗組員】孫右衛門 【乗組員数】18 【帰国ルート】ルソンービシヤヤカバロウカンーハルハヤーマハエハイトーソクボウー清国漳浦県ー漳州府ー厦門ー福州ー乍浦ー長崎 【関係船】ソクボウで筑前船村丸(No.143)の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、乍浦船ヨリ呂宋漂著之者拾七人送来事)／林樵「通航一覧」(一八一、長崎志)。

No. 139

【漂流年】宝暦12(1762)年 【船籍地】日本 【漂着地】ルソン 【乗組員数】14カ 【帰国ルート】ルソンーマニラ城域外の日本人町ディラオ 【備考】マニラ城域外の日本人町ディラオにあるフランシスコ会に引取られて、扶助料を給与された。洗礼を勧められたが、拒否したらしい

【出典】《川合》。

No. 140

【漂流年】宝暦13(1763)年 【船籍地】奥州仙台領石巻 【漂着地】東蝦夷地シヤマニ 【出港地】浦戸

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 141

【漂流年】宝暦13(1763)年 【船籍地】名古屋 【漂着地】蝦夷地トカチト

【出典】《加藤》松平道広「福山秘府」(他国漂人部卷之三二)。

No. 142

【漂流年】明和元(1764)年 【帰国年】明和8(1771)年 【船籍地】筑前国志摩郡唐泊浦 【船名】伊勢

丸（重右衛門船）【漂流地点】鹿島灘 【漂着地】ミンダナオ島 【出港地】箱館 【乗組員】重右衛門・孫太郎 【乗組員数】20 【帰国ルート】ミンダナオ島ーバンジェルマシンースラバヤー長崎

【出典】《川合》。《加藤》青木定遠「南海紀聞」（石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、荒川秀俊編『異国漂流記続集』、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流）／渥美正美「となりのはなし」（異国物語）／小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」（九、紅毛船ヨリ筑前之者送来事）／神沢杜口「翁草」（九〇、漂流人婦日本并紅毛舶之事）／熊野正紹「長崎港草」（八、漂流雜記下・紅毛送筑前孫太郎（宝曆一三年））／林樵「通航一覽」（二五一・二七〇、蝦夷草紙附録、栗園漫抄、長崎志統編）／桃西河（義三郎）「坐臥記」（一三七、炊子孫太郎漂流談）／松浦東溪「長崎古今集覽」（一二、紅毛船ヨリ筑前ノ者送来）／「異国漂流人之次第」（荒川秀俊編『異国漂流記集』）／「華夷九年録」（荒川秀俊編『近世漂流記集』）／「漂夫譚」（荒川秀俊編『近世漂流記集』）／「漂流天竺物語」（池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流）／「吹流天竺物語」（石井研堂編『校訂漂流奇談全集』）／「孫太郎ボルネオ漂流記」（柴秀夫編『南海漂流譚』）／「筑前の人保爾尼に漂流し万死を出で、故郷に帰る」（石井研堂訳『日本漂流譚』一）／「天竺物語」（仲原善忠訳『日本漂流奇談』）。

《同志社》○「華夷九年録」（3巻1冊、別「漂流奇譚華夷九年録」、成安永4年自序、著鈴木重翼、【写本】所九州大学（下巻1冊）、京都大学、東京都立日比谷図書館近藤文庫（中下巻2冊）、福岡県立図書館（1冊）、礪川堂文庫（1冊）→明和船日記）／「唐泊浦孫三郎口書」カ（1冊、【写本】所国立国会図書館（漂流記叢書26））／「唐泊孫七漂海話」カ（1冊、成明和7年、【写本】所竹柏園文庫）／「唐泊孫七漂流物語」カ（1冊、【写本】所九州大学）／「唐泊孫七漂話」カ（1冊、成宝曆12年、【写本】所宮内庁書陵部）／「筑州唐泊浦孫七天竺語」カ（1冊、【写本】所栗田文庫、【活字】『日本庶民生活史料集成5巻漂流』（三一書房、1968））／「筑人孫七漂海話」カ（1冊、【写本】所国立国会図書館）／「筑前国唐泊の孫七漂海話」カ（1冊、【写本】所同志社大学）／「筑前船漂流記」カ（1冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による）／「筑前孫太郎漂流記」（1冊、成明和年間、【写本】所{旧}彰考館文庫）／「天竺異聞物語」カ（1冊、【写本】所東北大学狩野文庫）／○「南海紀聞」（成寛政4年序、著青木興勝（定遠）、【写本】所国立国会図書館（2巻1冊）、国立国会図書館白井文庫（天保7年写1冊）、国会図書館支部内閣文庫（2巻2冊）（明治写1冊）、宮内庁書陵部（2巻2冊）、東京国立博物館（抄、1冊）、名古屋市蓬左文庫（1冊）、無窮会神習文庫（2巻1冊）、【版本】所宮内庁書陵部、香川大学神原文庫、京都大学、東京教育大学（巻1欠）、神戸大学、東京大学、京都府立図書館、東京都立日比谷図書館加賀文庫、福岡県立図書館、西尾市立図書館岩瀬文庫、栗田文庫、お茶の水図書館成篁堂文庫、※版本は5巻5冊）／「票舶新話」カ（1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫（文政4年藤田某写））／○「吹流天竺物語」（1冊、成明和7年、【写本】所岡田伊三次郎）／「孫太郎ボルネオ漂流談」（【活字】柴秀夫編『南海漂流譚』（双林社、昭和18年））。

《海洋》「筑前船漂流記」（1冊、【写本】）。

No. 143

【漂流年】明和元（1764）年 【帰国年】明和4（1767）年 【船籍地】筑前国残島 【船名】村丸 【漂流地点】陸奥国沖 【漂着地】ルソン 【乗組員】文次郎・五郎左衛門 【乗組員数】19 【帰国ルート】ルソンーカガヤンーソクボウー厦門ー福州ー乍浦ー長崎 【関係船】ソクボウで筑前船本宮丸（No. 138）の漂流者と一緒にになる

【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」（八、漂流雜記下（明和三年））／田辺茂啓「長崎実録大成（長崎志）」（一二、乍浦船ヨリ呂宋漂着之者拾七人送来事）／「東航一覽」（一八一、長崎志）／松浦東溪「長崎古今集覽」（一二、乍浦船ヨリ呂宋漂着ノ者拾七人送来）。

No. 144

【帰国年】明和2（1765）年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】21カ 【帰国ルート】朝鮮ー対馬ー長崎

【出典】《川合》。

No. 145

【漂流年】明和2(1765)年 【帰国年】明和4(1767)年 【船籍地】陸奥国磐城郡小名浜村 【船名】住吉丸 【漂流地点】小名浜沖 【漂着地】安南国 【乗組員】善四郎 【乗組員数】6 【帰国ルート】安南国—会安—長崎 【関係船】会安で常州船姫宮丸(No.146)の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》近藤守重「安南紀略藁」一／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、安南船ヨリ外国漂着之者七人送来事)／林糧「通航一覽」(一七七、長崎志)／「奥州人安南国漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)。

《同志社》○「奥州人安南国漂流記」(1冊、【写本】所京都大学(海外異聞の内)、【活字】『通航一覽 卷177』)。

No. 146

【漂流年】明和2(1765)年 【帰国年】明和4(1767)年 【船籍地】常陸国多賀郡磯原村 【船名】姫宮丸(弥八郎船) [弥八持船] 【漂流地点】銚子沖 【漂着地】安南国 【乗組員】佐平太 [佐源太]・弥八・友七 【乗組員数】6 【帰国ルート】安南国—会安—長崎—小石川水戸藩邸 【関係船】会安で奥州船住吉丸(No.145)の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》熊野正紹「長崎港草」(八、漂流雜記下)／近藤守重「安南紀略藁」一／田辺茂啓「長崎実録大成(長崎志)」(一二、安南船ヨリ外国漂着之者七人送来事)／林糧「通航一覽」(一七七、長崎志、迷復記)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、安南船ヨリ外国漂着ノ者七人送来)／「安南国漂流記」(神宮司庁『古事類苑』外交部)／「安南国漂流記」(柴秀夫編『南海漂流譚』、荒川秀俊編『日本漂流・漂着史料』)／「安南国漂流物語」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流)／「奥州人安南国漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「常人安南に漂流し同胞に邂逅して帰国す」(石井研堂訳『日本漂流譚』二)。

《同志社》○「安南国漂流記」(1冊、別「安南漂流記」、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書27)、国会図書館支部内閣文庫(明和2—4)、九州大学、九州大学九州文化史研究所(異国船漂着記と合)、京都大学(2巻1冊)(武道撫萃録383)、国学院大学、東京教育大学、東京大学史料編纂所(明和2)、日本大学、北海道庁(延宝・元禄・明和・寛政)、市立函館図書館(異国船漂着記・蝦夷騒動記と合)、栗田文庫(明和4)、礪川堂文庫(文政12)、{旧}彰考館文庫、【活字】『通航一覽4』)／「安南国瓢流人常州人弥八口上書」(1冊、成明和2年、【写本】所栗田文庫)／○「安南国漂流物語」(1冊、【写本】所九州大学)／「安南漂流」(1冊、【写本】所同志社大学(長崎、浄乗寺、明和5年写))／「水府船頭安南国漂着図」(1冊、【写本】所同志社大学(地図1枚もの53.3×54cm彩色入り)、※地図の左下に「水府船頭水主安南漂着記附図明和六年己巳秋七月八日従水府借之写」の肉筆あり)／「漂流之者共於長崎被相尋候申口」カ(1冊、【写本】所九州大学)／「漂流之者於長崎被相尋候申口安南国逗留中見聞仕雜談」カ(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫(文化2年写))。

《古典》「安南国江従水戸廻船漂流之記」カ(【写本】所玉川大学(文政13年写、1冊))／「安南国漂流記」(1冊、別「安南漂流記」、【写本】所群馬大学新田文庫(「安南國漂流記」、渡天之説と合[「安南國漂流記 渡天之説」1冊])、茨城県立歴史館(「安南瓢流話」、清船漂着談と合[「安南瓢流話 清船漂着談」1冊]) (「安南瓢流話」1冊) (「安南瓢流記」1冊) (1冊)、鹿沼市立図書館大樫文庫(「安南國漂流記」1冊)、黒川村公民館(「漂流人記」1冊)。

No. 147

【漂流年】明和4(1767)年 【乗組員】佐藤玄明 【帰国ルート】南海で異国船が救助 【備考】南海に漂流して異国鯨船に救われる

【出典】《川合》。

No. 148

【漂流年】明和7(1770)年 【船籍地】種子島 【漂着地】朝鮮 【乗組員】新右衛門 【帰国ルート】朝鮮
—長崎—鹿児島藩
【出典】《川合》。

No. 149

【漂流年】安永2(1773)年 【帰国年】安永3(1774)年 【船籍地】薩摩 【漂流地点】奄美大島沖 【漂
着地】清国浙江省寧波府定海県舟山 【出港地】沖永良部島 【乗組員】長兵衛・池山喜三右衛門・源次郎・
中原仲右衛門・権左衛門 【乗組員数】19 【帰国ルート】清国浙江省寧波府定海県舟山—乍浦—長崎 【備考】
四番船・五番船として長崎に入港
【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、午四番船同五番船ヨリ
薩州家臣送来事)／熊野正紹「長崎港草」(八、漂流雜記下)／林燿「通航一覽」(二二五、長崎志統編、落穂
雜談一言集)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、午四番船ヨリ薩州家臣送来)／「薩州人唐国漂流記」(石井
研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「薩人支那に漂流し商船に便乗して帰国す」(石井研堂訳『日本漂流譚』二)。
《同志社》「安永漂流紀聞」(1冊、別「長崎御役所口書扣・薩州人唐土漂着一条(原)」、成安永3年、著中
原仲左衛門・池田喜左衛門口書、【写本】所無窮会神習文庫)／○「薩州人唐国漂流記」(1冊、別「安永漂流
紀聞・長崎御役所口書扣薩州人唐土漂着一条」、成安永3年、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書1)、京
都大学(海外異聞の内)、無窮会神習文庫(「安永漂流紀聞」)／「薩摩藩両士漂流口書」(1冊、【写本】所国
立国会図書館(漂流叢書1))／「松平薩摩守家来池永喜三左衛門同中原仲左衛門口書」(1冊、【写本】所国
立国会図書館(漂流叢書1))。

No. 150

【漂流年】安永2(1773)年 【船籍地】尾張 【漂着地】琉球 【出港地】大坂
【出典】《加藤》林燿「通航一覽」(二四、塩尻)。

No. 151

【漂流年】安永3(1774)年 【帰国年】安永3(1774)年 【船籍地】加賀国石川郡粟ヶ崎村 【船名】藤
蔵船 【漂流地点】加賀沖 【漂着地】朝鮮半島の東南部 【乗組員】伝次郎 【乗組員数】9 【帰国ルート】
朝鮮半島の東南部—甘浦—釜山—ウワンカイ—対馬藩—大坂—故郷
【出典】《川合》。《加藤》「粟ヶ崎の者朝鮮漂着一巻口書」(石川県図書館協会編『加能漂流譚』)。
《同志社》「安永四年朝鮮漂着一巻」カ(1冊、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫)。

No. 152

【漂流年】安永3(1774)年 【帰国年】安永5(1776)年 【船籍地】陸奥国折ノ浜 【船名】最吉丸(十
兵衛船) 【漂流地点】常陸沖 【漂着地】広東省潮州府潮陽県 【乗組員】幸助 【乗組員数】14 【帰国ルー
ト】広東省潮州府潮陽県—乍浦—長崎
【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、申四番船同五番船ヨリ
奥州之者送来事)／林燿「通航一覽」(二二〇、長崎志統編)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、申四番船同
五番船ヨリ奥州ノ者送来)。

No. 153

【漂流年】安永3(1774)年 【帰国年】安永4(1775)年 【船籍地】陸奥國小竹浜 【船名】永福丸(六
兵衛船) 【漂流地点】岩城国塩屋崎沖 【漂着地】福建省泉州府惠安県の小島 【乗組員】佐五平・長右衛門
【乗組員数】16 【帰国ルート】福建省泉州府惠安県の小島—乍浦—長崎 【関係船】福州で陸奥国檜葉郡山

田浜村の漂流者ら (No. 154) と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、申壹番船同三番船ヨリ奥州之者送来事)／林燿「通航一覽」(二〇六、迷復記)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、申一番船同三番船ヨリ奥州ノ者送来)／「漂海録」(荒川秀俊編『異国漂流記続集』)。

《同志社》「漂流之覚書」(1冊、著小竹浜六兵衛、【写本】所早稲田大学、〔追加《早稲田》1冊、※「牡鹿郡小竹浜六兵衛舟唐国へ漂着来朝之船長崎へ送届候次第覚書」と同本カ))。

No. 154

【漂流年】安永4(1775)年 【帰国年】安永4(1775)年 【船籍地】陸奥国檜葉郡山田浜村カ 【漂着地】清国 【乗組員】勝兵衛・作兵衛・次郎・金右衛門・六兵衛 【乗組員数】5カ 【帰国ルート】清国-福州-乍浦-長崎 【関係船】福州で奥州小竹浜永福丸 (No. 153) の漂流者と一緒にいる 【備考】申之一番唐船・三番唐船として長崎に入港

【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」(四〇-一四(森永種夫『犯科帳』三))。

No. 155

【漂流年】安永4(1775)年 【船籍地】琉球カ 【漂着地】志摩国鳥羽浦

【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽」(二四、近世東西略史)。

《古典》「安永四年琉球船漂着一件書」カ (別「琉球船書上写」、【写本】所本居宣長記念館 (「〔安永四年琉球船漂着一件書〕」1冊))。

No. 156

【漂流年】安永5(1776)年 【船籍地】大隈国カ 【漂着地】朝鮮

【出典】《加藤》松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、朝鮮国漂流之者)。

No. 157

【漂流年】安永8(1779)年 【帰国年】安永9(1780)年 【船籍地】大坂安治川 【船名】住徳丸 (撰津屋半十郎船) 【漂流地点】伊豆国中木浦沖 【漂着地】清国福建省 【乗組員】徳藏・伝藏こと半十郎 【乗組員数】13 【帰国ルート】清国福建省-乍浦-長崎-江戸

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、子四番船同五番船ヨリ越後之者送来事)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、子四番同五番船ヨリ越後ノ者送来)。

《同志社》「紀州人福州漂流記」(1冊、【写本】所京都大学、※住徳丸福州漂流記と同内容)。

《海洋》「中華漂流記」(1冊、【写本】)。

No. 158

【漂流年】安永8(1779)年 【船籍地】紀伊国日高郡御坊村 【船名】一葉丸 (伝次郎船) 【漂流地点】伊豆沖 【漂着地】清国福建省 【出港地】江戸

【出典】《加藤》堀内信編「南紀徳川史」(一四・九五)／「一葉丸福州漂流記」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「大坂伝次郎船異国江漂流致し候一件」(石井謙治「大坂伝次郎船異国江漂流致し候一件」)。

《同志社》「一葉丸船長日記」(1冊、別「一葉丸福州漂流記」、成天明2年、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫 (異国漂流奇譚集の内)／「紀州船一葉丸漂流一件覚」(1冊、成安永8年、【写本】所国立国会図書館 (漂流記叢書29))／「紀州日高郡志賀屋伝藏舟漂流人覚書」カ (1冊、成安永8年、【写本】所国立国会図書館 (漂流記叢書30))／「福州へ漂流蘇生物語」カ (1冊、【写本】所京都府立図書館 (天明2年写))。

【漂流年】天明2(1782)年【帰国年】寛政4(1792)[寛政5(1793)]年【船籍地】伊勢国白子村【船名】神昌丸(彦兵衛船)[幸太夫船]【漂流地点】駿河沖【漂着地】アリューシャン列島のムチトカ島【乗組員】大黒屋光太夫[幸太夫・幸大夫・光大夫・太黒屋幸太夫]・庄蔵・新蔵・小市・磯吉【乗組員数】17【帰国ルート】アリューシャン列島のムチトカ島—ニジニカムチャッカー—オホーツク—ヤクーツク—イルクーツク—ペテルブルグ—イルクーツク—オホーツク—根室【備考】光太夫はペテルブルグで女帝エカテリナ二世に謁見、帰国の許可を得る。庄蔵と新蔵は残留

【出典】《川合》。《加藤》渥美正美編「となりのはなし」(漂民御覧記)/桂川甫周「北槎聞略」(亀井高孝編『北槎聞略』、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五巻漂流、竹尾式訳『北槎聞略—光太夫ロシア見聞記—』)/亀井南冥著「奇観録」(高木繁「亀井南冥著『奇観録』を紹介す」)/篠本廉「北槎異聞」(大友喜作編『北槎遺聞・北辺探事(北門叢書第六冊)』)/林燿「通航一覽」(二七四、北海鳥船記、柳營日次記、山本氏筆記、御徒方万年記、辺要分界図考、石川家譜、魯西亜船来一件)/林燿「通航一覽」(三一六・三一七、北海鳥船記、辺要分界図考、魯西亜紀聞、北槎聞略、漂民幸太夫磯吉帰国紀事録、石川家譜、魯西亜船来一件、片山氏筆記、近世東西略史、栗園漫抄[漂民御覧記・雑事記]、憲教類典)/堀内信編「南紀徳川史」一六/宮崎成身「視聴草」(三集之八、蛮人漂着(寛政五年大黒屋幸太夫等))/「蝦夷地初発記・漂民御覧之記」(神宮司庁『古事類苑』外交部)/「神昌丸魯国漂流始末」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、住田正一編『海事大辞書』下巻漂流記、清水文雄校注『韃靼漂流記』)/「蛮人漂着」(近藤瓶城編『史籍集覽』史料叢書二 他)/「漂民紀事」(塩田順庵編「海防統彙議」卷之一)/「北辺紀聞」(前篇中、(神宮司庁『古事類苑』外交部))/「北辺雜記」(上、(大蔵省編『日本財政経済史料』卷之七))/「北海異談譜」(『百万塔』一一)/「魯西亜国睡夢談」(ヴェ・エム・コンスタンチノフ露訳及解説『魯西亜国睡夢談』)/「魯西亜国漂民記」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)/「魯西亜船到著」(神宮司庁『古事類苑』外交部)/岡本柳之助編『日魯交渉 北海道史稿』(上、魯西亜使節ラックスマン来朝ノ事・伊勢白子村、神昌丸船頭幸太夫帰朝ノ事・將軍徳川家斉、漂民縦覧之記)/高柳真三・石井良助編『御触書天保集成』(下、六五二九・六五三〇号)/「勢人魯西亜に漂流し十二年を経て帰国す」(石井研堂訳『日本漂流譚』二)/「ロシア漂流記」(仲原善忠訳『日本漂流奇談』)。

《同志社》「赤人一件」(1冊、別「寛政四子年十一月松前表赤人一件」、著桂川甫周、【写本】所国立国会図書館(嘉永7岡本保孝識語))/「伊勢白子船神昌丸漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、天理図書館)/「伊勢漂民風説」カ(1冊、成寛政5年、著桂川国瑞編、【写本】所鹿児島大学玉里文庫、※漂民御覧之記等抄出)/「磯吉光大夫漂流」(2冊、同志社(海表異聞72~73))/「蝦夷乱初記 附神昌丸口書」カ(1冊、成寛政4年、【写本】所北海道庁)/「於路志屋江漂流記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書32))/「鄂羅斯海録」カ(1冊、著桂川国瑞、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(文政7年写、漂民上覧之記・寛政六寅年六月十二日御用番御老中戸田采女正殿より御勘定奉行へ御渡に相成候御書付を付す))/「ヲロシア国人伊勢のもの漂流の三人をおくり東蝦夷に着岸につき」(1冊、【写本】所東京大学)/「寛政五癸丑年九月十八日漂民上覧之記」カ(1冊、【写本】所同志社大学)/「寛政五癸丑年漂民御覧之記」カ(1冊、【写本】所慶應義塾大学)/「寛政五年勢州漂民問答」カ(1冊、【写本】所京都大学富士川文庫(世界諸国方角遠近捷見と合))/「寛政四子年漂流人幸太夫その外松前表へ帰着一件」(著桂川甫周(国瑞)、【写本】所国立国会図書館(春雨楼叢書の内))/「寛政四壬子年ムスコヘヤの都ヲロシアより送り来る漂流人伊勢白子船頭幸太夫江附添来候医師米田元丹咄留書」(【写本】所天理図書館(〔徳川史料〕、第12冊))/「奇観録」(1冊、成寛政6年、著亀井南冥訳、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書39)(漱芳閣叢書料25)、宮内庁書陵部(留取丹心を付す)、京都大学(中鏡の付)、早稲田大学(自筆、〔追加《北方》)、【活字】『九大医報』(10の3))/「幸大夫」(1冊、(俄羅斯紀聞1集、第9巻)、早稲田大学)/「幸大夫磯吉俄羅斯漂着記」(【写本】所東北大学狩野文庫(船頭小平治台湾漂流記と合1冊))/「幸太夫磯吉御覧記」(1冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)/「幸太夫磯吉引替」(【写本】所国立国会図書館(不忍叢書2))/「幸太夫磯吉漂泊物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書43))/「幸太夫磯吉吹流レ

候一件」(1冊、別「漂民幸太夫磯吉婦国紀事」、著中里仲舒、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)／「幸太夫婦朝記」(1冊、別「幸太夫婦朝之記」、【写本】所早稲田大学(3種、俄羅斯紀聞2集第3巻の内)、名古屋市蓬左文庫)／「幸太夫口語筆受被」(1冊、別「幸太夫口語筆受」、著川口三省、【写本】所早稲田大学(俄羅斯紀聞の内)、〔旧〕彰考館文庫(寛政5、漂民御覧記・北槎略聞と合))／「幸大夫上覧記」(【写本】所宮内庁書陵部(片玉集100))／「光太夫説話露国事情一斑」(1冊、※明治文献目録による)／「幸太夫船一件写」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書40))／「幸太夫大全」(1冊、【写本】所東北大学(文化5年写))／「幸太夫談話」(1冊、【写本】所国立国会図書館、国会図書館支部内閣文庫(北辺紀聞7))／「幸太夫日記」(1冊、成寛政3年、【写本】所林若吉、※露文、嘉永以前西洋輸入品及参考品目録による)／「幸太夫に付添松前より来る米田元丹といふ医師物語」(【写本】所宮内庁書陵部(片玉集100))／「光太夫話」(1冊、【写本】所九州大学)／「幸太夫漂流記」(1冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)／「幸太夫漂流談」(1冊、【写本】所慶應義塾大学、宮城県図書館、※魯西亜漂流記→漂流記)／「光大夫物語」(1冊、【写本】所早稲田大学(俄羅斯紀聞1集第3巻の内)、〔追加《北方》「光太夫物語」])／「幸太夫物語」(1冊、【写本】所東北大学狩野文庫(狩野亨吉写))／「幸太夫物語」(1巻、成宝永8年刊、※選択古書解題による)／「幸大夫を送来る阿魯西亜人松前侯え差出候書の写」(【写本】所宮内庁書陵部(片玉集100))／「神昌丸漂民記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(寛政11年写、漂流記叢書44)、京都府立図書館(安政2年写)、東京都立日比谷図書館近藤文庫(文化14年伊藤信国写))／「神昌丸漂流一件」(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「神昌丸漂流記」(1冊、成天明2年、【写本】所国立国会図書館、国会図書館支部内閣文庫、竹柏園文庫、龍谷大学、同志社大学)／「神昌丸漂流并婦国記」(1冊、【写本】所国学院大学)／「神昌丸漂流民記」(1冊、【写本】所金刀比羅宮図書館)／「神昌丸漂流問答」(1冊、【写本】所九州大学(文化5年写))／「勢州白子浦幸大夫婦国記」(【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(他と合1冊))／「勢州白子漂民御覧問答記」(1冊、別「勢州白子船光太夫記事(外)」、著桂川国瑞(甫周)編、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書33))／「勢州白子神昌丸光太夫上乘水主拾五人漂流発端并ロシア国中往来道法記」(1冊、著桂川甫周、【写本】所{京外大})／「勢州白子神昌丸漂流一件」(1巻、著桂川甫周、【写本】所京都大学(武道摭萃録274))／「勢州白子神昌丸船船頭漂流記」(1冊、【写本】所三重県立図書館(寛政6年写))／「勢州白子漂民御覧御回答記」カ(2冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)／「勢州白子船神昌丸漂流之記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書41))／「勢州白子船漂流書」カ(1冊、【写本】所名古屋市蓬左文庫)／「勢州白子村漂民言上之次第」カ(【写本】所大阪府立図書館(「魯西亜問記」、1冊)(斑狐問答集と合1冊))／「勢州難舟物語」(1冊、【写本】所京都大学)／「勢州ノ者魯西亜江漂着婦国之漂民御覧之記」(著桂川甫周、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(外国通覧3))／「船頭幸太夫歸郷始末」(1冊、【写本】所高知県立図書館)／「大幸雑話」(2巻2冊、著松平定信、【写本】所桑名松平家)／「太黒屋幸太夫ロシア漂着一件聞書」(1冊、著桂川甫周、【写本】所県立長崎図書館(寛政7年写))／「天明幸太夫磯吉魯西亜漂流記」(1冊、【写本】所無窮会神習文庫)／「天明二年駿河沖ヨリ漂流寛政五年婦国漂人口書」(1冊、【写本】所浅野図書館)／「蛮人漂着」(成寛政5年、【活字】『改定史籍集覧16』)／「漂民紀事」(【写本】所早稲田大学(俄羅斯紀聞、1集、第9巻)、〔追加《北方》※内容は「漂民御覧之記」])／「漂民御覧之記」(1冊、別「漂民記・漂民台覧之記・漂民御覧記・漂民上覧記」、成寛政5年、著桂川甫周(国瑞)、【写本】所国立国会図書館(「漂民台覧之記」、神昌丸異国漂流話を付す)(「漂流言上記」、享和4年西尾内記写、漂流問答話と合)(「勢州白子船光太夫記事」、漂流記叢書33)(「漂民談」、漂流記叢書34)(漂流記叢書35)(「魯西亜国江漂民問答」漂流記叢書36)(亜墨利加漂流記を付す、漂流記叢書37)(漂流記叢書38)(「漂民婦朝記」、井弘光写、好古堂漫録8)(漱芳閣叢書料11)(鶯宿雑記別録の内)(蝦夷乱初発記の付)、国会図書館支部内閣文庫(北槎略聞抄を付す)(「漂民御覧之記」、明治写)(「勢州ノ者魯西亜江漂着婦国之漂民御覧之記」外国通覧2)(雑綴3種の内)(「漂民上覧之記」、羅斯海録の付)、宮内庁書陵部(椿亭叢書9)(1冊)、九州大学、京都大学(「漂民問答記」)(寛政6年写、魯西亜国一覽を付す)(「吹上秘書」、東方珍話を付す)、京都大学富士川文庫(漂流私記と合)、同志社大学(1冊)、{京外大}(1冊)、龍谷大学(1冊)、神戸大学、国学院大学(「漂民記」)(1冊)、早稲田大学(「漂民記」)(2部)、東京大学(「漂

民上覧記」、旧篋叢書 5) (1 冊)、東京大学史料編纂所 (「勢州白子漂民御覧問答記」、中山久四郎蔵本写)、東北大学狩野文庫 (「幸太夫問答」)、岡山県総合文化センター (「漂民記」)、京都府立図書館 (寛政 6 年写)、高知県立図書館、北海道庁 (落葉集の内) (目佐万之内) (蝦夷記問の内) (蝦夷乱初発記と合、2 部) (建州女真始末と合、2 部)、県立長崎図書館、東京都立日比谷図書館近藤文庫 (「漂民台覧之記」) (2 部)、三重県立図書館 (「漂民上覧記」)、宮城県図書館 (「漂民上覧記」、魯西亜漂流記・漂流人魯西亜談話を付す) (1 冊)、宮城県図書館小西文庫、市立刈谷図書館、市立函館図書館 (文化 4 年水野時来写)、市立米沢図書館林泉文庫 (琉客記談を付す)、神宮文庫図書館 (寛政 6 年写) (「漂民上覧之記」) (1 冊)、尊経閣文庫 (筆叢 6) (1 冊)、天理図書館吉田文庫 (「漂民上覧記」)、羽間文庫、穂久邇文庫 (「漂民記」)、礪川堂文庫 (「幸太夫磯吉之記」)、浅野図書館 (「漂民記」) (「吹上秘抄」) (1 冊)、{旧} 彰考館文庫 (幸太夫口語筆受・北槎略聞と合)、国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫 (魯西亜国漂船問書の付)、東京都立日比谷図書館特別買上文庫諸家 (嘉永 5 年石嶋泰照写)、栗田文庫 (魯西亜国漂民記の付)、神宮文庫図書館 (「魯西亜問答」、文化 3 年写)、〔追加《古典》国文学研究資料館 (「漂民御覧の記」 1 冊)、群馬大学新田文庫 (「漂民記」 1 冊)、順天堂大学山崎文庫 (「漂民台覧之記」、寛政 7 年写、1 冊)、玉川大学 (「漂民記」、寛政 6 年写、1 冊) (1 冊)、茨城県立歴史館 (「御覧漂民記事」 1 冊)、射和文庫 (「白子幸太夫磯吉漂流ノ記」 1 冊)]、〔追加《北方》〕／「漂民報暗」カ (1 冊、著桂川甫周、【写本】所慶應義塾大学)／「漂流記」(1 冊、【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫 (「巴丹米利堅漂流記」) (1 冊)、西尾市立図書館岩瀬文庫)／「漂流人私記」(1 冊、【写本】所栗田文庫)／「噴揚私記」(1 冊、【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫)／○「北槎異聞」(4 卷 4 冊、成寛政 5 年序、著篠本廉 (竹堂)、【写本】所国立国会図書館 (北槎小録・北槎余録を付す、2 冊)、国会図書館支部内閣文庫、東北大学狩野文庫、北海道庁 (北槎小録・北槎余録を付す、5 冊) (4 冊)、{旧三井本居} (6 冊)、〔追加《北方》「北槎異聞 卷 1-4」〕／「北槎小録」カ (1 冊、別「北槎異聞小録」、成文化 4 年、著愛問主人 (新楽閑叟)、【写本】所国立国会図書館 (北槎異聞の付)、国会図書館支部内閣文庫 (明治写、北槎余録と合) (北槎余録と合) (1 冊)、国会図書館支部静嘉堂文庫 (続海外異聞の内)、京都大学 (2 冊) (1 冊)、龍谷大学、北海道庁 (北槎異聞の付) (2 部)、西尾市立図書館岩瀬文庫、なお 2 叟譚奇の内、〔追加《古典》射和文庫 (「二叟譚奇」の内)〕)／○「北槎聞略」(11 卷、成寛政 6 年、著桂川国瑞 (甫周)、【写本】所国立国会図書館 (3 冊)、国会図書館支部内閣文庫 (魯西亜略記・地図・器什・衣服図を付す、12 冊 2 軸) (魯西亜略記・地図を付す、4 冊 9 枚) (魯西亜略記を付す、6 冊) (「北槎聞略附图」、1 軸)、国会図書館支部静嘉堂文庫 (10 卷 5 冊、2 部) (9 卷 6 冊)、宮内庁書陵部 (5 冊) (巻 4、1 冊)、京都大学 (付録 1 巻共 9 冊)、慶應義塾大学富士川文庫 (1 冊)、東北大学狩野文庫 (文政 8 年晚翠軒写、付録共 5 冊)、広島大学 (10 卷 8 冊)、北海道庁 (図共 6 冊) (5 冊)、栗田文庫 (7 冊)、竜野文庫 (抄、2 冊)、天理図書館 (10 卷 5 冊)、亀井高孝、〔追加《古典》大洲市立図書館矢野玄道文庫 (11 卷、10 冊)、市立弘前図書館 (巻 4 存、1 冊)]、〔追加《北方》〕)／「北槎聞略抜書」カ (1 冊、【写本】所 {京外大} (天保 12 年写))／「北槎余録」カ (【写本】所国立国会図書館 (北槎異聞の付)、国会図書館支部内閣文庫 (明治写、北槎小録と合 1 冊) (北槎小録と合 1 冊)、北海道庁 (北槎異聞の付))／「北槎略聞」(1 冊、成寛政 5 年、著吉田篁墩、【写本】所国会図書館支部内閣文庫 (抄、漂民御覧之記の付)、{旧} 彰考館文庫 (1 冊) (漂民御覧記等と合)、〔追加《北方》〕)／「魯国事情問書」(1 冊、【写本】所国立国会図書館亀田文庫)／「魯西亜国漂船問書」(10 卷 10 冊、【写本】所国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫 (漂民御覧之記を付す))／「魯西亜国漂民記」(1 冊、著桂川甫周、【写本】所神戸大学 (文化 11 年写)、栗田文庫 (文政 8 年写、漂民御覧之記を付す) (1 冊))／「魯西亜国漂民記」(1 冊、別「漂流人口上書 (内)」、成寛政 5 年、【写本】所国立国会図書館)／「魯西亜国漂民記」カ (1 冊、【写本】所東京教育大学 (異船一件秘書類の内))／「魯西亜国漂民幸太夫磯吉実記」(1 冊、【写本】所京都府立図書館)／「魯西亜船伊勢国ノ漂民道來記」カ (1 冊、【写本】所九州大学 (寛政 12 年大沼中時写))。

《古典》「幸太夫異国物語」(別「異国物語」、【写本】所群馬大学新田文庫 (「幸太夫異国物語」 卷之上下、寛政 13 年源義達写))／「神昌丸漂流記」(【写本】所玉川大学 (一存、1 冊))／「漂流人幸太夫磯吉問答伝」(【写本】所市立弘前図書館 (1 冊))／「露西亜漂流帰国一件」カ (著桂川国瑞、【写本】所玉川大学 (1 冊))。

《北方》「蝦夷地初発記」(成寛政 5 年、【写本】)／「亜魯遮国物語」(成寛政 5 年、【写本】、※後半の「漂流

人問答」は桂川甫周編「漂民御覧之記」に同じ)／「鄂羅斯漂海録」(成寛政5年、【写本】、※桂川甫周「漂民上覧之記」を付す)／「寛政五癸丑年漂民上覧之記」(著桂川甫周編、【写本】、※「吹上秘書漂民御覧之記」に同じ)／「寛政四壬子年ヲロシヤ国人伊勢のもの漂流の三人をおくり東蝦夷地江着岸」(成寛政7年跋、【写本】、※「神昌丸漂流記」、「漂民御覧之記」および幸太夫の直話を記す)／「寛政四壬子年魯西亜船松前渡来之記」(【写本】)／「桜庄氏家記」(【写本】)／「勢州白子神昌丸幸太夫船上乗水主共一七人乗漂着発端ヲロシヤ国中往来道法記」(成寛政5年、【写本】)／「天明壬寅年幸太夫魯西亜漂流記」(【写本】)／○「漂民紀事」(【写本】、※内容は「漂民御覧之記」に同じ)／「漂流人問答」(成寛政5年、【写本】、※内容は桂川甫周編「漂民御覧之記」に同じ)／「吹上秘書漂民御覧之記」(成寛政5年、著桂川甫周(国瑞)、【写本】、【活字】『通航一覽』第8、岡本柳之助『日露交渉北海道史稿』、石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、『日本海防史料叢書』5)／「魯西亜志 乾・坤」(2冊、成寛政5年、著桂川甫周訳、【写本】)／「亜魯齊人来朝記(並松前ノ由来海上道矩)」(成寛政5年、【写本】、※北大図書館本「異国ヲロシヤ人来朝記」と同じ内容であるが、これに「幸太夫漂流日記之写」、「ヲロシヤ国聞書」のほかロシア文字、ロシア語彙を加える)。
《海洋》「神昌丸漂流記」(1冊、【写本】)。

《早稲田》「光太夫と露人蝦夷ネモロ滞居之図」(1巻、成寛政5年、著隆啓模、【写本】)／「北槎聞略付図」(2巻、成寛政6年、著桂川甫周撰)／「魯齊亜漂流問答(漂流人磯吉問答書)」(1冊、成寛政9年頃)。

《その他》「江戸漂流記総集別巻 大黒屋光太夫史料集」(4巻、山下恒夫編、日本評論社、2003、※第1巻：開国のあけぼの、ロシアの黒船蝦夷地に出現す(亜魯齊人来朝記、魯西亜実記、魯西亜人取扱手留、魯西亜人一件別録、神昌丸漂流記など)、第2巻：漂流と漂泊の十年、アレウト列島からシベリアへ、そしてペテルブルク(御私領ノ節魯西亜船入津一件 一魯西亜人松前着一件 一、異船航来漂民帰朝紀事、工藤万幸聞書、寛政五年神昌丸二漂民両目付吟味録、北槎異聞、寛政五年蝦夷地騒動聞書、魯西亜国漂泊聞書など)、第3巻：伊勢漂流民の懐旧談・ロシア資料(漂民御覧記、北槎略聞、老中戸田氏教の伺ひと申渡し、北行日録、亜魯齊西漂民記聞、光太夫口語、幸太夫談話、光大夫談筆記、オロシヤ問答)、第4巻：郷土と江戸の史跡と史実・絵画史料(漂流船実録、漂民磯吉聞書き、船頭幸太夫漂流聞書、極珍書 一光太夫漂流実録 一、一席夜話、実録幸太夫磯吉漂泊物語、勢州亀山藩領若松三村明細帳、寛政十年 磯吉婦郷文書、享和二年 光太夫婦郷文書、白子船問屋一見家文書断片、漂流私記、大黒亀次郎略伝、神昌丸遭難等長谷川家文書など)。

No. 160

【漂流年】天明5(1785)年 【帰国年】寛政9(1797)年 【船籍地】土佐国赤岡浦 【船名】松屋儀七船 【漂流地点】土佐国手詰崎沖 【漂着地】鳥島 【乗組員】長平 【乗組員数】4 【帰国ルート】鳥島-青ヶ島-八丈島-江戸 【関係船】鳥島で肥前船(No.161)の漂流者、薩州船(No.163)の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》曾繁「無人島談話」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／松野尾章行「皆山集」(無人島物語写之事)／宮崎成身「視聴草」(四集之一〇、岸本浦長平無人嶋江漂流之記(天明五年))／「岸本浦長平無人島へ漂流之記」(近藤瓶城編『史籍集覧』史料叢書九)／「長平漂流口書」(宮田定繁編『長平漂流記』)／「土州船無人島漂流譚」(柴秀夫編『南海漂流譚』)／「鳥島物語」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、仲原善忠訳『日本漂流奇談』)／「漂流日記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「無人しまへ漂着之もの吟味書」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)／「無人島長平」(『新土佐群書類従』五)／「無人嶋漂流記」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「無人島漂流記」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五巻漂流)／「無人島漂流口書」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「無人嶋ヨリ帰国之者御調書上留並八郎大明神由来書共」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／関田駒吉「土佐船の漂流文献」／「儀七漂流日記」(仲原善忠訳『日本漂流奇談』)／「土佐・大阪・日向の船無人島に漂着、合流帰還の物語」(吉岡永美訳『漂流船物語の研究』)。

《同志社》○「岸本浦長平漂流記」(1冊、別「岸本浦長平無人島へ漂流之記・土州香我美郡岸本浦長平天明五年巳正月晦日出船以来漂流記」、成天明5年、【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))／「岸本浦長平無人島江漂流して帰る事跡」(【写本】所国立国会図書館(御見聞録、中)、【活字】宮本常一等編『日

本庶民生活史料集成 5 卷 漂流：無人島漂流記』(三一書房、1968))／「長平書付写」(1 冊、【写本】所東京大学)／「長平嶋物語」カ (高知県香美郡岸本町青年団編、大正 15 年 2 月、49 p、19 cm)／「長平漂流記」カ (野村長平、高知県立中芸高校、昭和 39 年 2 月、65 p、19 枚、27 cm)／「長平無人島漂流絵図」(1 軸、【写本】所高知県立図書館)／「長平物語」カ (1 冊、【写本】所同志社大学)／「漂流記」カ (1 冊、【写本】所高知県立図書館)／「無人島談話」(【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(統海外異聞の内))／「無人島漂客」(1 冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)。

《古典》「長平無人島漂浪記」(別「土佐国赤岡浦長平無人島漂浪記」、【写本】所市立弘前図書館(「土佐国赤岡浦長平無人島漂浪記」1 冊))。

No. 161

【漂流年】天明 7 (1787) 年 【帰国年】寛政 9 (1797) 年 【船籍地】肥前国寺江村 【船名】金左衛門船〔金右衛門船〕【漂流地点】九十九里浜沖 【漂着地】鳥島 【出港地】仙台荒浜 【乗組員】儀三郎・市之丞・長之丞・清蔵 【乗組員数】11 【帰国ルート】鳥島－青ヶ島－八丈島－江戸 【関係船】鳥島で土州船 (No. 160) の漂流者、薩州船 (No. 163) の漂流者と一緒になる 【備考】肥前寺江村の金左衛門船は大坂北堀江の亀次郎にチャーターされる

【出典】《川合》。《加藤》曾槃「無人島談話」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／松野尾章行「皆山集」(無人島物語写之事)／桃西河(義三郎)「坐臥記」(一七二、三保関の米屋清蔵漂流奇談)／鹿磯村市之丞等無人嶋へ漂着の次第口書(石川県図書館協会編『加能漂流譚』)／「鳥島物語」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、仲原善忠訳『日本漂流奇談』)／「漂流日記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「無人しまへ漂着のもの吟味書」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)／「無人嶋漂流記」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「無人島漂流記」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流)／「無人島漂流帰着書」(狩野鐘太郎「新たに発見された天明漂流記－無人島漂流帰着書－」、※「天明漂流記」)／「無人島漂流口書」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「無人嶋ヨリ帰国之者御調書上留並八郎大明神由来書共」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「土佐・大阪・日向の船無人島に漂着、合流帰還の物語」(吉岡永美訳『漂流船物語の研究』)。

《同志社》「鹿磯村市之丞等無人島漂着の次第口書」(【活字】『加賀能登郷土図書叢刊加能漂流譚』)／「寛政九年巳十月能州鳳至郡鹿磯村市之丞加州石川郡大野村長之丞無人島漂着一件」(1 冊、【写本】所浅野図書館)／○「天明漂流記」(1 冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「漂流人嶋物語」(1 冊、【写本】所同志社大学(夢廻屋宋蝶、天保 2 年写))／「漂流無人嶋始末」(1 冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書 48))／「無人島帰着之次第」(1 冊、著市之丞・長兵衛、【写本】所東京大学)／「無人島之記」(1 冊、著小直久等、【写本】所国立国会図書館)。

No. 162

【漂流年】天明 8 (1788) 年 【帰国年】寛政 2 (1790) 年 【船籍地】松前松ヶ崎 【船名】松栄丸(彦六船)〔長吉船〕【漂流地点】八戸沖 【漂着地】広東省潮州府〔清国惠州付近〕【出港地】松前 【乗組員】善吉・伊兵衛・長吉 【乗組員数】15 【帰国ルート】広東省潮州府〔清国惠州付近〕－乍浦－長崎

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、戌式番船同三番船ヨリ陸奥出羽越後之者送来事)／林糧「通航一覽」(二二〇、近聞寓筆)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、戌二番同三番船ヨリ陸奥出羽越後ノ者送来)／「松栄丸唐国漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「奥人支那に漂流し商船に便乗して帰国す」(石井研堂訳『日本漂流譚』二)。

《同志社》○「松栄丸唐国漂流記」(【写本】所国立国会図書館(鶯宿雑記の内))／「漂流事略」(成天明 8 年、【写本】所九州大学九州文化史研究所(漂流記集の内))／「漂流民伊兵衛口上書写」カ (1 冊、成寛政 3 年、【写本】所京都大学)／「松前出帆漂流話」(成寛政 3 年、【写本】所国立国会図書館(天竺徳兵衛漂流記・無名国江漂流譚と合 1 冊)、〔追加《北方》))。

《北方》「松前一二印松栄丸長吉船漂流一件控」(成寛政 3 年、【写本】)／「松前船漂流大清着岸之事」(【写本】)。

No. 163

【漂流年】寛政元（1789）年 【帰国年】寛政9（1797）年 【船籍地】日向国諸県郡志布志浦 【船名】住吉丸（中山三右衛門船）〔中山三左衛門持船〕 【漂流地点】日向灘 【漂着地】鳥島 【乗組員】栄右衛門〔栄左衛門〕 【乗組員数】6 【帰国ルート】鳥島－青ヶ島－八丈島－江戸 【関係船】鳥島で土佐船（No.160）と肥前船（No.161）の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》曾槃「無人島談話」（石井研堂編『校訂漂流奇談全集』）／松野尾章行「皆山集」（無人島物語写之事）／「鳥島物語」（石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、仲原善忠訳『日本漂流奇談』）／「漂流日記」（石井研堂編『校訂漂流奇談全集』）／「無人しまへ漂着之もの吟味書」（荒川秀俊編『近世漂流記集』）／「無人島漂流記」（荒川秀俊編『異国漂流記集』）／「無人島漂流記」（池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流）／「無人島漂流口書」（石井研堂編『校訂漂流奇談全集』）／「無人嶋ヨリ帰国之者御調書上留並八郎大明神由来書共」（荒川秀俊編『異国漂流記集』）／「土佐・大阪・日向の船無人島に漂着、合流帰還の物語」（吉岡永美訳『漂流船物語の研究』）。

《同志社》「寛政九年漂流并無人嶋より帰着之次第」（1冊、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫）／「南洋無人島漂流記」カ（1冊、著栄右衛門等、【写本】所東北大学狩野文庫）／「南洋無人嶋漂流記」カ（成寛政元年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫（漂流記の内））／「日州志布志船漂流記」（1冊、【写本】所国立国会図書館（漂流記叢書50））／「漂流并無人島より帰着之次第」カ（1冊、成寛政9年、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫）／「無人嶋へ漂着一件」（1冊、【写本】所国立国会図書館（漂流記叢書49））／「無人島ヨリ帰着之次第并口書之写」カ（1冊、【写本】所礪川堂文庫）。

No. 164

【漂流年】寛政2（1790）年 【船籍地】大坂折屋町 【漂流地点】紀州沖 【漂着地】八丈島

【出典】《加藤》「撰州大坂折屋町 小堀屋庄左衛門 浦手形 八丈嶋」（段木一行「伊豆諸島における漂着船の処置」）。

No. 165

【漂流年】寛政3（1791）年 【船籍地】加賀国石川郡本吉 【船名】住吉丸（明翫屋徳兵衛船） 【漂流地点】経ヶ崎沖 【漂着地】朝鮮慶尚北道慶州地内甘浦 【乗組員】平四郎 【乗組員数】5

【出典】《川合》。

No. 166

【漂流年】寛政5（1793）年 【帰国年】文化元（1804）年 【船籍地】陸奥国牡鹿郡石巻 【船名】若宮丸（米沢屋平之丞船） 【漂流地点】仙台沖 【漂着地】アリューシャン列島 【出港地】石巻 【乗組員】平兵衛・善六・津太夫・左平〔佐兵衛〕・儀兵衛〔儀平〕・太郎・米沢平之丞 【乗組員数】16 【帰国ルート】アリューシャン列島－ヤクーツク－イルクーツク－モスクワ－ペテルブルグ－長崎 【関係船】イルクーツクで伊勢船神昌丸（No.159）の漂流者の世話になる 【備考】ペテルブルグでアレキサンドル一世に引見された。水主の善六らは帰化

【出典】《川合》。《加藤》大槻茂質「環海異聞」（石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、三島才二編『南蛮紀文選』、三島才二編『南蛮稀聞帳』、梅森三郎『日露国交史料』、大友喜作編『環海異聞（北門叢書第四冊）』、ヴェン・ゴレグリヤド『大槻茂質・志村弘強著 環海異聞卷之八 言語』、宮崎栄一編『環海異聞』、杉本つとむ解説『環海異聞 本文と研究』、小原大衛訳『寛政年間仙台漂客世界周航実記』）／大槻茂質「北辺探事」（大友喜作編『北槎遺聞・北辺探事（北門叢書第六冊）』）／小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」（一三、魯西亜船到港之部附漂流人送来之事）／羽太正養「休明光記附録」（三、ウルツプ嶋赤人より差出候漂流人より書状之儀ニ付同書）／林煌「通航一覽」（二七五、長崎志統編、落穂雑談一言集、北海鳥船記）／林煌「通航一覽」（二七七、長崎志統編、長崎実録大成、文化甲子魯西亜船渡来記）／林煌「通航一覽」（二八〇、

長崎志統編、文化甲子魯西亜船渡来記、環海異聞)／林燿「通航一覽」(二八二、栗園漫抄[崎陽日録]、魯西亜一件、長崎秘記、環海異聞)／林燿「通航一覽」(三一八、長崎志統編、魯西亜一件、魯西亜国漂流奥民口実、魯西亜新紀聞、外国叢書、北海烏船記)／林燿「統通信全覽」(類輯之部船艦門漂流、魯国船仙台漂流民護送長崎へ渡来一件)／松浦静山「甲子夜話三篇」(二八、賤夫幸太夫并何方かの魯西亜漂到の話、付魯帝夫婦の肖像[『環海異聞』鈔])／松浦東溪「長崎古今集覽」(一一、魯西亜国入港見聞録・魯西亜国へ漂流人四人口書之扣・漂流人持戻貫物之品改帳・漂流人申上候異国様子書)／「異国江漂流仕候陸奥国之者四人口書」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「外国漂流記」(齊藤笹舟『遭難三隻』)／「東夷竊々夜話」(一、ヲロシヤ国より帰朝日本人より聞書写(神宮司庁『古事類苑』外交部))／「犯科帳」(八一--一(森永種夫『犯科帳』六))／「北海異談譜」(『百万塔』一一)／岡本柳之助編『日魯交渉 北海道史稿』(中、陸奥仙台領漂流民ノ事蹟・魯西亜国使節れさのつと長崎に来ル・魯西亜使節れさのつと唐太ニテ我国ノ廻船ヲ追フ)。

《同志社》○「異国江漂流仕候陸奥国之者四人口書」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書12)、国会図書館支部内閣文庫(「魯西亜国漂流奥民口実」)、神戸大学、東京大学本居文庫、市立函館図書館(露使レサノット来朝一件の内)、お茶の水図書館小笠原文庫、岡山大学池田家文庫(土州人漂流記等と合)、東北大学(「漂流真事記」、文久2年写))／「異国奇聞」(2冊、【写本】所国立国会図書館)／「異国漂流記」(1冊、【写本】所九州大学)／「石巻水主魯斎亜視帰話」(1冊、成嘉永7年、【写本】所お茶の水図書館成篁堂文庫)／「奥州人魯西悪国漂流物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書55))／「奥州漂流民左平爰書並ニ長崎之尹副書」(1冊、【写本】所市立函館図書館(嶮谷叢説函館本1))／「おろしや国江漂流人口書留」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書54))／「ヲロシヤ漂流記 寛政5年 西蛮風説記(寛政9年)」カ(2巻、【写本】所高知県立図書館(天保6年))／「外国漂流記」カ(1冊、【写本】所九州大学(文化3年写))／○「環海異聞」(15巻首1巻16冊、成文化4年、著大槻茂質(磐水)問・津太夫等答、志村弘強(石溪)記、【写本】所国立国会図書館(7冊)(漂流記叢書51)、国会図書館支部内閣文庫(10冊)(6冊)(3部)、国会図書館支部静嘉堂文庫(6冊)(3冊)(筆熊手13-15)、国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫、宮内庁書陵部(手島惟敏写9冊)(8冊)、東京国立博物館(文政2年鳥居平八郎写4冊)(天保11年写5冊)、岡山大学池田家文庫(6冊)、九州大学(9巻9冊)(16冊)(7冊)(3巻3冊)、京都大学(16冊)(15冊)(7冊)(3冊)、京都大学富士川文庫(巻1・6・7・9・11)、東京教育大学(9冊)、慶應義塾大学(5冊)、慶應義塾大学富士川文庫(10冊)、神戸大学(16冊)(8冊)、国学院大学(13巻17冊)(8巻8冊)、早稲田大学(2部)、東京大学(16冊)(8巻8冊)、東北大学狩野文庫、北海道大学、名古屋大学神宮皇学館文庫、県立秋田図書館、大阪府立図書館(首巻・巻5・13-15欠、10冊)(8冊)(1冊)、京都府立図書館(巻1・8欠、11冊)、北海道庁(15冊)、県立長崎図書館(6冊)(2冊)、東京都立日比谷図書館加賀文庫(文化4年写5巻6冊)、東京都立日比谷図書館近藤文庫(6冊)、東京都立日比谷図書館東京誌料、宮城県図書館(5冊)、宮城県図書館伊達文庫、広島市立浅野図書館(17冊)、西尾市立図書館岩瀬文庫(10冊)、市立刈谷図書館(4冊)、長崎市立長崎博物館、市立函館図書館(5冊)、名古屋市蓬左文庫(8冊)(3冊)、鳥取宇倍神社、大橋図書館(3冊)、彰考館文庫(欠本、1冊)、尊経閣文庫(6冊)、竜野文庫(文化4年写6冊)、成田図書館(2冊)、阪急学園池田文庫(14冊)、佐倉中学校、{旧三井本居}、仙台伊達家、延岡内藤家(7冊)、萩毛利家、{京外大}(4冊)(5冊)(10冊)、同志社大学(16冊)(8冊)(3冊)、〔追加《北方》16巻9冊〕、【活字】石井研堂校訂『環海異聞』(叢文社、昭和51年))／「環海異聞(大槻茂質問)」カ(【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(「漂客記聞」、15巻7冊)、香川大学神原文庫(16巻10冊)(巻1欠、15冊)、東北大学狩野文庫(「漂客記聞」、巻1-4・首巻、2冊)、龍谷大学(15巻4冊)、岩手県立図書館(「漂客紀聞」、1冊)、岡山県総合文化センター(嘉永7年写5冊)、北海道庁(「漂客紀聞」、15巻5冊)、足利学校遺跡図書館(「環海紀聞」、弘化2年北爪尚卿・長谷川宗一写15巻9冊)(「環海紀聞」、異本、10巻5冊)、豊橋市立図書館(15巻4冊))／「寒沢秘説」(1冊、著松平定信、【写本】所東京大学史料編纂所(松平定晴蔵本写)、桑名松平家)／「仙台御来船異邦江漂流録」カ(1冊、【写本】所礪川堂文庫)／「仙台左平津太夫漂流」(3冊、【写本】所同志社大学(海表異聞、74~76))／「仙台船ロシア漂流聞書」カ(1冊、別「仙台船魯西亜漂流聞書」、【写本】所お茶の水図書館成篁堂文庫(文久3年写)、{旧}彰考館文庫)／「仙台船魯西亜漂流書」カ

(1冊、著永井惣兵衛編、【写本】所明治大学(文化5年写)／「仙台漂流民從魯西亜所贈之状」カ(1冊、【写本】所市立函館図書館(獬谷叢説 函館本1))／「津太夫佐兵衛よりの聞書写」(1冊、【写本】所国立国会図書館)／「漂南聞略」カ(3冊、別「漂南紀略」、著大槻茂質、【写本】所国立国会図書館、国会図書館支部静嘉堂文庫(続海外異聞の内))／「漂流記」(2巻2冊、【写本】所市立米沢図書館林泉文庫)／「漂流人異国辺歴之話」カ(【写本】所北海道庁(魯西亜国船渡米之始末と合1冊))／「文化元年魯西亜国船渡来始末並日本漂流人異国編歴之話」カ(1冊、【写本】所大阪府立図書館)／「文化錦」カ(2冊、別「西洋亜細亞州之内魯西亜国舟渡来始末並日本漂流人異国辺歴之話」、【写本】所国立国会図書館)／「北海漂流民見聞録」(1冊、【写本】所早稲田大学、〔追加《北方》])／「美世利国漂泊録」カ(1冊、【写本】所国立国会図書館(「漂流記叢書」58))／「陸奥国若宮丸漂流記」(1冊、【写本】所宮城県図書館伊達文庫)／「欧羅巴国漂流記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(明治写、漂流記叢書56))／「魯国へ漂流の記」(1冊、成寛政5年、【写本】所{旧}彰考館文庫)／「魯西亜国見聞記」(3冊、【写本】所{京外大})／「魯西亜国船渡来始末並日本漂流人異国遍歴之話」カ(1冊、別「魯西亜国船渡来之始末並日本漂流人異国辺歴之話」、成文化2年、【写本】所九州大学(「西洋欧羅巴州之内魯西亜国舟渡来始末並日本漂流人異国辺歴之話」)、早稲田大学、東北大学狩野文庫(1冊(漂海叢書3)、大阪府立図書館(「文化元年魯西亜国船渡来始末並ニ日本漂流人異国遍歴之話」)、北海道庁、東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「魯西亜國漂客紀聞」(首巻序例附言目録1巻15巻16冊、【写本】所龍谷大学)／「魯西亜国漂流奥民口実一異国に漂流した陸奥国之者四人口書」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(寛政4至文化元年写))／「魯斎垂視婦話」(1冊、成文化元年、著津太夫等、【写本】所函館税関、※北海道史料所在目録による)／「魯西亜秘録」カ(1冊、成国会図書館支部静嘉堂文庫(文化2年写))。《国書補遺》「石巻米沢平之丞漂流記」(1冊、成文化3年、【写本】所市立米沢図書館林泉文庫)。
《古典》「外国漂流記」カ(【写本】所玉川大学(元治元年写、1冊))／「環海異聞」(15巻首1巻16冊、成文化2年、著大槻玄沢(大槻茂質)問、津太夫等答、志村蒙庵(志村弘強)記、【写本】所大阪女子大学(文化2年写、2・4・8-11巻存)、新潟大学佐野文庫(15巻、1冊)、福岡県立伝習館高等学校対山館文庫(「環海異聞抜書」1巻、近代写、1冊)、大洲市立図書館矢野文庫(14巻存、巻15欠、14冊)(巻6存、1冊)、久留米市民図書館(近世末期写、巻5-12存、4冊)(近世末期写、巻6・7・10-15存、5冊)(「漂客記聞」、首1-3・8・9存、3冊)、市立弘前図書館(15巻、安政4年写、7冊)(15巻、5冊)、秋月郷土館(1冊)、射和文庫(14巻、巻2・14欠、15冊)、研医会図書館(16冊)、【版本】所玉川大学(15巻、5冊)、和歌山大学紀州藩文庫(15巻首1巻、6冊、朱校あり)、栃木県立図書館黒崎文庫(序・1-15、10・11欠、14冊)、※《同志社》「環海異聞」と同書カ)。
《北方》「俄羅斯亜雑話1-4」(4冊、成文化2年序、著武田孟文)／「寛政五年欧羅漂流記」(成文化3年頃、【写本】)／「永井惣兵衛聞書略(津太夫佐兵衛兩人話)」(【写本】)／「肥前長崎表江魯西亜国之船入津一件書」(成文化2年、【写本】、※「異国漂流仕候陸奥国ノ者四人口書」を付す)／「文化元甲子年九月長崎江魯西亜船渡来之記」(【写本】)／「文化元甲子年九月七日ヲロシヤ国船長崎表江来朝一件之事」(【写本】)／「文化元年魯西亜船長崎入港始末」(【写本】)／「文化元甲子年九月七日ヲロシヤ国船長崎表江来朝一件之事」(【写本】)／「北漂記 後編上・中・下」(3冊、成文化6年、著聴夢山人、【写本】)／「陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亜漂流之事」(成文化3年、著馬場安五郎、【写本】)／「魯西亜新記聞」(成文化2年、【写本】)／「魯西亜国漂流記」カ(成文化2年、【写本】、※文化3年成立の同名書とは別物)／「魯西亜国漂流記」(成文化3年、著馬場安五郎、【写本】、※文化2年成立の同名書とは別物)／「魯西亜国漂流之訳並日本へ帰国海路の様子訳」(成文化2年、【写本】)／「魯西亜使節長崎江到来一件」(【写本】)／「魯西亜船渡海実録」(成文化2年、【写本】)／「魯西亜談」(成文化6年頃、【写本】、※内題は「魯西亜船渡来之一件」とあり)／「魯西亜漂流記」(成文化2年、【写本】)／「魯西亜視婦話」(【写本】、【活字】『若宮丸漂流関係資料 第1輯』(石巻若宮丸漂流民の会、平成22年刊))。
《海洋》「魯西亜國船渡來記 乾・坤」(2冊、【写本】)。
《早稲田》「崎陽雜記」(1冊、【写本】)。
《その他》「異国漂流記 全」(【活字】『仙台藩御山守史料 御山守残間家文書』(宝文堂出版、昭和60年))。

No. 167

【漂流年】寛政6(1794)年 【帰国年】寛政7(1795)年 【船籍地】奥州名取郡閑上浜 【船名】大乘丸(彦十郎船) 【漂流地点】安房国沖 【漂着地】安南国 【乗組員】清蔵・清之丞・源三郎 【乗組員数】16 【帰国ルート】安南国-マカオ-広東-乍浦-長崎-江戸 【備考】卯九番唐船・卯十番唐船として長崎に入港 【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、卯九番船同拾番船ヨリ仙台之者送来事)／近藤守重「安南紀略藁」(一、甲寅漂民始末)／枝芳軒静之「南瓢記」(荒川秀俊編『異国漂流記続集』)／林糧「通航一覽」(一七八・一八四、外国叢書載阿媽港記、落穂雑談一言集、野翁物語、嘆詠余話)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、卯九番同拾番船ヨリ仙台ノ者来米)／「南漂記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「犯科帳」(六九-五六(森永種夫『犯科帳』五))。

《同志社》「安南国江漂流仕候陸奥国之者九人口書」(1冊、成寛政8年、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫(長崎市役所蔵本写)、長崎市役所)／「陳世徳筆語船頭清蔵安南国物語」(【写本】所京都大学(増訂海外異聞の内))／○「南瓢記」(5巻5冊、成寛政9年序、同10年刊、著枝芳軒静之、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(「南漂記」、1冊)、東北大学(「南漂記」、東北大学狩野文庫(1冊)、【版本】所国立国会図書館(漂流記叢書3)(5巻1冊)、国立国会図書館亀田文庫、京都大学、東京教育大学、神戸大学、早稲田大学、東北大学狩野文庫(巻5補写)、岡山県総合文化センター(「異国奇譚南瓢記」、京都府立図書館、東京都立日比谷図書館近藤文庫、市立刈谷図書館、栗田文庫、同志社大学、〔追加《古典》横浜市立大学三枝博音文庫(5巻、5冊)、〔追加《海洋》1冊)、【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫))／「漂客紀譚」(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「漂民始末」カ(1冊、著近藤守重編、【写本】所〔旧〕彰考館文庫)／「漂流記」(1冊、著頼惟完、【写本】所広島市立浅野図書館、※陳世徳ばなし・船頭清蔵安南ばなしを収む)。

《早稲田》「南漂安南記事」(1冊、成明治16年序、著源三郎原書・曾嘯雲訳評)／「南漂記」(1冊、【版本】、※南瓢記とほぼ同一の版)。

No. 168

【漂流年】寛政7(1795)年 【船籍地】琉球 【漂着地】土佐国幡多郡下田浦 【出港地】清国福建省 【乗組員】親垣親雲上・伊良皆親雲上・坐波・儀間筑登之・石川親雲上 【乗組員数】31 【帰国ルート】土佐国幡多郡下田浦-日向国細島 【出典】《川合》・《加藤》関田駒吉「土佐漂着船に関する文献」。

No. 169

【漂流年】寛政7(1795)年 【帰国年】寛政9(1797)年 【船籍地】松前西在突符村 【船名】金右衛門船 【漂流地点】奥尻島の突符村地光 【漂着地】満洲吉林地方の魚皮韃境 【出港地】蝦夷地奥尻島 【乗組員】孫太郎・安次郎・重兵衛 【乗組員数】3 【帰国ルート】満洲吉林地方の魚皮韃境-北京-蘇州-乍浦-長崎 【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、巳式番船ヨリ松前之者送来事)／林糧「通航一覽」(二三六、韃国漂流奥民口実、北海島船記、長崎志統編)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、巳二番船ヨリ松前ノ者送来)／宮崎成身「視聽草」(四集之一〇、韃国江漂流仕候奥州松前之者三人口書等)／「犯科帳」(七〇-四八(森永種夫『犯科帳』五))／「松前人韃韃漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)。

《北方》「赤蝦夷風説記並奥州松前領漂流人口上之写」(【写本】)／「奥州松前領漂流人口上之写」(成寛政10年、【写本】)。

No. 170

【漂流年】寛政7(1795)年 【帰国年】寛政10(1798)年 【船籍地】陸奥国土佐郡青森大町 [松前箱館]

【船名】徳永丸(久保屋儀兵衛船)[舩屋喜衛門手船] 【漂流地点】箱館沖 【漂着地】バタン諸島の一小島 【出港地】下蝦夷地 【乗組員】久保屋儀兵衛[久保義兵衛]・巳之助・万次郎・吉太郎・円次郎 【乗組員数】5 【帰国ルート】バタン諸島の一小島ーバタン島ールソン島のカガヤンーマニラーカヴィテーマカオーー広東ー乍浦ー長崎ー江戸

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、午四番船同八番船ヨリ陸奥出羽之者送来等)／林樵「通航一覽」(二一九、長崎志統編)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、午四番同八番船ヨリ陸奥出羽ノ者送来ル)／「青森港儀兵衛漂流始末口書」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「犯科帳」(七一-八七(森永種夫『犯科帳』五))。

《同志社》「儀兵衛漂流記」(1冊、【写本】所日本学士院)／「久保義兵衛漂流記」(1冊、成寛政7年、【写本】所天理図書館古義堂文庫(「松前箱館名前之船徳永丸船頭久保義兵衛漂流記」、伊藤東里写))／「唐土漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、※寛政7-11、寛政十一年未九月長崎ニ而御穿儀口上書写・青森港儀兵衛等漂流始末口書を収む)、「漂流人口書」(1冊、成寛政11年、【写本】所桑名松平家)。

《北方》「漂流人口書写」(成寛政12年、【写本】)。

《海洋》「羽州新屋敷村吉太郎漂流之聞書」(1冊、【写本】)。

No. 171

【漂流年】寛政10(1798)年 【帰国年】寛政10(1798)年 【船籍地】石見国カ 【漂着地】朝鮮国慶尚道慶州の内甘浦 【乗組員数】6カ 【帰国ルート】朝鮮国慶尚道慶州の内甘浦ー対馬藩ー長崎ー生国

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、対州ヨリ朝鮮漂着之者送来事)／林樵「通航一覽」(一三五、長崎志統編)／松浦東溪「長崎古今集覽」(一二、対州ヨリ朝鮮漂着ノ者送来)。

No. 172

【漂流年】享和2(1802)年 【帰国年】文化5(1808)年 【船籍地】蝦夷箱館奥山 【船名】順吉丸(角屋吉左衛門船) 【漂流地点】仙台沖 【漂着地】台湾 【乗組員】文助 【乗組員数】9 【帰国ルート】台湾ーチョプラン島ー安平ー厦門ー福州ー乍浦ー長崎 【関係船】安平で薩摩船永柳丸(No.177)の漂流者と一緒になる 【備考】七番唐船として長崎入港

【出典】《川合》。《加藤》秦貞廉「享和三癸亥 漂流台湾チョプラン島之記」(植松安・山中樵「享和三癸亥漂流台湾チョプラン嶋之記」)／「犯科帳」(八四-五五(森永種夫『犯科帳』六))。

《同志社》「享和三年癸亥漂流台湾チョプラン嶋之記」(台北、台湾叢書会、昭和14年、82, 8, 17 p、図15(愛書、第12輯))／「順吉丸漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(享和2至文化6写))／「文化五辰年当十一月入津之辰七番唐船より送来候外国漂流日本人申口書抜」(1冊、【写本】所鹿児島県立図書館)。

No. 173

【漂流年】享和3(1803)年 【船籍地】陸奥国北郡牛滝村[南部領牛滝村福浦村] 【船名】慶祥丸(源右衛門船) 【漂流地点】九十九里浜沖 【漂着地】千島列島ホロモシリ島 【出港地】箱館 【乗組員】継右衛門 【乗組員数】14 【帰国ルート】千島列島ホロモシリ島ーペトロパウロフスクーエトロフ島 【関係船】ペトロパウロフスクで通訳する陸奥船若宮丸(No.166)の漂流者に会う 【備考】エトロフ島のシベトロ番屋に出頭した

【出典】《川合》。《加藤》羽太正義「休明光記」(七、南部領牛滝村船方の者とも魯西亜国へ漂流帰帆せし事)／林樵「通航一覽」(三一九、南部商船ホロムシリ島漂流記、漂流雑話)／宮崎成身「視聽草」(続七集之一、文化甲子ホルムシリ国漂流(南部領船頭継右衛門等申口))／「漂客東察加出奔記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／岡本柳之助編『日魯交渉 北海道史稿』(中、南部領、牛滝村、船頭継右衛門等漂流シテ魯領ニ

至り、自ラ千島諸島ヲ経テ帰朝ス)。

《同志社》「牛泉秘説」(1冊、【写本】**所**東京大学史料編纂所、桑名松平家)／「南部商船ホロムシリ島漂流記」(1冊、**別**「南部領牛滝村福浦村慶祥丸ホロムシリ島江漂着ニ而エトロフ島シベトロ江渡来之一件・漂流人共口書写」、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(2部)、〔追加《北方》【写本】(「南部商船ホロムシリ島漂流記)〕、【活字】『通航一覽 第8』(東京国書刊行会、大正2年))／○「漂客東察加出奔記」(**別**「文化元年魯西亜属島内ホロムシリ島へ漂流ノ口書」、**成**文化4年、【写本】**所**国立国会図書館(魯西亜国漂流ニ実記の内)、東北大学狩野文庫(漂海叢書2))／「漂民継右衛門以下之儀菊地惣内上書」カ(【写本】**所**市立函館図書館(嶮谷叢説、太田本1))。

《北方》「蝦夷諸島新図 自占守至得撫」(**成**文化4年、※「江登呂府島ヨリカムサスカ迄島々ノ図」とほとんど同じ)／「江登呂府島ヨリカムサスカ迄島々ノ図」(**成**文化4年、【写本】)。

《海洋》「享和漂民記」(1冊、【写本】)。

No. 174

【漂流年】文化2(1805)年 【船籍地】日本 【漂着地】アラスカのシトカ付近 【帰国ルート】アラスカのシトカ付近ーロシア人が救助ーヤポンスキー島ー蝦夷の沿岸
【出典】《川合》。

No. 175

【漂流年】文化3(1806)年 【帰国年】文化4(1807)年 【船籍地】大坂安治川 【船名】稲若丸(伝法屋吉右衛門船) 【漂流地点】伊豆下田沖 【乗組員】新名屋吟蔵・文右衛門・貞五郎・喜三郎・惣次郎・和左蔵・松次郎・平原善松 【乗組員数】8 【帰国ルート】アメリカ船が救助ーハワイーマカオーー広東ーマカオーバタビアー長崎ー故郷

【出典】《川合》。《加藤》林樵「通航一覽」(三二二、文化丁卯巫墨利加船渡来記)／「安芸国木谷浦平原善松夷蛮漂流帰国録」(村上貢「夷蛮漂流帰国録」)／「芸州善松北米漂流譚」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「夷蕃漂流帰国目録」(栗原朋信・吉原博見編「夷蕃漂流帰国目録」)／「夷蛮漂流帰国録」(三原郷土文化研究会編『三原郷土資料』第一三集)／「犯科帳」(八三-九(森永種夫『犯科帳』六))／「善松漂流記事」(実藤恵秀編「芸州木谷善松漂流記事」)。

《同志社》○「夷蛮漂流帰国録」(1冊、**著**登志陽水、【写本】**所**市立三原図書館、浅野図書館、【活字】栗原明信・吉原博見『夷蛮漂流帰国目録〔史料紹介〕』(海事史研究10、昭和43年))。

No. 176

【帰国年】文化4(1807)年 【船籍地】遠江カ
【出典】《川合》。

No. 177

【漂流年】文化4(1807)年 【帰国年】文化5(1808)年 【船籍地】鹿児島藩 【船名】永柳丸(鹿児島藩主松平薩摩守の手船) 【漂流地点】南海 【漂着地】台湾 【出港地】山川 【乗組員】伊勢貞右衛門・源五郎 【乗組員数】22 【帰国ルート】台湾ー安平ー厦門ー福州ー乍浦ー長崎 【関係船】安平で箱館船順吉丸(No.172)の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」(八四-四五(森永種夫『犯科帳』六))。

No. 178

【漂流年】文化6(1809)年 【帰国年】文化7(1810)年 【船籍地】大坂山本町 【船名】天徳丸(油屋源蔵船) [富田屋三次郎船] 【漂流地点】遠州灘 【漂着地】台湾 【乗組員】三次郎・新助・新蔵 【乗組員

数】14 【帰国ルート】台湾—清国—長崎

【出典】《川合》。《加藤》宮崎成身「視聽草」(続七集之一、大湾漂着(文化六年天徳丸))／「神嶋外浦要吉台湾漂流一件」(石井謙治「天徳丸台湾漂流記二編—「漂民帰郷録」と「神嶋外浦要吉台湾漂流一件」一)／「芸州豊田郡生口島瀬戸町向島屋善蔵異国漂流略記」(村上貢「史料紹介 台湾漂流記」)／「犯科帳」(八六-五四～五六、八七-六七・七二(森永種夫『犯科帳』六))／「漂民帰郷録」(石井謙治「天徳丸台湾漂流記二編—「漂民帰郷録」と「神嶋外浦要吉台湾漂流一件」一)。

《同志社》「大坂安治川岡田屋源蔵借屋新助漂流記」(1冊、【写本】所天理図書館)／「大坂油屋源蔵船台湾漂流記(仮題)」(1冊、【写本】所岡山大学)／「天徳丸漂流始末口写 附 漂流説語」(1冊、【写本】所早稲田大学)／「漂民帰郷録」(1冊、【写本】所松平公益会)／「漂流人豊田郡瀬戸田船乗善蔵異国見聞筆記」カ(1冊、【写本】所浅野図書館)／「文化六年台湾漂流記」カ(1冊、【写本】所東京教育大学)／「文化六年天徳丸台湾漂着記」(1冊、【写本】所大阪府立図書館)。

No. 179

【漂流年】文化6(1809)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】朝鮮

【出典】《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、対州ヨリ朝鮮漂着之者送来事)。

No. 180

【漂流年】文化7(1810)年 【帰国年】文化8(1811)年 【船籍地】薩摩国鹿児島下町 【船名】長久丸(松村良右衛門船) 【漂着地】清国江南 【乗組員】貞次郎 【乗組員数】26 【帰国ルート】清国江南—長崎

【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」(八六-二九(森永種夫『犯科帳』六))。

《同志社》「清国漂流図」(3軸、著森山貞次郎撰・西清美等画、【写本】所早稲田大学)。

No. 181

【漂流年】文化7(1810)年 【船籍地】琉球 【漂着地】五島奈良尾

【出典】《川合》。

No. 182

【漂流年】文化7(1810)年 【帰国年】文化10(1813)年 【船籍地】摂津国御影村 【船名】歡喜丸〔勸亀丸〕(加納屋十兵衛船) 【漂流地点】紀州沖 【漂着地】カムチャッカ半島 【出港地】大阪 【乗組員】平助・与茂吉・久蔵・吉五郎 【乗組員数】16 【帰国ルート】カムチャッカ半島—オホーツク…①与茂吉：クナシリ島・②久蔵：箱館 【関係船】オホーツクに五郎次がいた

【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽」(三〇七、遭厄日本紀事附録、曹厄日本紀事)／林糧「通航一覽」(三二〇、靖北録)／「東夷竊々夜話」(四(神宮司庁『古事類苑』外交部))／「魯西亜国漂流記聞書」(木崎良平「安芸の久蔵の『魯西亜国漂流記聞書』」)／「魯西亜国漂流聞書」(村上貢・小田実「芸州川尻村久蔵ロシア国漂流記」)／岡本柳之助編『日魯交渉 北海道史稿』(中、利格児ゑとろふノ番人五郎次及漂流人六人ヲ放還ス并ニ高田屋嘉兵衛魯鑑ニ捕ハル、事・扨捉島番人五郎次ノ事及其聞書并ニ漂流民六人ノ事蹟)／「摂州御影村与茂吉難船物語」(藤木喜一郎・新見貫次・増田五良訳『海の無残な物語—ふるさとびとの漂流記—)。

《同志社》「東韃漂談」(2巻4冊、著一色広信等、【写本】所東京教育大学(稿本)、龍谷大学)。

《北方》「魯西亜国漂流聞書」(成文化12年カ、著久蔵、【写本】)／「魯西亜国漂流吉五郎申上書」(成文化10年、【写本】)。

No. 183

【帰国年】文化8(1811)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】24カ 【帰国ルート】朝鮮—長崎 【備考】対馬侯より護送されて長崎に到着

【出典】《川合》。

No. 184

【漂流年】文化9(1812)年 【帰国年】文化10(1813)年 【船籍地】種子島カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員】三右衛門・助右衛門 【帰国ルート】朝鮮→帰国

【出典】《川合》。

No. 185

【漂流年】文化9(1812)年 【帰国年】文化13(1816)年 【船籍地】鹿児島藩 【船名】永寿丸(鹿児島藩主松平豊後守斎興の手船) [喜三右衛門船・喜三左衛門船] 【漂流地点】紀州沖 【漂着地】千島列島のハラマコタン島 【出港地】薩摩 【乗組員】喜三左衛門 [喜左衛門]・佐助・角治 【乗組員数】25 【帰国ルート】千島列島のハラマコタン島→アイヌ人が保護→ペトロパウロフスク①→オホーツク→ペトロパウロフスク②→ウレッジ島→エトロフ島→江戸 【関係船】ペトロパウロフスク②で尾張船督乗丸(No. 188)の漂流者と一緒にいる

【出典】《川合》。《加藤》川上親信「漂海紀聞」(木崎良平・井田好治編『漂海紀聞—文化九・十三年薩摩永寿丸カムチャッカ漂流記—附・玉里文庫所蔵洋学関係書籍目録』)／木場貞良「魯西亜漂流記」(木崎良平『永寿丸魯西亜漂流紀』)／林糧「通航一覽」(三二一、岡田某所蔵留書、靖北録)／「永寿丸魯国漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「川内川口船問屋間島永寿丸漂流記」(浜田亀峰『鹿児島県川内郷土史』下巻)／「漂民口書」(木崎良平『永寿丸魯西亜漂流紀』)／「魯西亜国漂着様子書」(浜田亀峰『鹿児島県川内郷土史』下巻、木崎良平『永寿丸魯西亜漂流紀』)。

《同志社》○「漂海紀聞」(5巻5冊、著川上親信編、【写本】所鹿児島大学玉里文庫)／「北際漂譚」(5巻付録1巻、成文化8年、著川上親信編、【写本】所宮内庁書陵部(古賀煜等写3冊)、東北大学狩野文庫(巻1、1冊)、{旧}彰考館文庫(5冊)、桑名松平家(5冊)、〔追加《古典》大阪女子大学(5冊)、伊達市開拓記念館(6冊)])／「魯西亜国漂着始末口上書」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書59))。

《北方》○「永寿丸魯国漂流記」(著喜三左衛門等、【活字】『通航一覽 第8』)／「薩州手船六百九拾石積永寿丸船頭喜三左衛門水主佐助角治申口」(成文化13年、【写本】)／「西海航路図(仮題)」(軸物1巻、成文化初年カ)／「拂郎察国魯西亜国戦記」(成文化9年、【写本】、※末尾に「附録」として薩摩船永寿丸船頭喜三左衛門の語った漂流譚「漂民間書」(3丁)を付す)。

《早稲田》「漂流之記」(1冊、【写本】)。

No. 186

【漂流年】文化10(1813)年 【船籍地】土佐国福島浦 【漂流地点】熊野灘 【漂着地】八丈島

【出典】《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 187

【漂流年】文化10(1813)年 【船籍地】日本 【出港地】蝦夷 【乗組員数】35 【帰国ルート】イギリス船が救助→ノーアホーク・サウンドのロシア植民地 【備考】文化10年はイギリス船が日本船を救助した年代カ

【出典】《川合》。

No. 188

【漂流年】文化10(1813)年 【帰国年】文化13(1816)年 【船籍地】尾張国名古屋納屋町 [紺屋町] 【船名】督乗丸(小島屋庄右衛門船) [長右衛門船] 【漂流地点】遠州灘 【出港地】江戸 【乗組員】重吉こと長右衛門・要吉・半兵衛・音吉 【乗組員数】14 【帰国ルート】イギリス船が救助→サンタ・バーバラ→シ

トカーベトロパウロフスクーウルップ島ーエトロフ島ー江戸 【関係船】ペトロパウロフスクで薩摩船永寿丸 (No.185) の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》池田寛親「船長日記」(住田正一編『海事史料叢書』第五卷、石井研堂編『異国漂流奇譚集』督乗丸船長日記、玉井幸助校訂・解説『船長日記』、名古屋海洋文化協会編『尾張船督乗丸漂流並に船頭重吉生還記録』、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流、岸尚洋訳『重吉漂流記』、北条明直訳『船長日記』)／林燿「通航一覧」(三二一、岡田某所蔵留書、靖北録)／「尾佐竹本督乗丸一件」(服部聖多朗『尾張漂流譚』)／「督乗丸魯国漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「尾州知多郡半田村重吉物語」(服部聖多朗『尾張漂流譚』)／「尾州半田村百姓吹流之一件」(服部聖多朗『尾張漂流譚』)／「松前奉行支配調下役村上貞助エトロフ島詰相にて漂流人重吉相糺候口書の覚」(名古屋海洋文化協会編『尾張船督乗丸漂流並に船頭重吉生還記録』)／「増補評註 尾張船頭重吉の太平洋漂流物語」(吉岡永美訳『漂流船物語の研究』)。
《同志社》「尾張国長右衛門船漂流記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(薩摩国喜三左衛門船漂流と合))／「半田重吉漂流記」(1冊、成文化10年、【版本】所西尾市立図書館岩瀬文庫)／「半田村重吉船長日記」(【写本】所名古屋市蓬左文庫(資治雜笈1輯))／「尾州知多郡半田村重吉物語」(別「難船物語聞書写(外)」)【写本】所国立国会図書館(文化11年写、漂流記叢書62)→半田重吉漂流記→半田村重吉船長日記)／○「船長日記」(3巻3冊、成文政5年自序、著池田寛親、【写本】所国立国会図書館(3冊)(漂流記叢書61)(鶯宿雜記の内)、国会図書館支部内閣文庫(2部)、国会図書館支部静嘉堂文庫(文政写、付録共4冊)(3巻3冊)、宮内庁書陵部(手島惟敏写5巻2冊)(3巻3冊)、東京国立博物館(3巻3冊)(2冊)、九州大学(3巻2冊)、京都大学(3冊)(1冊)、東京教育大学、神戸大学(5冊)(3冊)、早稲田大学、同志社大学(5冊)(海表異聞62-66)、龍谷大学(4冊)、東京大学(付録共4冊)、東京大学史料編纂所(「尾州名護屋船長日記」、1冊)、東北大学狩野文庫(天保6年松齋写3巻1冊)、広島大学(5冊)、明治大学、静岡県立中央図書館葵文庫(2巻2冊)、県立秋田図書館(図を付す、4冊)、大阪府立図書館、京都府立図書館(2冊)、北海道庁(「布那遠佐日記」、5巻3冊)、東京都立日比谷図書館加賀文庫(付録共4冊)、東京都立日比谷図書館近藤文庫(弘化3年写)、足利学校遺跡図書館(付録共4冊)、市立刈谷図書館、名古屋市立鶴舞図書館(1冊)、豊橋市立図書館(弘化2年鈴木孝平写3巻1冊)(3巻1冊)、名古屋市蓬左文庫(「半田村重吉船長日記」、資治雜笈1輯)、栗田文庫(5冊本2部)、金刀比羅宮図書館(1冊)、無窮会神習文庫、浅野図書館(1冊)、【旧】彰考館文庫、延岡内藤家(器物図説を付す、5冊)、〔追加《国書補遺》お茶の水図書館成實堂文庫(「魯国漂流船長日記」、2冊)、〔追加《古典》栃木県立図書館黒崎文庫(上中下、3冊)、大洲市立図書館矢野玄道文庫(3巻、文政5年写、3冊)、久留米市民図書館(近世末期写、巻中存、1冊)、射和文庫(3巻、3冊)、〔追加《北方》3巻1冊)〕／「文化十四巳年尾州半田村百姓吹流之一件」カ(【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書第60))／「文化年中漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(天保7年写))／「魯西亜国衣類器物披露来由書」(1冊、著小栗重吉、【版本】所京都大学、西尾市立図書館岩瀬文庫(「半田重吉漂流記」)、【京外大】、複製)魯西亜国衣類器物披露来由書(昭和10年))。
《古典》「船長日記図」カ(【写本】所栃木県立図書館黒崎文庫(1冊))。
《北方》「十吉談記」(著小栗重吉、【写本】)。

No.189

【漂流年】文化10(1813)[文化9(1812)]年【帰国年】文化11(1814)年【船籍地】安芸国豊田郡御手洗島之内大浜村【船名】虎市丸(栄助船)【漂着地】清国広東省【出港地】沖の島【乗組員】栄助・次作・利吉【帰国ルート】清国広東省ー長崎【備考】戌四番唐船・戌九番唐船で長崎に着く

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、戌四番同九番船ヨリ芸州之者送来事)／「犯科帳」(九一-四・一五(森永種夫『犯科帳』七))。

No.190

【漂流年】文化12(1815)年【帰国年】文化13(1816)年【船籍地】薩摩国阿久根【船名】伊勢田丸(政

右衛門船) 【漂流地点】宝島沖 【漂着地】清国広東省惠州府陸豊県碣石鎮 【出港地】奄美大島 【乗組員】宅右衛門・古渡七郎右衛門・権左衛門・坊助・八兵衛 【乗組員数】49 [46] 【帰国ルート】清国広東省惠州府陸豊県碣石鎮-玉山区-乍浦-長崎

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、子式番同三番同四番同五番同六番同七番船ヨリ薩州家臣送来事)／菅茶山「筆のすさび」(一、唐山漂流紀文)／林燿「通航一覽」(二二二、文化薩人漂流記、栗園漫抄)／松浦静山「甲子夜話」(三二、漂流記事并広東真景図)／「犯科帳」(九二-五二(森永種夫『犯科帳』七))／「文化十三丙子薩州漂客見聞録」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)。《同志社》○「薩州漂客見聞録」(1冊、別「文化十三丙子薩州漂客見聞録(原)・薩州漂客見聞録」、成文化13年、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書13)、国会図書館支部内閣文庫(外国紀聞8・9)、国会図書館支部静嘉堂文庫、早稲田大学)／「薩人唐国漂着申口書付」カ(1冊、【写本】所東京大学本居文庫)／「薩人漂流記」カ(別「薩州人漂流」、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(1冊)、宮内庁書陵部(1冊)、桑名松平家(「薩州人漂流」5冊)、鹿児島大学玉里文庫(「様子書」1冊)(「口書」1冊))／「薩摩大島漂流人一件」カ(1冊、【写本】所東京大学本居文庫)／「漂流人申口覚書」カ(1冊、別「漂流人申口在館唐人共ニ御尋ニ付御覚書」、【写本】所鹿児島大学玉里文庫)／「文化十二乙亥薩州漂客見聞録」カ(1冊、【写本】所無窮会神習文庫)。

《北方》「漂流人覚書」(成文化13年、【写本】)。

No. 191

【漂流年】文化12(1815)年 【船籍地】加賀国本吉村 【船名】三次郎船 【漂流地点】薩摩沖 【出港地】薩摩国山川港 【備考】薩摩沖で浸水。種子島島間村牛野沖で生存者2人が救助された
【出典】《川合》。

No. 192

【漂流年】文化13(1816)年 【船籍地】薩摩国鹿児島 【船名】相生丸 【漂着地】清国浙江省寧波府象山県の内石浦 【出港地】琉球国大島
【出典】《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、丑四番同五番船ヨリ薩州隅州之者送来事)。

No. 193

【漂流年】文化14(1817)年 【船籍地】琉球 【漂着地】五島玉ノ浦大宝沖
【出典】《川合》。

No. 194

【帰国年】文化14(1817)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】清国浙江省 【乗組員数】24カ 【帰国ルート】清国浙江省-長崎
【出典】《川合》。

No. 195

【漂流年】文政2(1819)年 【船籍地】琉球国泉崎村 【船名】仲村渠筑登之の馬艦船 【漂着地】常州多賀郡川尻村 【出港地】八重山島 【乗組員】当銘 【乗組員数】12 【備考】常州多賀郡川尻村に鹿児島藩士が行き、漂流者を水戸藩から受取った
【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽」(二四、琉球人漂流聞見図説)。

No. 196

【漂流年】文政2(1819)年 【船籍地】薩摩藩カ 【船名】亀寿丸(薩摩藩手船) 【漂着地】朝鮮 【出港地】琉球国永良部島

【出典】《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、対州ヨリ薩州家臣朝鮮漂着之者送來事)。

No. 197

【漂流年】文政2(1819)年 【船籍地】琉球 【漂着地】肥前国五島福江島岐宿村西津 【乗組員数】9

【出典】《川合》。

No. 198

【漂流年】文政2(1819)年 【船籍地】薩摩国川内白和町 【船名】若宮丸 【漂着地】清国浙江省温州府 【出港地】琉球大島の内津代

【出典】《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、巳五番同六番船ヨリ薩州家臣送來事)。

No. 199

【帰国年】文政3(1820)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】24カ 【帰国ルート】朝鮮ー長崎 【備考】対馬藩から護送されて長崎に着いた

【出典】《川合》。

No. 200

【漂流年】文政3(1820)年 【帰国年】文政9(1826)年 【船籍地】陸奥国閉伊郡船越浦田野村〔閉伊郡磯鷄村〕 【船名】神社丸(黒沢屋六之助船) 【漂流地点】房州沖 【漂着地】パラオ諸島 【乗組員】平之丞・亀蔵・久助・久兵衛・伊勢松・倉松・清助・米次・栄助・長吉・鶴松・喜太郎 【乗組員数】12 【帰国ルート】パラオ諸島ーシャムーマカオー乍浦…①倉松、清助、米次、栄助：隅州屋久島ー長崎・②長吉、鶴松、喜太郎：遠州下吉田村ー清水港ー肥前平戸田助浦兀島ー長崎

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、西六番同八番船ヨリ奥州之者送來事)／西田直養「ペラホ物語」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／林燿「通航一覽統輯」(三三～四〇、片山筆記、視聽草、漂着船懸合筆記也)／林燿「通航一覽統輯」(七八、戸川家蔵長崎志統編、唐船漂泊一件、視聽草、甲子夜話統編)／松浦静山「甲子夜話三篇」(六八、ヘラホ物語)／宮崎成身「視聽草」(二集之六、文政中唐船護送漂民(奥州山田村長吉等))／宮崎成身「視聽草」(続三集之六、文政中唐船護送漂民(奥州山田村長吉等))／「パラウ漂流記」(南部叢書刊行会編『南部叢書』第一〇冊)／「パラウ漂流記」(荒川秀俊編『日本漂流・漂着史料』)。

《同志社》「温古堂叢書」(【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(13冊)、※10冊にペラホ物語を収録)／「難船帰朝異国嶋物語」(1冊、【写本】所岩手県立図書館、※パラウ嶋漂流記の異本)／〇「パラウ漂流記」(1冊、成文政9年、【写本】所岩手県立図書館(「パラウ島漂流記」)、【活字】荒川秀俊編『異国漂流記続集』(地人書館、昭和39年))／「漂泊物語」カ(1冊、成文政9年、【写本】所岩手県立図書館)／「漂民口状」カ(1冊、別「異国江漂流仕候奥州之者七人口書」、成文政9年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)／「文政九丙戌年於長崎漂流人請取御用記」(1冊、【写本】所岩手県立図書館)／〇「ペラホ物語」(1冊、別「ペラホ物語」、成天保6年、著西田直養、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書6)、国会図書館支部内閣文庫(墨海山筆別集11)、国会図書館支部静嘉堂文庫(温古堂叢書10)、京都大学(漂流叢書4)、無窮会神習文庫(自筆))／「ヘラヲ島漂着之記」カ(1冊、成文政2年、【写本】所東京国立博物館、岩手県立図書館(「ヘラヲ島漂流之記」))／「墨海山筆」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(111巻別集11巻内41巻欠、目錄共84冊))

〔別集〕11 にペラポ物語を収録)。

No. 201

【漂流年】文政3(1820)年 【船籍地】日本 【漂着地】北アメリカのコロンビア川口の南側アダムス岬 【備考】船体は大破していたが、多数の乗組員は無事に救助された
【出典】《川合》。

No. 202

【漂流年】文政4(1821)年 【帰国年】文政4(1821)年 【船籍地】琉球国之内大島大和浜間切之内今里村カ 【乗組員】末喜久・作林・喜久恵 【乗組員数】3 【帰国ルート】オランダ船が救助—長崎
【出典】《川合》。

No. 203

【漂流年】文政4(1821)年 【船籍地】薩摩国高城郡 【船名】住徳丸 【漂着地】朝鮮国全羅道濟州牧旗義県為美浦 【出港地】琉球国大島
【出典】《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、対州ヨリ朝鮮漂着之者送来事)。

No. 204

【帰国年】文政4(1821)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】清国浙江省 【乗組員数】15カ 【帰国ルート】清国浙江省—長崎
【出典】《川合》。

No. 205

【漂流年】文政5(1822)年 【船籍地】奥州仙台牡鹿郡湊 【船名】円蔵船 【漂着地】種子島国上村湊 【乗組員】吉蔵 【帰国ルート】種子島国上村湊—鹿児島
【出典】《川合》。

No. 206

【帰国年】文政5(1822)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】36カ 【帰国ルート】朝鮮—長崎 【備考】対馬藩から護送されて長崎に着いた
【出典】《川合》。

No. 207

【漂流年】文政5(1822)年カ 【船籍地】種子島カ 【漂着地】清国 【出港地】琉球沖ノ永良部ヶ島 【乗組員】仲之允・徳松 【帰国ルート】清国—帰国 【備考】清国船で帰国したとの通知が鹿児島藩から種子島家に着いた
【出典】《川合》。

No. 208

【漂流年】文政5(1822)年 【帰国年】文政6(1823)年 【船籍地】薩摩国鹿児島 【船名】天満丸 【漂着地】清国福建省漳州府漳浦県 【出港地】琉球国大島 【乗組員】幸次郎・仲右衛門 【乗組員数】28 【帰国ルート】清国福建省漳州府漳浦県—長崎
【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、未沓番同四番船ヨリ薩摩大隅之者送来事)／「犯科帳」(一〇一—* (森永種夫『犯科帳』七))。

No. 209

【漂流年】文政6(1823)年 【帰国年】文政6(1823)年 【船籍地】鹿児島藩 【船名】神通丸(鹿児島藩主松平豊後守手船) 【出港地】鬼界島 【乗組員】橋口武兵衛門・上村藤次郎 【乗組員数】24 【帰国ルート】オランダ船が救助—長崎

【出典】《川合》。

No. 210

【漂流年】文政6(1823)年 【船籍地】薩摩藩 【船名】神明丸(薩摩藩手船) 【漂着地】朝鮮国全羅道興陽県豊安浦 【出港地】琉球大島

【出典】《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、対州ヨリ朝鮮漂着之者送来事)。

No. 211

【漂流年】文政6(1823)年 【船籍地】薩摩藩 【船名】天神丸(薩摩藩手船) 【漂着地】朝鮮国興清道安興 【出港地】宝島

【出典】《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補(「長崎志統編」九、対州ヨリ朝鮮漂着之者送来事)。

No. 212

【漂流年】文政6(1823)年 【帰国年】文政7(1824)年 【船籍地】種子島 【船名】熊野丸 【漂着地】朝鮮 【乗組員】三浦藤兵衛 【帰国ルート】朝鮮—長崎

【出典】《川合》。

No. 213

【漂流年】文政6(1823)年 【帰国年】文政7(1824)年 【船籍地】種子島カ 【漂着地】清国 【乗組員】喜蔵・次郎右衛門・源次郎・休次郎・善太郎 【帰国ルート】清国—長崎—鹿児島

【出典】《川合》。

No. 214

【漂流年】文政7(1824)年 【船籍地】薩摩国鹿児島下町 【船名】金山丸 【漂着地】朝鮮国 【出港地】琉球

【出典】《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、対州ヨリ朝鮮漂着之者送来事)。

No. 215

【帰国年】文政7(1824)年 【船籍地】薩摩カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】62カ 【帰国ルート】朝鮮—長崎 【備考】対馬藩から護送されて長崎に着いた

【出典】《川合》。

No. 216

【漂流年】文政7(1824)年 【帰国年】文政8(1825)年 【船籍地】大坂本町 【船名】安穩丸(柏屋勘兵衛船) 【漂流地点】紀州新宮沖 【出港地】大坂 【乗組員】兵蔵・惣吉・松次郎 【乗組員数】13 【帰国ルート】外国船が救助—小名浜沖で漁撈中の常陸国多賀郡河原子村の十吉の漁船に移す—平潟—江戸

【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽統輯」(一四七、常藩筆藪)。

No. 217

【漂流年】文政8(1825)年 【船籍地】土佐国中ノ浜 【漂流地点】足摺崎沖 【漂着地】青ヶ島 【出港地】

紀伊国和歌山

【出典】《加藤》関田駒吉「土佐船の漂流文献」。

No. 218

【漂流年】文政9(1826)年 【帰国年】文政9(1826)年 【船籍地】薩摩国山川 【船名】財久丸 【漂流地点】琉球大島付近 【漂着地】清国浙江省寧波府定海県 【乗組員】直右衛門 【乗組員数】10カ 【帰国ルート】清国浙江省寧波府定海県—長崎 【備考】戌七番唐船で長崎に着く

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、戌七番船ヨリ薩州之者送来事)／林燿「通航一覽統輯」(四一、長崎志統編)／「犯科帳」(一〇四-*(森永種夫『犯科帳』七))。

No. 219

【漂流年】文政9(1826)年 【帰国年】文政10(1827)年 【船籍地】越前国丹生郡下海浦 【船名】宝力丸(蓬萊屋庄右衛門船) 【漂流地点】長門国仙崎沖 【漂着地】揚子江の河口あたりの松江府 【出港地】蝦夷地浦河 【乗組員】善右衛門・吉左衛門 【乗組員数】9 【帰国ルート】揚子江の河口あたりの松江府—乍浦—長崎 【備考】戌八番船として長崎に着く

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、戌八番船ヨリ越前国能登国之者送来事)／林燿「通航一覽統輯」(四六、戸川家蔵長崎志統編、甲子夜話統編)／松浦静山「甲子夜話統篇」(一三、北海漂流話)／山崎英常「続片叢記」四／「大念寺新村吉左衛門唐国へ漂着一件口書」(石川県図書館協会編『加能漂流譚』)／「犯科帳」(一〇四-*(森永種夫『犯科帳』七))。

《同志社》「大念寺新村吉左衛門唐国漂着一件口書」(【活字】『加能漂流譚』(石川県図書館協会、昭和13年、加賀能登郷土図書叢刊))／「寶刀丸漂流記」(福井図書版刊、昭和15年)。

《海洋》「文政九戌年越前之者九人唐國南京省中漂流覚書」(1冊、【写本】)。

No. 220

【漂流年】文政9(1826)年 【船籍地】陸奥国小南部領 【漂着地】相模国浦賀 【出港地】小南部領 【備考】陸奥国小南部領の江戸廻船

【出典】《加藤》松浦静山「甲子夜話」(九八、南部人東洋に漂流して石柱を見る事)。

No. 221

【漂流年】文政10(1827)年 【船籍地】陸奥八戸カ 【漂着地】清国

【出典】《川合》。

No. 222

【漂流年】文政10(1827)年 【船籍地】陸奥カ 【漂着地】清国

【出典】《川合》。

No. 223

【漂流年】文政10(1827)年 【帰国年】文政11(1828)年 【船籍地】陸奥国八戸 【船名】融勢丸(石橋徳右衛門船) 【漂流地点】平潟沖 【漂着地】バタン諸島の小島 【出港地】常陸国平潟 【乗組員】徳次郎・勇吉・惣助 【乗組員数】11 【帰国ルート】バタン諸島の小島—バタン島—マニラ—温州—長崎

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、子四番同五番船ヨリ陸奥伊予之者送来事)／林燿「通航一覽統輯」(四四、長崎志統編)／「口書」(村上貢「予州岩城村勇吉漂流関係史料紹介」)／「犯科帳」(一〇七-*(森永種夫『犯科帳』八))／「融勢丸唐流帰国記」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「予州松山領越智郡岩城村勇吉漂流記」(村上貢「史料紹介予州岩城村勇吉漂流記」)。

《同志社》「漂流人一件大阪御留書抜」(1冊、**成**文政12年、【写本】**所**岩手県立図書館 →融勢丸唐流帰国記)。

No. 224

【漂流年】文政11(1828)年 【帰国年】文政13(1830)年 【船籍地】伊豆国八丈島中野郷 【船名】仁寿丸(沖山金右衛門船) 【漂流地点】八丈島近く 【漂着地】ルソン島カガヤン 【出港地】江戸 【乗組員】儀兵衛・助四郎・栄助 【乗組員数】13 【帰国ルート】ルソン島カガヤン→マニラ→マカオ→広東→乍浦→長崎→江戸

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、丑四番同七番船ヨリ伊豆国八丈島之者送来事)／林糧「通航一覽統輯」(八一、長崎志統編、甲子夜話統編、カガヤン漂流記)／松浦静山「甲子夜話統篇」(八五、蛮国漂流記)／宮崎成身「視聽草」(三集之八、天竺漂着(文政十一年八丈島仁寿丸))／「犯科帳」(一〇七-一二二(森永種夫『犯科帳』八))。

《同志社》「カカヤン人記」(1冊、**成**文政11年、【写本】**所**福島県立図書館)／○「カカヤン漂流記」(1冊、**成**文政11-13年、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫、【活字】荒川秀俊編『異国漂流記続集』(地人書館、昭和39年))／「暹羅国漂流奇談」(1冊、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(文政11年写))／「漂客譚記」(2巻2冊、【写本】**所**東北大学狩野文庫)／「漂流」(1冊、【写本】**所**西尾市立図書館岩瀬文庫)。

No. 225

【漂流年】天保元(1830)年 【帰国年】天保2(1831)年 【船籍地】薩摩藩 【船名】大日丸(薩摩藩手船) 【漂流地点】薩州七島の内蛇峠島沖 【漂着地】清国浙江省寧波府定海県の内舟山 【乗組員数】10カ 【帰国ルート】清国浙江省寧波府定海県の内舟山→長崎→生国 【備考】卯四番唐船で長崎に到着

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、卯四番船ヨリ薩州之者送来事)／林糧「通航一覽統輯」(四一・四二、唐国漂流記、長崎志統編)。

《同志社》「卯四番唐船ヨリ送来候漂流日本人一件手続」カ(1冊、**成**天保14年、【写本】**所**県立長崎図書館)／「卯四番唐船ヨリ送来候漂流人一件」カ(1冊、**成**天保3年、**著**長崎奉行所、【写本】**所**県立長崎図書館)／「天保三年卯四番唐船より送来候漂流人一件」カ(1冊／【写本】**所**鹿児島県立図書館)。

No. 226

【漂流年】天保元(1830)[天保3(1832)]年 【帰国年】天保元(1830)年 【船籍地】備前国岡山広瀬町 【船名】神力丸(多賀屋金十郎船) 【漂流地点】熊野灘の大島沖 【乗組員】五左衛門・甚介・清兵衛・勝之助・伊勢次郎 【乗組員数】19[14] 【帰国ルート】バタン諸島のイバホス島で船が大破→サブタン島→バタン島→マニラ→マカオ→広東→乍浦→長崎 【備考】卯一番唐船・卯三番唐船として長崎に入港

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、卯壱番同三番船ヨリ備前讃岐備後能登国之者送来事)／林糧「通航一覽統輯」(八二・八三、巴旦国漂流記、海表異聞、隅陬奇筆、海表異聞)／林糧「統通信全覽」(類輯之部船艦門漂流、備前藩土巴旦国へ漂流清商船護送一件)／「神力丸馬丹漂流口書」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「塵浜村清兵衛バタンへ漂着の次第口書」(石川県図書館協会編『加能漂流譚』)／「南国奇話」(吉田文治編『海表叢書』巻三、新村出編『南蛮紅毛史料』)／「能州羽咋郡塵浜村清兵衛異国漂流口書」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「犯科帳」(一〇九-三四・三六(森永種夫『犯科帳』八))／「備前国漂流人一件」(渡辺頼母『吉備文庫』第一輯)。

《同志社》「異国漂流記」(1冊、【写本】**所**同志社大学(嘉永2年写))／「異国漂流物語 神力丸馬丹島」(1冊、【写本】**所**東北大学(天保14年増井武啓写))／「異国物語」(1冊、**別**「塵浜漂流記・塵浜村清兵衛バタンへ漂着の次第口書」、【写本】**所**金沢市立図書館稼堂文庫(明治38年写))／「異国物語」(**別**「塵浜漂流記」、【写本】**所**金沢市立図書館清水文庫(「塵浜村清兵衛漂流口書」、【活字】『加賀能登郷土図書叢刊加能漂流譚』)／「神力丸漂流一件」(2冊、【写本】**所**国立国会図書館(漂流記叢書64))／「天保三壬辰漂流記」(1冊、【写本】**所**宮内庁書陵部(手島惟敏写))／○「南国奇話」(1冊、**成**天保3年、**著**勝之助、【写本】**所**京都府立図

書館)／○「能州羽咋郡塵浜村清兵衛異国漂流口書写」(1冊、【写本】所国立国会図書館)／「能登国清兵衛異国江漂流之始末」(1冊、【写本】所九州大学)／「巴旦国漂流記」(1冊、【写本】所神戸大学(天保15年写))／「馬旦国母後須島漂流日記」カ(1冊、著片山栄蔵、【写本】所岡山大学池田家文庫)／「巴担島漂流記」カ(2巻2冊、成天保2年、【写本】所東北大学(天保11年上野十之助写1冊)、東北大学狩野文庫(天保13年川上義孝写)、京都府立図書館(「巴旦漂流実録」、天保3年写1冊)、西尾市立図書館岩瀬文庫(「巴旦漂流記」、嘉永4年山本錫夫写、亜墨利加漂流口書・墨夷漂流記と合1冊)、長崎市立長崎博物館(「破旦漂流聞書」))／「備前岡山広瀬町漂流記」カ(1冊、【写本】所正宗文庫)／「漂到巴旦国讚民口状」カ(著勝之助、【写本】所宮内庁書陵部(静幽堂叢書51))／「漂流記」(【写本】所九州大学(正徳3年写1冊)(2軸)(1冊)、東京教育大学(1冊本2種)、東京大学史料編纂所(福井白道寺蔵本写1冊(蒲堂叢書の内)、彰考館文庫(鹿島治乱記と合1冊)、{旧}彰考館文庫(8冊)(欠本、1冊)(1冊)、{旧三井鸚軒}(1冊)、【版本】所寛政元版－東京外語大学(1冊)、刊年不明－岡山大学池田家文庫(2冊)、九州大学(2冊)、岡山県総合文化センター(1冊)、県立長崎図書館(1冊)、上田市立図書館花月文庫(天保7年、2冊)、【活字】『吉備群書集成5』、※岡山藩の廻米船神力丸の漂流記で、上巻は御札一件請取渡前後御届書類、下巻は漂流人十四人の口上書)／「漂流記」カ(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書31))／「漂流人口書」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書63))。

《北方》「能州羽喰郡塵浜村清兵衛異国江漂流仕候ニ付天保三年八月廿六日口書写」カ(成天保3年、【写本】)。

No. 227

【漂流年】天保元(1830)年 【船籍地】種子島カ 【漂着地】清国 【出港地】喜界島 【乗組員】三右衛門・庄蔵 【備考】清国船で帰還中に破船して水死。清国人がこれを長崎奉行に報告
【出典】《川合》。

No. 228

【漂流年】天保2(1831)年 【船籍地】日本 【備考】カナダのクイーン・シャーロット島で難破
【出典】《川合》。

No. 229

【漂流年】天保2(1831)年 【帰国年】天保3(1832)年 【船籍地】大隅国 【漂着地】朝鮮国全羅道济州旌義県為美浦[济州牧義県為美浦] 【乗組員数】14カ 【帰国ルート】朝鮮国全羅道济州旌義県為美浦[济州牧義県為美浦]－対馬藩－長崎－生国
【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、対州ヨリ朝鮮漂着大隅之者送来事)／林燿「通航一覽統輯」(六、戸川家蔵長崎志統編)。

No. 230

【漂流年】天保3(1832)年 【船籍地】尾張国知多郡小野浦 【船名】宝順丸(樋口源六船) 【漂流地点】遠州灘 【漂着地】北アメリカのワシントン植民地フラッター岬付近 【出港地】鳥羽 【乗組員】重右衛門・岩吉・久吉・音吉 【乗組員数】14 【帰国ルート】北アメリカのワシントン植民地フラッター岬付近－ハワイ－ロンドン－マカオ 【関係船】マカオで肥後船の漂流者(No. 237)と一緒になる 【備考】マカオ、香港、上海などに住んで日本人漂流者の世話をしたり、通訳として外国船で来航したり、数奇な一生を送った
【出典】《川合》。《加藤》中島広足「檀園随筆」(上、唐国の男女のなからひのみたりなる事)／林燿「通航一覽統輯」(五三、甲子夜話、帰齋叢書)／林燿「通航一覽統輯」(六九、某筆記、甲寅秘記)／林燿「続通信全覽」類輯之部船艦漂流、米国商船我国ノ漂民ヲ護送浦賀へ渡来文政嚴令ニ依テ発砲掃除一件・漂流人請取方故障一件・海外へ漂流ノ国民処分沿革一件)／「安政二乙卯年雜録」(水野忠徳雜録之一(荒川秀俊編『日本漂流・漂着史料』))。

No. 231

【漂流年】天保3(1832)年 【帰国年】天保7(1836)年 【船籍地】越後国早川村 【船名】角長の船〔龍宮丸(長門屋持船)〕 【漂着地】ハワイのオアフ島ワイアルア付近 【出港地】松前〔江刺〕 【乗組員】次郎・右衛門・伝助・長太・伝吉・戸三郎 【乗組員数】9 【帰国ルート】ハワイのオアフ島ワイアルア付近-ホノルル-ペトロパウロフスクーシトカーエトロフ島

【出典】《川合》。《加藤》林燿「続通信全覧」(類輯之部船艦門雜件、外船対州津軽近海通航具状及英艦漂民護送ノ件)／藤川貞「天保雜記」(一九、日本より漂流之船乗共送戻書翰和解)／松浦静山「甲子夜話三篇」(三四、奥蝦夷に魯西亜人云云せし翰牘の和解)／松浦静山「甲子夜話三篇」(五六、越後漂流人一件の文無き処の追書)。

《北方》「天保九年戌年三月越後国中村浜戸三郎外式人之もの異国江漂着之上異国舟ニテ被送戻候一件」(成天保9年、【写本】)／「漂流談」(成天保9年頃、著戸三郎、【写本】)。

No. 232

【漂流年】天保4(1833)年 【船籍地】泉州堺 【船名】明吉丸(木屋平兵衛船) 【漂着地】種子島安城村 【出港地】長崎 【乗組員】嘉兵衛 【乗組員数】9 【備考】鹿児島藩横目らが取調べて鹿児島藩へ報告した 【出典】《川合》。

No. 233

【漂流年】天保4(1833)年 【船籍地】琉球 【漂着地】五島大和守領分 【出典】《加藤》藤川貞「天保雜記」(三、五島大和守領分江琉球人漂着御届(天保四年八月))。

No. 234

【漂流年】天保5(1834)年 【帰国年】天保6(1835)年 【船籍地】尾張カ 【漂着地】ルソン 【乗組員】音吉 【帰国ルート】ルソン-帰還 【出典】《川合》。

No. 235

【漂流年】天保5(1834)年 【船籍地】日本 【漂着地】マリアナ群島 【乗組員】与四郎(または伊四郎) 【乗組員数】21カ 【帰国ルート】マリアナ群島-グアム島 【備考】グアム島に土着したと伝えられる 【出典】《川合》。

No. 236

【帰国年】天保6(1835)年 【船籍地】長門国豊浦郡肥中浦 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】3カ 【帰国ルート】朝鮮-長崎 【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽続輯」(六、戸川家蔵長崎志続編)。

No. 237

【漂流年】天保6(1835)年 【船籍地】肥後国飽託郡川尻 【船名】庄蔵船 【漂流地点】天草沖 【漂着地】ルソン島 【乗組員】庄蔵・寿三郎・熊太郎・力松 【乗組員数】4 【帰国ルート】ルソン島-マニラ-マカオ 【関係船】マカオで尾張船宝順丸(No. 230)の漂流者と一緒になる 【備考】マカオ、香港、上海などで日本人漂流者の世話などをして、一生を海外で送った

【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽続輯」(五三、甲子夜話、帰齋叢書)／林燿「続通信全覧」(類輯之部船艦門漂流、米商船我国ノ漂民ヲ護送浦賀へ渡来文政厳令ニ依テ発砲掃除一件・漂流人請取方故障一件・海外へ漂流ノ国民処分沿革一件)／「安政二乙卯年雜録」(水野忠徳雜録之一(荒川秀俊編『日本漂流・漂着

史料』)／「心癢類編」(四(大蔵省編『日本財政経済史料』卷之七))／「漂客寿三郎手簡」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、※「漂民寿三郎之書翰」)。

《同志社》「肥後国漂民澳門ヨリ長崎へ送書翰」カ(1冊、**成**天保12年、【写本】**所**宮内庁書陵部(手島惟敏写))／○「漂民寿三郎之書翰」(1冊、**成**天保12年、**著**寿三郎、【写本】**所**東京大学(文久2年写)、岡田伊三次郎(「漂客寿三郎通信」))／「漂流人書状写」カ(1冊、**著**肥後寿三郎等、【写本】**所**東北大学狩野文庫)。

No. 238

【漂流年】天保7(1836)年 【帰国年】天保8(1837)年 【船籍地】陸奥国閉伊郡山田村カ 【船名】開運丸[海運丸] 【漂流地点】九十九里浜沖 【漂着地】清国広東省 【出港地】江戸 【乗組員】万吉 【乗組員数】5カ 【帰国ルート】清国広東省-長崎

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、酉壱番同三番船ヨリ奥州之者送来事)／林燿「通航一覽統輯」(四六、戸川家蔵長崎志統編)。

No. 239

【漂流年】天保9(1838)年 【帰国年】天保9(1838)年 【船籍地】薩摩藩 【船名】三益丸 【漂着地】清国蘇州府崇明県 【出港地】琉球国大島 【乗組員】吉次郎 【乗組員数】23 【帰国ルート】清国蘇州府崇明県-長崎 【備考】戌四番・五番唐船で長崎に着いた

【出典】《川合》。《加藤》小原克紹著、野間寿恒・村岡重文追補「長崎志統編」(九、戌四番同五番船ヨリ薩州隅州之者送来事)／林燿「通航一覽統輯」(四五、戸川家蔵長崎志統編)／「犯科帳」(一一七-三五(森永種夫『犯科帳』八))。

《同志社》「漂民吉次郎覚書」カ(【写本】**所**宮内庁書陵部(椿亭叢書9))。

No. 240

【漂流年】天保9(1838)年 【船籍地】常陸国那珂郡湊村 【船名】南部屋文右衛門船 【漂流地点】奥州沖 【漂着地】青ヶ島 【出港地】箱館

【出典】《川合》。《加藤》「湊村御用留」(湯浅五郎「親船」六、那珂湊市史編さん委員会編『那珂湊市史料』第八集)。

No. 241

【漂流年】天保9(1838)年 【帰国年】天保14(1843)年 【船籍地】越中国富山古寺町 【船名】長者丸(能登屋兵右衛門船) 【漂流地点】仙台領唐丹浦沖 【乗組員】吉岡屋平四郎・五三郎・喜右衛門・金六・平四郎・片口屋七左衛門・八左衛門・六兵衛・平兵衛・次郎吉 【乗組員数】10 【帰国ルート】アメリカ船が救助-ハワイ-ペトロパウロフスク-オホーツク-シトカー-エトロフ島-松前-江戸-帰郷

【出典】《川合》。《加藤》遠藤高環「時計物語」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流)／古賀謹一郎「蕃談」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流、室賀信夫・矢守一彦編訳『蕃談-漂流の記録第一』)／林燿「続通信全覽」(類輯之部船艦門雑件、外船対州津軽近海通航具状及英艦漂民護送ノ件)／「撤土徹私漂流記」(高瀬重雄『北前船長者丸の漂流』)／「時計献上の漂民」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「漂流人次郎吉物語」(高瀬重雄『北前船長者丸の漂流』)。

《同志社》「海防稟議」カ(【写本】**所**天理図書館(45冊)、※第14冊に漂客次郎吉話を収録)／○「撤土徹私漂流記」(1冊、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(天保9年写)、尊経閣文庫、〔追加《古典》射和文庫(「サントウイス漂流記」1冊)])／○「時規物語」(別「献上之御時規由来並用法之覚」、**成**嘉永2年、**著**遠藤高環、【写本】**所**宮内庁書陵部(明治写11冊)、金沢市立図書館加越能文庫(時計函記を付す、26冊))／○「蕃談」(3巻3冊、別「蕃譚」、**著**次郎吉述、古賀増編、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫、国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫(編者自筆)、鹿児島大学玉里文庫、九州大学(5冊)、京都大学、東京教育大学(撤

土微私漂流記を付す、6冊)、神戸大学、東京大学史料編纂所(6冊)、東北大学狩野文庫(3巻5冊)、京都府立図書館(6冊)、北海道庁、富山県立図書館(3巻6冊)(3冊)、西尾市立図書館岩瀬文庫(6冊)、名古屋市蓬左文庫、大橋図書館、尊経閣文庫、お茶の水図書館成篋堂文庫(6冊)(1冊)、浅野図書館、〔追加《北方》【活字】『東洋文庫39』〕/「漂客次郎吉話」カ(【写本】所天理図書館(海防彙議14))/○「漂流人次郎吉物語」(1冊、著次郎吉、【写本】所市立高岡図書館、※長者丸の漂流記「蕃談」とは別系統の写本で挿絵なし)/「流蕃通書」カ(10巻10冊、著次郎吉述、憂天生編、【写本】所九州大学(10巻9冊)、京都大学、西尾市立図書館岩瀬文庫、岡田伊三次郎→蕃談)。

No. 242

【漂流年】天保10(1839)年【帰国年】天保13(1842)年【船籍地】遠江国佐野郡高御所村【船名】昌栄丸(茂左衛門船)【漂流地点】遠州灘【乗組員】千太郎[仙太郎]・松之助・辰蔵【乗組員数】3【帰国ルート】外国船が救助ーホノルルーマカオー福州ー乍浦ー長崎ー江戸ー故郷【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」(一一九-五六(森永種夫『犯科帳』九))。

No. 243

【漂流年】天保10(1839)年【帰国年】天保11(1840)年【船籍地】陸奥国気仙郡小友浦【船名】中吉丸(及川庄兵衛船)【漂流地点】鹿島灘【漂着地】小笠原島【乗組員】三之丞【乗組員数】6【帰国ルート】小笠原島ー下総国飯岡沖ー銚子【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽統輯」(一五〇、天保十年奥民漂流記)/林燿「統通信全覽」(類輯之部船艦門漂流雑件、陸奥国小友浦船小笠原島ニ漂着外国人ノ移住見聞之概略具状一件)/「小友船漂流記」(南部叢書刊行会編『南部叢書』第一〇冊)/「小友船漂流記」(大船渡市史編集委員会編『大船渡市史』第三巻I)。

《同志社》「奥州気仙郡三之丞蛮島漂流記」(1冊、成天保11年、【写本】所岩手県立図書館、岡田伊三次郎)/○「小友船漂流記」(1冊、成天保11年、【写本】所岩手県立図書館)/「天保十年奥州気仙郡庄兵衛船漂流の書付」(【写本】所東京大学史料編纂所(西海遺珠の内))/「陸奥船南洋漂流記一天保10年」(【活字】『通航一覽統輯 巻150』、荒川秀俊編『異国漂流記統集』(地人書館、昭和39年))。

No. 244

【漂流年】天保10(1839)年【船籍地】常陸国那珂郡湊村【船名】宝来丸【漂流地点】平潟沖【漂着地】琉球国勝連浜村【出典】《加藤》菊地半兵衛「風聞記」(那珂湊市史編さん委員会編『那珂湊市史料』第八集)。《同志社》「漂着常陸国人滞在日記」カ(1冊、成道光20(天保11)年、【写本】所旧沖繩県立沖繩図書館)。

No. 245

【漂流年】天保12(1841)年【帰国年】嘉永4(1851)年【船籍地】土佐国高岡郡宇佐浦【船名】筆之丞(伝蔵)の漁船【漂流地点】土佐湾【漂着地】鳥島【乗組員】伝蔵・万次郎[中浜万次郎・ジョン万次郎・満次郎・萬次郎・万治郎]・五右衛門・寅右衛門・重助【乗組員数】5【帰国ルート】鳥島ーアメリカ船が救助ーホノルルー琉球ー長崎【関係船】伝蔵：ホノルルで撰津船永住丸(No.247)の漂流者に会う。ホノルルで紀伊船天寿丸(No.267)の漂流者に会う。長崎で紀伊船天寿丸(No.267)の漂流者に会う。万次郎：ホノルルで紀伊船天寿丸(No.267)の漂流者に会う。長崎で紀伊船天寿丸(No.267)の漂流者に会う。【備考】ハワイに残った寅右衛門は三州船永久丸(No.293)の漂流者のために通訳を勤めた【出典】《川合》。《加藤》池道之助「思出艸」(『土佐史談』五二・五三)/河田小龍「漂異紀略」(坂井昌夫編『中浜万次郎資料集』、川田維鶴『漂異紀略 付研究河田小龍とその時代』)/林燿「通航一覽統輯」(七九・八〇、異国漂流記、辛丑異国漂流記、中浜万次郎漂流記)/林燿「通航一覽統輯」(一一五、某秘記)/林燿「統

通信全覽」(類輯之部船艦門漂流、土佐国宇佐浦漁夫万次郎外四人漂流中米国船ノ救助ニ依テ同国ニ至帰朝一件)／松野尾章行「皆山集」(四、幕府中浜万次郎召抱之事)／松野尾章行「皆山集」(四五、万次郎に学びたし)／吉田正誉「漂客談奇」(荒川秀俊編『異国漂流記集』、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流)／「宇佐浦漂流人口咄」(広谷喜十郎編『土佐清水関係藩政期文書』一)／「宇佐浦漂流人申口」(広谷喜十郎編『土佐清水関係藩政期文書』一)／「開出雑話」(坂井昌夫編『中浜万次郎資料集』)／「土佐国幡多郡中の浜浦万次郎一代記」(『建依別』一六-五・七・八)／「難船人帰朝記事」(坂井昌夫編『中浜万次郎資料集』)／「願書一通」(坂井昌夫編『中浜万次郎資料集』)／「犯科帳」(一三四-五七(森永種夫『犯科帳』一〇))／「漂客談奇」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、住田正一編『海事大辞書』中巻中浜万次郎、荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「漂民間書」(坂井昌夫編『中浜万次郎資料集』、荒川秀俊編『日本漂流・漂着史料』)／「漂民録」(神宮司庁『古事類苑』外交部)／「漂流人聞書」(坂井昌夫編『中浜万次郎資料集』)／「漂流奇談」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「漂流万次郎帰朝談」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「満次郎漂流記」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)／関田駒吉「土佐船の漂流文献」／「万次郎アメリカ漂流記」(仲原善忠訳『日本漂流奇談』)。

《同志社》「亜墨利加詞」カ(【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))／「亜墨利加漂流記」(1冊、【写本】所三井文庫)／「亜墨利加漂流聞書」(【写本】所愛媛県立図書館)／「亜墨利加漂流万次郎在留物語」(1冊、【写本】所秋岡武次郎)／「亜墨利加より帰国聞書」(1冊、【写本】所高知県立図書館(嘉永5年))／「亜墨利幹土州幡多郡中の浜万次郎漂流漸聞記」(【写本】所徳島県立図書館)／「亜羅周遊奇談」カ(【写本】所田中滝治氏(高知県南国市)(嘉永4年写))／「異国物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書77))／「宇佐浦漂流人申口・宇佐浦漂流人口咄」(【写本】所広谷喜十郎氏(高知県立図書館))／「宇佐浦より漂流留」カ(1冊、【写本】所九州大学)／「海外聞書」(【写本】所広谷喜十郎氏(高知県立図書館)(嘉永5年頃写))／「皆山集」(【写本】所東京水産大学羽原文庫、東京大学史料編纂所、※5巻、45巻に万次郎関係記録所収)／「嘉永帰朝漂客奇談」カ(1冊、【写本】所神戸大学)／「嘉永五異国戻聞書 萬次郎物語」(1冊、【写本】所高知県立図書館)／「嘉永五年壬子土佐人漂流記」(【写本】所田中滝治氏(高知県南国市)(嘉永7年写))／「参考漂流人始末聞書」カ(2巻図1巻2冊、別「参考漂客伝」、成天保12年、著小梁処士、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、慶應義塾大学富士川文庫、神戸大学、東京大学、東北大学狩野文庫(嘉永6年写)、浅野図書館、中浜博氏)／「辛丑異国漂流記」(【活字】『通航一覽統輯 第3巻』所収)／「伝蔵五右衛門萬次郎亜墨利加漂流記」(2巻2冊、【写本】所龍谷大学)／「土佐國中浜万次郎漂流記」(1冊、【写本】所東京教育大学)／○「土佐国幡多郡中の浜浦万次郎一代記」(【写本】所若江南風氏(小松島市))／「土佐国幡多郡中ノ浜村漁人万次郎異国漂流之次第図書実録」(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「土佐国人亜墨利加国江漂流記」(1冊、著中浜万次郎、【写本】所東北大学狩野文庫(嘉永7年南麓社写))／「土佐国漂流人申口聞書」(【写本】所高知県立図書館、真覚寺(土佐市宇佐))／「土佐国万次郎漂流記」(【写本】所西尾市立図書館岩瀬文庫(嘉永5年写))／「土佐伝蔵漂流記」(【写本】所宮内庁書陵部(南陽叢書1))／「土佐中浜万次郎漂流記」(1冊、【写本】所九州大学)／「土佐漂流人口書」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書69))／「土佐万次郎異国漂流次第図書実録」(【写本】所東京都立日比谷図書館)／「土佐万次郎漂流記」(1冊、【写本】所西尾市立図書館岩瀬文庫)／「土州宇佐浦流者万次郎聞書」(1冊、【写本】所鈴鹿文庫)／「土州宇佐浦漁人北亜墨利加江漂流之記」(1冊、【写本】所同志社大学)／「土州宇佐浦獵師漂流記」カ(1冊、【写本】所東京大学本居文庫(カピタン封書和解写を付す))／「土州漁夫亜墨利加漂流一件」(【写本】所田中滝治氏(高知県南国市))／「土州漁夫漂流記」(3冊、【写本】所神戸大学)／「土州人中浜万次郎漂流記」(【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫(管見叢話1))／「土州人漂流記」カ(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書76)(「土州人漂流記」、嘉永6年写、漂流記叢書79)(宮塚叢書の内)、宮内庁書陵部(嘉永5年写)、田中滝治氏(嘉永6年写)、岡山大学池田家文庫(異国へ漂流仕候陸奥国之者四人口書等と合))／「土州難船人帰朝記」カ(1冊、成嘉永5年、【写本】所米沢市立図書館興讓館文庫)／「土州幡多郡中浜万次郎漂流漸聞書」(1冊、成嘉永7年、【写本】所徳島県立図書館)／「土州漂流記」(1冊、【写本】所同志社大学、2部(嘉永7年写・荒本和一、昭和16年写))／「土州漂流人口書」(1冊、成嘉永4年、【写本】所市

立米沢図書館林泉文庫)／「土州舟子万次郎異国江漂流之始末」(1冊、別「土州舟子万次郎漂流始末」、成天保12年、著竹村修、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(明治写))／「土州万次郎漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(雑話を付す))／「中浜万次郎資料集」(坂井昌男編、高知放送史談会、昭和44年3月、221p、(放送史談会叢書、第1集))／「中浜万次郎漂海記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)／「中浜万次郎漂流紀事」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(明治写))／「難船人帰朝記事」(成嘉永5年、【写本】所九州大学(嘉永7年写1冊)、「難船人帰朝記」、安政3年小川某写1冊)、東京大学史料編纂所(1冊)、京都府立図書館(「難船人帰朝記」、2冊)、高知県立図書館(兼松文書の内)、{高知市民図}、深瀬昭氏、東京都立日比谷図書館近藤文庫(2巻2冊)、米沢市立図書館興讓館文庫(3巻、下巻欠、1冊)、中浜博氏(難船人帰朝記、1冊)、〔追加《海洋》「嘉永五年難船人帰朝記事：全」、1冊〕)／「日本人漂流之記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書80))／「八多郡中浜万次郎噺聞書写」(【写本】所丸亀市立図書館(嘉永5年写))／「秘説漂流録」(5巻5冊、【写本】所東北大学狩野文庫、東京都立日比谷図書館近藤文庫、※漂流談奇・異国船浦賀渡来一件を収む・全5冊のうち万次郎関係1.2の34枚分)／「漂客紀聞」(1冊、【写本】所神宮文庫図書館(嘉永5年写)(嘉永6年写)、「亜米利加ヨリ帰国聞書」、嘉永6年写))／「漂客見聞録」(3冊、著牧志摩守編、【写本】所国立国会図書館)／「漂客語録」(1冊、著中浜万次郎、【写本】所高知県立図書館)／○「漂客談奇」(成嘉永5年、著吉田正誉(文治)、【写本】所国立国会図書館(嘉永6年栗田寛写1冊)(3巻3冊)、「漂客奇談」、漂流記叢書65、1冊)、「漂客奇談」、土佐漂流人口書と合、漂流記叢書69(漂流記叢書66・67、1冊本2部)(漂流記叢書68、2巻2冊)、国会図書館支部内閣文庫(1冊)、国会図書館支部静嘉堂文庫(「漂流談奇」、1冊)、宮内庁書陵部(1冊)、東京国立博物館(3冊)、香川大学神原文庫(2冊)、九州大学(1冊)、京都大学(1冊)、神戸大学(2冊)、「漂客奇談」、1冊)、国学院大学(1冊)、早稲田大学(「土佐漂客談奇」、1冊)、「漂客談話」、1冊(1冊本2部)、東京大学(「漂流奇談」、1冊)、東京大学史料編纂所(1冊)、東北大学狩野文庫(「漂客譚」、1冊)、「漂流談奇」、2巻、秘説漂流録の内)、京都府立図書館(1冊)、東京都立日比谷図書館近藤文庫(3巻3冊)(1冊)、「漂客奇談土州中之浜漂人異話」、1冊)、「漂流談奇」、2巻、秘説漂流録の内)、西尾市立図書館岩瀬文庫(「漂客奇談」、1冊)、名古屋市蓬左文庫(2巻2冊)、市立米沢図書館林泉文庫(窪田梨溪写1冊)、神宮文庫図書館(嘉永7年写1冊)、尊経閣文庫(1冊)、お茶の水図書館成篁堂文庫(1冊)、「漂客奇談」、1冊)、穂久邇文庫(1冊)、礪川堂文庫(1冊)、浅野図書館(1冊)、〔追加《古典》茨城大学菅文庫(「海國圖志 附漂客談奇」、1冊)、玉川大学(安政4年写、1冊)、新潟大学佐野文庫(1冊)(1冊)、茨城県立歴史館(「漂客奇談」、1冊)、栃木県立図書館黒崎文庫(「嘉永漂客奇談」1-4、4冊)、市立弘前図書館(「漂客奇談」、1冊)、射和文庫(「嘉永5年漂客談奇」、1冊)〕、〔追加《北方》「漂客奇談」〕、【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫))／「漂異紀畧」(川田維鶴撰、【写本】所{京外大}(嘉永5年写4巻4冊)、松岡鬼一氏、住吉神社、高知県立郷土文化会館、中浜博氏、〔追加《海洋》「漂異記略4巻」、1冊〕、〔追加《早稲田》4冊〕)／「漂民間書」カ(別「漂民録・漂流人間書・漂流談」、【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))／「漂民紀事」(【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))／「漂民新話」(3巻付1巻4冊、【写本】所神戸大学)／「漂洋瑣談」カ(【写本】所中浜博氏(中日病院外科医長))／「漂流始末聞書」(1冊、【写本】所神戸大学)／「漂流談記」カ(2巻、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫(秘説漂流録の内))／「漂流人始末聞書」(1冊、【写本】所龍谷大学(嘉永5年写)、中浜博)／「漂流人土佐国万次郎口書」(【写本】所田中滝治氏(高知県南国市))／「漂流譚－土佐国万次郎帰朝」(【写本】所田中滝治氏(高知県南国市))／「松平土佐守小人万次郎相糺書付」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、東京大学史料編纂所、国立国会図書館、京都大学(図)、※土佐国群書類従巻84の内)／「漫子亜墨利加雑話」(1冊、別「難船人帰朝記」、【写本】所東京大学史料編纂所(2部))／「万次郎一世紀」(【写本】所名古屋市蓬左文庫)／「萬次郎杯往還聞書」(1冊、【写本】所高知県立図書館(嘉永5))／「万次郎外四人漂流一件」(【写本】所田中滝治氏(高知県南国市))／「万次郎北米漂流記」(1冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)／「万次郎譚

和解船話」(1冊、著太虚道人、【写本】所国立国会図書館(第2編、漂流記叢書71)(坤、漂流記叢書72))／○「満次郎漂流記」(1冊、別「大日本土佐国漁師漂流記」、著鈍通子編、【版本】所国立国会図書館(漂流記叢書73)(1冊)、九州大学、東京教育大学、東北大学狩野文庫、{京外大}、岡山県総合文化センター、高知県立図書館、東京都立日比谷図書館近藤文庫、礪川堂文庫、高橋正、〔追加《古典》天明2版-栃木県立図書館黒崎文庫(1冊)、嘉永6版-玉川大学(「漂流譚」1冊)(1冊)〕、〔追加《海洋》1冊〕、※明治11版(「亜米利加漂流譚」)あり)／「万次郎漂流紀事」(※日本漂流書目による)／「万次郎漂流細書」(【写本】所田中滝治氏(高知県南国市))／「万次郎漂話」(1冊、【写本】所宮内庁書陵部)／「万次郎物語」(1冊、【写本】所高知県立図書館(伊藤丑太郎嘉永5年写))。

《国書補遺》「土州人漂流記」カ(【写本】所岡山大学池田家文庫(異国へ漂流仕候陸奥国之者四人口書等と合))。《古典》「漂流人対問」(【写本】所福井市立図書館(「漂流人対問」1冊))／「漂流人土佐万次郎取調書写」(【写本】所玉川大学(嘉永7年写、1冊))。

《北方》「漁夫万次郎亜米理加漂流之記」。

《海洋》「大日本土佐國漁師漂流譚」(1冊、【版本】、〔追加《早稻田》1冊〕、※鈍通子記録)／「土州漂流人口書：完」(1冊、【写本】)。

No. 246

【漂流年】天保12(1841)[天保11(1840)]年【帰国年】天保14(1843)年【船籍地】加賀国石川郡大野村【船名】松徳丸(丸屋伝六船)【漂流地点】鹿島灘【乗組員】勝蔵・宗七・弥三兵衛【乗組員数】7【帰国ルート】清国船が救助-マカオ-乍浦-長崎【関係船】マカオで肥後船(No.237)の漂流者と会う。マカオで撰津船永住丸(No.247)の初太郎と一緒にいる。乍浦で陸奥船観吉丸(No.248)の漂流者と一緒になる。乍浦で撰津船永住丸(No.247)の善助と一緒にいる。

【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」(一二三-六四(森永種夫『犯科帳』九))／「皆月村弥三兵衛異国へ漂着の次第口書」(石川県図書館協会編『加能漂流譚』)。

No. 247

【漂流年】天保12(1841)年【帰国年】①・②天保14(1843)年・③弘化2(1845)年【船籍地】撰津国兵庫西宮内町【船名】永住丸[栄寿丸](中村屋伊兵衛船)【漂流地点】犬吠崎沖【乗組員】善助・初太郎・儀三郎・亥之助・弥市・太吉【乗組員数】13【帰国ルート】スペイン船が救助-カリフォルニア…①初太郎：マカオ①-ホノルル-マカオ②-乍浦-長崎-故郷・②善助：マカオ①-ホノルル-マカオ②-上海-乍浦-長崎-故郷・③亥之助、弥市、太吉：乍浦-長崎【関係船】初太郎：ホノルルで土佐の漂流者(No.245)と会う。マカオ②で肥後船の漂流者(No.237)と加賀船松徳丸(No.246)の漂流者と会う。松徳丸の漂流者とは一緒になる。乍浦で陸奥船観吉丸(No.248)の漂流者と一緒になる。乍浦で善助と一緒にいる。善助：ホノルルで土佐の漂流者(No.245)と会う。上海で尾張船宝順丸(No.230)の漂流者の世話になる【備考】カリフォルニアで置き去りにされた者のうち儀三郎は寧波で帰国を断念してイギリス役所で働く

【出典】《川合》。《加藤》井上黙「亜湧竹枝」(河野太郎『初太郎漂流記』)／井上黙「初太郎漂流記」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)／岩崎俊章「東航紀聞」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五巻漂流)／田中基文・賀来佐之「墨是可新話」(入江涓訳『墨是可新話-島原松平文庫に眠るメキシコ漂流秘書-』)／林糧「通航一覽続輯」(一一四・一一五、亜墨新話、漂民善助口書)／林糧「続通信全覽」(類輯之部船艦門漂流、紀伊国周佐美浦船亜米利加国ニ漂流一件)／堀内信編「南紀徳川史」一八／前川温・酒井輝「亜墨新話」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』、三島才二編『南蛮紀文選』、三島才二編『南蛮稀聞帳』、河野太郎『初太郎漂流記』)／前川文「海外異聞」(荒川秀俊編『異国漂流記続集』)／「浮世の有様」(巻一一、天保十五年雜記四六、漂流)／「栄寿丸漂流口書」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／「紀州熊野漂流嘶」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五巻漂流)／「長尾市太郎成立書並系図」(河野太郎『初太郎漂流記』)／「犯科帳」(一二三

一六〇・九八 (森永種夫『犯科帳』九)／戸台俊一「弥市漂流物語」。

《同志社》○「亜墨新話」(5巻5冊、別「天保年間阿波国水手初太郎等漂流一件・海外異聞・亜墨利加新話」、**成**天保15年序、**著**前川温(文)・酒井輝(順蔵)撰、守任定輝画、郡波希顔序、【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(5冊)、宮内庁書陵部(2冊)、東京国立博物館(巻1・2、2冊)、岡山大学池田家文庫(3冊)、京都大学(7冊)、東京大学史料編纂所(4冊)、東北大学狩野文庫(3冊)、早稲田大学(5冊)、県立秋田図書館(4冊)、徳島県立図書館(1冊)、東京都立日比谷図書館加賀文庫(3冊)、植考書屋(5冊)、成田図書館(3冊)、凌霄文庫(3冊)、国会図書館支部内閣文庫(1冊)、同志社大学(1冊)、〔追加《北方》〕、〔追加《国書補遺》【活字】荒川秀俊『異国漂流記続集』(昭和39年)〕／「亜墨竹枝」(1冊、**成**弘化2年前川文序、同3年広瀬建・篠崎弼序、**著**井上黙(春洋)、【写本】所早稲田大学、{旧三井鶚軒}、名古屋市蓬左文庫(資治雜笈二輯)、〔追加《国書補遺》東京都立中央図書館特別買上文庫諸家(暎夷伝示天下諸国檄等と合)〕、【版本】所国会図書館支部内閣文庫、慶應義塾大学、東京大学、早稲田大学、東京都立日比谷図書館加賀文庫、村野文庫、凌霄文庫、鮎沢信太郎、岡田伊三次郎、同志社大学、〔追加《国書補遺》香川大学神原文庫)〕／「亜墨竹枝余話」(1冊、**成**弘化年間、**著**井上黙(春洋)、【写本】所凌霄文庫)／「亜墨利加新話」カ(4巻2冊、【写本】所名古屋大学岡屋文庫)／「亜米理軒見聞記」(上中下巻1冊、【写本】所同志社大学)／「伊豫松山亥ノ助北亜美理駕漂流紀」(1冊、【写本】所龍谷大学(嘉永2年写))／「栄寿丸善助西洋漂流物がたり」(1冊、【写本】所京都府立図書館)／「海外異聞」(1冊、別「亜墨利加聞書」、【写本】所名古屋大学神宮皇学館文庫)／○「海外異聞」(5巻5冊、別「亜墨利加新話・亜米利加新話」、**成**安政元年刊、**著**靄湖漁叟、【版本】所国会図書館支部内閣文庫、関西大学、九州大学、京都大学、東京教育大学、神戸大学、東北大学狩野文庫、広島大学、東京都立日比谷図書館近藤文庫、{東京}、西尾市立図書館岩瀬文庫、市立刈谷図書館、名古屋市蓬左文庫、大橋図書館、栗田文庫、神宮文庫図書館、竜門文庫、{京外大}、同志社大学、〔追加《国書補遺》龍谷大学、上田市立図書館花月文庫〕、〔追加《古典》嘉永7版一東洋文庫藤井文庫(「亜墨利加新話」5巻、5冊)、市立弘前図書館(「亜墨利加新話」5巻、5冊)、その他一島根大学桑原文庫(「亜墨利加新話」1-5、5冊)〕、〔追加《海洋》3冊、巻之1~3〕、〔追加《早稲田》5冊)〕／「海外異話」(別「天保十二年伊予松山船子亥之助漂流記」、**成**嘉永2年、【写本】所国立国会図書館(2巻1冊)、国会図書館支部内閣文庫(2巻2冊)、宮内庁書陵部(嘉永4年写4冊)、京都府立図書館(明治2年写1冊)、西尾市立図書館岩瀬文庫(1冊)、市立刈谷図書館(1冊)、龍谷大学(2巻2冊)、〔追加《国書補遺》国立国会図書館(1冊)、鹿児島大学玉里文庫(2巻1冊)〕／「海外漂流記 上之部 下之部」(1冊、【写本】所同志社大学(安政2年小西写)、※下之部は拾遺海外漂流記となっている)／「紀伊国漂流民一件書類」カ(2冊、【写本】所京都大学(大正元年井上善助蔵本写))／「紀州口熊野漂流漸」カ(1冊、【写本】所渡辺千秋、【活字】宮本常一等編『日本庶民生活史料集成 5巻 漂流：無人島漂流記』三一書房、1968)／「紀州善助渡米録」(3冊、**成**弘化元年、**著**那波希顔、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)／「紀州善助米利幹漂流記」(1冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)／「千石積栄寿丸沖船頭善助口書」(1冊、【写本】所{京外大})／「善助自筆和漢対照漂流始末」カ(1軸、※日本漂流書目による)／「善助初太郎漂流記」(【活字】荒川秀俊編『異国漂流記続集 5 通航一覽続編漂流記選』地人書館、昭和39年)／「善助漂流記」カ(【写本】所東京教育大学(3巻3冊)、西尾市立図書館岩瀬文庫(1冊))／「天保十二年紀州牟婁郡善助阿波板野郡初太郎か丑年カリホルニヤに至りた紀事」(【写本】所東京大学史料編纂所(西海遺珠の内))／「天保漂流記海外異聞抄」カ(1冊、**著**靄湖漁叟、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫(海外異聞考を付す)、※海外異聞抄出)／○「東航紀聞」(10巻6冊、**著**岩崎俊章編、【写本】所国立国会図書館、国学院大学(嘉永4年写6巻6冊)、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校青山文庫、成田図書館(3冊)、〔追加《古典》射和文庫(從魯西亜帝王支那北京帝都へノ勅使道中日記と合[「魯西使支那往來日記等」合1冊])〕)／「初太郎北亜米利加漂流記」(1冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)／○「初太郎漂流記」(【活字】河野太郎編『初太郎漂流記』(徳島県教育会出版部、1970)、(初太郎漂流記の資料として「亜墨新話」・「長尾市太郎成立書並系図」・「亜墨竹枝」のほか「郷土人物誌」の記述「其後の永住丸漂流者の動向」を収めている))／「初太郎米国談」(4冊、**成**天保15年序、【写本】所神戸大学)／「漂流記」(1

冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)／「漂流聞書」(1冊、【写本】所{京外大}(弘化4年写))／「漂流談」(1冊、成天保15年、【写本】所早稲田大学)／「漂流人異国物語」カ(1冊、【写本】所神戸大学)／「漂流人口書」カ(1冊、著亥之助等、【写本】所島原市立島原公民館松平文庫)／「漂流人善助聞書」カ(1冊、【写本】所{京外大})／「漂流人善助初次郎口書写」カ(1冊、【写本】所国立国会図書館(弘化2年写、漂流記叢書82))／「漂流人弥市長崎奉行所ニテ請取方等ノ手続書」カ(1冊、【写本】所京都大学)／「漂流人弥市之記」カ(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書83)、九州大学)／「漂流物語」(1冊、【写本】所京都大学)／○「墨是可新話」(著田中基文・賀来佐之、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(5巻5冊)、島原市立島原公民館松平文庫(弘化4年写、付録目録共9巻))／「米利幹漂流記」(1冊、別「亜墨新話」、【写本】所早稲田大学)。

《古典》「米利幹漂流記」カ(別「漂流聞書」、著福田久右衛門、【写本】所射和文庫(「漂流聞書」1冊))。
《早稲田》「漂流始末記」(1軸、著善助記)。

No. 248

【漂流年】天保12(1841)年 【帰国年】天保14(1843)年 【船籍地】陸奥国伊達郡北半田 【船名】観吉丸[観音丸](重吉船) 【漂流地点】九十九里浜沖 【漂着地】フィリピン群島中のサマル島付近の小島 【乗組員】甚助・次郎吉・長次郎・喜平・重吉・与三蔵 【乗組員数】8 【帰国ルート】フィリピン群島中のサマル島付近の小島-カヴィテ-マニラ-香港-マカオ-乍浦-長崎-江戸 【関係船】乍浦で撰津船永住丸(No. 247)の初太郎と加賀船松徳丸(No. 246)の漂流者と一緒になる。乍浦で撰津船永住丸(No. 247)の善助と一緒にになる。

【出典】《川合》。《加藤》大槻磐溪「観音丸呂宋漂流記」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／大槻磐溪「呂宋漂流記」(荒川秀俊編『異国漂流記集』)／大槻磐溪「呂宋漂流記」(池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五巻漂流)／林煌「通航一覽続輯」(七、呂宋国漂流記、管海区略)／藤川貞「天保雜記」(五〇、呂宋国漂流記(大槻清崇附地図并船)・呂宋国漂流記之内抄録)／「犯科帳」(一二三-六七(森永種夫『犯科帳』九))／「呂宋国漂流記」(服部聖多朗「呂宋国漂流記」)。

《同志社》「天保漂流記」カ(1冊、別「天保辛丑漂流記事」、成弘化2年、著大槻清崇、【写本】所県立長崎図書館(2部)、{旧}彰考館文庫、〔追加《古典》宮城教育大学(「漂流記」、魯西亜漂流記他と合〔「漂流記」1冊〕)])／○「呂宋国漂流記」(1冊、別「呂宋漂流記」、成弘化2年、著大槻清崇編、【写本】所国立国会図書館(好古堂漫録7)(漂流記叢書52)(弊函一掃7)、国会図書館支部内閣文庫(明治写)、国会図書館支部静嘉堂文庫(昭和写)(1冊)、宮内庁書陵部(静幽堂叢書51)、東京国立博物館(「天保辛丑呂宋国漂流記」)、東京大学(嘉永5年写)(1冊)、東京大学史料編纂所、東北大学狩野文庫(2部)、龍谷大学(1冊)、同志社大学(1冊)、岡山県総合文化センター、京都府立図書館(蒸気船訳・鷺毛筆余と合)(1冊)、高知県立図書館(弘化2年写)、県立長崎図書館、東京都立日比谷図書館近藤文庫(嘉永7年百花園主人写)、足利学校遺跡図書館(旅の流塵62)、西尾市立図書館岩瀬文庫、神宮文庫図書館、尊経閣文庫、竹柏園文庫、〔追加《古典》島根大学海野文庫(「呂宋國漂流記」、弘化3年写、1冊)、宮城教育大学(漂流再記他と合〔「漂流記」1冊〕)(弘化2年写、1冊、翠帚館叢書)、大洲市立図書館矢野玄道文庫(弘化2年写、1冊)、〔追加《海洋》積成會寄贈本1冊、森下晋二氏寄贈本1冊))〕。

《古典》「仙台之漂流人足覚」カ(【写本】所宮城教育大学(弘化2年写、1綴))。

《早稲田》「漂流之記」(1冊、【写本】)。

No. 249

【漂流年】天保12(1841)年 【船籍地】尾州内海 【船名】数右衛門船 【漂流地点】紀州沖 【乗組員】数右衛門・源助・治助・長吉・十作・亀吉・伊助 【乗組員数】7 【帰国ルート】外国船が救助-ペルーのカヤオ港 【備考】長吉は万延元年ごろ商船で清国へ。十作は明治3年ごろ死亡。亀吉は仕立屋になり、結婚。伊助はりマで大工になり、結婚

【出典】《川合》。

No. 250

【漂流年】天保 14 (1843) 年 【帰国年】天保 14 (1843) 年 【船籍地】薩摩国河辺郡加世田郷泊村 【船名】栄助の漁船 【漂流地点】五島沖 【漂着地】朝鮮 【乗組員】与吉 【乗組員数】21 【帰国ルート】朝鮮—萩三島—長門国萩宇津港—長崎

【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」(一二三—六五(森永種夫『犯科帳』九))。

《同志社》「薩摩国与吉其外者共朝鮮へ漂流致シ定法ノ送方ニ不相成乗戻長門宇津港へ漂流一件」(1 冊、著長崎奉行所、【写本】所県立長崎図書館)。

No. 251

【漂流年】天保 14 (1843) 年 【船籍地】江戸カ 【備考】北海でアメリカ船が救助。天保 14 年はアメリカ船が救助した年代カ。

【出典】《川合》。

No. 252

【帰国年】天保 15 (1844) 年 【船籍地】天草カ 【漂着地】朝鮮 【乗組員数】3 カ 【帰国ルート】朝鮮—長崎 【備考】対馬藩から護送されて長崎に着いた

【出典】《川合》。

No. 253

【漂流年】天保 15 (1844) 年 【帰国年】弘化 2 (1845) 年 【船籍地】阿波国中野郡撫養 【船名】幸宝丸(天野屋兵吉船) 【漂流地点】紀伊国比井岬沖 【漂着地】鳥島 【乗組員】徳之丞・由蔵・幸助 【乗組員数】11 【帰国ルート】鳥島—アメリカ船が救助—(上総国夷隅郡守谷村・房州乙浜村)—浦賀 【関係船】アメリカ船で日本へ航行中に陸奥船千寿丸 (No. 254) を救助し一緒になる 【備考】連絡のため由蔵らを上総国夷隅郡守谷村に上陸させ、さらに幸助らを房州乙浜村に上陸させた

【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽統輯」(一〇五—一〇八、乙巳異船一件、某筆記、尹隸秘蔵、相浪手簡、或留記、乙巳雜書、浦賀雜事、浦賀雜書、亜墨利加雜事、浦賀雜話、異船一件、亜米利加船雜事、弘化年録、浦賀与力留書、捕賀同心由緒書、浦賀御褒美聞書、異国船渡来一件)／林燿「続通信全覽」(類輯之部船艦門漂流、米国鯨漁船阿波下総両国ノ漂民護送浦賀へ渡来一件)／藤川貞「弘化雜記」(三、漂流人由蔵上総国守谷村江上陸・弘化無人島漂流紀聞・阿波船水主十一人帰国次第・護送紀略・阿波国幸蔵丸幸助漂流中日記写・漂流人為乗組候異国船渡来之評書)／堀内信編「南紀徳川史」一八／「浮世の有様」(卷十二、弘化二年雜記八、漂流民の話)／「浮世の有様」(卷十三、弘化三年雜記一七、漂流人の嘯)／「幸宝丸漂流記」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「己酉雜綴」(二〇(神宮司庁『古事類苑』外交部))。

《同志社》「阿南漂泊實記」(1 冊、【写本】所同志社大学(海表異聞 49))／「阿南漂流記」(1 冊、成弘化元—2 年、著徳之丞等、【写本】所東北大学狩野文庫)／「阿波幸宝丸漂流記」(1 冊、成嘉永頃、【写本】所九州大学)／「幸宝丸漂流一件聞書」(1 冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書 84))。

《北方》「弘化二年乙巳亜墨利加船浦賀入律並阿州漂民帰朝之記」カ。

《海洋》「撫養天野屋船南部船外船ニ被助聞書」(1 冊、【写本】)。

No. 254

【漂流年】弘化 2 (1845) 年 【帰国年】弘化 2 (1845) 年 【船籍地】陸奥国閉伊郡釜石浦 【船名】千寿丸(佐野屋与平治船) 【漂流地点】常州平潟沖 【乗組員】勇助・太郎兵衛・富蔵 【乗組員数】11 【帰国ルート】アメリカ船が救助—館山港—浦賀 【関係船】救助されたアメリカ船に阿波船幸宝丸 (No. 253) の漂流

者がおり一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽統輯」（一〇五～一〇八、乙巳異船一件、某筆記、尹隸秘藏、相浪手簡、或留記、乙巳雜書、浦賀雜事、浦賀雜書、亜墨利加雜事、浦賀雜話、異船一件、亜米利加船雜事、弘化年録、浦賀与力留書、浦賀同心由緒書、浦賀御褒美聞書、異国船渡来一件）／林燿「続通信全覽」（類輯之部船艦門漂流、米國鯨漁船阿波下総両国ノ漂民護送浦賀へ渡来一件）／藤川貞「弘化雜記」（三、漂流人由蔵上総国守谷村江上陸・護送紀略）／堀内信編「南紀徳川史」一八／「己酉雜綴」（二〇（神宮司庁『古事類苑』外交部））。

No. 255

【帰国年】弘化2（1845）年 【船籍地】尾張カ 【備考】アメリカ船が尾張の漂民を護送して浦賀に来航
【出典】《加藤》林燿「続通信全覽」（類輯之部船艦門漂流、米國船尾張ノ漂民護送浦賀ニ渡来一件）。

No. 256

【漂流年】弘化2（1845）年 【帰国年】弘化3（1846）年 【漂流地点】種子島沖 【漂着地】清国松江府華亭県の小島 【乗組員】喜兵衛・富三郎・小重太・幸吉 【乗組員数】4 【帰国ルート】清国松江府華亭県の小島一乍浦一長崎 【備考】種子島に流された淡路の者4人の島抜け
【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」（一三〇-一二三（森永種夫『犯科帳』一〇））／「御仕置伺集」（七〇（森永種夫『御仕置伺集』上））。

No. 257

【漂流年】弘化2（1845）年 【船籍地】日本 【乗組員】3カ 【備考】アメリカ船に救助されてハワイに上陸。弘化2年はアメリカ船に救助されてハワイに上陸した年代カ
【出典】《川合》。

No. 258

【帰国年】弘化2（1845）年 【船籍地】日本 【備考】アメリカ船が安房国館山に入港し漂流者を送致して去った
【出典】《川合》。

No. 259

【漂流年】弘化3（1846）年 【帰国年】弘化4（1847）年 【船籍地】尾張 【出港地】大坂 【乗組員数】9カ
【帰国ルート】ドイツ船が救助一松前海峡で日本船に移す一南部領
【出典】《川合》。

No. 260

【漂流年】弘化4（1847）年 【帰国年】嘉永元（1848）年 【船籍地】伊豆国三宅島 【船名】権現丸（伝右衛門船） 【漂着地】薩州屋久島 【出港地】八丈島 【乗組員】伝右衛門 【乗組員数】6 【帰国ルート】薩州屋久島一長崎
【出典】《川合》。

No. 261

【漂流年】弘化4（1847）年 【船籍地】日本 【乗組員数】4カ 【備考】アメリカ船に救助されてホノルルに上陸。弘化4年はアメリカ船に救助されてホノルルに上陸した年代カ
【出典】《川合》。

No. 262

【漂流年】弘化4(1847)年 【船籍地】日本 【漂着地】スタプレトン島の一小湾 【乗組員数】5カ 【備考】フランス船が海岸に漂着した日本船の生存者を救助。弘化4年はフランス船が救助した年代カ
【出典】《川合》。

No. 263

【漂流年】嘉永元(1848)年 【船籍地】日本 【乗組員数】20カ 【帰国ルート】アメリカ船が救助ーハワイ諸島のマウイ島ラハイナ 【備考】漂流者はラハイナに6ヶ月ないし8ヶ月滞在した。嘉永元年はハワイ諸島のマウイ島ラハイナに上陸させた年代カ
【出典】《川合》。

No. 264

【漂流年】嘉永元(1848)年 【帰国年】嘉永2(1849)年 【船籍地】大阪今橋 【船名】大通丸(紙屋新助船) 【漂流地点】志州沖 【乗組員】正十郎 【乗組員数】12 【備考】陸奥国気仙沼越喜来村の住民に救助された
【出典】《川合》。《加藤》「大坂船漂着記」(南部叢書刊行会編『南部叢書』第一〇冊)。
《同志社》○「大阪船漂着記」(別「大阪船漂流記」、成嘉永2年、【写本】所岩手県立図書館)。

No. 265

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】播州赤穂郡坂越浦 【船名】明德丸(矢子屋彦兵衛船) 【漂着地】八丈島属島小島宇津木村 【乗組員】彦四郎・長五郎・平七・清七 【乗組員数】14
【出典】《川合》。

No. 266

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】三州高浜 【船名】竹久丸(栄三郎船) 【漂着地】青ヶ島 【乗組員】栄三郎・久吉 【乗組員数】15 【帰国ルート】青ヶ島ー八丈島大賀郷
【出典】《川合》。

No. 267

【漂流年】嘉永3(1850)年 【帰国年】①嘉永4(1851)年・②嘉永5(1852)年 【船籍地】紀伊国日高郡園浦 【船名】天寿丸(和泉屋庄衛門船)[庄左衛門船・虎吉船] 【漂流地点】伊豆沖 【出港地】江戸 【乗組員】九助こと虎吉[寅吉]・長助・半六・佐蔵 【乗組員数】13 【帰国ルート】アメリカ船が救助…①虎吉：ホノルルーハワイー香港ー上海ー乍浦ー長崎ー故郷・②長助、半六：ペトロパウロフスクーアヤンーノウォアルハンゲリスク(シトカ)ー豆州下田ー豆州中木浦ー下田ー江戸ー故郷 【関係船】虎吉：ハワイで土佐の漂流者(No.245)と会う。香港で肥後の漂流者(No.237)と会う。上海で尾張船宝順丸(No.230)の漂流者と会う。乍浦で肥前の漂流者(No.286)と一緒にいる。長崎で土佐の漂流者(No.245)と会う。
【出典】《川合》。《加藤》林糧「通航一覽統輯」(九八、漂民蛮話、漂客談奇、幽陬秘籍、某筆記)／林糧「続通信全覽」(類輯之部船艦門漂流雑件、海外へ漂流ノ国民処分沿革一件)／藤川貞「安政雜記」(一、豆州入間村漂流人儀江川太郎左衛門伺書)／「紀州船米国漂流記」(石井研堂編『校訂漂流奇談全集』)／「犯科帳」(一三四-四七(森永種夫『犯科帳』一〇))／「漂流船聴書」(荒川秀俊編『近世漂流記集』)。
《同志社》「亜墨利加漂流記聞」(1冊、別「紀伊国日高郡園浦天寿丸虎吉船亜墨利加漂流記聞」、成嘉永4年、【写本】所九州大学(自筆)／「紀州園浦漂流記」(1冊、著能勢矩政、【写本】所東京国立博物館(嘉永5年写))／「天寿丸漂流記」(上・下巻1冊、【写本】所龍谷大学、※上巻は「天寿丸オロシア廻り漂流記」、下巻は「天寿丸唐土廻り漂流記」「天寿丸漂客内佐蔵聞書附録(嘉永七年寅七月)」「長崎表江イギリス人御忠

節御奉行衆江直々御達申上度との前口上写」からなる)／「天寿丸漂流談」(1冊、成嘉永2年、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)／「東帰異聞雑記」(1冊、【写本】所東京大学史料編纂所(東京都酒井新次郎蔵本写)、同志社大学(安政2年写))／「蕃国記」(3巻3冊、【写本】所龍谷大学)／「漂流人日高郡蘭浦新町庄左衛門船天寿丸沖船頭九助事虎吉初五人の者共申口書」(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「漂流舟記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(嘉永6年写、漂流記叢書85))。

《海洋》「垂墨漂客談 上・下」(2冊、【写本】)／「紀州太郎兵衛自筆漂流記」(1冊、【写本】、※乾のみ)／「豆州下田港江異國船入津漂流人乗せ来始末荒増於異船承り書留写」(1冊、【写本】)／「漂民蠻話：完」(1冊、【写本】)／「北沙奇聞録」(1冊、【写本】)。

No. 268

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】大坂淡路町二丁目 【船名】寿通丸(錫屋庄兵衛船) 【漂着地】八丈島三根村神湊 【乗組員】徳蔵・利右衛門・政蔵 【乗組員数】16
【出典】《川合》。

No. 269

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】尾州常滑浦 【船名】嘉永丸(忠蔵船) 【漂着地】八丈島中之郷藍ヶ江 【乗組員】忠蔵 【乗組員数】9 【関係船】嘉永丸には漂流中に救助された讃州塩飽牛島平右衛門船大新造の13人がいた
【出典】《川合》。

No. 270

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】播州坂越浦 【船名】小竹丸(義兵衛船) 【漂着地】八丈島末吉村神子崎 【乗組員】助市・与市・長右衛門 【乗組員数】11
【出典】《川合》。

No. 271

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】越後国頸城郡青海浦 【船名】観在丸(内川屋、斎藤太次右衛門船) 【漂着地】八丈島大賀郷八重根 【乗組員】内河屋徳三郎・小野伴三郎・民治郎 【乗組員数】11 【関係船】観在丸には漂流中に救助された摂州鳴尾の丸屋半右衛門船、成竜丸の5人がいた
【出典】《川合》。

No. 272

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】淡州津名郡志筑浦 【船名】春吉丸(九右衛門船) 【漂着地】青ヶ島 【乗組員】九右衛門・友八・芳太郎 【乗組員数】10 【帰国ルート】青ヶ島ー八丈島大賀郷
【出典】《川合》。

No. 273

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】播州坂越浦 【船名】住寿丸(松次郎船) 【漂着地】青ヶ島 【乗組員】松次郎・源治郎・利八 【乗組員数】11 【帰国ルート】青ヶ島ー八丈島大賀郷
【出典】《川合》。

No. 274

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】尾州常滑浦 【船名】幸栄丸(富浦長次郎船) 【漂着地】八丈島属

島小島宇津木村 【乗組員】万蔵 【乗組員数】10 【帰国ルート】八丈島属島小島宇津木村—末吉村洞輪沢
【出典】《川合》。

No. 275

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】淡州三原郡惣川村 【船名】福膳丸(新蔵船) 【漂着地】青ヶ島 【乗組員】新蔵・茂助・春吉 【乗組員数】5 【関係船】福膳丸には洋上で救助された越中国射水郡六渡寺村の次郎兵衛船、長寿丸の7人がいた
【出典】《川合》。

No. 276

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】阿州那賀郡答島村 【船名】喜栄丸(善兵衛船) 【漂着地】八丈島末吉村洞輪沢 【乗組員】熊蔵・勇蔵・金蔵 【乗組員数】10
【出典】《川合》。

No. 277

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】紀州尾鷲浦 【船名】喜福丸(浜中屋、土井八郎兵衛船) 【漂流地点】八丈島末吉村 【乗組員】長吉・惣兵衛・長太郎 【乗組員数】12
【出典】《川合》。

No. 278

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】紀州鶴殿 【船名】観喜丸(彦右衛門船) 【漂着地】八丈島末吉村 【乗組員】彦兵衛・勇治郎・彦左衛門 【乗組員数】8
【出典】《川合》。

No. 279

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】尾州野間一色村 【船名】春日丸(野村藤次郎船) 【漂着地】八丈島末吉村 【乗組員】虎吉 【乗組員数】12
【出典】《川合》。

No. 280

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】大坂船坂町 【船名】長栄丸(佐兵船) 【漂着地】青ヶ島 【乗組員】留五郎・梅吉 【乗組員数】11 【帰国ルート】青ヶ島—八丈島大賀郷 【関係船】長栄丸には漂流中に救助された江戸北新堀の孫市船、松福丸の8人がいた
【出典】《川合》。

No. 281

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】加賀国向栗ヶ崎 【船名】宝永丸(鳥屋徳兵衛船) 【漂着地】青ヶ島 【乗組員】長治郎・清五郎 【乗組員数】12 【帰国ルート】青ヶ島—八丈島大賀郷
【出典】《川合》。

No. 282

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】紀州和歌山湊上町 【船名】和合丸(御影屋市兵衛船) 【漂着地】八丈島属島小島鳥打村 【乗組員】岩蔵・治助・源兵衛 【乗組員数】7
【出典】《川合》。

No. 283

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】大坂福島 【船名】住清丸(木屋市十郎船) 【漂着地】八丈島末吉村卷繩浦 【乗組員】庄十郎・藤四郎・和吉 【乗組員数】15

【出典】《川合》。

No. 284

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】摂州御影 【船名】天徳丸(西田屋弥平治船) 【漂着地】八丈島末吉村 【乗組員】庄治郎・福松・栄蔵 【乗組員数】17

【出典】《川合》。

No. 285

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】摂州今津 【船名】三社丸(利作船) 【漂着地】八丈島三ツ根村神湊 【乗組員】権八・市兵衛・熊吉 【乗組員数】16

【出典】《川合》。

No. 286

【漂流年】嘉永3(1850)年 【帰国年】嘉永5(1852)年 【船籍地】肥前国彼杵郡伊王島大明寺村カ〔深堀大明寺カ〕・五嶋カ 【漂流地点】釣松魚 【漂着地】清国浙江省寧波府定海県 【出港地】五嶋 【乗組員】菊蔵・仁蔵・虎次郎・春蔵・忠五郎・八十松・和七・未蔵 【乗組員数】14 【帰国ルート】清国浙江省寧波府定海県一乍浦一長崎 【関係船】乍浦で紀州船天寿丸(No. 267)の漂流者と一緒になる

【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽統輯」(四三・四四、漂流人帰国之記)／「犯科帳」(一三四-三七(森永種夫『犯科帳』一〇))。

《同志社》「漂会謾草」(1冊、著深堀魯(棟伍)、【写本】所国立国会図書館鸚軒文庫(文久2年写)、同志社大学(文久2年写))。

No. 287

【漂流年】嘉永3(1850)年 【帰国年】①安政元(1854)年・②安政6(1859)年 【船籍地】摂津国菟原郡大石村 【船名】永力丸〔栄力丸〕(松屋八三郎船) 【漂流地点】大王崎沖 【漂着地】江戸 【乗組員】万蔵・亀五郎・次作・彦蔵〔浜田彦蔵〕・長助・仙八・岩吉・安太郎・利七 【乗組員数】17 【帰国ルート】アメリカ船に救助される一サンフランシスコ①一ハワイ一香港…①長助：上海①一乍浦一長崎・②彦蔵：サンフランシスコ②一ホノルル一上海②一長崎一神奈川一サンフランシスコ③ 【関係船】香港で肥後船(No. 237)の漂流者の世話になる。長助：上海①で尾張船宝順丸(No. 230)の漂流者の世話になる。乍浦で薩州の漂流者(No. 297)が送られてきた。彦蔵：サンフランシスコ②で尾張船永栄丸(No. 309)の漂流者に会う。ホノルルで尾張船神力丸(No. 310)の漂流者の世話をする。アメリカ船にいた淡路の政吉(No. 313)の世話をする。上海②で尾張船宝順丸の漂流者(No. 230)に会う。サンフランシスコ③で尾張の漂流者(No. 321)の世話をする

【出典】《川合》。《加藤》浜田彦蔵「漂流記」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』彦蔵漂流記、早川純三郎編『文明源流叢書』第三、荒川秀俊編『異国漂流記集』、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流、荒川秀俊編『近世漂流記集』、東根武一・中嶋仁道訳『嘉永三年遠州灘沖栄力丸海難漂流生還者の記録の研究』)／林燿「通航一覽統輯」(一一六、(引用書名記載なし))／林燿「統通信全覽」(類輯之部船艦門漂流、播州本荘村農民北米利堅国へ漂流一件、芸州二ノ島村船乗亀五郎米国桑港へ漂流一件)／堀熙明「栄力丸漂流記談」(吉田文治編『海表叢書』卷三、新村出編『南蛮紅毛史料』)／奥平昌忠「長瀬村人漂流談」(谷田亀寿編『長瀬村利七漂流談』、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷漂流)／勝海舟「吹塵録」(貨幣之部一-二七、亜墨利加使節へ応接之上取極候趣申上候書付)／「亜墨利加漂流記」(服部聖多朗「亜墨利加漂流記」)／「嘉永

三年遠州灘沖海難漂流人口書(東根武一・中嶋仁道『嘉永三年遠州灘沖栄力丸海難漂流生還者の記録の研究』)／「犯科帳」(一三五-一九・二〇・三〇・三五(森永種夫『犯科帳』一〇))／「播州人米国漂流始末」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／「彦蔵漂流記」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』)／高市慶雄校訂並解題『開国逸史 アメリカ彦蔵自叙伝』／中川努訳『アメリカ彦蔵回想記』)／中川努・山口修訳『アメリカ彦蔵自伝』／土方久徴(鷗洲散士)補訳『漂流異譚 開国之滴』)／松岡貞信訳『長瀬村利七漂流談』)／「アメリカ漂流紀」(仲原善忠訳『日本漂流奇談』)。

《同志社》「栄力丸漂流記—嘉永3年」(【活字】『通航一覽統輯 卷116』(「北亜墨利加部13」)、荒川秀俊編『異国漂流記続集』(地人書館、昭和39年))／「東西異聞」(6巻6冊、**成**安政2年序、**著**一色広信(見竜)問・菅生信胤記、【写本】**所**東京大学、兵庫善福寺、お茶の水図書館成篁堂文庫(1冊)、龍谷大学(6冊)、〔追加《国書補遺》龍谷大学(7巻7冊)〕)／「長瀬村人取調書」カ(1冊、【写本】**所**姫路市立図書館、田村家(安政2年写))／「長瀬村人漂流記 前巻後巻及び漂民異聞秘録」(3巻1冊、**著**奥多昌忠聞記、【写本】**所**同志社大学(安政2年写)、※「日本庶民生活史料集成」所収の「長瀬村人漂流談」上中下3巻と大部分同じ、「漂民異聞秘録」は巻之中に相当する)／○「長瀬村利七漂流談」(別「長瀬村人漂流談」、**著**奥多昌忠編、【写本】**所**国立国会図書館(明治写2巻1冊、漂流記叢書88)、京都大学(安政2年写2巻1冊)(安政7年写1冊)、早稲田大学(1冊)、名古屋市蓬左文庫(「嘉永伯耆人漂流談」、3巻、資治雜笈2輯)、奥多孫太郎(安政3年写1冊)、【謄写】長瀬村利七漂流談、谷田亀寿編、昭和13年)／「漂客夢物語」(1冊、【写本】**所**西尾市立図書館岩瀬文庫)／○「漂流記」(2巻2冊、別「彦蔵漂流記・アメリカ彦蔵漂流記・播州彦蔵漂流記」、**成**文久3年序、**著**彦蔵、【版本】**所**国立国会図書館(漂流記叢書86)(2巻2冊)、国立国会図書館亀田文庫、国会図書館支部内閣文庫(1冊)、国会図書館支部静嘉堂文庫、東京国立博物館、九州大学、京都大学(1冊)、{京外大}、同志社大学、神戸大学、東北大学狩野文庫、東京都立日比谷図書館東京誌料、お茶の水図書館成篁堂文庫、無窮会神習文庫(1冊)、竜門文庫、浅野図書館(1冊)、〔追加《古典》玉川大学(「彦蔵漂流記」1冊)〕、〔追加《北方》2冊、「漂流記上・下」〕、〔追加《海洋》「漂流記2巻」1冊〕〔追加《早稲田》2冊)〕)／「文明漂流叢書」(第3冊、国書刊行会、大正3年、※漂流記(亜米利加彦蔵)を収録)。

《古典》「播州加古郡西船頭万蔵外拾六人異国に漂流記」(【写本】**所**玉川大学(安政2年写、1冊))。

No. 288

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】長門国藤曲村 【船名】浮木丸 【漂流地点】犬吠崎沖 【漂着地】清国乍浦近辺の小島 【出港地】江戸

【出典】《加藤》「権市口上書」(桜木保「漂流民権市“口上書、について」)。

《海洋》「雲州人漂流記：全」(1冊、【写本】)／「嘉永船便加羅物がたり」(1冊、【写本】)／「船便唐物語」(1冊、【写本】)。

No. 289

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】三州松江 【船名】栄蔵船 【漂着地】八丈島中之郷藍ヶ江 【乗組員数】8

【出典】《川合》。

No. 290

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】摂州菟原郡御影村 【船名】富貴丸(沢田屋十兵衛船) 【漂着地】八丈島三根村神湊 【乗組員数】16

【出典】《川合》。

No. 291

【漂流年】嘉永3(1850)年 【船籍地】相州西浦賀町 【船名】六兵衛船 【漂着地】八丈島末吉村洞輪沢 【乗

組員数】5

【出典】《川合》。

No. 292

【漂流年】嘉永4(1851)年 【船籍地】日本 【漂着地】アリューシャン列島アッカ島 【乗組員数】3カ

【出典】《川合》。

No. 293

【漂流年】嘉永4(1851)年 【帰国年】①嘉永5(1852)年・②安政元(1854)年 【船籍地】三河国渥美郡江比間村 【船名】永久丸(与一船) 【漂流地点】志摩国沖 【乗組員】岩吉・善吉・作蔵・勇次郎 【乗組員数】4 【帰国ルート】アメリカ船が救助ーホノルル…①岩吉、善吉：釜山ー長崎・②作蔵、勇次郎：ホーン岬ーニューベットフォードーニューヨークーボストンーホーン岬ーバルパライソーガラパゴス諸島ーサンフランシスコー香港ー豆州下田沖 【関係船】ホノルルで土佐の漂流者(No.245)が通訳をした。作蔵ら：香港で肥後の漂流者(No.237)の世話になる

【出典】《川合》。《加藤》村上範政・稲熊元長「漂民間書」(近藤恒次編『三河文献集成』近世編上)。

《同志社》○「漂民間書」(12巻5冊、**成安政3年**、**著**村上範致・萱生景福・稲熊元長、【写本】**所**村上正敏(自筆))。

No. 294

【帰国年】嘉永5(1852)年 【船籍地】長州カ 【乗組員数】9カ 【備考】清国船で長崎に着いた

【出典】《川合》。

No. 295

【漂流年】嘉永6(1853)年 【船籍地】日本カ 【備考】アメリカ船がパガン島およびクリガン島の近くで甲板を波に洗われて横たわっている日本船らしい遭難船を一隻見つけた。嘉永6年はアメリカ船が遭難船を見つけた年代カ

【出典】《川合》。

No. 296

【漂流年】嘉永6(1853)年 【船籍地】日本 【備考】C・M・スキヤモン船長は、カリフォルニア半島沖にあるセドロス諸島中のサン・ベニト島の西南端で、難破した日本船の破片を発見した。嘉永6年は船長が日本船の破片を発見した年代カ

【出典】《川合》。

No. 297

【漂流年】嘉永6(1853)年 【帰国年】安政元(1854)年 【船籍地】薩州カ 【漂着地】清国ソウメン府 【出港地】琉球 【乗組員】平左衛門 【乗組員数】19カ 【帰国ルート】清国ソウメン府ースウチウー乍浦ー長崎 【関係船】乍浦で摂津船永力丸(No.287)の漂流者と一緒になった

【出典】《川合》。

No. 298

【漂流年】嘉永6(1853)年 【帰国年】嘉永7(1854)年 【船籍地】越後国岩船郡寝屋村 【船名】八幡丸〔善助船〕 【漂流地点】松前江差沖 【乗組員】勇之助 【乗組員数】13 【帰国ルート】アメリカ船が救助ーカリフォルニアー下田

【出典】《川合》。《加藤》林燿「通航一覽統輯」(一〇九、甲寅雜記、海禁雜記、蛮船聞書、御届留、或筆記、某筆記、浦賀無名氏留書)／林燿「統通信全覽」(類輯之部船艦門漂流、米船越後ノ漂民護送浦賀ニ渡來下田ニテ受領一件)／「下田取計一件」(五(神宮司序『古事類苑』外交部))。

No. 299

【漂流年】安政元(1854)年 【船籍地】琉球 【漂着地】土佐国津呂浦

【出典】《川合》。

No. 300

【漂流年】安政元(1854)年 【帰国年】安政2(1855)年 【船籍地】芸州倉橋 【船名】文蔵船 【漂流地点】日向沖 【漂着地】種子島浦田浦 【乗組員】文三郎 【帰国ルート】種子島浦田浦一山川

【出典】《川合》。

No. 301

【漂流年】安政2(1855)年 【船籍地】日本 【備考】アメリカ船がシベリアのアヤンからの復航中、アメリカ沿岸を距る九百海里の洋上で、一隻の放棄された日本船を得た。安政2年はアメリカ船が日本船を得た年代カ

【出典】《川合》。

No. 302

【帰国年】安政3(1856)年 【船籍地】琉球カ 【乗組員】渡名喜親方 【備考】アメリカ船が救助し那覇に入港

【出典】《川合》。

No. 303

【帰国年】安政3(1856)年 【船籍地】撰津国東明浦 【船名】平治船 【乗組員】新太郎 【乗組員数】16カ 【帰国ルート】アメリカ船が救助一安房国南朝夷村の甚左衛門の漁船に移乗

【出典】《川合》。

No. 304

【漂流年】安政3(1856)年 【船籍地】琉球中山府 【漂着地】薩州山川港

【出典】《川合》。

No. 305

【漂流年】安政3(1856)年 【船籍地】日本 【備考】アメリカ船が、ラドラン群島のグアム島に一隻の難破した日本船があったことを報告した。安政3年はアメリカ船が報告した年代カ

【出典】《川合》。

No. 306

【漂流年】安政3(1856)年 【船籍地】日本 【備考】ブリッグ型船プリンス・デ・ジョインビル号は、マグダレナ湾付近で一隻の難破した日本船を見たことを報告した。安政3年はプリンス・デ・ジョインビル号が報告した年代カ

【出典】《川合》。

No. 307

【漂流年】安政3(1856)年 【漂着地】清国 【備考】大隅国種子島に流された者が島抜けした後に漂流
【出典】《加藤》「犯科帳」(一三六-三六(森永種夫『犯科帳』一〇))／「御仕置伺集」八七(森永種夫『御仕置伺集』下)。

No. 308

【漂流年】安政4(1857)年 【船籍地】琉球 【漂着地】長崎代官管地野母村沖 【備考】長崎代官は長崎在勤の鹿児島藩吏に引き渡した
【出典】《川合》。

No. 309

【漂流年】安政4(1857)年 【帰国年】安政5(1858)年 【船籍地】尾張国知多郡半田村 【船名】永栄丸(七三郎船) 【漂流地点】伊豆半島沖 【乗組員】七三郎 【乗組員数】12 【帰国ルート】イギリス船が救助-サンフランシスコ-香港-上海-長崎 【関係船】サンフランシスコで摂津船栄力丸(No.287)の漂流者と会う。香港で肥後船(No.237)の漂流者に会う。上海で尾張船宝順丸(No.230)の漂流者に会う。長崎で尾張船神力丸(No.310)の漂流者に会う。
【出典】《川合》。《加藤》林燿「続通信全覧」(類輯之部船艦門雑件、外船対馬津軽近海通航具状及英艦漂民護送長崎ニ渡来一件)／「犯科帳」(一三八-四五・五五・六九(森永種夫『犯科帳』一一))。

No. 310

【漂流年】安政4(1857)年 【帰国年】①安政5(1858)年・②安政6(1859)年 【船籍地】尾張国知多郡亀崎村 【船名】神力丸(次三郎船) 【漂流地点】三州大山沖 【出港地】江戸 【乗組員】源弥・勘太郎・喜平 【乗組員数】5 【帰国ルート】アメリカ船が救助…①源弥：箱館・②勘太郎、喜平：ホノルル-長崎 【関係船】勘太郎、喜平：ホノルルで摂津船栄力丸の漂流者(No.287)の世話になる。長崎で尾張船永栄丸の漂流(No.309)に会う。
【出典】《川合》。《加藤》「犯科帳」(一三八-六九(森永種夫『犯科帳』一一))。

No. 311

【帰国年】安政5(1858)年 【船籍地】松前カ 【乗組員】伝九郎・甚吉・久米吉・由松 【乗組員数】4カ
【備考】4人の漂流者を乗せたロシア軍艦が伊豆国下田に入港
【出典】《川合》。

No. 312

【漂流年】安政5(1858)年 【帰国年】万延元(1860)年 【船籍地】播磨国赤穂郡坂越浦[赤穂郡刈屋村] 【船名】光塩丸 【漂流地点】鹿島灘沖 【漂着地】ルソン 【出港地】浦賀 【乗組員】庄三郎・浅吉・善四郎・権八・源蔵・乙松・市太郎・近之助・八三郎・嘉市・利助・民三郎・清五郎・金兵衛・弥四郎 【乗組員数】15カ 【帰国ルート】ルソン-長崎
【出典】《川合》。《加藤》林燿「続通信全覧」(類輯之部船艦門漂流、播州赤穂長之助船呂宋国へ漂流一件)／「犯科帳」(一三九-四六・四九・七九(森永種夫『犯科帳』一一))。

No. 313

【漂流年】安政5(1858)年 【帰国年】万延元(1860)年 【船籍地】淡路カ 【漂流地点】紀州沖 【乗組員】政吉 【乗組員数】3カ 【帰国ルート】アメリカ船が救助-ホノルル-横浜 【関係船】ホノルルで摂津船永力丸(No.287)の漂流者の世話になる。横浜で再会

【出典】《川合》。

No. 314

【帰国年】安政6(1859)年 【船籍地】日本 【備考】アメリカ船が日本人漂流民を護送して渡来

【出典】《加藤》林煇「続通信全覧」(類輯之部船艦門漂流、米国鯨船モーリエー号我国ノ漂流民護送一件)。

No. 315

【漂流年】安政6(1859)年 【帰国年】安政6(1859)年 【船籍地】北蝦夷地トンナイカ 【漂着地】ニコライエフスク 【出港地】トンナイ 【乗組員】北蝦夷地トンナイ詰足軽倉内忠右衛門 【帰国ルート】ニコライエフスクー北蝦夷地クシュンナイ

【出典】《川合》。《加藤》「御用留」(神宮司庁『古事類苑』外交部)。

《北方》「北地詰足軽倉内忠右衛門廻嶋一件(自主御用所)」(成安政6年)。

No. 316

【漂流年】安政6(1859)年 【船籍地】日本 【備考】バーク型船ガンビア号はあるオーシャン島で一隻の日本船の残骸を発見した。安政6年はガンビア号が日本船の残骸を発見した年代カ

【出典】《川合》。

No. 317

【漂流年】安政6(1859)年 【備考】ブルックス島の東側で二隻の擱坐船の遺物とそれらの帆柱が海岸に打ち上げられているのが発見された。安政6年は二隻の擱坐船の遺物とそれらの帆柱が発見された年代カ

【出典】《川合》。

No. 318

【漂流年】安政6(1859)年 【船籍地】奥州宮古 【船名】善宝丸 【漂着地】琉球

【出典】《川合》。

No. 319

【漂流年】安政7(1860)年 【船籍地】豊後国岡領三佐村 【船名】福吉丸 【漂流地点】野茂崎沖 【漂着地】琉球国久志間切川田村車泊 【出港地】長崎

【出典】《加藤》安仁屋正昭「船頭庄吉の琉球漂流記」。

No. 320

【漂流年】文久元(1861)年 【帰国年】文久3(1863)年 【船籍地】尾張国知多郡内海 【船名】伊勢丸(前野長七船) 【漂流地点】熊野灘 【漂着地】アリューシャン列島のアツツ島 【出港地】江戸 【乗組員】代助・亀三郎・定吉 【乗組員数】12 【帰国ルート】アリューシャン列島のアツツ島ーニコライエフスクー長崎

【出典】《川合》。《加藤》「尾州船漂流記」(服部聖多朗『尾張漂流譚』)／「犯科帳」(一四二-一二四(森永種夫『犯科帳』一一))。

No. 321

【漂流年】文久元(1861)年 【帰国年】文久2(1862)年 【船籍地】尾張国知多郡中洲 【船名】イオ丸 【漂流地点】熊野灘 【出港地】江戸 【乗組員】清五郎・権次郎・彦吉・栄吉・仙次郎 【乗組員数】11 【帰国ルート】アメリカ船が救助ーサンフランシスコー神奈川 【関係船】摂津船栄力丸(No. 287)の漂流者の世話になる

【出典】《川合》。《加藤》「尾州船漂流記」（服部聖多朗『尾張漂流譚』）。

No. 322

【漂流年】文久元（1861）年 【帰国年】文久2（1862）年 【船籍地】尾張国知多郡小野浦 【船名】忠五郎船 【漂流地点】熊野灘 【漂着地】八丈島 【出港地】江戸 【乗組員数】13 【帰国ルート】八丈島－江戸

【出典】《川合》。《加藤》「尾州船漂流記」（服部聖多朗『尾張漂流譚』）。

No. 323

【漂流年】文久元（1861）年 【船籍地】尾張国知多郡野間 【船名】鈴木平吉船 【漂流地点】熊野灘 【漂着地】伊豆国小浦 【出港地】江戸

【出典】《川合》。

No. 324

【漂流年】文久元（1861）年 【船籍地】豊後国岡領三佐村カ 【漂着地】久志間切川田村車泊

【出典】《加藤》安仁屋正昭「船頭庄吉の琉球漂流記」。

No. 325

【漂流年】文久2（1862）年 【船籍地】日本 【備考】バーク船ヤンキー号は一隻の日本の難破船を発見した。文久2年はバーク船ヤンキー号が日本の難破船を発見した年代カ

【出典】《川合》。

No. 326

【漂流年】文久3（1863）年 【船籍地】越前国三国 【船名】順喜丸 【出港地】箱館 【備考】イギリス船が救助

【出典】《加藤》林煌「続通信全覧」（類輯之部船艦門漂流、彼我人民漂流一件）。

No. 327

【帰国年】文久3（1863）年 【船籍地】日本 【漂着地】ロシアの属島 【帰国ルート】ロシアの属島－長崎 【備考】イギリス船がロシアの属島に漂着した日本人を護送して長崎に来港

【出典】《加藤》林煌「続通信全覧」（類輯之部船艦門漂流、彼我人民漂流一件）。

No. 328

【漂流年】文久3（1863）年 【出港地】長崎 【乗組員】広島藩士・鹿児島浪士 【備考】アメリカ船が救助

【出典】《加藤》林煌「続通信全覧」（類輯之部船艦門漂流、彼我人民漂流一件）。

No. 329

【漂流年】文久3（1863）年 【船籍地】日本 【漂着地】ベーカス島 【乗組員数】4カ 【備考】陸に引き寄せて調査すると4人の日本人死体があった

【出典】《川合》。

No. 330

【漂流年】文久3（1863）年 【備考】プロヴィデンス島の鹹湖側の岸に数年経過した難破船の破片が発見

された。文久3年は難破船の破片が発見された年代カ

【出典】《川合》。

No. 331

【漂流年】元治元(1864)年 【船籍地】常州那珂湊 【船名】小池屋四郎八船 【漂着地】種子島能野浦 【乗組員】源七 【乗組員数】7 【備考】鹿児島藩横目らが取調べて鹿児島藩へ報告

【出典】《川合》。

No. 332

【漂流年】元治元(1864)年 【帰国年】慶応元(1865)年 【船名】幕府の第一長崎丸 【漂流地点】遠州灘 【漂着地】八丈島 【出港地】江戸 【乗組員】本木昌造 【備考】八丈島で破船。船長らは在島160日の後、幕府の救助を得て帰った

【出典】《川合》。

No. 333

【漂流年】慶応元(1865)年 【帰国年】慶応元(1865)年 【船籍地】越中国射水郡六渡寺 【船名】平寿丸(平次郎船) 【漂流地点】佐渡沖 【漂着地】北洋の島 【乗組員】清八・与吉・次三郎・北次郎・与三三郎 【乗組員数】5 【帰国ルート】北洋の島ーウラジオストークー長崎

【出典】《川合》。《加藤》林煌「続通信全覧」(類輯之部船艦門漂流、彼我人民漂流一件)。

No. 334

【漂流年】慶応元(1865)年 【船籍地】壱岐国平戸 【船名】灘吉丸 【漂着地】朝鮮国全羅道济州無注浦 【出港地】対馬

【出典】《加藤》林煌「続通信全覧」(類輯之部船艦門漂流、彼我人民漂流一件)。

No. 335

【漂流年】慶応2(1866)年 【帰国年】慶応3(1867)年 【船籍地】松前志摩守領分大松前カ [大松浦カ] 【漂流地点】カラフトのクシュンナイ 【漂着地】ロシア領沿海州 【乗組員】栄吉・竹松・竹蔵 【乗組員数】4カ 【帰国ルート】ロシア領沿海州ーウラジオストークー長崎

【出典】《川合》。《加藤》林煌「続通信全覧」(類輯之部船艦門漂流、英船ヂョアナ号ヲーサカ号我国ノ漂民ヲ護送一件)。

No. 336

【漂流年】慶応2(1866)年 【船籍地】八丈島 【漂流地点】御蔵島沖 【漂着地】清国の東砂という無人島 【出港地】江戸 【帰国ルート】清国の東砂という無人島ー清国船が救助ー香港

【出典】《加藤》林煌「続通信全覧」(類輯之部船艦門漂流、在香港英国鎮台八丈島漂民救助一件)。

No. 337

【漂流年】慶応2(1866)年 【船籍地】紀伊国牟婁郡有田村 【漂流地点】勢州沖 【漂着地】鳥島 【備考】アメリカ船に救助される

【出典】《加藤》林煌「続通信全覧」(類輯之部船艦門漂流、布哇鯨漁船小笠原島へ漂流ノ国民護送一件)。

No. 338

【漂流年】慶応3(1867)年 【船籍地】八丈島カ 【漂着地】香港 【乗組員】八丈島用船預長戸路収蔵 【乗

組員数】34カ 【備考】駐日イギリス特派全権公使から収蔵らが香港に漂着したことが報告される。慶応3年は駐日イギリス特派全権公使から報告があった年代カ
【出典】《川合》。

No. 339

【漂流年】慶応3（1867）年 【船籍地】対馬藩 【出港地】長崎 【備考】外国船に救助され上海に上陸
【出典】《加藤》林煌「続通信全覧」（類輯之部船艦門漂流、英船ヂョアナ号ヲーサカ号我国ノ漂民ヲ護送一件）。

No. 340

【漂流年】慶応4（1868）年 【船籍地】日本 【備考】スペイン使節が日本人漂民を護送して来るとアメリカ書記官が報告。慶応4年はアメリカ書記官からの報告を受けた年代カ
【出典】《加藤》林煌「続通信全覧」（類輯之部船艦門漂流、西班牙使節我国ノ漂民ヲ護送一件）。

No. 341

【漂流年】明治元（1868）年 【船籍地】鍋島藩支藩の小城藩 【船名】大木丸 【漂流地点】東支那海 【漂着地】台湾 【出港地】上海
【出典】《加藤》豆田三兵衛「上海航記」（荒川秀俊編『近世漂流記集』）。

第 2 部 未分類漂流記

No. 1

《同志社》「秋田船異国漂流記」(1 冊、【写本】所北海道庁、※天明 8-寛政 2 の記事)。

No. 2

《同志社》「阿州船漂流記」(1 巻、【写本】所京都大学 (武道撫萃録 383))。

No. 3

《同志社》「亜墨船事状」(1 冊、【写本】所浅野図書館)。

No. 4

《同志社》「亜米利駕漂流記」(1 冊、**成**弘化 2 年、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)。

No. 5

《同志社》「安永漂流話」(1 冊、【写本】所岡山市図書館 (天明元年))。

No. 6

《同志社》「安南国江漂着之記」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫 (外国通覧 3))。

No. 7

《同志社》「異国航来漂民婦朝紀事」(1 冊、**成**文化 4 年、【写本】所北海道大学)。

No. 8

《同志社》「夷国嘶実録」(3 冊、※国書解題等による)。

No. 9

《同志社》「異国漂流記」(【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫 (続海外異聞の内)、愛媛県立図書館伊予史談会文庫 (1 冊)、雲泉文庫 (弘化 4 年写 2 冊))。

No. 10

《同志社》「異国漂流記」(1 冊、**成**天保 2 年、**著**六兵衛等、【写本】所東京都立日比谷図書館加賀文庫)。

No. 11

《同志社》「異国漂流記」(1 冊、**成**安永 9 年、【写本】所国立国会図書館、京都大学、※北韃物語の付、安永 3-8 の記事)。

No. 12

《同志社》「異国漂流口書一件」(1 冊、※讃岐史料史籍目録による)。

No. 13

《同志社》「異国漂流物語」(1 冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)。

No. 14

《同志社》「異国へ漂流仕候奥州之者七人口書」(1冊、**成安政**4年、【写本】**所**京都府立図書館)。

No. 15

《同志社》「異国渡り口書」(5冊、【写本】**所**三井文庫)。

No. 16

《同志社》「伊勢国漂流民に関する書付」(1冊、**成寛政**4年、【写本】**所**岡山大学池田家文庫)。

No. 17

《同志社》「浦賀へ異国より漂流人送来候一件」(1冊、【写本】**所**国立国会図書館)。

No. 18

《同志社》「雲州三保関船乗無人島漂着記」(1冊、**成寛政**9年、【写本】**所**九州大学)。

No. 19

《同志社》「蝦夷地漂着人帰朝之記」(1冊、**成寛政**9年、**著**曾槃士攷、【写本】**所**西尾市立図書館岩瀬文庫)。

No. 20

《同志社》「蝦夷島漂流記」(1冊、**成寛文**年間、**著**伊勢人某、※地誌目録による)。

No. 21

《同志社》「蝦夷漂流口書」(1冊、【写本】**所**東北大学狩野文庫)。

No. 22

《同志社》「越後船漂流記」(**別**「越後漂流記」、**成元禄**6年、【写本】**所**京都大学(武道撫萃録382))。

No. 23

《同志社》「越前舟子漂流談」(1冊、**著**日下部景衡、**成正徳**2年、【写本】**所**宮内庁書陵部(自筆、定西法師琉球話と合))。

No. 24

《同志社》「越前落船記」(1冊、**成寛永**20年、【写本】**所**尊経閣文庫)。

No. 25

《同志社》「江戸船漂落紀事」(【写本】**所**宮内庁書陵部(片玉集続集27、無人嶋談話の付))。

No. 26

《同志社》「大阪船漂落紀聞」(1冊、【写本】**所**宮内庁書陵部(片玉集続集27))。

No. 27

《同志社》「奥州人江南漂着記」(1冊、【写本】**所**京都大学(海外異聞の内))。

No. 28

《同志社》「奥州人南京漂着記」(1冊、【写本】所京都大学(海外異聞の内))。

No. 29

《同志社》「奥州人漂着海島図記」(1冊、【写本】所お茶の水図書館成篁堂文庫)。

No. 30

《同志社》「奥州人漂着日記」(1冊、別「奥州人漂着之時日記」、【写本】所旧沖繩県立沖繩図書館(天保14年)(安政6年))。

No. 31

《同志社》「奥州人福建漂流記」(1冊、【写本】所京都大学(海外異聞の内))。

No. 32

《同志社》「奥州之船頭安南国漂着之奇談」(1冊、著松平定信、【写本】所桑名松平家)。

No. 33

《同志社》「大隅國漂人口上書并宗旨名」(1冊、【写本】所同志社大学)。

No. 34

《同志社》「大槌浦商船漂流夜話」(1冊、【写本】所岩手県立図書館)。

No. 35

《同志社》「奥民漂到韃国款状」(1冊、※国書解題による)。

No. 36

《同志社》「奥民漂流記」(1冊、【写本】所東京大学)。

No. 37

《同志社》「岡山漂流人記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(相馬祭記の付))。

No. 38

《同志社》「御国民呂宋国支配内漂流記」(1冊、【写本】所九州大学(福岡黒田家蔵本写))。

No. 39

《同志社》「阿蘭陀文」(1巻、【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫))。

No. 40

《同志社》「鄂羅斯漂海録」(1冊、【写本】所国立国会図書館旧幕関係引継書、※第1部No.159の「鄂羅斯漂海録」は同書カ)。

No. 41

《同志社》「尾張人漂流記」(【写本】所名古屋市蓬左文庫(資治雜笈、二輯))。

No. 42

《同志社》「尾張国人異国漂着記」(1冊、【写本】所お茶の水図書館成篁堂文庫)。

No. 43

《同志社》「海外異聞」(26冊、著桂川(森島)中良、【写本】所穂久邇文庫、{旧}彰考館文庫(1冊)(3冊))。

No. 44

《同志社》「海外異聞」(32巻、成文政9年序、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(崎陽雜記を付す))。

No. 45

《同志社》「海外漂流記聞」(成明和4年、【写本】所国立国会図書館(春雨楼叢書の内))。

No. 46

《同志社》「外国紀談」(※日本漂流書目による)。

No. 47

《同志社》「外国漂流全書」(13冊、【写本】所天理図書館)。

No. 48

《同志社》「外国漂流手続書」(1冊、成天保15年、【写本】所九州大学)。

No. 49

《同志社》「嘉永六年丑八月漂流人直晰聞書」(【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書70))。

No. 50

《同志社》「釜石漁夫漂流物語」(1冊、別「南部釜石浦漁夫漂泊物語(内)」、成宝暦2年、著美濃部作右衛門、【写本】所岩手県立図書館)。

No. 51

《同志社》「カムチャッカ漂流記—嘉永3年」(【活字】『通航一覽統輯 卷98』、荒川秀俊編『異国漂流記統集』(地人書館、昭和39年))。

No. 52

《同志社》「寛永漂民記」(4巻1冊、【版本】所天理図書館、【複製】稀書複製会新生期)。

No. 53

《同志社》「寛政九年無人島江漂流之者於八丈島口書」(1冊、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫)。

No. 54

《同志社》「寛政漂流話」(1冊、【写本】所九州大学)。

No. 55

《同志社》「広東漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(正徳元-4)(広東漂着日本人帰国之記)、正徳元-4)、東京大学史料編纂所(正徳2年)、東京都立日比谷図書館近藤文庫(チフラン漂流人略話記と合)、

中山久四郎)。

No. 56

《同志社》「広東物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(巻5、漂流記叢書6附録)、東北大学狩野文庫(「広東国へ漂着船帰朝物語」、弘化3年写)、東京都立日比谷図書館近藤文庫(明和4年写))。

No. 57

《同志社》「寛文十三年韃旦国漂流記」(1冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)。

No. 58

《同志社》「紀州漂着船被仰出書」(1冊、【写本】所神宮文庫図書館)。

No. 59

《同志社》「紀州漂流人西洋諸国之間書」(1冊、【写本】所京都大学)。

No. 60

《同志社》「北亜墨利加船応接記漂流人護送」(【活字】荒川秀俊編『近世漂流記集』(法政大学出版局、1969))。

No. 61

《同志社》「北亜墨利加渡船次第」(【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書70))。

No. 62

《同志社》「紀民漂流記」(2冊、【写本】所高知県立図書館)。

No. 63

《同志社》「紀民漂流記事」(2巻2冊、成嘉永2年、著水栗竜秀、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)。

No. 64

《同志社》「九助並弥市漂流記」(1冊、成嘉永5年、【写本】所西尾市立図書館岩瀬文庫)。

No. 65

《同志社》「漁夫漂流始末記」(1冊、【写本】所西尾市立図書館岩瀬文庫)。

No. 66

《同志社》「近世漂流談」(1冊、【写本】所神宮文庫図書館(嘉永6年写))。

No. 67

《同志社》「金蔵ヲロシヤ行」(1冊、成文化11年、【写本】所宮内庁書陵部、※金蔵書上)。

No. 68

《同志社》「於クナシリ仙台石巻漂流船之砌御用状案文写」(1冊、【写本】所市立函館図書館)。

《北方》「天保五年年於クナシリ仙台石巻漂流船之砌御用状案文写」(【写本】)。

No. 69

《同志社》「弘化丙午海外異話」(1冊、【写本】所鹿児島大学)。

No. 70

《同志社》「江南商話」(成文化5年、著戸部徳進(春行)、【写本】所国立国会図書館(1冊)(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))。

No. 71

《同志社》「江南船浦戸沖漂着記」(1冊、【写本】所東京国立博物館(文政10年写))。

No. 72

《同志社》「児島郡日比村者朝鮮漂着留」(1冊、【写本】所岡山大学池田家文庫)。

No. 73

《同志社》「児島郡松太郎漂流記」(1冊、【写本】所岡山県総合文化センター(文化11年写))。

No. 74

《同志社》「孤嶋漂流記」(1冊、【写本】所高知県立図書館(寛政10年写))。

No. 75

《同志社》「御領国之船唐漂着之儀付締方」(1冊、【写本】所旧沖繩県立沖繩図書館)。

No. 76

《同志社》「薩州税所長左衛門漂流一件」(1冊、成文化12年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(今村源右衛門日記抄等を付す))。

No. 77

《同志社》「薩州人漂流記事」(1冊、成文化13年、【写本】所{旧}彰考館文庫)。

No. 78

《同志社》「薩州ヨリ送越候無人島漂流日本人一件」(1冊、【写本】所東京大学史料編纂所、県立長崎図書館)。

No. 79

《同志社》「薩人漂海記」(著佐和莘斎、【写本】所早稲田大学(華谷叢書1集))。

No. 80

《同志社》「薩摩国種ヶ島漂流」(【写本】所九州大学(中山国奉書、渡天、八丈島漂流、唐国広東漂流、朝鮮国奉書と合1冊))。

No. 81

《同志社》「薩摩漂流記」(1冊、【写本】所{旧}彰考館文庫(安永写))。

No. 82

《同志社》「薩摩ヨリ送越所無人島漂流日本人一件」(1冊、**成**嘉永4年、**著**長崎奉行所、【写本】**所**県立長崎図書館)。

No. 83

《同志社》「讃岐船頭漂流談」(1冊、【写本】**所**東北大学狩野文庫)。

No. 84

《同志社》「讃州船漂流記」(1冊、【写本】**所**京都大学(武道摺萃録382))。

No. 85

《同志社》「讃民漂到島凶之説」(1冊、**著**国多吉右衛門等、【写本】**所**宮内庁書陵部(静幽堂叢書51))。

No. 86

《同志社》「ジャガタラ文」(【版本】長崎夜話艸の内、【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫)、『婦人文庫文集名媛遺芳』)。

No. 87

《同志社》「松歳丸遭難記」(1冊、**著**河村秀前、【写本】**所**福島県立図書館(昭和写))。

No. 88

《同志社》「商船漂寄廣東記」(1巻、【写本】**所**高知県立図書館(元文2年写))。

No. 89

《同志社》「正徳元年肥前国商船広東漂流一件」(【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(漂流雑記3))。

No. 90

《同志社》「清国漂流記」(1冊、【写本】**所**東京教育大学)。

No. 91

《同志社》「清国福建省江漂流記」(1冊、**成**宝暦元年、【写本】**所**{学書言志})。

No. 92

《同志社》「清国蘭邪浦漂着見聞記」(1冊、【写本】**所**京都大学)。

No. 93

《同志社》「清太郎聞書(仮称)」(【活字】『通航一覽続輯 卷116』、※「班節録」という書物からの採録)。

No. 94

《同志社》「神力丸一条」(1冊、【写本】**所**蓬左文庫)。

No. 95

《同志社》「神力丸航海日誌」(1冊、**著**千賀信之、【写本】**所**名古屋市立鶴舞図書館、【活字】川合彦充『神力丸航海日誌〔付文久三年尾張藩用船航海記(翻刻)〕』(海事史研究15、1970.10、136-161頁))。

No. 96

《同志社》「セイホレ江対話」(1冊、**成**文久元年、【写本】**所**神戸大学)。

No. 97

《同志社》「西洋漂流物語」(※日本漂流書目による)。

No. 98

《同志社》「仙台船漂着唐山記」(1冊、**別**「奥民唐土漂流記」、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫、※宝暦3・4)。

No. 99

《同志社》「仙台漂流人口書」(【写本】**所**早稲田大学(俄羅斯紀聞1集第5巻)、〔追加《北方》])。

No. 100

《同志社》「続環海異聞」(7巻7冊、**著**大槻茂楨(磐里)、【写本】**所**国会図書館支部静嘉堂文庫)。

No. 101

《同志社》「大明漂流実記」(1冊、**成**宝暦11年、【写本】**所**東京都立日比谷図書館近藤文庫(昭和写))。

No. 102

《同志社》「大湾国漂泊物語」(1冊、**著**吉右衛門等、【写本】**所**東北大学狩野文庫)。

No. 103

《同志社》「高田屋嘉兵衛等漂流一件」(1冊、**成**文化9年、【写本】**所**金沢市立図書館加越能文庫)／「高田屋嘉兵衛魯西亜国渡海記」(1冊、【写本】**所**京都府立図書館(嘉永6年写))／「文化九年高田屋嘉兵衛等漂流一件」(1冊、【写本】**所**尊経閣文庫)。

《早稲田》「五郎治事蹟」(1冊、**成**文化9年、**著**中川五郎治述、【写本】)。

No. 104

《同志社》「太三郎の記」(1冊、【写本】**所**同志社大学(海表異聞77))。

No. 105

《同志社》「韃竺茶話」(2編2冊、【写本】**所**東京都立日比谷図書館近藤文庫、※韃鞨天竺へ漂着之者口上覚)。

No. 106

《同志社》「韃旦国江漂流新話」(1冊、【写本】**所**九州大学)。

No. 107

《同志社》「韃旦国漂流記」(【写本】**所**豊橋市立図書館(他と合1冊))。

No. 108

《同志社》「韃旦国漂流奇聞」(1冊、【写本】**所**京都大学(天竺徳兵衛紀聞、庄の浦仙女物語、妖怪聞書を付す))。

No. 109

《同志社》「筑前国漂流人一件之書」(1冊、【写本】所浅野図書館)。

No. 110

《同志社》「チフラン漂流人略話」(1冊、【写本】所市立函館図書館(嶮谷叢書、函館本、2))。

No. 111

《同志社》「中天竺馬丹国物語 元祿七漂流記」(1冊、【写本】所宮内庁、※六蔵・伝右衛門等)。

No. 112

《同志社》「中天筑馬嶋江漂流記」(1冊、【写本】所彰考館文庫(享保4年写))。

No. 113

《同志社》「珍説書漂流船記事」(1冊、【写本】所浅野図書館)。

No. 114

《同志社》「天竺渡海物語」(1冊、著天竺徳兵衛、【写本】所国立国会図書館(宝暦7年写、水茎難類記の内)、国立国会図書館亀田文庫(「播州高砂浦船頭徳兵衛天竺渡海物がたり」、学習院大学(雕虫居写本の内)、神戸大学、横浜市立大学、宮城県図書館小西文庫、〔追加《国書補遺》香川大学神原文庫(「唐土天竺へ渡海物語」、宝永8年加地昌繩写)〕、【活字】『日本文庫10』)／「天竺徳兵衛覚書」(1冊、【写本】所西尾市立図書館岩瀬文庫(天保3年写))／「天竺徳兵衛記」(1冊、【写本】所京都大学(寛保3年写、自越前国到鞆鞆漂泊船書を付す))／「天竺徳兵衛渡天海陸物語」(1冊、【写本】所京都府立図書館)／「天竺徳兵衛渡天之記」(1冊、【写本】所無窮会神習文庫)／「天竺徳兵衛渡天物語」(【写本】所京都大学(武道摭萃録382)、〔追加《古典》玉川大学(1冊)、大阪天満宮御文庫(讃州丸亀多宮小太郎報讐記と合〔「天竺徳兵衛渡天物語 讃州丸亀多宮小太郎報讐記」1冊〕))／「天竺徳兵衛筆記」(1冊、【写本】所東京大学)／「天竺徳兵衛漂流記」(成元文2年、【写本】所国立国会図書館(松前出帆漂流話等と合1冊、〔追加《北方》))／「天竺徳兵衛物語」(1冊、【写本】所東北大学狩野文庫、京都府立図書館(武家法度・詩題と合)(1冊)、浅野図書館)／「天竺物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(延享4年写、漂流記叢書95)(宝暦7年写、漂流記叢書97)(「高砂舟頭町徳兵衛天竺へ渡り候物語」、漂流記叢書96)(1冊)、国会図書館支部静嘉堂文庫、宮内庁書陵部(静幽堂叢書51)、日本学士院、東京大学本居文庫(「海陸道法次第天竺物語」)、【活字】『古老遺筆』(明治29年))／「唐土天竺へ渡海物語」(1冊、【写本】所香川大学神原文庫(宝永8年加地昌繩写))／「徳兵衛天竺物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書3))／「播州高砂徳兵衛天竺物語」(1冊、成享保13年、【写本】所神戸大学→天竺渡海物語)。

《古典》「天竺徳兵衛正説」(【版本】所栃木県立図書館黒崎文庫(「古事記袋 水」))／「渡天之説」(著天竺徳兵衛、【写本】所群馬大学新田文庫(安南国漂流記と合〔「安南国漂流記渡天之説」1冊〕)、〔追加《その他》【写本】所国会図書館支部内閣文庫(撰津徴六八)、【活字】『改定史籍集覧16』)、※『補訂版 国書総目録』より))。／「播州高砂通船記」(別「徳兵衛渡天記」、【版本】所元治元版一市立弘前図書館(遠州新居難船記他と合〔「難船集記」1冊]))。

No. 115

《同志社》「天竺渡天海陸物語」(1冊、【写本】所天理図書館古義堂文庫)。

No. 116

《同志社》「天竺渡天物語」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書94))。

No. 117

《同志社》「天竺漂流記」(1冊、別「天竺漂流珍物話集」、【写本】所東北大学狩野文庫)。

No. 118

《同志社》「天保三年異国江漂流之口書」(1冊、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫)。

No. 119

《同志社》「天保十一年異国江漂流之口書」(1冊、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫)。

No. 120

《同志社》「天保漂流記」(1冊、【写本】所九州大学(安政3年写))。

No. 121

《同志社》「天明年間漂流覚書」(1冊、別「加茂村長五郎権吉尋書」、成天明8年、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)／「唐国漂流帰国の次第」(1冊、【写本】所国立国会図書館(万延元年写、漂流記叢書47)、※天明7)。

No. 122

《同志社》「天明年中漂流之記」(1冊、【写本】所名古屋市蓬左文庫)。

No. 123

《同志社》「天明漂民記録」(1冊、成寛政5年、【写本】所東京都立日比谷図書館東京誌料)。

No. 124

《同志社》「唐国広東漂流」(【写本】所九州大学(薩摩国種ヶ島漂流等と合1冊))。

No. 125

《同志社》「唐国漂流記」(1冊、【写本】所同志社大学(天保13年写))。

No. 126

《同志社》「唐国漂流記」(1冊、【写本】所京都大学(宝暦14年写、猪飼氏旧蔵書、24帙)、宮城県図書館小西文庫(安永7年写))。

No. 127

《同志社》「唐国漂流帰客談」(1冊、成寛保2年、※明治文献目録による)。

No. 128

《同志社》「唐国漂流人口書」(1冊、【写本】所名古屋市立鶴舞図書館)。

No. 129

《同志社》「唐国福建省漂着之口書」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(外国通覧5))。

No. 130

《同志社》「唐国福建省江漂流記」(1冊、【写本】所{学書言志})。

No. 131

《同志社》「唐国福建省江漂流記問答」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(外国通覧5))。

No. 132

《同志社》「唐国ヨリ送来候漂流人之儀ニ付書面」(2冊、成文化13年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)。

No. 133

《同志社》「唐土漂流記」(1冊、【写本】所神宮文庫図書館(天保14年写))。

No. 134

《同志社》「唐土漂流之噺」(1冊、成天保10年、著金原文十、【写本】所{学書言志})。

No. 135

《同志社》「東備尻海浦船漂流記」(1冊、【写本】所東京国立博物館(文政13年写))。

No. 136

《同志社》「徳兵衛物語」(1冊、【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(文化4年写))。

No. 137

《同志社》「土佐国漁船漂流之記」(【写本】所国立国会図書館(膺懲叢書2))。

No. 138

《同志社》「土佐国人漂流記」(1冊、成嘉永4年、【写本】所尊經閣文庫)。

No. 139

《同志社》「土佐国船子洋流日記」(1冊、別「東洋漂流記」、【写本】所神戸大学)。

No. 140

《同志社》「土佐国船無人島漂流記」(2巻、成宝暦9年、著関重家、【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(上巻、土佐国群書類従、漂流)、京都大学(土佐国群書類従、漂流)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))。

No. 141

《同志社》「土佐船漂流記」(※日本漂流書目による)。

No. 142

《同志社》「土佐漂客談考」(1冊、成安政元年、【写本】所学習院大学)。

No. 143

《同志社》「土州船漂落紀聞」(【写本】所宮内庁書陵部(片玉集続集27))。

No. 144

《同志社》「土州漁師帰朝記」(1冊、著山崎道生、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書75))。

No. 145

《同志社》「土人漂流異略記」(1冊、【写本】所礪川堂文庫)。

No. 146

《同志社》「渡天」(【写本】所九州大学(薩摩国種ヶ島漂流等と合1冊))。

No. 147

《同志社》「名古屋人漂流記」(1冊、著伊藤常足、【写本】所天理図書館吉田文庫)。

No. 148

《同志社》「難船一件」(1冊、著設楽八三郎、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、※弘化4-嘉永2)。

No. 149

《同志社》「難船記」(2巻2冊、【写本】所国学院大学)。

No. 150

《同志社》「難船記」(2冊、著峰斎泉密、【写本】所東京国立博物館(安政2年青島彦一郎写))。

No. 151

《同志社》「難船紀聞」(1冊、著大田覃編、【写本】所早稲田大学(手稿本))。

No. 152

《同志社》「難船記録」(1冊、成寛政6年、【写本】所九州大学九州文化史研究所)。

No. 153

《同志社》「難船取扱一件」(1冊、【写本】所九州大学九州文化史研究所)。

No. 154

《同志社》「難船取扱書」(【写本】所九州大学九州文化史研究所(御評定所日記等と合1冊))。

No. 155

《同志社》「難船取扱及船数録」(1冊、著多田六右衛門、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫)。

No. 156

《同志社》「難船之節控」(1冊、成明和元年、【写本】所神戸大学)。

No. 157

《同志社》「難船秘書」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、※寛政12-文化2)。

No. 158

《同志社》「南島漂流記」(1冊、成天保10年、【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(炎島履霜録を付す))。

No. 159

《同志社》「南島漂流記」(【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(続海外異聞の内))。

No. 160

《同志社》「難風にて中天竺ハタン島漂着者口書」(【写本】所東京教育大学(燈下雜記20・21))。

No. 161

《同志社》「南部漁民漂流記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書9))。

No. 162

《同志社》「南部船浙江漂着録」(【写本】所宮内庁書陵部(片玉集99))。

No. 163

《同志社》「南部流船一件」(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)。

No. 164

《同志社》「南洋漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫)。

No. 165

《同志社》「二伊勢人の漂流聞書」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流叢書9))。

No. 166

《同志社》「西間切大島間志村漂民名簿」(【写本】所宮内庁書陵部(椿亭叢書9)、県立長崎図書館(同上))。

No. 167

《同志社》「日本人おらしや流れ行被助帰国之事」(【写本】所下田市箕作、戸崎家蔵、※伊豆の音吉の聞書)。

No. 168

《同志社》「日本人魯西亜国江漂流口書」(成文化元年、【写本】所{旧}彰考館文庫(魯西亜使節之役人御答書等と合1冊))。

No. 169

《同志社》「ハタン延宝書」(1冊、成延宝8年、【写本】所天理大学(文政2年奇山写))。

No. 170

《同志社》「馬丹記」(1冊、【写本】所東京大学史料編纂所(東京都関野貞蔵本写))。

No. 171

《同志社》「波旦国漂流人覚書」(1冊、【写本】所九州大学(嘉永2年写))。

No. 172

《同志社》「八丈島漂渡記」(成延享3年、著池則満、【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))。

No. 173

《同志社》「八丈嶋漂流」(【写本】所九州大学(薩摩国種ヶ島漂流等と合1冊))。

No. 174

《同志社》「八丈島漂流覚書」(3冊、【写本】所慶應義塾大学)。

No. 175

《同志社》「八丈島瓢話」(別「難風流船物語」、【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))。

No. 176

《同志社》「八丈島難風漂流之記」(1冊、【写本】所東京国立博物館(江戸末期写))。

No. 177

《同志社》「尾薩漂民私記」(著藤隆則、【写本】所京都大学(嘉永3年写2冊)、市立函館図書館(3冊)、{旧}彰考館文庫(1冊)、同志社大学(2冊))。

No. 178

《同志社》「備前尻海村槌三郎漂干朝鮮国記」(1冊、【写本】所岡山市図書館(享保元年写))。

No. 179

《同志社》「備前難船記」(1冊、成天保元年、著金沢屋忠助、【版本】所正宗文庫)。

No. 180

《同志社》「備前国尻海村五左衛門難船記」(1冊、成文政2年、【写本】所岡山市図書館)。

No. 181

《同志社》「常陸川尻琉球船漂着記」(【写本】所彰考館文庫(薩摩宝島異国船乱妨記と合1冊))。

No. 182

《同志社》「備中船子徳兵衛漂流記」(1冊、【写本】所浅野図書館)／「漂流夢物語」(1冊、成安政4年、【写本】所九州大学、西尾市立図書館岩瀬文庫、※徳兵衛が備中へ帰郷したのちの聞書とみられる)。

No. 183

《同志社》「漂海異聞」(成嘉永6年、著山崎道生、【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))。

No. 184

《同志社》「漂海記」(1冊、別「金毘羅利生物語」、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)。

No. 185

《同志社》「漂海記」(11冊、【写本】所岡山県総合文化センター)。

No. 186

《同志社》「漂海記聞」(5冊、【写本】所岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)。

No. 187

《同志社》「漂海始末」(1冊、**著**新山質、【写本】**所**{学書言志}、※戊申漂海記事)。

No. 188

《同志社》「漂海咨文」(8冊、**著**近藤守重編、※日本漂流書目による)。

No. 189

《同志社》「漂海談」(1冊、**著**竹村安五郎、【写本】**所**神宮文庫図書館(文化2年写))。

No. 190

《同志社》「漂客記」(1冊、【写本】**所**神戸大学)。

No. 191

《同志社》「漂客聞書」(1冊、【写本】**所**神宮文庫図書館、礪川堂文庫(「漂客記聞書」))。

No. 192

《同志社》「漂客奇談」(1冊、【写本】**所**桑名松平家(6種))。

No. 193

《同志社》「漂客紀聞」(3巻、**別**「予州漂客記聞」、**成**弘化3年序、**著**由井幹、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(文鳳堂雑纂61))。

No. 194

《同志社》「漂客紀聞」(著者不明)(【写本】**所**岡山大学池田家文庫)。

No. 195

《同志社》「漂客記聞」(【写本】**所**京都大学(岩垣氏遺著及旧蔵書5帙)、※越中人多三郎上状)。

No. 196

《同志社》「漂客物語」(1冊、【写本】**所**国立国会図書館)。

No. 197

《同志社》「漂語6種」(1冊、【写本】**所**大鳥富士太郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)。

No. 198

《同志社》「漂船記」(1冊、【写本】**所**東京大学(天保8年写)、※文化13)。

No. 199

《同志社》「漂船紀聞」(1冊、【写本】**所**九州大学)。

No. 200

《同志社》「漂船護送汐路」(1軸、**著**小島潜、【写本】**所**東北大学狩野文庫)。

No. 201

《同志社》「漂着口書嘯草」(1冊、【写本】所岡山大学池田家文庫)。

No. 202

《同志社》「漂着使記録」(成徳6年、著多田新蔵・阿比留平次、【写本】所九州大学九州文化史研究所(破船漂民護送使記録、和漂民記録と合1冊))。

No. 203

《同志社》「漂南新話」(1冊、別「漂南新語(内)」、成寛政11年序、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(外国紀聞12)、早稲田大学、東京大学)。

No. 204

《同志社》「漂舶遺聞」(1冊、著菽園外史、【写本】所東北大学狩野文庫)。

No. 205

《同志社》「漂泊珍話」(2冊、著曲水庵、【写本】所浅野図書館(文政元年写))。

No. 206

《同志社》「漂民異聞」(3巻3冊、【写本】所大阪府立図書館)。

No. 207

《同志社》「漂民帰国之記」(1冊、成寛政5年、著石川六右衛門、【写本】所徳島県立図書館)。

No. 208

《同志社》「漂民紀州藤代村長兵衛書上」(【写本】所宮内庁書陵部(椿亭叢書26))。

No. 209

《同志社》「漂民奇談」(1冊、著富永正謙、【写本】所宮内庁書陵部(「漂民奇談序」、片玉集52)、神宮文庫図書館(文久元年写))。

No. 210

《同志社》「漂民帰朝類聚」(3巻3冊、成嘉永4年、著吉田為政、【写本】所国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫(嘉永6年写))。

No. 211

《同志社》「漂民後記」(1冊、【写本】所九州大学)。

No. 212

《同志社》「漂民象胥」(1冊、【写本】所京都大学、東京大学本居文庫)。

No. 213

《同志社》「漂民対話」(2冊、【写本】所京都大学(弘化2年写))。

No. 214

《同志社》「漂民長兵衛書上」(【写本】所宮内庁書陵部(椿亭叢書9))。

No. 215

《同志社》「漂民日記」(【写本】所名古屋市蓬左文庫(資治雜笈2輯))。

No. 216

《同志社》「漂民筆録」(1冊、**成**文政4年、**著**鳴沢益・王寿珍、【写本】所東京大学)。

No. 217

《同志社》「漂民間記」(2巻2冊、【写本】所神戸大学)。

No. 218

《同志社》「漂流異国人御札書並再御札書写」(1冊、**成**嘉永元年、【写本】所市立函館図書館)。

No. 219

《同志社》「漂流異国物語」(2巻、【写本】所国学院大学(安政2年写))。

No. 220

《同志社》「漂流一件上書」(1冊、【写本】所九州大学)。

No. 221

《同志社》「漂流異聞」(1冊、**成**天保15年、※明治文献目録による)。

No. 222

《同志社》「漂流異話」(1冊、【写本】所西川吉之助、※嘉永3-7、播州浅右衛門等米国へ漂流記事、開国文化史料大観による)。

No. 223

《同志社》「漂流御届留書」(1冊、【写本】所京都大学、※宝暦7・文政9)。

No. 224

《同志社》「漂流唐着話」(1冊、【写本】所京都大学)。

No. 225

《同志社》「漂流記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(慶応元年写、漂流記叢書89)、※文久元年尾州船漂流記)。

No. 226

《同志社》「漂流記」(1冊、**著**勝之助、【写本】所龍谷大学)。

No. 227

《同志社》「漂流記」(3巻、**著**山脇敬李、【写本】所岡山県総合文化センター)。

No. 228

《同志社》「漂流聞書」(1冊、【写本】所桑名松平家)。

No. 229

《同志社》「漂流紀事」(著黒田行、※本朝医家著述目録による)。

No. 230

《同志社》「漂流帰国記」(1冊、【写本】所東京大学史料編纂所(蒲堂叢書の内))。

No. 231

《同志社》「漂流記集」(2冊、著万寿堂、【写本】所西尾市立図書館岩瀬文庫)。

No. 232

《同志社》「漂流記抄録」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(明治写))。

No. 233

《同志社》「漂流記談」(2巻2冊、著敦斎編、【写本】所京都大学)。

No. 234

《同志社》「漂流記談鈔録」(1冊、【写本】所宮内庁書陵部)。

No. 235

《同志社》「漂流帰朝話説」(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)。

No. 236

《同志社》「漂流紀聞」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(寛保元・2、1冊)、東京教育大学(1冊)、慶應義塾大学(文化4年小笠原道端写、阿魯齊亜人物図志の付)、名古屋市蓬左文庫(3巻3冊)、高知県立図書館(3冊、文化7))。

No. 237

《同志社》「漂流帰来記」(1冊、【写本】所{学書})。

No. 238

《同志社》「漂流久蔵見聞記」(1冊、【写本】所浅野図書館)。

No. 239

《同志社》「漂流記録」(1冊、成嘉永5年、【写本】所九州大学)。

No. 240

《同志社》「漂流見聞記」(1冊、成嘉永6年、著早崎益寿、【写本】所京都府立図書館)。

No. 241

《同志社》「漂流雑記」(1冊、【写本】所東北大学狩野文庫、市立刈谷図書館)。

No. 242

《同志社》「漂流私記」(1冊、【写本】**所**京都大学富士川文庫(漂民御覧記と合)、延岡内藤家(天明2年写))。

No. 243

《同志社》「漂流七天竺話」(3巻1冊、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(天保5年写)、※宝暦12-安永3)。

No. 244

《同志社》「漂流実録」(1冊、【写本】**所**東京大学史料編纂所(東京都酒井新太郎蔵本写))。

No. 245

《同志社》「漂流島物語」(1冊、【写本】**所**国立国会図書館(漂流記叢書2))。

No. 246

《同志社》「漂流船一件」(1冊、【写本】**所**東京教育大学)。

No. 247

《同志社》「漂流船紀」(1冊、【写本】**所**京都府立図書館)。

No. 248

《同志社》「漂流船聞書」(【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(土佐国群書類従、拾遺、漂流)、高知県立図書館(同上))。

No. 249

《同志社》「漂流船口書」(1冊、**成**明和8年、【写本】**所**宮内庁書陵部(安永2年写))。

No. 250

《同志社》「漂流船物語」(1冊、【写本】**所**日本学士院)。

No. 251

《同志社》「漂流船行衛」(1冊、**成**文政3年、【写本】**所**延岡内藤家)。

No. 252

《同志社》「漂流談雜綴」(1冊、【写本】**所**岡田伊三次郎、※文明移入に関する古書展覧会目録による)。

No. 253

《同志社》「漂流中見聞実況上申書」(1冊、※日本漂流書目による)。

No. 254

《同志社》「漂流珍談」(2冊、【写本】**所**萩毛利家)。

No. 255

《同志社》「漂流珍話」(2巻2冊、**成**嘉永2年、**著**空斜山人、【写本】**所**香川大学神原文庫(自筆稿本))。

No. 256

《同志社》「漂流土佐人口書」(1冊、**成**嘉永4年、【写本】**所**宮内庁書陵部)。

No. 257

《同志社》「漂流日記」(1冊、【写本】**所**岡山大学池田家文庫)。

No. 258

《同志社》「漂流人」(1冊、【写本】**所**京都大学(文化8)、桜山文庫(「瓢流人」))。

No. 259

《同志社》「漂流人異出噺」(1冊、**成**安政元年、【写本】**所**県立鳥取図書館)。

No. 260

《同志社》「漂流人一件」(【写本】**所**国立国会図書館(不忍叢書7)、東京国立博物館(嘉永4年写、1冊)、岡山大学池田家文庫(天保3、8冊))。

No. 261

《同志社》「漂流人一件下方申出写」(1冊、【写本】**所**浅野図書館、※直兵衛等2名口上)。

No. 262

《同志社》「漂流人異話」(1冊、【写本】**所**神宮文庫図書館(安政元年写))。

No. 263

《同志社》「漂流人異話下書」(1冊、【写本】**所**浅野図書館)。

No. 264

《同志社》「漂流人御尋書」(1冊、【写本】**所**岩手県立図書館(天保12)(天保12-14))。

No. 265

《同志社》「漂流人書上之写」(1冊、【写本】**所**九州大学)。

No. 266

《同志社》「漂流人聞書」(1冊、【写本】**所**大阪市立大学森文庫)。

No. 267

《同志社》「漂流人聞書」(1冊、**著**稲毛実、※国学者伝記集成による)。

No. 268

《同志社》「漂流人帰国口書」(1冊、【写本】**所**国学院大学)。

No. 269

《同志社》「漂流人帰国口書写」(1冊、**成**明和4年、【写本】**所**東京大学史料編纂所)。

No. 270

《同志社》「漂流人帰朝一件留」(1冊、**成**明和8年、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫)。

No. 271

《同志社》「漂流人口書」(1冊、**著**宇治甚助等、【写本】**所**岡山県総合文化センター)。

No. 272

《同志社》「漂流人口書」(【写本】**所**東京国立博物館(安永3年写1冊)、岡山大学池田家文庫(6冊))。

No. 273

《同志社》「漂流人口書写」(1冊、【写本】**所**神戸大学、東京都立日比谷図書館加賀文庫(弘化2年写))。

No. 274

《同志社》「漂流人口書其外品々写」(9冊、**成**天保4年、【写本】**所**岡山大学池田家文庫)。

No. 275

《同志社》「漂流人口供」(1冊、**成**嘉永5年、【写本】**所**穂久邇文庫)。

No. 276

《同志社》「漂流人口上書」(1冊、【写本】**所**岡山大学池田家文庫)。

No. 277

《同志社》「漂流人口上聞書」(1冊、【写本】**所**岡山県総合文化センター)。

No. 278

《同志社》「漂流人直物語聞書」(1冊、**成**文政13年、【写本】**所**九州大学九州文化史研究所)。

No. 279

《同志社》「漂流人始末之事」(1冊、**成**天保4年、【写本】**所**岡山市図書館)。

No. 280

《同志社》「漂流人唐国ヨリ連渡一件」(1冊、【写本】**所**礪川堂文庫)。

No. 281

《同志社》「漂流人共相咄候儀 別段書留置奉差上候書付」(※通航一覧、巻321収録)。

No. 282

《同志社》「漂流人南海談」(1冊、【写本】**所**岡山市図書館)。

No. 283

《同志社》「漂流人の噺を聞書」(1冊、【写本】**所**東京都立日比谷図書館近藤文庫(文化8年写))。

No. 284

《同志社》「漂流人咄聞書」(1冊、【写本】**所**京都大学(万延元年写))。

No. 285

《同志社》「漂流人平左衛門外十五人持戻並貰物請取帳」(1冊、**成**安政元年、【写本】**所**東京大学史料編纂所)。

No. 286

《同志社》「漂流人物語記」(1冊、【写本】**所**九州大学)。

No. 287

《同志社》「漂流人問答始末」(1冊、**著**山岡新、【写本】**所**東京都立日比谷図書館加賀文庫(寛政7年写))。

No. 288

《同志社》「漂流之記」(1冊、**別**「土佐人漂流帰国ノ記(外)」、【写本】**所**国立国会図書館(漂流記叢書78))。

No. 289

《同志社》「漂流之次第口上書」(1冊、【写本】**所**浅野図書館)。

No. 290

《同志社》「漂流八ヶ条」(【写本】**所**京都府立図書館(乾卷、1冊))。

No. 291

《同志社》「漂流譚」(1冊、**成**寛政5年刊、**著**鈍通子、【版本】**所**神戸大学)。

No. 292

《同志社》「漂流秘録」(【写本】**所**桑名松平家(欠本、3冊))。

No. 293

《同志社》「漂流民書上留」(4巻4冊、【写本】**所**京都大学、※文政8-安政5)。

No. 294

《同志社》「漂流民帰国記」(※日本漂流書目による)。

No. 295

《同志社》「漂流民郷覧記」(1冊、**著**稲毛実、※国学者伝記集成による)。

No. 296

《同志社》「漂流物語」(2冊、**著**鈴木服、※国学者伝記集成等による)。

No. 297

《同志社》「漂流模様横文字扣」(1巻、※日本漂流書目による)。

No. 298

《同志社》「漂流問答話」(【写本】**所**国立国会図書館(享和4年写、漂流言上記と合1冊))。

No. 299

《同志社》「漂流呂宋国記」(1冊、【写本】所九州大学)。

No. 300

《同志社》「閩省漂流南部人護送始末雜録」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(寛延3・4年山崎寿写))。

No. 301

《同志社》「吹流佐礼記」(6冊、【写本】所{旧}彰考館文庫)。

No. 302

《同志社》「吹流船話」(【写本】所宮内庁書陵部(椿亭叢書8))。

No. 303

《同志社》「福建省漂着記」(1巻、【写本】所高知県立図書館(明和5年写))。

No. 304

《同志社》「福島浦浅平八丈島物語聞書」(1冊、成文化10年、【写本】所高知県立図書館)／「福島浦浅平漂流記」(別「土州高岡郡福島浦福吉屋浅平漂流記」、成文化11年、著西山直亮、【写本】所国立国会図書館(土佐国群書類従、漂流)、国会図書館支部内閣文庫(同上)、京都大学(同上)、東京大学史料編纂所(同上)、高知県立図書館(同上))。

No. 305

《同志社》「文化丁卯漂流人口書」(1冊、成文化4年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(南部藩士千葉政之進筆記を付す)、〔追加《北方》))。

No. 306

《同志社》「文政十年唐国江漂流始末口書」(1冊、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫)。

No. 307

《同志社》「文政漂流記」(3冊、【写本】所大阪府立図書館)。

No. 308

《同志社》「文政漂流譚」(1冊、※明治文献目録による)。

No. 309

《同志社》「宝曆漂流記」(1冊、【写本】所市立刈谷図書館)。

No. 310

《同志社》「松平阿波守殿御糺漂流民口上留写」(1冊、【写本】所龍谷大学)。

No. 311

《同志社》「松平修理太夫手船朝鮮国江致漂流候一件」(1冊、成元治元年、著長崎奉行所公事方、【写本】所県立長崎図書館)／「松平修理太夫領分ノモノ朝鮮国江致漂流候一件」(1冊、成文久2年、著長崎奉行所公事方、【写本】所県立長崎図書館)。

No. 312

《同志社》「松前船清国漂流記」(1冊、【写本】**所**東北大学(天保5年写))。

No. 313

《同志社》「松前船漂着広記等」(【写本】**所**東北大学狩野文庫(肥前国平戸島千里浜鄭氏遺蹟碑記並銘、鄭氏遺蹟碑陰記等と合1冊))。

No. 314

《同志社》「三宅八丈漂泊憂物語」(1冊、【写本】**所**東京都立日比谷図書館近藤文庫(八丈島物語を付す))。

No. 315

《同志社》「陸奥船漂流記」(1冊、【写本】**所**東京大学本居文庫)。

No. 316

《同志社》「無人島江漂着之記」(【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(外国通覧1))。

No. 317

《同志社》「無人島記」(1冊、**成**天明7年、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(明治写))。

No. 318

《同志社》「無人島記」(1冊、【写本】**所**宮内庁書陵部(片玉集76)、神宮文庫図書館)。

No. 319

《同志社》「無人島記」(**著**林子平、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(外国通覧2))。

No. 320

《同志社》「無人島之記」(1冊、**著**渡辺金太夫等編、【写本】**所**東北大学狩野文庫)。

No. 321

《同志社》「無人島之記」(【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫(地勢提要の付))。

No. 322

《同志社》「無人島噺」(【写本】**所**高知県立図書館(万囊の内))。

No. 323

《同志社》「無人島漂着記」(1冊、**成**寛政9年、【写本】**所**国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫)。

No. 324

《同志社》「無人島漂着記」(5巻2冊、【写本】**所**京都大学(慶応元年写))。

No. 325

《同志社》「無人島漂着帰帆」(1冊、**成**寛政10年、【写本】**所**史料館祭魚洞、※浦手形出島役人手控)。

No. 326

《同志社》「無人島漂着者始末書」(成嘉永7年、【写本】所国立国会図書館(加模西葛杜加国風説考等と合1冊))。

No. 327

《同志社》「無人島漂着之始末」(1冊、【写本】所浅野図書館)。

No. 328

《同志社》「無人島漂着之者共始末書」(1冊、【写本】所東京大学)。

No. 329

《同志社》「無人嶋漂到記」(1冊、【写本】所東北大学狩野文庫)。

No. 330

《同志社》「無人島漂流書附」(1冊、【写本】所九州大学)。

No. 331

《同志社》「無人島漂流記」(1冊、成寛政10年、著樋口醉山、【写本】所無窮会神習文庫)。

No. 332

《同志社》「無人島漂流記」(成元文4年、【写本】所九州大学九州文化史研究所(常州多珂郡磯原村船頭左太夫安南漂流記等と合1冊))。

No. 333

《同志社》「無人島漂流紀聞」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(外国紀聞28))。

No. 334

《同志社》「無人島漂流談話」(1冊、【写本】所長崎市立長崎博物館、※天明4)。

No. 335

《同志社》「無人島漂流之書付」(1冊、成寛政9年、【写本】所東京国立博物館)。

No. 336

《同志社》「無人島へ漂流并帰帆」(1冊、【写本】所龍谷大学)。

No. 337

《同志社》「無人島へ漂流の者於八丈嶋口書写」(1冊、成寛政9年、【写本】所金沢市立図書館加越能文庫)。

No. 338

《同志社》「無人島物産志」(1冊、成寛政9年序、著曾槃編、【写本】所杏雨書屋)。

No. 339

《同志社》「無人島物語」(1冊、成享保2年、著善八、※国書解題等による)。

No. 340

《同志社》「大和船道之島船漂着之節在番公事」(1冊、【写本】所旧沖繩県立沖繩図書館)。

No. 341

《同志社》「吉田蛮史」(著山本宗明、【写本】所龍谷大学(2冊)、西尾市立図書館岩瀬文庫(1冊))。

No. 342

《同志社》「琉球船漂着始末」(3冊、成文政2年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(明治写)、{旧}彰考館文庫)。

No. 343

《同志社》「呂宋国江漂流婦朝御吟味口書写」(成明和元年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(漂流記の内))。

No. 344

《同志社》「呂宋国漂流人記」(【写本】所国会図書館支部内閣文庫(海防彙議続2)、京都大学(同上))。

No. 345

《同志社》「露国漂流記」(1冊、成文化3年序、【写本】所神戸大学)。

No. 346

《同志社》「魯西亜教諭信牌写」(【写本】所宮内庁書陵部(椿亭叢書9)、県立長崎図書館(同上))。

No. 347

《同志社》「魯刺亜国江漂流人蛮国之話」(1冊、【写本】所京都大学(文化2年写))。

No. 348

《同志社》「魯西亜国漂客記聞」(6巻2冊、【写本】所東京都立日比谷図書館近藤文庫)。

No. 349

《同志社》「魯齊亜国漂民実記」(1冊、成文化5年、【写本】所京都府立図書館)。

No. 350

《同志社》「魯西亜国漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(外国紀聞18)、早稲田大学、〔追加《古典》茨城県立歴史館(1冊)])。

No. 351

《同志社》「魯西亜国漂流聞書」(1冊、【写本】所京都府立図書館、※文化3帰国談)。

No. 352

《同志社》「魯西亜国漂流並洋中ニテ外国船江被助揚候日本人一件」(1冊、【写本】所県立長崎図書館、※慶応元-3)。

No. 353

《同志社》「魯西亜国漂流人一件」(1冊、【写本】所東京大学)。

No. 354

《同志社》「魯西亜国漂流之訳書及附録」(1冊、【写本】所東京大学)。

No. 355

《同志社》「魯西亜国へ漂流人口書写ノ事」(【写本】所東北大学狩野文庫(漂海叢書3))。

No. 356

《同志社》「魯西亜国より帰国の漂流人共申立御様子書」(1冊、【写本】所東京都立日比谷図書館東京誌料)。

No. 357

《同志社》「魯西亜話」(【写本】所神戸大学(1冊)、足利学校遺跡図書館(旅の流塵62・63、2冊))。

No. 358

《同志社》「魯西亜話」(2冊、成文化2年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫)。

No. 359

《同志社》「魯西亜漂流記」(1冊、【写本】所早稲田大学(俄羅斯紀聞、4集、第2巻))。

No. 360

《同志社》「魯西亜漂流記帰国海路記」(【写本】所東京大学史料編纂所(西海遺珠の内))。

No. 361

《同志社》「魯西亜漂流人談話聞書」(【写本】所宮内庁書陵部(椿亭叢書9))。

No. 362

《同志社》「魯西亜漂流之訳書並日本へ帰国海路之様子訳」(1冊、※日本漂流書目による)。

No. 363

《同志社》「若宮丸漂流聞書」(1冊、【写本】所東京国立博物館(文政7年写))。

No. 364

《国書補遺》「通俗漂海録」(【版本】所寛政7版—龍谷大学、〔追加《その他》4巻4冊、成明和6年序、著清田絢(君錦)訳、【版本】所寛政7版—京都大学、※唐土行程記の改題本、『補訂版 国書総目録』より))。《古典》「唐土行程記」(4巻4冊、別「漂海録」、成明和6年刊、著(朝鮮)崔溥著、清田儋叟(清田絢)訳、【版本】所明和6版—新潟大学佐野文庫(4巻、4冊)、加賀市立図書館聖藩文庫(4巻、4冊)、〔追加《その他》【版本】所国立国会図書館(2冊)、国会図書館支部内閣文庫、国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫、宮内庁書陵部、京都大学、東北大学狩野文庫、広島大学(2冊)、東京都立日比谷図書館加賀文庫、下郷文庫(3冊)、{学書言志}、※『補訂版 国書総目録』より))。

No. 365

《古典》「異国漂着船話」(1冊、著榎本童賢、【写本】所久留米市民図書館(2巻、1冊)、〔追加《その他》【写本】所東京大学本居文庫、※『補訂版 国書総目録』より))。

No. 366

《古典》「異国物語」(【写本】**所**栃木県立図書館黒崎文庫(嘉永5年写、1冊))。

No. 367

《古典》「羽州加茂村之者唐土江漂流記」(【写本】**所**玉川大学(寛政3年写、1冊))。

No. 368

《古典》「越前人長崎人漂流記」(【写本】**所**射和文庫(志州布施田村小平次記と合〔「漂流記」合1冊]))。

No. 369

《古典》「ヲロシヤ国漂流記」(【写本】**所**市立弘前図書館(「ヲロシヤ国漂流記」1冊))。

No. 370

《古典》「海外漂話」(著山本正佑・岩井重克、【写本】**所**茨城大学菅文庫(巻1-3、3冊))。

No. 371

《古典》「薩州漂人口上書並宗旨名歳附写」(【写本】**所**玉川大学(1冊))。

No. 372

《古典》「薩州漂流人口書」(【写本】**所**玉川大学(安永3年写、1冊))。

No. 373

《古典》「西洋ハタアジア漂流記」(別「嘉永増補西洋ハタアジア漂流記」、著森羅万象一世(森島甫榮)著、筒井定繁(筒井武右衛門)増補、【写本】**所**市立弘前図書館(「嘉永増補 西洋ハタアジア漂流記」、嘉永3年筒井定繁写、1冊))。

No. 374

《古典》「船頭伝兵衛漂流の一件口上書」(【写本】**所**玉川大学(「船頭伝兵衛漂流の一件口上書」、宝暦4年写、1冊))。

No. 375

《古典》「朝鮮物語」(【写本】**所**市立弘前図書館(5巻、天保8年写、1冊))。

No. 376

《古典》「唐国漂流之実録」(【写本】**所**玉川大学(1冊))。

No. 377

《古典》「土州人漂流記」(1冊、【写本】**所**大洲市立図書館矢野玄道文庫(風説書略文と合〔「風説書略文」1冊]))。

No. 378

《古典》「渡天説記」(【写本】**所**玉川大学(寛延元年写、1冊))。

No. 379

《古典》「難船漂流観音靈徳額面図画」(著寛秀記、宥演識、素山画、【版本】所文化9版—玉川大学(1冊))。

No. 380

《古典》「南部人漂流唐国記」(【写本】所本居宣長記念館(1冊、春庭筆))。

No. 381

《古典》「八丈島記」(【写本】所新潟大学佐野文庫(天保10年写、1冊))。

No. 382

《古典》「漂客奇賞図」(著谷文晁画、【版本】所寛政2版—東京芸術大学脇本文庫(「漂客奇賞」1冊)、新潟大学佐野文庫(「漂客奇賞圖」1冊))。

No. 383

《古典》「漂民記」(【写本】所茨城大学菅文庫(和田戸山の記他と合[「雨月集」1冊]))。

No. 384

《古典》「漂流記」(【写本】所玉川大学(天保13年写、1冊))。

No. 385

《古典》「漂流紀聞」(【写本】所玉川大学(上中下、嘉永4年写、3冊))。

No. 386

《古典》「漂流再記」(【写本】所宮城教育大学(天保漂流記他と合[「漂流記」1冊]))。

No. 387

《古典》「漂流人口書」(【写本】所島根大学海野文庫(1冊))。

No. 388

《古典》「漂流人和記」(【写本】所玉川大学(1冊))。

No. 389

《古典》「漂流之者帰国書」(【写本】所玉川大学(上存、1冊))。

No. 390

《古典》「無人島漂着八丈島口書」(【写本】所玉川大学(1冊))。

No. 391

《古典》「無人島漂民説話」(【写本】所玉川大学(1冊))。

No. 392

《古典》「魯西亜国漂着之始末御糺之節申上候趣意口書並漂着様子書」(【写本】所玉川大学(1冊))。

No. 393

《古典》「魯西亜漂流記」(1冊、【写本】所玉川大学(文政6年写、1冊)(乾存、坤欠、1冊)、宮城教育大学(呂宋国漂流記他と合[「漂流記」1冊])、茨城県立歴史館(「ロシア漂流記」1冊))。

No. 394

《北方》「雨ソウ偶筆 上・下」(成寛政末年頃、著松前広長(監物、老圃)、※松前広長の晩年における漢文による随筆集。清国漂流の松前漁夫などの話を含む)。

No. 395

《北方》「蝦夷草紙 上・下」(2冊、成寛政2年、著最上徳内(常矩)、【写本】、【活字】『北門叢書 1』、最上徳内『蝦夷草紙』(時事通信社、昭和40年)、※エトロフ島で出会ったロシア人からえた情報中には南部漂流民の消息を含む)。

No. 396

《北方》「蝦夷日記」(成享保2年、【写本】)。

No. 397

《北方》「雑口書」(成安政2年、【写本】)。

No. 398

《北方》「[西海航路図]」。

No. 399

《北方》「台湾南部之図」(成明治6年頃)。

No. 400

《北方》「子モロ領ノツケ之内イキタラウシ江異国船渡来漂流人共差置退帆仕候儀申上候書付」(成安政5年、【写本】)。

No. 401

《北方》「文政十三寅六月中クスリ御場所江漂着いたし候御城米積遠州川崎八郎左衛門船沖船頭半兵衛上乘次郎兵衛並水主拾九人のもの執調書且右虎寿丸見分書其外請証文之写」(【写本】)。

No. 402

《北方》「魯西亜国記聞」(成天明6年、著最上徳内)。

No. 403

《同志社》「筑前国人呂宋福州漂着記」カ(1冊、【写本】所京都大学(増訂海外異聞の内)、※第1部の138or143カ)。

No. 404

《同志社》「知多郡亀崎村七三郎漂流談」カ(別「安政尾張人漂流記」、成安政6年、【写本】所名古屋市蓬左文庫(資治雑笈2輯)、※第1部の309 or 310カ)。

No. 405

《同志社》「無人島漂着船頭水主口書写」カ（1冊、【写本】所礫川堂文庫、※第1部の91or103カ）。

第 3 部 漂流記集

No. 1

《同志社》「亜墨利加漂流記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書81・87)、※第81は萬次郎等の漂流始末書《第1部245》、第87は嘉永3年摂州永力丸漂流記《第1部287》)。

No. 2

《同志社》「安南国漂流記」(1冊、【写本】所国立国会図書館(安南国漂流物語《第1部146》、大宛国漂流話《?》、宝暦七丑九月吹流候船人小平治口上書《第1部132》を取む)。

No. 3

《同志社》「異国漂着船話」(5冊、著木下八郎次衛門編、【写本】所雲泉文庫(元禄5年写)、{京外大}(元禄5年写)、※1巻、奥州信夫郡福嶋上大笹村上乘百姓武右衛門宝暦十二年十二月支那通州に漂着《第1部135カ》、2巻、台湾物語《?》、3巻、定西伝琉球物語《?》、4~5巻、暹羅物語《?》)。

No. 4

《同志社》「異国漂流記集」(荒川秀俊編、吉川弘文館、昭和37年、275p(気象史料シリーズ2)、※異国物語《第1部12》、尾張国知多郡大野村孫左衛門船漂流帰国之事《第1部24》、漂人談話《第1部82》、浙江漂流帰帆《第1部124》、宝暦七年丑九月志州鳥羽浦船頭漂流一件《第1部132》、異国漂流人の次第《第1部142》、異国江漂流仕候陸奥国の者四人口書《第1部166》、能州羽咋郡塵浜村清兵衛異国漂流口書写《第1部226》、呂宋国漂流記《第1部248》、漂客談奇《第1部245》、漂流奇談《第1部245》、呂寿丸漂流口書《第1部247カ》、漂流記《第1部287》、無人嶋ヨリ帰国之者御調書上留《第1部91・103・160・161・163》、無人嶋漂流記《第1部91・103・127・133・160・161・163》)。

No. 5

《同志社》「異国漂流記続集」(荒川秀俊編、地人書館、昭和39年、318p(気象史料シリーズ6)、※南海紀聞、5冊(昭和元年)《第1部142》、漂海録(安永3)《第1部153》、南瓢記、5冊(寛政6)《第1部167》、海外異聞、5冊(天保12)《第1部247》、通航一覽続輯、漂流記選、6冊《第1部247》、巻78(パラオ島漂流記、文政3年)《第1部200》、巻81(カガヤン漂流記、文政11年)《第1部224》、巻150(陸奥船南洋漂流記、天保10年)《第1部243》、巻115(善助・初太郎漂流記、天保12年)《第1部247》、巻116(栄力丸漂流記、嘉永3年)《第1部287》、巻98(カムチャッカ漂流記、嘉永3年)《第2部51》)。

No. 6

《同志社》「異国漂流奇譚集」(石井研堂編、福永書店、昭和2年、638頁、※元和漂流記《第1部4》、讃州船島国脱航談《第1部7》、勢州船北海漂着記《第1部16》、薩州船清国漂着談《第1部106》、津軽船御馳走談《第1部129》、荒浜船南通州漂着始末《第1部135》、一葉丸福州漂流記《第1部158》、芸州善松北米漂流譚《第1部175》、督乗丸船長日記《第1部188》、融勢丸唐流帰国記《第1部223》、神力丸馬丹漂流口書《第1部226》、時計献上の漂民《第1部241》、観音丸呂宋漂流記《第1部248》、漂流万次郎帰朝談《第1部245》、幸宝丸漂流記《第1部253》、播州人米国漂流始末《第1部287》、彦蔵漂流記《第1部287》、広東船漂着奇談《?》、漂流譚雑筆《?》)。

No. 7

《同志社》「乙巳漂客紀聞」(1冊、**成**弘化2年、**著**宇田川興斎、【写本】**所**岩手県立図書館)／「弘化乙巳漂民日記」(1冊、**成**弘化3年、**著**宇田川興斎、【写本】**所**東京大学史料編纂所、※弘化2→乙巳漂客紀聞)。

《海洋》「乙巳漂客記聞」(1冊、【写本】)。

【関連事項】東京海洋大学の漂流事情の解説より《第1部253・254》。

No. 8

《同志社》「永寿丸漂流記」(1冊、**別**「薩南国喜三右衛門船尾張国長右衛門船年月同時漂流記」、**成**文化13年、【写本】**所**国立国会図書館、東京大学)。

【関連事項】別称の「薩南国喜三右衛門船」《第1部185》尾張国長右衛門船《第1部188》年月同時漂流記より。

No. 9

《同志社》「蝦夷嶋漂着」(1冊、**別**「勢州松坂の船蝦夷島之漂着奥州船唐国之漂着(内)」、**成**寛文12年、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫、〔追加《北方》【写本】〕)。

《北方》「寛文十三年蝦夷国風書附」(【写本】、※「蝦夷嶋漂着」より抜写したもの)。

【関連事項】別称の「勢州松坂の船蝦夷島之漂着」《第1部29》奥州船唐国之漂着《?》(内)より。

No. 10

《同志社》「蝦夷島流船物語・無人島物語・天竺渡海物語」(3巻1冊、【写本】**所**宮城県図書館)。

【関連事項】書名の「蝦夷島流船物語《?》・無人島物語《?》・天竺渡海物語《第2部114》」より。

No. 11

《同志社》「遠州船無人島物語」(**成**元文4年、【写本】**所**国立国会図書館(漂流叢書7)、【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫)、『日本庶民生活史料集成5巻漂流』(三一書房、1968)、柴秀夫編『南海漂流譚』(双林社、昭和18年))。

【関連事項】書名及び活字本の検索による《第1部91・103》。

No. 12

《同志社》「海外異聞」(1冊、【写本】**所**宮内庁書陵部(手島惟敏写)、※唐太記(最上常矩)《?》、小笠原島記《?》、異船漂着記(原新六郎)《?》、赤蝦夷風説考(最上常矩)《?》を収む)。

No. 13

《同志社》「海外異聞」(25巻25冊、【写本】**所**宮内庁書陵部(定西法師伝のみ)、京都大学、京都府立図書館、※定西法師伝《?》、讃岐高松の百姓吉右衛門等漂流記《第1部7》、馬丹島漂流記《第1部24》、切支丹宗門来朝記《?》、游房筆語《?》、琉球聘使記《?》、岡野三左衛門広東漂流記《第1部77》、朝鮮人来朝記《?》、阿蘭陀問答《?》、蝦夷にしき(上倉徳五郎蝦夷漂流記)《?》、島谷市左衛門等無人島漂流記《?》、異国人房州へ漂着記《?》、紅毛訳問答《?》、奥州人福建漂流記《第2部31》、奥州人浙江漂着記《第1部124ヵ》、奥州人南京漂着記《第2部28》、奥州人江南漂着記《第2部27》、筑前国人呂宋福州漂着記《第2部403》、横文字和解《?》、薩州人唐国漂流記《第1部149》、住徳丸福州漂着記《第1部157》、紀州人福州漂着記《第1部157》、奥州人安南国漂流記《第1部145》、陳世徳筆語船頭清蔵安南国物語《第1部167》を収む)。

No. 14

《同志社》「外国紀聞」(30冊、**別**「外国叢書」、【写本】**所**国会図書館支部内閣文庫、※安南紀略藁(6冊)《第

1部 145カ・146カ・167カ》、異国漂蕩記聞(1冊)《?》、薩州漂客聞見録(2冊)《第1部190》、異国記聞(1冊)《第1部122》、外国記聞(1冊)《?》、漂南新語(1冊)《第2部203》、亜媽港紀略藁(2冊)《第1部40カ・167カ》、魯西亜志(1冊)《第1部159カ》、魯西亜本記略艸稿(2冊)《?》、魯西亜国漂流記(1冊)《第2部350》、魯西亜新記聞(1冊)《第1部166カ》、五郎次話(1冊)《?》、東韃地方紀行(3冊)《?》、北狄防禦之記(1冊)《?》、北蝦夷島新説(1冊)《?》、沿海異聞(1冊)《?》、海島風土記(2冊)《?》、無人島漂流紀聞(1冊)《第2部333》、琉客譚記(1冊)《?》、竜涉紀略(1冊)《?》を収む。

No. 15

《同志社》「嶮谷叢説」(成寛政2-文政13、著福居芳磨(膝知文・嶮谷)編、【写本】所国立国会図書館(太田本第5、1冊)、国会図書館支部内閣文庫(「みちのくにえきろの記」2巻2冊)、国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫(「東奥紀行図」、秦檜丸画・安藤重之等校、3巻2冊)、東京教育大学(那珂本、8冊)(同、1冊)、静岡県立中央図書館葵文庫(文政11年頃写、新野問答・建官考・天明炎焼之記・老女問答を収む)、市立函館図書館(太田本、10冊)(教大蔵那珂本写8冊)、※市立函館図書館本:奥州漂民左平爰書並ニ長崎之尹副書《第1部166》、仙台漂民從魯齊亜・所贈之状《第1部166カ》、漂民繼右衛門以下之儀菊地惣内上書《第1部173カ》、チフラン漂流人略話《第2部110》を収録、東京教育大学本:宝暦四年奥仙台之民唐土・浙江省漂流之記《第1部124》、宝暦九年台湾漂民之記《第1部132カ》を収録)。

No. 16

《同志社》「外国通覧」(5巻3冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、※巻1-阿蘭陀風説和解之書《?》、中華物語《?》、復濃比須盤国書写并方物風俗《?》、仙台石ノ巻江異国舟漂着之記《?》、房州千倉海江南京舟漂着之記《?》、紀州大島浦江蛮舟漂着之記《?》、伊豆国八丈島江唐船漂着記《?》、巻2-豆陽大島記附七島ノ事《?》、無人島記(林子平)《第2部319》、無人島江漂着之記《第2部316》、巻3-安南国江漂着之記《第2部6》、勢州ノ者魯西亜江漂着帰国之漂民御覧之記(桂川甫周)《第1部159》、越前国住人行韃韃口上《第1部12》、巻4-宝暦九年漂流記《第1部132》、巻5-唐国福建省漂着之口書《第2部129》、唐国福建省江漂流記問答《第2部131》)。

No. 17

《同志社》「海事史料叢書」(20巻、住田正一編、巖松堂、昭和4~6年、※5:船長日記(重吉)《第1部188》、6:颶風新話(伊藤君独訳)《?》、13:海外漂流年代記《?》を収録)。

No. 18

《同志社》「海表異聞」(79冊、著徹桑土人、【写本】所同志社大学、京都大学(大正5年同志社蔵本抄写19冊)、※30.異国物語《第1部12》、39~40.支那漂流記上下2巻《第1部58》、41~44.支那漂流記4巻《第1部124》、47.台湾漂流《第1部132》、48~49.小笠原島記并漂流記《第1部91》、62~66.船長日記、4巻図1巻《第1部188》、72~73.磯吉光太夫漂流、上下2巻《第1部159》、74~76.仙台左平津太夫漂流 上中下3巻《第1部166》、77.太三郎の記《第2部104》)。

【関連事項】書名の検索による《第1部253》。

No. 19

《同志社》「海表叢書」(巻3、新村出編、更生閣、昭和3年、※元和航海記《?》、大島筆記《第1部137》、南国奇話《第1部226》、栄力丸漂流記談《第1部287》)。

No. 20

《同志社》「加能漂流譚」(金沢、石川県図書館協会、昭和13年3月、77p、21cm、(加賀能登郷土図書館叢刊)、

複製、昭和47年6月、※本書は安永4年から約70年間に起った漂流事件の口書5種を編纂したもの。粟ヶ崎の者朝鮮漂着一巻口書《第1部151》、鹿磯村市之丞等無人嶋へ漂着の次第口書《第1部161》、大念寺新村吉左衛門唐國へ漂着一件口書《第1部219》、塵濱村清兵衛バタンへ漂着の次第口書《第1部226》、皆月村弥三兵衛異國へ漂着の次第口書、附録：浦手形の事《第1部246》、異國船漂着の節御扶持人十村等心得方覚書《?》、加能漂流譚解説：輪島の船、朝鮮に漂着の事《第1部102》、輪島の水主共朝鮮漂着談《第1部102》。

No. 21

《同志社》「俄羅斯紀聞」(【写本】4集40冊、早稲田大学本、※〔1集〕3. 光太夫物語《第1部159》、5. 仙台漂流人口書《第2部99》、9. 漂民紀事《第1部159》、幸太夫口語筆受被《第1部159》、北様略聞《?》〔2集〕13. 幸太夫帰朝記(3種)《第1部159》、17. 北海漂民見聞録《第1部166》、〔4集〕32. 魯西亜国漂流記《第1部166》)。

【関連事項】書名の検索による《第1部188・第2部359・第3部82》。

No. 22

《同志社》「近世漂流記集」(荒川秀俊編、法政大学出版局、1969、468p、19cm、※韃靼、大明、朝鮮・順歴誌《第1部12》、広東へ漂流覚書《第1部77》、南部人漂流記《第1部122》、宝曆漂流物語 全《第1部124》、漂夫譚 全《第1部142》、華夷九年録 全《第1部142》、魯西亜國漂流民記《第1部159》、満次郎漂流記《第1部245》、初太郎漂流記《第1部247》、漂流船聴書《第1部267》、彦蔵漂流記(木版本)《第1部287》、無人しまへ漂着之もの吟味書《第1部160・161・163》、巴旦人漂流記《?》、北亜墨利加船応接記漂流人護送《第2部60》、上海航記《第1部341》)。

No. 23

《同志社》「校訂漂流奇談全集」(石井研堂校訂、東京博文館、明治33年7月、1000p、20cm(統帝国文庫、第22編)、※近世漂流年表《?》、韃靼漂流記《第1部12》、台州漂客記事《第1部2》、阿州船無人島漂流記《第1部25》、日州船漂落紀事《第1部64》、番人打破船《第1部82》、馬丹島漂流記《第1部24》、遠州船無人島物語《第1部91・103》、竹内徳兵衛魯國漂流談《第1部112》、志州船台湾漂着話《第1部132》、吹流天竺物語《第1部142》、南海紀聞《第1部142》、安南國漂流物語《第1部146》、奥州人安南國漂流記《第1部145・146カ》、薩州人唐國漂流記《第1部149》、神昌丸魯國漂流始末《第1部159》、鳥島物語《第1部160・161・163》、無人島談話《第1部160・161・163》、漂流日記《第1部160・161・163》、無人島漂流口書《第1部160・161・163》、松栄丸魯國漂流記《第1部162カ》、環海異聞《第1部166》、南漂記《第1部167》、青森港儀兵衛漂流始末口書《第1部170》、松前人韃靼漂流記《第1部169》、漂客加察哈出奔記《第1部173》、督乗丸魯國漂流記《第1部188・132》、永寿丸魯國漂流記《第1部185》、文化十三丙子薩州漂客見聞録《第1部190》、ペラホ物語《第1部200》、漂客寿三郎手簡《第1部237》、亜墨新話《第1部247》、漂客談奇《第1部245》、紀州船米國漂流記《第1部267》・附録：海外異聞《?》、山田仁左衛門渡唐録《?》、天竺徳兵衛物語《第2部114》、ジャガタラ文《第2部86》、阿蘭陀文《第2部39》)。

No. 24

《同志社》「坐臥記」(著桃西河(桃井西河)、〔追加《古典》【写本】所島根大学桑原文庫(天明5年写、1冊)、【版本】所明治四五版-島根大学桑原文庫(1冊)〕、【活字】『出雲文庫1』、※大阪北堀江の備前屋亀次郎にチャーターされた肥前寺江村の金右衛門船の水主、出雲国島根県三保関の住人米屋喜助伴清蔵が天明7年に鳥島に漂着したときの漂流記)。

【関連事項】書名の検索による《第1部142・161》。

No. 25

《同志社》「薩摩国喜三左衛門船漂流記 付尾張国長右衛門船漂流記」(【写本】所国立国会図書館、※薩州永寿丸漂流記)。

【関連事項】書名の「薩摩国喜三左衛門船漂流記《第1部185》付尾張国長右衛門船漂流記《第1部188》」より。

No. 26

《同志社》「資治雜笈」(【写本】欠本、5輯目録共94冊、名古屋市蓬左文庫本、※1輯、南海紀聞(欠)《第1部142カ》、半田村重吉船長日記《第1部188》、2輯、垂墨竹枝《第1部247》、漂民日記《第2部215》、伯耆人漂流談《第1部287》、尾張人漂流記《第2部41》)。

【関連事項】書名の検索による《第2部404》。

No. 27

《同志社》「従前之唐国外国等へ漂着イタシ候者共名前」(1冊、【写本】所県立長崎図書館、※貞享元-寛政)。

【関連事項】書名及び備考にある年代の幅より複数と判断。

No. 28

《同志社》「続海外異聞」(12巻12冊、著大槻茂楨(盤里)編、【写本】所国会図書館支部静嘉堂文庫(巻2・11欠、10冊)、※存巻は中山聘使録《?》、漂南聞略《第1部166カ》、広東漂船襍記《?》、聞槎白語《?》、無人島談話ニ附録《?》、無人島談話《第3部70》、南島漂流記《第2部159》、異国漂流記《第2部9》、寧波船筆記《?》、北槎小録《第1部159カ》)。

No. 29

《同志社》「韃旦漂流記」(齊藤清衛監修、清水文雄校註、春陽堂、昭和17年、138p、図版、地図(新文庫8)、※韃旦漂流記《第1部12》、馬丹島漂流記《第1部24》、遠州船無人島物語《第1部91》、神昌丸魯国漂流始末《第1部159》、じゃがたら文《第2部86》)。

No. 30

《同志社》「椿亭叢書」(31冊、【写本】所宮内庁書陵部、県立長崎図書館、※第8冊：志州鳥羽漂流人間書《第1部132カ》、吹流船話《第2部302》、第9冊：山田仁左衛門略伝《?》、漂民吉次郎覚書《第1部239カ》、漂民長兵衛書上《第2部214》、魯西亜教諭信牌写《第2部346》、漂民御覽之記《第1部159》、魯西亜漂流人談話聞書《第2部361》、西間切大島問志村漂民名簿《第2部166》)。

【関連事項】書名の検索による《第2部208》。

No. 31

《同志社》林燿「通航一覽」(350巻付録23巻凡例総目2巻絵図1帙、成嘉永6年、著林燿・宮崎成身等編、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(稿本、322巻付録22巻、有欠、続輯共414冊)(巻1-24、続輯共26冊)、京都大学(巻25-272、有欠、141冊)、東京大学史料編纂所(186巻付録12巻、有欠)、日本大学(付録共9冊)、北海道庁(巻273-321、27冊)、〔追加《国書補遺》岡山大学池田家文庫(10冊)〕、〔追加《古典》関西大学五弓雪窓文庫(「通航一覽序」、「必読書題言彙纂、第2冊)〕)、【活字】『通航一覽』(国書刊行会、明治45年、複製：清文堂、1967)、※永禄9-文政8)。

【関連事項】書名の検索による《第1部6・8・11・12・13・19・20・21・24・27・28・30・31・40・49・50・51・57・58・59・70・71・77・78・79・82・83・106・112・113・122・123・124・125・126・130・132・135・137・138・142・145・146・149・150・152・153・155・159・162・166・

167・169・170・171・173・175・182・185・188・190・195・第2部281》。

No. 32

《同志社》林煌「通航一覽統輯」(151 卷付録 26 卷、**著**林煌・宮崎成身等編、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(稿本、142 卷付録 26 卷、有欠、通航一覽と合 414 冊)(巻 1-4、通航一覽と合 26 冊)(巻 1-4、明治写 1 冊)、東京国立博物館(有欠、68 冊)、京都大学(巻 8-44・47-63・81、46 冊)、東京大学史料編纂所(142 卷付録 26 卷、有欠)、北海道庁(巻 84-103、10 冊)、【活字】『通航一覽統輯』(清文堂、昭和 43-48 年))。

【関連事項】書名の検索による《第1部 200・216・218・219・223・224・225・226・229・230・236・237・238・239・243・245・247・248・253・254・267・286・287・298・第2部 51・93》。

No. 33

《同志社》「通信全覽」カ(初編 106 卷総目 2 卷類輯目録 1 卷英国来翰 5 卷・2 編 186 卷総目 2 卷類輯目録 1 卷 303 冊、**成**慶応 3 年、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(稿本)、東京大学史料編纂所(欠本、初編類輯 24 冊 2 編類輯 41 冊)、【活字】『通信全覽』(雄松堂書店、昭和 58 年)、※安政 6-万延元)。

【関連事項】林煌「続通信全覽」とのつながりから複数と判断。

No. 34

《同志社》林煌「続通信全覽」(【写本】所外務省外交史料館(編年之部 505 卷、類輯之部 1366 卷)、【活字】『続通信全覽』(編年之部 1~、雄松堂出版、昭和 58 年~))。

【関連事項】書名の検索による《第1部 166・226・230・231・237・241・243・245・247・253・254・255・267・287・298・309・312・314・326・327・328・333・334・335・336・337・339・340》。

No. 35

《同志社》「唐土漂流記」(1 冊、【写本】所宮城県図書館、※浙江省漂流記《?》、広東漂流記聞《?》、韃靼漂流記《第1部 12 カ》、徳兵衛渡竺記《第2部 114》を収む)。

No. 36

《同志社》「督乗丸魯国漂流記」(1 冊、**別**「漂客談話督乗丸長右衛門志摩国小平次」、**成**文化 13 年、**著**長右衛門・小平次、【写本】所東北大学(宝暦 11 年写)、岡田伊三次郎、【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫))。

【関連事項】別称の「漂客談話督乗丸長右衛門」《第1部 188》志摩国小平次《第1部 132》より。

No. 37

《同志社》「土佐国群書類従」(【写本】160 卷拾遺 70 卷内 7 卷欠、総目録 2 冊共 304 冊、国会図書館支部内閣文庫本、※〔漂流〕77 清水浦琉球船漂着聞書《第1部 137 カ》、難風流船物語《第2部 175》、78 八丈島漂渡記《第2部 172》、79 南京朱心如船漂着之記《?》、土佐国船無人嶋漂流之記上《第2部 140 カ》、泉之波有手船記《?》、80 無人嶋漂流記《?》、81 土州香我美郡岸本浦長平天明五年巳正月晦日出船以来漂流記《第1部 160》、土州高岡郡福嶋浦福吉屋浅平漂流記《第2部 304》、82 下田日記《?》、83 江南商話《第2部 70》、84 松平土佐守小人中浜万次郎儀北亜墨利加在留中及見聞候始末相札候趣申上候書付《第1部 245》、漂民録《第1部 245 カ》、亜墨利加詞《第1部 245 カ》、85 漂民紀事《第1部 245》、漂海異聞《第2部 183》)。

【関連事項】書名の検索による《第2部 248》。

No. 38

《同志社》「土州船大阪船薩州船漂流譚」(1冊、成嘉永元年、【写本】所香川大学神原文庫(佐藤霍舟写))。
【関連事項】書名の「土州船《?》大阪船《?》薩州船《?》漂流譚」より。

No. 39

《同志社》「鳥島物語」(【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫))。
【関連事項】書名及び活字本の検索による《第1部160・161・163》。

No. 40

《同志社》「長崎叢書 第5編」(西道仙・安中半三郎校、長崎古文書出版会、明治27年、※長崎港艸第7巻：日本人異国漂流雑記《第3部49》、漂流泊瀬伝平衛日録《第1部106》、奥州南部人漂流日録《第1部122カ》を含む)。

No. 41

《同志社》「南海漂流譚」(柴秀夫編、東京、双林社、昭和18年、203p、図4、地図1、18.6cm、※解説、福建厦門寧波難風渡唐帰朝記《第1部122》、異国漂流談《第1部132》、遠州船無人島漂流記《第1部91》、土州船無人島漂流譚《第1部160》、孫太郎ボルネオ漂流談《第1部142》、安南国漂流記《第1部146》、馬丹島漂流物語《第1部24》、近世漂流年表《?》)。

No. 42

《同志社》「難船漂流人口書写 其他」カ(1冊、【写本】所早稲田大学)。
【関連事項】書名及び備考にある年代の幅より複数と判断。

No. 43

《同志社》「南蛮紀文選」(三島才二校訂編纂、聚芳閣、大正15年、※西洋紀聞(新井白石)《?》、長崎夜話草(西川正休)《第1部17カ・18カ・24カ・40カ・77カ》、野叟独語(杉山人)《?》、環海異聞(大槻茂質)《第1部166》、蘭説弁惑(有馬元晁)《?》、亜墨新話(那波希顔)《第1部247》、曉窓追録(栗本匏)《?》)。

No. 44

《同志社》「南部叢書」(南部叢書刊行会編、昭和2~6年、11冊、※10：無人島漂流物語《第1部103》、無力丸漂流記《第1部122カ》、パラウ漂流記《第1部200》、小友船漂流記《第1部243》、大阪船漂着記《第1部264》等を収録)。

No. 45

《同志社》「日本海防史料叢書 第5巻」カ(住田正一編、海防史料刊行会、昭和7年、※漂民紀事《第1部245カ》を収録)。
【関連事項】書名の検索による《第1部159》。

No. 46

《同志社》「日本財政経済史料 巻之7 経済之部4」(大蔵省編、財政経済学会、大正12年1月、※第2：外国通商、1漂着船並漂流民、p885~932)。
【関連事項】書名の検索による《第1部40・125・159・237》。

No. 47

《同志社》「日本支那朝鮮各人漂流及送還記録」カ (1冊、【写本】所東京国立博物館 (江戸中期写))。
【関連事項】書名より複数と判断。

No. 48

《同志社》「日本庶民生活史料集成 第5巻漂流」(宮本常一等編、東京、三一書房、1968、※時規物語 (遠藤高璟)《第1部241》、蕃談 (古賀謹一郎)《第1部241》、東航紀聞 (岩崎俊章)《第1部247》、紀州口熊野漂流嚟 (筆者不詳)《第1部247カ》、遠州船無人島物語 (筆者不詳)《第1部91・103》、無人島漂流記 (筆者不詳)《第1部160・161・163》、船長日記 (池田寛親)《第1部188》、尾州大野村船漂流一件 (筆者不詳)《第1部24》、越前船漂流記 (筆者不詳)《第1部12》、呂宋国漂流記 (大槻清崇)《第1部248》、台湾漂流記 (筆者不詳)《第1部132》、安南国漂流記 (筆者不詳)《第1部146》、東洋漂客談奇 (吉田正誉)《第1部245》、南海紀聞 (青木定遠)《第1部142》、漂流天竺物語 (筆者不詳)《第1部142》、長瀬村人漂流談 (奥田昌忠)《第1部287》、漂流記 (浜田彦蔵)《第1部287》、北槎聞略 (桂川甫周)《第1部159》、漂流註記：ロシアの東方進出と日本の漂流民 (中村喜和)《?》、気象学からみた漂流記 (倉嶋厚)《?》、漂流船覚書 (石井謙治)《?》、参考文献)。

No. 49

《同志社》「日本人異国漂流雑記」(【活字】西道仙・安中半三郎校『長崎叢書 第5編』(長崎古文書出版会、明治27年))。
【関連事項】書名の検索による《第1部24・49・51・58・59》。

No. 50

《同志社》「日本潭流譚」(石井民司編、東京、学齢館、明治26年、2冊、国立国会図書館 (漂流記叢書2)、〔追加《海洋》「日本漂流譚 第一・第二」、2冊〕、〔追加《早稲田》2冊〕、※1：①越前の人韃靼に漂流し明韓を経て故郷に帰る《第1部12》、②阿紀の人無人島に漂流し一板に縁りて故郷に帰る《第1部25》、③尾張の人馬丹島に漂流し土人を欺きて故郷に帰る《第1部24》、④志摩の人台湾島に漂流し清国船に因て故郷に帰る《第1部132》、⑤筑前の人保爾尼に漂流し萬死を出でて故郷に帰る《第1部142》、2：⑥常人安南に漂流し同胞に邂逅して帰国す《第1部146》、⑦遠人無人島に漂流し新漂船を得て帰国す《第1部91》、⑧薩人支那に漂流し商船に便乗して帰国す《第1部149》、⑨奥人支那に漂流し商船に便乗して帰国す《第1部162》、⑩勢人魯西亜に漂流し十二年を経て帰国す《第1部159》)。

No. 51

《同志社》「播州高砂住異名天笠徳兵衛渡天物語〔薩州税所長右衛門漂流一件〕」(1巻、【写本】所高知県立図書館 (元文元年写))。
【関連事項】書名の「播州高砂住異名天笠徳兵衛渡天物語《第2部114》〔薩州税所長右衛門漂流一件《第2部76》〕」より。

No. 52

《同志社》「漂海雑誌」カ (5冊付録1冊、※寛永-安永、日本漂流書目による)。
【関連事項】書名及び備考にある年代の幅より複数と判断。

No. 53

《同志社》「漂海叢書」(【写本】所東北大学狩野文庫 (第1欠、4冊)、※2. 文化元年魯西亜属島内ホロムシリ島へ漂流ノ口書並外2種《第1部173カ》、3. 魯西亜国へ漂流人口書写ノ事《第2部355》、魯西亜国

船渡来始末並日本漂流人異国遍歴之話《第1部166カ》、4. 魯西亜船ヨリ差戻候唐太島エトロフ島番人共南部大膳大夫家来大村次五郎吟味仕候処申上候書《?》、5. 魯西亜属島長夷マキセンケンコウリツ外男女拾三人エトロフ島へ渡来仕候一件吟味仕候趣申上候書付《?》。

No. 54

《同志社》「漂客叢話」(1冊、【写本】所尊経閣文庫、〔追加《古典》関西大学五弓雪窓文庫(「書漂客叢話後」、
「必讀書題言彙纂、第1冊」)])、※文政-天保、伊予遠江越中人等漂流記事)。

【関連事項】備考より複数と判断。

No. 55

《同志社》「漂船秘録」(2巻2冊、【写本】所国立国会図書館(漂流記叢書42)、※勢州幸太夫《第1部159》、奥州長右衛門《第1部153》等漂流)。

【関連事項】書名の検索による《第1部122カ》。

No. 56

《同志社》「漂流記」(3冊、【写本】所同志社大学、※1巻：勢州白子村彦兵衛手船神昌丸幸太夫并磯吉事十二ヶ年以前ヲロシアの国江漂流致し此度送来候趣糺候一件《第1部159》、2巻：〔津太夫、儀平ら漂流者らの聞書〕(文化2)《第1部166》、3巻：西洋欧羅巴洲之内魯西亜国渡来始末并日本漂流人美国編歴之話《第1部166カ》)。

No. 57

《同志社》「漂流記」カ(1冊、【写本】所宮内庁書陵部(手島惟敏写)、※宝暦度福建漂流記等)。

【関連事項】備考の「宝暦度福建漂流記《第1部122カ》等」より複数と判断。

No. 58

《同志社》「漂流記」カ(1冊、【写本】所宮内庁書陵部(手島惟敏写)、※寛永度韃靼漂流記等)。

【関連事項】備考の「寛永度韃靼漂流記《第1部12カ》等」より複数と判断。

No. 59

《同志社》「漂流記」(1冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫、※台湾漂流記《第1部132カ》、志州鳥羽流船記《第1部132》、呂宋国江漂流婦朝御吟味口書写《第2部343》、南洋無人嶋漂流記《第1部163カ》を収む)。

No. 60

《同志社》「漂流記集」(【写本】所九州大学九州文化史研究所、※津田村勝之助嘶之覚《?》、漂流事略《第1部162》、寒川郡津田村百姓漂流記《?》を収む)。

No. 61

《同志社》「漂流記叢書」(【写本】119冊、国立国会図書館本、1日本漂流譚(活)《第3部50カ》、2漂流島物語《第2部245》、3南瓢記(版本)《第1部167》、4異国漂渡記《第1部12》、5越州三国浦新保村住人異国物語《第1部12》、6中天竺之内馬丹嶋江漂流ノ舟水主共口書《第1部24》(付広東物語5)《第2部56》、7中天竺馬丹物語《第1部24》、8宝暦元年未十二月廿一日唐国福建省江致漂着候奥州南部之者六人口書《第1部122》、9南部漁民漂流記《第2部161》、10享保四年筒山船漂流一件口上書《第1部91》、11異国漂流船談《第1部132》、12志州鳥羽船外国江吹流候一件《第1部132カ》、13志州鳥羽小

平治船漂流之間書《第1部132》、14志州流船記書上写《第1部132カ》、15志州鳥羽流船目錄《第1部132カ》、16宝曆七歲丑九月志州鳥羽布施村船頭吹流次第《第1部132カ》、17・18異国漂流談(2部)《第1部132》、19志州鳥羽船頭小平次難風吹流帰国之次第《第1部132》、20吹流志州鳥羽領小平次外国咄し《第1部132》、21志州鳥羽船頭小平治難舟書付之写《第1部132》、22志州布施田村小平治舟唐へ流レ行ク次第《第1部132》、23志州鳥羽船頭帰国《第1部132カ》、24海難噺物語《第1部132》、25筑前国唐泊津孫太郎漂流一件口上書《第1部142》、26唐泊浦孫三郎口書《第1部142カ》、27安南国漂流記《第1部146》、28・29紀州船一葉丸漂流一件覚《第1部158》、30紀州日高郡志賀屋伝蔵舟漂流人覚書《第1部158カ》、31漂流記《第1部226カ》、32於路志屋江漂流記《第1部159》、33勢州白子漂民御覽御問答記《第1部159》、34漂民御覽之記(漂民談)《第1部159》、35漂民御覽之記《第1部159》、36漂民御覽之記(魯西亜国江漂民問答)《第1部159》、37漂民御覽之記《第1部159》(付亜墨利加漂流記)、38漂民御覽記《第1部159》、39奇観録《第1部159》、40幸太夫船一件写《第1部159》、41勢州白子船神昌丸漂流之記《第1部159》、42異国奇談漂船秘録《第3部55》、43実録幸太夫磯吉漂泊物語《第1部159》、44神昌丸漂民記《第1部159》、45蝦夷関係記事雑纂《?》、46孤島漂流難船日記《?》、47賀茂村権吉長五良唐国漂流帰国之次第《第2部121》、48漂流無人嶋始末《第1部161》、49無人嶋へ漂着一件《第1部163》、50日州志布志船漂流記《第1部163》、51環海異聞《第1部166》、52呂宋国漂流記《第1部248》、53魯西亜漂流記《第3部76》、54おろしや国江漂流人口書留《第1部166》、55奥州人魯西亜国漂流物語《第1部166》、56歐羅巴国漂流記《第1部166》、57文化元年九月長崎渡来魯西亜船取調べの次第《第1部166カ》、58美世利国漂泊録《第1部166カ》、59永寿丸魯西亜国漂着始末口上書《第1部185》、60文化十四年尾州半田村百姓吹流候一件《第1部188カ》、61船長日記《第1部188》、62尾州知多郡半田村重吉物語《第1部188》、63漂流人口書《第1部226》、64備前神力丸漂流一件《第1部226》、65漂客奇談《第1部245》、66-68漂客談奇(3部)《第1部245》、69土佐漂流人口書・漂客奇談《第1部245》、70嘉永六年丑八月漂流人直噺聞書《第2部49》、北亜墨利加渡舶次第《第2部61》、71万次郎譚和解船話2《第1部245》、72万次郎譚和解船話坤《第1部245》、73大日本土佐国漁師漂流記(版本)《第1部245》、74亜米利加漂流譚(活)《第1部245カ》、75土州漁師帰朝記《第2部144》、76土州人漂流記《第1部245カ》、77土佐国万次郎異国物語《第1部245》、78漂流之記《第2部288》、79土州人漂流記《第1部245カ》、80日本人漂流之記《第1部245》、81亜墨利加漂流記《第1部245》、82漂流人善助初次郎口書写《第1部247カ》、83漂流人弥市之記《第1部247カ》、84弘化元年天野屋手船幸宝丸漂流一件聞書《第1部253》、85漂流舟記《第1部267》、86漂流記(版本)《第1部287》、87亜墨利加漂流記《第1部287》、88長瀬村人漂流談《第1部287》、89漂流記《第2部225》、90明治五壬申正月廿一日漂流著信記《?》、91漂客紀事《?》、92環海航路日記《?》、93航海日記《?》、94天竺渡天物語《第2部116》、95天竺物語《第2部114》、96高砂舟頭町徳兵衛天竺え渡り候物語《第2部114》、97天竺物語《第2部114》)。

No. 62

《同志社》「漂流口書」(別「無人島漂流口書」、成寛政9年、【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫))。
【関連事項】書名及び活字本の検索による《第1部160・161・163》。

No. 63

《同志社》「漂流雑記」(6冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫(寛政2・3写)、※1. 中天竺馬丹島之記《第1部24》、2. 寛永二十一年越前三国浦竹内藤右衛門等韃靼漂流一件《第1部12》、3. 寛文十三年伊勢松坂七郎兵衛等蝦夷漂流一件《第1部29》、正徳元年肥前国商船広東漂流一件《第2部89》、4. 享保四年遠江国荒居甚八等無人島漂流一件《第1部91》、5. 宝暦十一年仙台領木村屋茂右衛門船清国漂流始末《第1部135》、明和二年常陸磯原村船頭友七等安南漂流一件《第1部146》、6. 宝暦十一年仙台領木村屋茂右衛門船清国漂流《第1部135》)。

No. 64

《同志社》「漂流雑記」(1冊、【写本】所龍谷大学、※神昌丸漂流記《第1部159》、西魯亜國漂流記《?》、巴旦漂流記《?》、大清國漂流船志摩国布施田村小平次一件《第1部132》、安南国并南京江漂流記《?》を収録)。

No. 65

《同志社》「漂流叢書」(【写本】13冊、国立国会図書館本、※1松平薩摩守家来池永喜三左衛門同中原仲左衛門口書《第1部149》、2越前国三国浦新保村佐内藤左衛門同子藤蔵等覚書《第1部12》、3徳兵衛天竺物語《第2部114》、4享保十三戊申年中天竺之内馬丹嶋江流れ候水主口書《第1部24》、5西洋人が唐国ヨリ買取シ茶之高《?》、6ペラホ物語《第1部200》、7元文四無人嶋ヨリ帰来セル遠州荒井之者尋問記《第1部91》、8安南国漂流物語《第1部146ヵ》、9二伊勢人の漂流記聞書《第2部165》、寛政五漂民記《?》、10山田仁左衛門渡唐録《?》、11阿蘭陀国々改并行状《?》、12異国江漂流仕り候陸奥国之者四人口書《第1部166》、13文化十三丙子歳薩州漂客見聞録《第1部190》)。

No. 66

《同志社》「漂流日記」(【活字】『校訂漂流奇談全集』(続帝国文庫)、※天明5-寛政2、土州鏡の郡赤岡浦松尾儀七船船頭水主4人)。

【関連事項】書名及び活字本の検索による《第1部160・161・163》。

No. 67

《同志社》「北辺探事」(2冊、別「魯国日本交通史・北辺秘録」、成文化3年、著大槻玄沢、【写本】所国立国会図書館、国会図書館支部内閣文庫(林氏蝦夷紀事抄録・江戸元文4年己未御記録を付す)(補遺、4冊)、国会図書館支部静嘉堂文庫(補遺共1冊)、京都大学、早稲田大学(補録抄録1巻・補遺3巻共5冊)、東京大学史料編纂所(「北辺秘録」、桑名松平家蔵本写1冊)(「魯国日本交通史」、東京都大槻文彦蔵本写5冊)(補遺、1冊)、北海道庁(「魯西亜聞書」、1冊)(5冊)(1冊本2部)、宮城県図書館(1冊)、宮城県図書館伊達文庫(1冊)、浅野図書館(1冊)、桑名松平家(「北辺秘録」、1冊)、〔追加《北方》〕、【活字】『北門叢書6』)。

【関連事項】書名の検索による《第1部159・166》。

No. 68

《同志社》「北門叢書」(大友喜作解説・校訂、北光書房、昭和18~19年、6冊、※第4環海異聞(大槻玄沢)《第1部166》、第6北槎異聞(篠本廉)《第1部159》、北辺探事(大槻玄沢)《第1部159・166》、北辺探事補遺(同)《?》)。

【関連事項】書名の検索による《第2部395》。

No. 69

《同志社》「無人しまへ漂着之もの吟味書」(【活字】荒川秀俊編『近世漂流記集』(法政大学出版社、1969))。

【関連事項】書名及び活字本の検索による《第1部160・161・163》。

No. 70

《同志社》「無人島談話」(2巻付1巻3冊、成寛政9年自跋、著曾繁編、【写本】所国立国会図書館(2巻付1巻1冊、2部)、国立国会図書館白井文庫(2巻付1巻1冊)、国会図書館支部内閣文庫(明治写、琉球人漂着記を付す、2巻付1巻1冊)(3冊)、国会図書館支部静嘉堂文庫(2巻1冊)(続海外異聞の内)(2部)、

国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫、宮内庁書陵部（5冊）（片玉集続集27）、東京国立博物館（江戸末期写）（3冊）、九州大学（1冊）、京都大学（2巻付1巻2冊）、東京大学（2冊）、東北大学狩野文庫、西尾市立図書館岩瀬文庫（1冊）、市立刈谷図書館（3冊）（5冊）、杏雨書屋（東博蔵本写）、神宮文庫図書館、高木文庫、無窮会神習文庫（4巻2冊）、{旧} 彰考館文庫（2冊）、【活字】『校訂漂流奇談全集』（続帝国文庫）、※寛政元年志布志住吉丸）。

【関連事項】 書名及び活字本の検索による《第1部160・161・163》。

No. 71

《同志社》「無人嶋之記」（2冊、【写本】所国会図書館支部内閣文庫（文政4年写）、※享保4・天明5・7）。

【関連事項】 享保4年・天明5・7年における無人島漂流のものによる《第1部91カ・160カ・161カ》。

No. 72

《同志社》「無人嶋漂流記」（【写本】所宮内庁書陵部（池底叢書94）、【活字】荒川秀俊編『異国漂流記集』（吉川弘文館、昭和37年））。

【関連事項】 書名及び活字本の検索による《第1部91・103・127・133・160・161・163》。

No. 73

《同志社》「無人嶋より帰国之者御調書上」（【活字】荒川秀俊編『異国漂流記集』（吉川弘文館、昭和37年））。

【関連事項】 書名及び活字本の検索による《第1部91・103・160・161・163》。

No. 74

《同志社》「迷復記」（成安永9年序、著菊莊翁編、【写本】所国会図書館支部内閣文庫（12冊）（残欠、1冊）、宮内庁書陵部（松前東蝦夷地阿魯西亜人來船を付す、片玉集後集17-19）、東北大学狩野文庫（7巻7冊）、岩手県立図書館（内閣蔵本写1冊））。

【関連事項】 書名の検索による《第1部124カ・146カ・153カ》。

No. 75

《同志社》「魯西亜国漂流二実記」（1冊、【写本】所国立国会図書館、※督乗丸魯国漂流記《第1部188》、漂客東察加出奔記《第1部173》）。

No. 76

《同志社》「魯西亜漂流記」（1冊、【写本】所国立国会図書館（寛政5、漂流記叢書53）、日本学士院、九州大学（「魯西亜漂流記」、文化14）、京都大学（文化9）、東京教育大学、東京大学史料編纂所（「薩人喜三左衛門以下廿三人魯西亜漂流紀」《第1部185》、文化9-14、2冊）、東京都立日比谷図書館近藤文庫（仙台津太夫等《第1部166》、大正写）、宮城県図書館（「露西亜漂流記」）、宮城県図書館小西文庫（寛政5）、穂久邇文庫（寛政5、弘化2写）、無窮会神習文庫（寛政4-6）、{旧} 彰考館文庫（2冊）（巻3のみ））。

No. 77

《国書補遺》「御領内江唐船朝鮮舟琉球舟漂着并沖合見掛調帳」カ（1冊、成天保14年、【写本】所県立長崎図書館）。

【関連事項】 書名より複数と判断。

No. 78

《北方》「異舶航来漂民帰朝紀事」（成文化4年、【写本】、※伊勢、仙台漂流民のことを諸記録や諸本より抄

写す)。

【関連事項】備考の伊勢《第1部159》、仙台漂流民《第1部166》より。

No. 79

《北方》「異船航来漂流民帰朝紀事」カ(成文化4年、【写本】、※安永7、8年飛騨屋請負場所へロシア人渡来、ラクスマン使節、レザノフ使節の日本来航、その他漂流民からの聞書などを諸書より抄写したもの。大黒屋光太夫についてはキイタツプ惣支配人、御船手水主組頭、根室より福山まで同行した幕吏らによる聞書きを含む)。

【関連事項】備考の大黒屋光太夫《第1部159》、レザノフ《第1部166カ》より。

No. 80

《北方》「蝦夷旧聞 上・下」カ(2冊、成安政元年序、著鈴木善教、※群書中より蝦夷地に関する記事を抜萃し、惣説、服従、漂流、魯西亜侵蝦夷等の項に分けて記す)。

【関連事項】備考より複数と判断。

No. 81

《北方》「蝦夷見聞誌 卷1-29」カ(29巻10冊、著林子平カ、【写本】、※「三国通覧図説」をもとにし、これに松前の商人や船乗り、漂流民の話や逸話を混えて、蝦夷地の沿革、人物、風俗習慣、言語、動植物などを詳説す)。

【関連事項】備考より複数と判断。

No. 82

《北方》「蝦夷草紙附録」(成寛政2年、著最上徳内、【写本】、※「蝦夷草紙」中の「附録」を抜萃す。エトロフ、ウルップ、カムサスカ、チュクチ国、ロシア人イジュヨゾフのこと、南部漂流民のことなどを記す)。

【関連事項】書名の検索による《第1部112・128・136・142カ》。

No. 83

《北方》「蝦夷地文化秘密録 上・下」(8巻2冊、【写本】、※巻2は「漂民御覧之記」に同じ《第1部159》。巻3は仙台領漂流民送還一件《第1部166カ》、巻4-8は文化丁卯事件をめぐる幕府の対策、東北諸藩の蝦夷地出兵などを文書によって記す)。

No. 84

《北方》「外事(外泊・漂流)」カ(北海道志 第22冊(巻30-31))。

【関連事項】「開拓使が編集した地理、風俗、政治、産業、物産の全般にわたる大部の北海道地誌で、廃使後大蔵省で刊行」という北海道志の説明及び書名より複数と判断。

No. 85

《北方》「紀州熊野浦江異船漂着之事」カ(【写本】(合冊・附属資料:松前船漂流大清着岸之事、異国船漂着届並被仰渡之事)、※寛政3年紀州熊野大嶋浦に到来した異国船2隻のこと、天明8年漂流して清国惠州へ漂着した松前船のこと《第1部162》、寛政3年筑前、長門、石見の沖に現れた異国船のことなどを記す)。

【関連事項】備考より複数と判断。

No. 86

《北方》「近世瑣録」カ(【写本】、※「柳營年中行事」のほか、「京極丹後守殿領地被召上一件」、「宝暦十四

年通詞鈴木伝蔵報父仇朝鮮才天蒼話」など江戸時代の雑話を収録す。他に「寛文年中勢州松阪七郎兵衛等蝦夷島漂流之話」《第1部29》を含む。

【関連事項】備考より複数と判断。

No. 87

《北方》「狄艦事略 卷1-9 (卷2欠)」(8冊、著菴原カン齋(道麿)撰、【写本】、※ロシア人の千島南下、元文の黒船、ラクスマン・レザノフ両使節の来航、文化丁卯の変、ゴロヴニーン捕囚事件など文化11年までのロシア関係の記事を文書によって叙述す。巻8-9は文化13年ロシア船によりエトロフ島へ送還された督乗丸と永寿丸の水主たちの漂流記)。

【関連事項】備考のラクスマン《第1部159カ》、レザノフ《第1部166カ》、督乗丸《第1部188》、永寿丸《第1部185》より。

No. 88

《北方》「幕末外交書目」(成安政6年頃、※前書は江戸時代の海防、漂流、蝦夷誌、異国情報、条約関係などについての約300点の文献を列記)。

【関連事項】備考より複数と判断。

No. 89

《北方》「尾州名古屋紺屋町小嶋屋庄右衛門船千二百石積督乗丸難船之始末」(成文化13年、著小栗重吉、【写本】、※文化10年10月江戸より帰航の途中伊豆沖で暴風に逢い、1年4ヶ月の漂流ののち英国船に救助され、カムチャッカから薩摩の永寿丸の乗組員らとともにロシア船で帰国した督乗丸船頭長右衛門(重吉)と水主音吉の口書。同じく薩州船永寿丸の船頭喜三左衛門ら3人の申口も含む)。

【関連事項】備考の督乗丸《第1部188》、永寿丸《第1部185》より。

No. 90

《北方》「ベニョフスキー書簡和解」カ(※「天明壬寅年幸太夫魯西亜漂流記」等を含む)。

【関連事項】備考の「天明壬寅年幸太夫魯西亜漂流記《第1部159》等」より複数と判断。

No. 91

《北方》「北辺紀聞」カ(成寛政5年、著木村謙次、【写本】、※ロシア人の千島・蝦夷地来航、南部漂流民などの情報を記す。ロシア領域図・蝦夷地図を付す。末尾には江戸の儒者吉田篁トンより立原翠軒宛のラクスマン使節に関する情報を記した書状写を付す)。

【関連事項】備考のラクスマン《第1部159カ》、南部漂流民などより複数と判断。

No. 92

《北方》「北虜志 上・下 卷1-8」カ(8巻2冊、成安政3年、著豊田亮(天功)、【写本】、※水戸彰考館総裁の豊田亮が、藩命によってロシアの歴史・地理・日本漂流民からの伝聞・ゴロヴニーン捕囚事件のこななどを諸書中より編集し、漢文で記したもの)。

【関連事項】備考より複数と判断。

No. 93

《北方》「本朝要石」カ(【写本】、※「伊勢国漂流民於吹上御物見上覧の事」に始まり、ラクスマン、レザノフ両使節の来航一件、文化3-4年ロシア船の北辺襲撃事件、東北諸藩の出兵および若年寄堀田正敦の蝦夷地出張などを記す)。

【関連事項】備考の「伊勢国漂流民於吹上御物見上覧の事」《第1部159》、レザノフ《第1部166カ》より。

No. 94

《北方》「魯西亜一件（附録）」カ（成文化4年、【写本】、※寛政元年のメナシ・クナシリ騒動、同4年のラクスマン使節来航、大黒屋光太夫の漂流次第、同11年幕府の東蝦夷地上地、文化元年レザノフ使節の長崎渡来、文化3-4年ロシア船の北辺襲撃事件などについての文書、書簡、風聞写を集めたもの）。

【関連事項】備考の大黒屋光太夫《第1部159》、レザノフ《第1部166カ》より。

No. 95

《海洋》「異國漂着集」（1冊、【写本】、※定西法師傳并琉球国之事《?》、印度の内バタン国へ漂着人物語之事《第1部24》、蝦夷乱記《?》、寛文十三年蝦夷国風書附《第3部9》、長崎濱田彌兵衛阿蘭陀人を生捕之事《?》、シンモンズ後家おはる文の事《?》、廣東へ漂着覚書《第1部77》、人員郷貫すべて不記才、越前新保村韃靼へ漂着之事《第1部12》）を収録。

No. 96

《海洋》「異國漂着船話 一～六」（6冊、【写本】、※一：朝鮮國ヨリ三使来朝之事 附呂宋國船漂着之事《?》、異邦の商船江御朱印取下事《?》、越前国新保村竹内藤右衛門船、國田兵右衛門船韃靼江漂流之事《第1部12》、二：讃岐國高松之船嶋國へ漂着之事《第1部7》、江戸堀江町宮本善八船無人嶋へ漂着之事《第1部103》、豆州口嶋之事《?》、三：伊勢國松坂七郎兵衛異國江吹流され夫より蝦夷へ渡りし事《第1部16》、蝦夷の國風并産物之事《?》、松前志摩守殿家系の事《?》、蝦夷一揆騒動松前より征伐之事《?》、壞疽雑談之事《?》、四：蝦夷の雑談乃事 松前の産物蝦夷島説《?》、薩摩國の船琉球の回米を積難風ニ逢異國へ漂着の事《第1部106》、琉球国中山王の委説《?》、五：志摩國鳥羽の小平次臺灣國江漂着之事《第1部132》、奥州大笹村武右衛門船南通州江漂着之事《第1部135カ》、六：奥州津軽郡石崎村治右衛門船朝鮮國へ漂着之事《第1部129》）。

No. 97

《海洋》「異國漂流人帰国之記」（1冊、【写本】、※志州船漂流人帰国之事《第1部132》、藝州漂流人帰国之事《第1部175》、奥州漂流人帰国之事《第1部166》、豫州漂流人帰国之話《第1部223》）。

No. 98

《海洋》「紀州天壽丸露國漂流記」（1冊、【写本】、※天壽丸漂流記《第1部267》、天壽丸異聞別録《第1部267》、極密内存《第1部267》、附録 一葉丸心得の趣《第1部158》）。

No. 99

《海洋》「漂流記 上・下」（2冊、【写本】、※上：永壽丸《第1部185》、督乗丸《第1部188》、神昌丸《第1部159》、下：神昌丸《第1部159》）。

No. 100

《海洋》「槃游餘録漂流記叢」（1冊、※清次郎等呂宋漂流記《第1部125》、南部長吉ハラオ漂流記《第1部200》、薩永寿丸北海漂流記《第1部185》、紀州寅吉等十三人魯國漂流記《第1部267》、播州萬次郎等米國漂流記《第1部245》、遠州仙太郎唐土ヨリ帰ル《第1部242》、阿州幸宝丸外船ニ救ワル《第1部253》）。

No. 101

《その他》「石井研堂コレクション 江戸漂流記総集」(6巻、山下恒夫再編、日本評論社、1992-1993年、※第1巻：元和漂流記《第1部4》、讃州船島国脱航談《第1部7》、唐国漂着記事二篇(台州漂客記事《第1部2》、番人打破船《第1部82》)、韃靼漂流記《第1部12》、勢州船北海漂着記《第1部16》、馬丹島漂流記《第1部24》、阿州船無人島漂流記《第1部25》、薩州船清国漂流談《第1部106》、十三夜丸台湾漂流記《第1部123》、津軽船朝鮮江陵漂着記《第1部129》、日州船漂落紀事《第1部64》、遠州船無人島物語《第1部91・103》、無人島漂着八丈島浦手形ほか《?》、無人島談話《第1部160・161・163》、鳥島物語《第1部160・161・163》、寛政無人島漂民浦賀番所口書など《第1部160・161・163》、土州人長平漂流日記《第1部160》、山田仁左衛門渡唐録《?》、徳兵衛天竺物語《第2部114》、じゃがたら文《第2部86》と阿蘭陀文《第2部39》、第2巻：志州船台湾漂着話《第1部132》、奥州荒浜船南通州漂着始末《第1部135》、吹流れ天竺物語《第1部142》、南海紀聞《第1部142》、安南国漂流物語《第1部146》、奥州人安南国漂流記《第1部145》、南瓢記(大乘丸漂民口書)《第1部167》、薩州人唐国漂流記《第1部149》、一葉丸福州漂流記(心得の趣き)《第1部158》、松前船松栄丸唐国漂流記《第1部162》、漂客紀事《?》、難船奇聞《第2部151カ》、第3巻：大黒屋光太夫ロシア漂流一件(幸太夫・磯吉取糺しの事・漂民御覧記・雑録・磯吉物語)《第1部159》、竹内徳兵衛魯国漂流談《第1部112》、享和漂民記《第1部173》、永寿丸魯国漂流記《第1部185》、督乗丸魯国漂流記《第1部188》、船長日記《第1部188》、松前人韃靼漂流記(松前漂民口書)《第1部169》、青森港儀兵衛漂流始末口書《第1部170》、芸州善松異国漂流記《第1部175》、文化十三丙子歳薩州漂客見聞録《第1部190》、豊長筑三領唐船漂流の記《?》、第4巻：ペラホ物語《第1部200》、越前船宝刀丸清国漂着覚書き《第1部219》、融勢丸唐流帰国記《第1部223》、神力丸馬丹漂流口書《第1部226》、漂客寿三郎庄蔵手簡《第1部237》、漂民送還ニ就テノ上書《?》、呂宋国漂流記《第1部248》、亜墨新話《第1部247》、阿州船幸宝丸漂流記《第1部253》、乙巳漂客記聞《第1部253・254》、嘉永船便加羅物がたり《第1部288》、広東漂船雑記《?》、第5巻：中浜万次郎漂流一件(漂客談奇・島津斉彬書簡四通・長崎奉行所吟味書一・長崎奉行所吟味書二・中ノ浜庄屋ら三名聞書き・附録)中浜万次郎帰朝後履歴書)《第1部245》、満次郎漂流記《第1部245》、紀州船米国漂流記《第1部267》、紀州天寿丸露国漂流記(天寿丸漂民の帰国後関係文書)《第1部267》、漂流記《第1部287》、播州人米国漂流始末《第1部287》、銚子湊御城米荷打ち吟味一件《?》、漂流譚雑筆《?》、第6巻：環海異聞《第1部166》)。

No. 102

《その他》「漂流奇談集成」(加藤貴校訂、国書刊行会、1990年、※台州漂客記事《第1部2》、阿州船無人島漂流記《第1部25》、番人打破船《第1部82》、竹内徳兵衛魯国漂流談《第1部112》、志州船台湾漂着話《第1部132》、奥人安南国漂流記《第1部146》、薩州人唐国漂流記《第1部149》、幸太夫大全《第1部159》、松栄丸唐国漂流記《第1部162》、無人島談話《第1部160・161・163》、鳥島物語《第1部160・161・163》、南瓢記《第1部167》、松前人韃靼漂流記《第1部169》、唐土漂流記《?》、漂客東察加出奔記《第1部173》、永寿丸魯国漂流記《第1部185》、督乗丸魯国漂流記《第1部188》、薩州漂客見聞録《第1部190》、ペラホ物語《第1部200》、漂流人書状写《第1部237カ》、紀州船米国漂流記《第1部267》)。

編著者紹介

平川 新 ひらかわ あらた

東北大学名誉教授

宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）館長

竹原万雄 たけはら かずお

東北大学東北アジア研究センター助教

東北大学東北アジア研究センター叢書 第73号

江戸時代の漂流記と漂流民

— 漂流年表と漂流記目録 —

2023年9月15日発行

編著者 平川 新 竹原万雄

発行者 東北大学東北アジア研究センター

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

印刷 蕃山房

〒989-3126 仙台市青葉区落合一丁目 4-8

